

雲南市埋蔵文化財調査報告書2

ゴマボリ遺跡・寺田I遺跡

— 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 —

第1分冊

2007年3月

国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
雲南市教育委員会

ゴマボリ遺跡・寺田I遺跡

— 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 —

第 1 分 冊

2007年3月

国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
雲 南 市 教 育 委 員 会



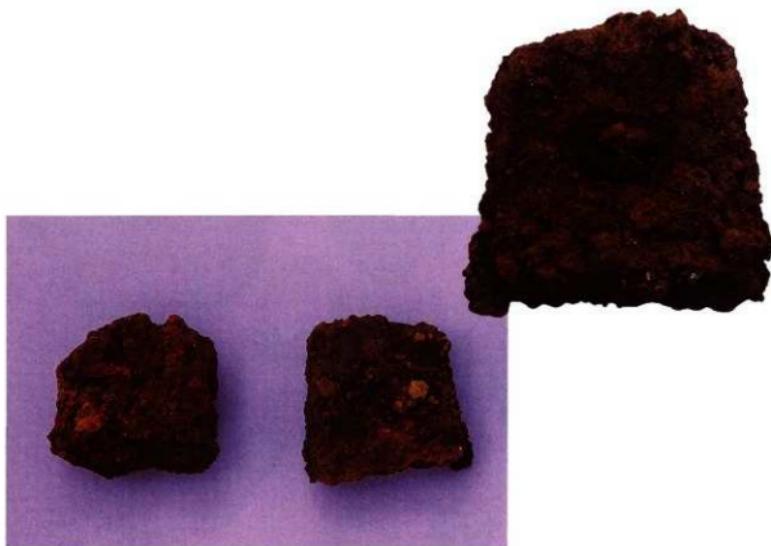
卷頭図版 1 尾原・北原・下布施地内上空写真 ○：寺田Ⅰ遺跡



卷頭図版2 寺田I遺跡5区出土 炉底塊（含鉄）



卷頭図版3 寺田I遺跡5区出土 鋼塊



卷頭図版4 寺田I遺跡2区出土 切鉄（右上は写真右側の裏面（原寸））



卷頭図版5 寺田I遺跡2区出土 銅滓（原寸）



卷頭図版6 寺田I遺跡2区出土 銀冶・鋳銅関連遺物

序

国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所では、斐伊川、神戸川の両水系に対する治水事業の一環として、神戸川上流に志津見ダム、斐伊川上流に尾原ダムを建設する事業を進めています。

ダム建設事業の実施に際しましては、埋蔵文化財の保護にも十分に留意し、関係機関と協議しながら必要な調査を実施するとともに、記録の保存に努めております。

尾原ダム建設事業におきましても、旧木次町教育委員会、そして合併後に事業を引き継がれました雲南市教育委員会をはじめ、関係各位のご協力のもと、平成9年度より発掘調査を実施してまいりました。

この間には、数多くの貴重な遺跡や遺物が発見され、先人の技術の高さや努力の跡、そして精神生活の奥深さを目の当たりにすることができました。本報告書に掲載するゴマボリ遺跡、寺田I遺跡をはじめとして、これまで積み上げられてきた調査成果が、郷土の歴史教育や地域における諸活動に広く活用されることを期待しております。

最後になりましたが、発掘調査からこの報告書刊行に至るまでの間、多大なるご協力を賜りました関係者の皆様方、関係諸機関に深く感謝申し上げます。

平成19年3月

国土交通省中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
所長 八尋 裕

序

雲南市教育委員会では、旧木次町教育委員会が国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて実施してきた尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を、平成16年11月1日の町村合併により引き継いで実施してまいりました。本書は、このうち平成14・15・17年度に行ったゴマボリ遺跡、寺田I遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

これまで旧木次町教育委員会、雲南市教育委員会が実施してきた尾原ダム建設に伴う発掘調査事業も、本書の刊行をもって終えることとなります。この間の、雲南地方、とりわけ斐伊川中・上流域における考古学的資料の蓄積には目を見張るものがあります。この地域で明らかにされた旧石器時代から江戸時代に至る遺跡や遺物は、当時の人々の営みを考える上で貴重な資料となっており、徐々にではありますが、この地域の歴史が明らかにされてきていると言えます。

本書に掲載したゴマボリ遺跡では、中世後期から近世初期の製鉄関連遺物が出土し、寺田I遺跡では、奈良時代の精錬及び鍛錬を行った鍛冶工房とみられる遺構が確認されるなど、この地に古くから製鉄に関する高い技術が存在していたことを知ることができました。本書が、これまでの調査成果とともに、地域の歴史や文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査からこの報告書刊行に至るまでの間、地元の皆様をはじめ、国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、鳥根県教育委員会など、関係諸機関より多大なるご協力とご指導を賜りましたことに心より深く感謝申し上げます。

平成19年3月

雲南市教育委員会

教育長 土江博昭

例　　言

1. 本書は、旧木次町教育委員会及び市町村合併により発足した雲南市教育委員会が、平成14年度から平成17年度にかけて実施した尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

本報告書は、旧木次町教育委員会がこれまで発行した尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書からの通番で第7冊目となる。

なお、本書は第1章から第4章までを第1分冊、第5章を第2分冊とした。

2. 調査の対象となった遺跡は次のとおりである。

・ゴマボリ遺跡　　鳥根県雲南市木次町北原822番地

・寺田I遺跡　　鳥根県雲南市木次町北原1221番地外

3. 発掘調査は、国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所から委託を受けて、木次町教育委員会（平成16年10月31日まで）及び雲南市教育委員会（平成16年11月1日より）が実施した。調査に関する経費は、国土交通省中国地方整備局が負担した。

発掘調査及び報告書作成にかかる組織体制については、第1章第2節に記した。

4. 発掘調査の期間は次のとおりである。

・ゴマボリ遺跡（発掘調査）

平成14年4月24日～平成14年5月30日

・寺田I遺跡1区・2区（発掘調査）・3区（試掘調査）・4区（発掘調査）

平成14年6月4日～平成14年11月20日

・寺田I遺跡5区（発掘調査）

平成15年5月26日～平成15年10月10日

・寺田I遺跡3区（発掘調査）

平成17年6月1日～平成17年8月12日

5. 指図中の方位は測量法による第III系座標X軸の方向を指す。また、平面直角座標系XY座標は世界測地系による。

6. 現地調査及び報告書作成にあたっては、多くの方々からご指導、ご助言、ご協力を賜った。本書の発刊に際して、改めて深く感謝の意を表したい。なお、ご芳名については、本書第1章第2節において各事業年度ごとに明記した。

7. 平成14・15年度の寺田I遺跡発掘調査に際しては、地形測量業務を株式会社栄進に委託して行った。

8. 寺田I遺跡2区検出焼上の地磁気年代測定については、島根大学総合理工学部の時枝克安教授に依頼して実施し、この分析結果について時枝氏、一瀬久嘉氏、竹内博史氏より玉稿を賜った（第5章第1節掲載）。また、寺田I遺跡2区の土壤環境と鉄器の遺存状況の対応関係について、愛媛大学法文学部の村上恭通教授より玉稿を賜った（第5章第2節掲載）。記して感謝の意を表したい。

なお、これら2稿の報告については、編集によるものを除き原則としてそのまま掲載した。し

たがって、挿図及び表、並びに写真については、それぞれ独立して付番しており、本書の目次に記した挿図番号、表番号、図版番号とは連続していない。

9. その他の自然科学的分析については、次のとおりそれぞれ業務を委託して行った。なお、これらの分析結果報告について本書に稿を起こしたものについても、編集によるものを除き原則としてそのまま掲載した。したがって、挿図及び表、並びに写真については、それぞれ独立して付番しており、本書の目次に記した挿図番号、表番号、図版番号とは連続していない。

環境考古研究会

- ・ゴマボリ遺跡・寺山I遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定
- ・寺山I遺跡2区出土木材の樹種同定（第5章第3節）
- ・寺田I遺跡2区土壤内の花粉分析（第5章第4節）

株式会社古環境研究所

- ・寺田I遺跡2区炭化物放射性炭素年代測定

株式会社九州テクノリサーチ・TACセンター

- ・寺田I遺跡2区鍛冶・鑄造関連遺物の金属学的調査（第5章第5節）
- ・寺田I遺跡5区出土製鉄関連遺物の金属学的調査（第5章第6節）

10. 本書掲載の第2図から第8図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を使用して作成した。
11. 本書に掲載した図面は、調査員・調査補助員等が分担して作成した。出土遺物の実測・トレークについては、その一部を文化財調査室いなか倉に委託して行った。また、写真的撮影については、調査員が行った。
12. 本書の執筆者並びに執筆分担は、目次に明記した。また、穴澤義功氏には、製鉄関連構及び遺物の分類等、調査に際して終始丁寧なご指導を賜った。記して深甚の謝意を表したい。
13. 本書の編集は坂本論司・山崎修が行った。
14. 本報告書掲載の出土遺物、実測図、写真などの資料は、雲南省教育委員会で保管している。

目 次

[第1分冊]

第1章 調査に至る経緯

| | | |
|-------------------|------|---|
| 第1節 発掘調査の経緯 | (山崎) | 1 |
| 第2節 調査体制 | (山崎) | 3 |

第2章 位置と歴史的環境

(山崎) 5

第3章 ゴマボリ遺跡

| | | |
|----------------------|---------|----|
| 第1節 発掘調査の経過と概要 | (坂本・山崎) | 21 |
| 第2節 層序と出土遺物 | (坂本) | 21 |
| 第3節 まとめ | (坂本) | 25 |

第4章 寺田I遺跡

| | | |
|-------------------------|------------|-----|
| 第1節 発掘の経過と概要 | (坂本・山崎) | 27 |
| 第2節 遺構と出土遺物 | (坂本・山崎) | 32 |
| 第3節 製鉄関連遺物の考古学的観察 | (穴澤・坂本・山崎) | 107 |
| 第4節 まとめ | (坂本・山崎) | 222 |

[第2分冊]

第5章 自然科学的分析

| | |
|-----------------------------------------|----|
| 第1節 寺田I遺跡2区検出焼土の地磁気年代 | 1 |
| 第2節 寺田I遺跡2区出土鍛冶・鋳造遺物の金属学的調査 | 9 |
| 第3節 寺田I遺跡2区の土壤環境と鉄器の遺存状況の対応関係について | 67 |
| 第4節 寺田I遺跡2区出土木材の樹種同定 | 69 |
| 第5節 寺田I遺跡2区土壤内の花粉分析 | 74 |
| 第6節 寺田I遺跡5区出土製鉄関連遺物の金属学的調査 | 78 |

挿図目次

| | | | |
|----------------------------|-------|---------------------------------------------|----|
| 第1図 調査地の位置 | 5 | 第31図 寺田1遺跡2区谷部断土層図 | 45 |
| 第2図 旧石器・縄文時代の遺跡 | 6 | 第32図 寺田1遺跡2区炎焼き遺構実測図 | 46 |
| 第3図 弥生時代の遺跡 | 9 | 第33図 寺田1遺跡2区流路横断土層図 | 47 |
| 第4図 古墳時代の遺跡 | 10 | 第34図 寺田1遺跡2区炎宿まり断面土層図 | 47 |
| 第5図 水系の祭祀遺跡 | 12 | 第35図 寺田1遺跡2区箱式石棺検出状況 | 49 |
| 第6図 古代の製鉄関連遺跡 | 13 | 第36図 寺田1遺跡2区近世墓群平面図 | 50 |
| 第7図 城跡・城館跡 | 14 | 第37図 寺田1遺跡2区近世墓群断面図 | 51 |
| 第8図 中・近世の製鉄遺跡 | 15 | 第38図 寺田1遺跡2区精錬鍛冶遺構上面出土土器 | 53 |
| 第9図 ゴマボリ遺跡・寺田1遺跡の位置と周辺の地形 | 20 | 第39図 寺田1遺跡2区排溝場出土上器 | 54 |
| 第10図 ゴマボリ遺跡調査区分図 | 22 | 第40図 寺田1遺跡2区出土鍛冶・鋳鋼関連遺物(切鉄) | 56 |
| 第11図 ゴマボリ遺跡中央ベルト土層図 | 23 | 第41図 寺田1遺跡2区出土鍛冶・鋳鋼関連遺物(鉄器1) | 57 |
| 第12図 ゴマボリ遺跡銅金北壁土層図 | 24 | 第42図 寺田1遺跡2区出土鍛冶・鋳鋼関連遺物(鉄器2) | 58 |
| 第13図 ゴマボリ遺跡出土土器 | 24 | 第43図 寺田1遺跡2区出土鍛冶・鋳鋼関連遺物(鉄器3) | 59 |
| 第14図 ゴマボリ遺跡出土製鉄関連遺物 | 25 | 第44図 寺田1遺跡2区出土鍛冶・鋳鋼関連遺物(羽口1) | 60 |
| 第15図 寺田1遺跡調査区配置図 | 27 | 第45図 寺田1遺跡2区出土鍛冶・鋳鋼関連遺物(羽口2) | 61 |
| 第16図 寺田1遺跡1区・2区遺構配置図 | 29~30 | 第46図 寺田1遺跡2区出土鍛冶・鋳鋼関連遺物(鉄砧石) | 62 |
| 第17図 寺田1遺跡3区グリット設定図 | 31 | 第47図 寺田1遺跡2区出土鍛冶・鋳鋼関連遺物(石鏡1) | 63 |
| 第18図 寺田1遺跡1区平面図 | 32 | 第48図 寺田1遺跡2区出土鍛冶・鋳鋼関連遺物(石鏡2・鑑) ² | 64 |
| 第19図 寺田1遺跡1区トレント土層図 | 33 | 第49図 寺田1遺跡2区出土鍛冶・鋳鋼関連遺物(堆塙) | 65 |
| 第20図 1区トレント出土土器 | 33 | 第50図 寺田1遺跡2区谷部上方包含層出土土器・石器 | 67 |
| 第21図 寺田1遺跡2区近世墓群・精錬鍛冶遺構断面図 | 34 | 第51図 寺田1遺跡2区近世墓群出土遺物(1) | 68 |
| 第22図 寺田1遺跡2区精錬鍛冶遺構平面図 | 35 | 第52図 寺田1遺跡2区近世墓群出土遺物(2) | 69 |
| 第23図 寺田1遺跡2区1号断土層図 | 36 | 第53図 寺田1遺跡2区近世墓群出土錢貨(1) | 70 |
| 第24図 寺田1遺跡2区精錬鍛冶遺構断面図 | 37 | 第54図 寺田1遺跡2区近世墓群出土錢貨(2) | 71 |
| 第25図 寺田1遺跡2区桥状構造断土層図 | 38 | 第55図 寺田1遺跡2区近世墓群出土錢貨(3) | 72 |
| 第26図 寺田1遺跡2区精錬鍛冶遺構分布図 | 39 | 第56図 寺田1遺跡3区平面図 | 76 |
| 第27図 寺田1遺跡2区精錬鍛冶遺構断面図 | 39 | 第57図 寺田1遺跡3区中央ベルト(X軸)断土層図 | 77 |
| 第28図 寺田1遺跡2区精錬鍛冶遺構遺構形状図 | 41~42 | 第58図 寺田1遺跡3区中央ベルト(Y軸)断土層図 | 78 |
| 第29図 寺田1遺跡2区排溝場横断土層図 | 43 | 第59図 寺田1遺跡3区炎焼き遺構実測図 | 79 |
| 第30図 寺田1遺跡2区谷部前方断土層図 | 43 | 第60図 寺田1遺跡3区東壁(X軸)断土層図 | 80 |

| | | | |
|---------------------------------------|-------|-------------------------------------|---------|
| 第61図 寺田 I 道路 3 区出土十器(1)..... | 81 | 第90図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図⑩..... | 139 |
| 第62図 寺田 I 道路 3 区出土十器(2)..... | 82 | 第91図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図⑪..... | 140 |
| 第63図 寺田 I 道路 3 区出土製鉄関連遺物 | 84 | 第92図 寺山 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図⑫..... | 141 |
| 第64図 寺田 I 道路 4 区横断土層図(北側) | 86 | 第93図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図⑬..... | 142 |
| 第65図 寺田 I 道路 4 区河辺路平面図 | 87~88 | 第94図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図⑭..... | 143 |
| 第66図 寺田 I 道路 4 区横断土層図(南側) | 89 | 第95図 寺山 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図⑯..... | 144 |
| 第67図 寺田 I 道路 5 区北側平盤土層図 | 90 | 第96図 寺山 I 道路 2 区鉄関連遺物構成図 No1 | 145~146 |
| 第68図 寺田 I 道路 5 区平面図 | 91~92 | 第97図 寺田 I 道路 2 区鉄関連遺物構成図 No2 | 147~148 |
| 第69図 寺田 I 道路 5 区南側横断土層図 | 93 | 第98図 寺田 I 道路 2 区鉄関連遺物構成図 No3 | 149~150 |
| 第70図 寺田 I 道路 5 区炭窯跡 2 炭測図 | 95 | 第99図 寺田 I 道路 2 区鉄関連遺物構成図 No4 | 151~152 |
| 第71図 寺山 I 道路 4 区・5 区出土上器(1) | 97 | 第100図 寺田 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(1)..... | 189 |
| 第72図 寺田 I 道路 4 区・5 区出土上器(2) | 99 | 第101図 寺田 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(2)..... | 190 |
| 第73図 寺田 I 道路 4 区・5 区出土十器(3) | 100 | 第102図 寺山 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(3)..... | 191 |
| 第74図 寺田 I 道路 4 区・5 区出土土器(4) | 101 | 第103図 寺田 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(4)..... | 192 |
| 第75図 寺田 I 道路 4 区・5 区出土土器(5) | 102 | 第104図 寺田 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(5)..... | 193 |
| 第76図 寺田 I 道路 4 区・5 区出土石器 | 103 | 第105図 寺田 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(6)..... | 194 |
| 第77図 製鉄関連遺物各部位の名称 | 107 | 第106図 寺田 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(7)..... | 195 |
| 第78図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図(1)..... | 127 | 第107図 寺田 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(8)..... | 196 |
| 第79図 寺山 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図(2)..... | 128 | 第108図 寺田 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(9)..... | 197 |
| 第80図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図(3)..... | 129 | 第109図 寺田 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(10)..... | 198 |
| 第81図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図(4)..... | 130 | 第110図 寺田 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(11)..... | 199 |
| 第82図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図(5)..... | 131 | 第111図 寺田 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(12)..... | 200 |
| 第83図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図(6)..... | 132 | 第112図 寺田 I 道路 5 区製鉄関連遺物実測図(13)..... | 201 |
| 第84図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図(7)..... | 133 | 第113図 寺田 I 道路 5 区鉄関連遺物構成図 No1 | 202 |
| 第85図 寺山 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図(8)..... | 134 | 第114図 寺田 I 道路 5 区鉄関連遺物構成図 No2 | 203~204 |
| 第86図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図(9)..... | 135 | 第115図 寺田 I 道路 5 区鉄関連遺物構成図 No3 | 205~206 |
| 第87図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図(10)..... | 136 | 第116図 寺山 I 道路 5 区鉄関連遺物構成図 No4 | 207~208 |
| 第88図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図(11)..... | 137 | 第117図 羽森第3 道路構成図 | 226 |
| 第89図 寺田 I 道路 2 区鍛冶・鉄鋼関連遺物実測図(12)..... | 138 | 第118図 芝原道路鍛冶構成平面図 | 226 |

表 目 次

| | |
|-----------------------------|---------|
| 第1表 奥出雲地方における縄文時代遺跡と出土土器図年 | 7 |
| 第2表 周辺道路一覧表 | 18~19 |
| 第3表 ゴマボリ遺跡出土木炭放射性炭素年代測定分析結果 | 26 |
| 第4表 寺田I遺跡2区近世高砂概要一覧表 | 52 |
| 第5表 寺田I遺跡2区出土土器観察表 | 73~74 |
| 第6表 寺田I遺跡2区近世高砂出土鉢貨一覧表 | 75 |
| 第7表 寺田I遺跡3区出土土器観察表 | 85 |
| 第8表 寺山I遺跡4区・5区出土土器観察表 | 104~106 |
| 第9表 寺山I遺跡2区鍛冶・鋳鋼関連遺物観察表 | 111~126 |
| 第10表 寺田I遺跡2区製鉄関連遺物分析資料一覧表 | 153 |
| 第11表 寺田I遺跡2区鍛冶遺構主要要素一覧表 | 178 |
| 第12表 寺山I遺跡5区製鉄窯窓遺物観察表 | 181~188 |
| 第13表 寺山I遺跡5区製鉄窯窓遺物分析資料一覧表 | 209 |
| 第14表 寺田I遺跡5区製鉄窯窓遺物等主要要素一覧表 | 221 |
| 第15表 寺田I遺跡2区楕形鍛冶炉集計表 | 225 |
| 第16表 寺田I遺跡出土式样的放射性炭素年代測定結果 | 227 |

卷頭図版目次

| | |
|-------------------------|---------------------------|
| 卷頭図版1 穂原・北原・下布施地内上空写真 | 卷頭図版4 寺田I遺跡2区出土 切鉄 |
| 卷頭図版2 寺山I遺跡5区出土 炉底塊(含鉄) | 卷頭図版5 寺山I遺跡2区出土 鋼津 |
| 卷頭図版3 寺田I遺跡5区出土 鋼塊 | 卷頭図版6 寺山I遺跡2区出土 鍛冶・鋳鋼関連遺物 |

図版目次

図版1

ゴマボリ遺跡 溝壠前状況

ゴマボリ遺跡 総断十層状況

ゴマボリ遺跡 完掘状況

図版2

ゴマボリ遺跡 出土土器

ゴマボリ遺跡 鋼鉄圓錐遺物

寺田I遺跡1・2・4区調査前状況

図版3

寺田I遺跡 1区粘土張り面検出状況

寺田I遺跡 2区鍛冶造構検出状況

寺田I遺跡 1号・2号鍛冶炉検出状況

図版4

寺田I遺跡 精鍛鍛冶遺構再結合下層緑青粒検出状況

寺田I遺跡 框形様遺構検出状況

寺田I遺跡 2区枠形様遺構破断 半掘状況

図版5

寺田I遺跡 鍛冶遺構上面遺物出土状況

寺田I遺跡 剥り鉄出土状況

寺田I遺跡 2区斜面縦断土層出土状況

図版6

寺田I遺跡 2区炭焼き遺構検出状況

寺田I遺跡 2区炭焼き遺構完掘状況

寺田I遺跡 2区箱式石棺検出状況

図版7

寺田I遺跡 2区箱式石棺蓋石除去状況

寺田I遺跡 2区近世墓群検出状況

寺田I遺跡 2区近世墓群9号古墓・鉄末石・円筒瓦出土状況

図版8

寺田I遺跡 2区炭窯跡検出状況

寺田I遺跡 1・2・4区完掘状況

寺田I遺跡 3区調査前状況

図版9

寺田I遺跡 3区炭焼き遺構検出状況

寺田I遺跡 3区炭焼き遺構木炭検出状況

寺田I遺跡 3区羽口・土器出土状況

図版10

寺田I遺跡 3区自然流路検出状況

寺田I遺跡 3区自然流路検出状況

寺田I遺跡 3区完掘状況

図版11

寺田I遺跡 4区河道検出状況

寺田I遺跡 5区調査前状況

寺田I遺跡 5区北側西壁十層状況

図版12

寺田I遺跡 5区炭窯跡1検出状況

寺田I遺跡 5区炭窯跡2検出状況

寺田I遺跡 5区石列1検出状況

図版13

寺田I遺跡 5区炭窯り検出状況

寺田I遺跡 5区鉄闇連遺物出土状況

寺田I遺跡 5区東 須恵器出土状況

図版14

寺田I遺跡 5区完掘状況

寺田I遺跡 2区鍛冶遺構上面出土土器

寺田I遺跡 2区排溝場出土土器(1)

第1章 調査に至る経緯

第1節 発掘調査の経緯

鳥取県東部を流れる斐伊川は、島根県と鳥取県の県境に位置する船通山に源を発し、途中、大馬木川・阿井川・久野川・三刀屋川・赤川等の支川を合わせながら北流、山陰平野でその流れを東に転じ、宍道湖・大橋川・中海を経て日本海へ注ぐ、幹川流路延長153km、流域面積2,070km²の一級河川である。宍道湖は汽水湖としては全国で7番目、中海は全国で5番目の面積を誇る。宍道湖・中海は、平成17年11月、アフリカ・ウガンダで開催された第9回締約国会議で、ラムサール条約（「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」）に同時に登録された。

この斐伊川は、古代において「出雲大川」と呼ばれ、天平5（733）年にまとめられた『出雲國風土記』に記されているとおり、当時は現在のように宍道湖へ流れ込まず、「神門水海（現在の神西湖）」を経て日本海へ注いでいた。ところが、寛永16（1639）年の洪水により、その流れを東に変え、現在のように宍道湖・大橋川・中海を経て日本海に注ぐようになった。これは、上流域において古くから行われていた「たたら製鉄」の隆盛によって、砂鉄採取のための「かんな流し」が上流から下流域において大量の土砂が堆積し、典型的な天井川となったことが大きな要因である。

土砂の流出が加速するにつれて、下流域ではたびたび水害に見舞われていたが、流路が変わってからも幾度となく水害が発生し、そのたびに、この天井川に対する様々な対策が講じられていた。昭和18年、20年の洪水を機に、斐伊川治水の抜本的対策論が浮上し検討が始まったが、昭和36、38、40年と洪水は続発する。これを受けて、島根県は、昭和44年6月に「斐伊川・神戸川の治水及び関係地域の開発に関する基本構想」を発表した。

さらに、昭和47年には梅雨前線の停滞による集中豪雨が下流の宍道湖周辺域及び大橋川流域を襲った。これによって県都松江市が甚大な被害を受け、斐伊川の治水について緊急かつ具体的な対策を講じる必要に迫られた。そこで、島根県は、昭和50年10月に「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画」を発表、翌昭和51年7月には建設省（現国土交通省）が「斐伊川水系工事実施基本計画」を告示し、県は「神戸川水系工事実施基本計画」の認可を得る。そして「斐伊川水系工事実施基本計画」を改定し、この「斐伊川水系工事実施基本計画改定案」により、「百年の大計」と称される斐伊川治水事業が具体化した。この斐伊川治水事業は、①斐伊川下流部の大橋川改修及び宍道湖・中海湖岸堤防の整備、②中流域における斐伊川放水路建設と斐伊川本線の改修、③斐伊川・神戸川上流におけるダムの建設、という、いわゆる「治水3点セット」を基本とする一大プロジェクトである。

この計画に基づく尾原ダムは、斐伊川の本流を堰き止めて建設される多目的ダムで、貯水池は、ダムサイトが建設される雲南市木次町（旧大原郡木次町）平田から、上流の仁多郡奥出雲町（旧仁多郡仁多町）三成に及ぶ。平成3年10月、ようやく「尾原ダム建設事業に伴う基本協定書」の調印がなされて事業着手となり、平成5年12月に水源地域対策特別措置法のダム指定を受けた。翌平成6年2月には「尾原ダム建設に関する基本計画」が公示され、平成7年11月には地元3団体と損失

補填基準協定書の調印となって用地買収の着手となった。

建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）では、尾原ダム建設に伴って、まずダムサイト直下流域における残土処理工事が計画された。そこで、平成5年3月と平成6年3月に島根県教育委員会が実施した分布調査の結果に基づき、平成8年9月9日、旧木次町教育委員会に対して、建設省中国地方建設局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所（現国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所）より、当該地域における埋蔵文化財の確認のための調査依頼がなされた。

旧木次町教育委員会では、斐伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて、平成8年11月20日及び12月13日に残土処理工事予定地内の試掘調査を実施し、当該地における遺跡の存在を確認した。旧建設省としては、当初、尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財の調査については島根県に依頼する予定であったが、当時、島根県教育委員会が実施する埋蔵文化財調査が増大しており、発掘調査の調整がつきにくく、また、ダム工事に先行する残土処理工事が急を要していたため、旧建設省、島根県教育庁文化財課及び旧木次町の三者で協議を行い、当該遺跡の発掘調査については旧木次町で実施することとなった。

こうして、旧木次町教育委員会では、平成9年度より斐伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財の調査を実施してきたが、その後、島根県教育委員会が尾原ダム建設予定地内の埋蔵文化財調査を実施するにあたって、旧木次町教育委員会、旧仁多町教育委員会（現奥出雲町教育委員会）と県教委の三者で協議を行い、基本的にはダム本体部分については島根県、残土処理場や付け替え道路などの付帯工事部分については各町が調査を実施することが確認された。これ以後は、各機関の調査状況や調査体制を勘案して、調整を図りながら分担して調査を実施した。これまでに、発掘調査の成果として、家の上遺跡・石壙遺跡・上壙内たら跡・北原I遺跡・茶屋の廻遺跡・枯木ヶ谷鉢遺跡・下布施横穴墓群・案久寺遺跡・家ノ前鉢跡・谷口遺跡・宮サコ遺跡・西ノ平遺跡・コフケ遺跡の報告書を刊行している。

旧木次町は、平成16年11月1日に大原郡の大東町・加茂町・飯石郡の三刀屋町・吉田村・掛合町が合併して雲南市となり、旧木次町教育委員会が実施していた尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査の事業については、合併以後、雲南市教育委員会が引き継いで実施した。

本書は、尾原ダム建設にかかる市道北原日登線付替工事及び残土処理工事に伴って、平成14年度から平成17年度にかけて実施したゴマボリ遺跡及び寺田I遺跡の発掘調査報告書である。

第2節 調査体制

本書に掲載する遺跡の発掘調査及び報告書作成については、下記の体制で行った。なお、平成14・15年度の発掘作業（発掘作業員の雇用、重機借り上げ、発掘作業用品の調達等）については、国土交通省中国地方整備局、社団法人中国建設弘済会、旧木次町の三者協定に基づき、社団法人中国建設弘済会に委託して実施した。

平成14年度（ゴマボリ遺跡、寺田I遺跡1区・2区・3区・4区発掘調査）

〔調査主体〕 本次町教育委員会 教育長 水瀬豊美

〔事務局〕 坂本武男（本次町教育委員会教育次長）【平成14年4月30日まで】、稻岡恵子（同教育次長）【平成14年5月1日から】、十嵐和則（同体育・文化振興係長）

〔調査員〕 坂本諭司（本次町教育委員会主幹・埋蔵文化財専門員）

〔調査補助員〕 浅沼 博（嘱託職員）、大坂敏行（同）、安川賢太（同）、宇田川千歌子（同）

〔調査指導〕 穴澤義功（たたら研究会委員）、伊藤徳広（島根県教育庁文化財課）、角田徳幸（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）、杉原清一（島根県文化財保護指揮委員）、田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、西尾克己（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）、蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員）、東山信治（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）

〔発掘作業〕 社団法人中国建設弘済会島根県支部

　　〈現場担当〉 小村敏行（技術員） 　　〈事務担当〉 藤原愛子

平成15年度（寺田I遺跡5区発掘調査）

〔調査主体〕 本次町教育委員会 教育長 水瀬豊美

〔事務局〕 稲岡恵子（本次町教育委員会教育次長）、加木和了（同体育・文化振興係長）

〔調査員〕 坂本諭司（本次町教育委員会主幹・埋蔵文化財専門員）

〔調査補助員〕 宇田川千歌子（嘱託職員）、安川賢太（臨時職員）

〔調査指導〕 黒田貴保（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）、穴澤義功（たたら研究会委員）、時枝克安（島根大学総合理工学部）、杉原清一（島根県文化財保護指揮委員）、田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、蓮岡法暉（同）、原田敏照（島根県教育庁文化財課）

〔発掘作業〕 社団法人中国建設弘済会島根県支部

　　〈現場担当〉 小村敏行（技術員） 　　〈事務担当〉 藤原愛子

平成16年度（ゴマボリ遺跡、寺田I遺跡出土遺物等整理作業）

〔調査主体〕 本次町教育委員会 教育長 水瀬豊美【平成16年10月31日まで】

　　雲南省教育委員会 教育長 土江博昭【平成16年11月1日から】

〔事務局〕 稲岡恵子（本次町教育委員会教育次長）、加木和了（同体育・文化振興係長）

【平成16年10月31日まで】

　　高橋文男（雲南省教育委員会教育次長）、稻岡恵子（同：済寧省課長）、板垣 旭（同文化財・文化振興グループG L・主幹）、山崎 修（同副主幹）、伊藤 廉（同本次教育分室主任主事）【平成16年11月1日から】

- 【調査員】坂本諭司（木次町教育委員会次長補佐）【平成16年10月31日まで】
（雲南省教育委員会本次教育分室グループリーダー）【平成16年11月1日から】
- 【調査補助員】宇山川千歌子（嘱託職員）、安川賢太（臨時職員）
- 【調査指導】熱田貴保（島根県教育厅埋蔵文化財調査センター）、穴澤義功（たたら研究会委員）、
田中義昭（島根県文化財保護審議会委員、雲南省文化財保護審議会副会長）、蓮岡
法暉（島根県文化財保護審議会委員、雲南省文化財保護審議会会长）、原田敏照
(島根県教育厅文化財課)
- ※西ノ半遺跡・コフケ遺跡発掘調査実施、発掘調査報告書作成、刊行
- 平成17年度（寺田I遺跡3区発掘調査・出土遺物等整理作業）
- 【調査主体】雲南省教育委員会 教育長 壱江博昭
- 【事務局】高橋文刃（雲南省教育委員会教育部長）、稻岡恵子（同生涯学習課長）、伊藤 廉
(本次教育分室主任主事)
- 【調査員】坂本諭司（雲南省教育委員会本次教育分室長）、板垣 旭（同生涯学習課文化財・
文化振興グループG.L.・主幹）、山崎 修（同S.L.・副主幹）、堀江篤史（同上事）
- 【調査補助員】宇山川千歌子（嘱託職員）、安川賢太（臨時職員）
- 【調査指導】熱田貴保（島根県教育厅埋蔵文化財調査センター）、穴澤義功（たたら研究会委員）、
田中義昭（島根県文化財保護審議会委員、雲南省文化財保護審議会副会長）、
蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員、雲南省文化財保護審議会会长）、
東森 晋（島根県教育厅文化財課）
- 【発掘作業員】石橋定利、亀山英夫、小林孝芳、齊藤治雄、千原昌、難波正、野津盛、藤原盛一、
吉田 博
- 平成18年度（報告書作成）
- 【調査主体】雲南省教育委員会 教育長 壱江博昭
- 【事務局】藤井信弘（雲南省教育委員会教育部長）、稻岡恵子（同生涯学習課長）、山浪文雄
(同文化財・文化振興グループ副主幹)、堀江篤史（同主任上事）
- 【調査員】坂本諭司（雲南省教育委員会生涯学習課上査）、板垣 旭（同文化財・文化振興グ
ループG.L.・主幹)、山崎 修（同S.L.・主幹）
- 【調査補助員】宇山川千歌子（嘱託職員）、安川賢太（臨時職員）
- 【整理作業】飯塚明美（臨時職員）、青木裕美子（臨時職員）
- 【調査指導】穴澤義功（たたら研究会委員）、中山義昭（島根県文化財保護審議会委員、雲南省
文化財保護審議会副会長）、蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員、雲南省文化
財保護審議会会长）、目次謙一（島根県教育厅文化財課世界遺産登録推進室）

第2章 位置と歴史的環境

本報告書に記すゴマボリ遺跡・寺田Ⅰ遺跡は、島根県雲南市本次町北原に所在する。

雲南市は、平成16年11月1日、大原郡の大東町・加茂町・本次町・飯石郡の三刀屋町・吉田村・掛合町の6町村が合併して発足した。市域は、島根県の東部にあたる出雲地方の中央部から南東部に広がる。市の中央を国道54号が南北に縦貫しており、この国道54号を基軸として、主要地方道松江木次線、主要地方道出雲三刀屋線、および国道314号などの幹線道路が接続する市の中心部は、県都松江市や出雲市方面、広島県方面への交通の要衝となっている。

市内には、一級河川斐伊川とその支流の赤川・三刀屋川・久野川、さらにその支流である阿川川、吉田川などが流れているほか、神戸川に注ぐ稗原川、波多川が流れている。加茂町から大東町、本次町、三刀屋町にかけては、斐伊川と赤川、三刀屋川の合流地点を中心として平地が広がっているが、南部の吉田町、掛合町では中国山地に至る広範な山間地域となっている。

両遺跡のある北原は、市域を貫流する斐伊川の中流域に位置し、そのまま東側で仁多郡奥山町に接している。北原は、湯村やダムサイトが築かれる平田とともに「温泉地区」と称されるが、昭和30（1955）年に本次町・日登村と合併するまでは仁多郡温泉村に属していた。天平5（733）年にまとめられた「山雲國風土記」（以下、「風土記」と記す。）の仁多郡条には、この温泉地区に遺跡地が現存する「漆仁社」「石壇社」のほか、「薬湯」の存在を示した「漆仁川邊」の記述があり、この地域が仁多郡に属していた歴史は非常に長い。

古代、「出雲大川」と呼ばれた斐伊川については、「風土記」に、出雲国と伯耆国の境となる島上山を源として、仁多郡の横田・三處・三澤・布勢の4郷、大原郡の来次・斐伊・屋代・神原の4郷を経て、出雲郡の河内・出雲の2郷、さらに伊勢・杵築の2郷を経て神門水海に至る、という流路が記されているが、支流を含めたこの斐伊川流域には、「古事記」や「日本書紀」に記された八岐大蛇退治伝説の伝承地が数多く点在している。これが、斐伊川の氾濫をヤマタノオロチに見立てて、斐伊川の治水事業を「平成のオロチ退治」と称する由縁でもある。

斐伊川は、長い歴史の中で幾度となく水害を引き起こし、流域に暮らす人々を苦しめたが、一方で肥沃な土地と川の恵みをもたらした。このことは、周辺に数多くの遺跡が残されていることからも窺い知ることができる。



第1図 調査地の位置

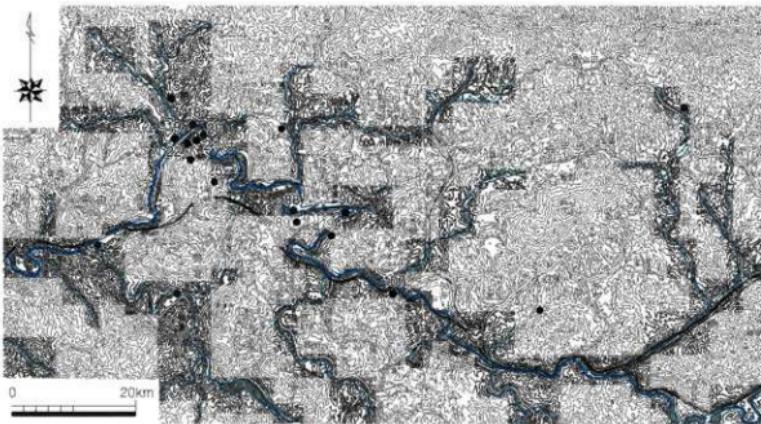
以下、斐伊川中・上流域を中心とする周辺の遺跡を紹介しながら、この地域の歴史的環境を概観してみたい（遺跡名称に付した番号は分布図と一致する）。

旧石器時代 この時代の遺跡は、島根県内でも決して多くはなく、近年、資料が増加しつつはあるものの、まとまった石器の出土はほとんどなかったと言ってよい。しかし、平成17年に奥出雲町の原田遺跡（88）で、堆積した火山灰との関係が層位的に確認できる石器群や調理場跡とみられる燐群が検出され、この地域のみならず中国地方の旧石器時代の様相を知る手がかりとして注目を集めている。ここで指標となる火山灰は、この遺跡から直線距離で西へ約33km離れた三瓶山の浮布降下火山灰（16,000年前）、鹿児島県の姶良Tn火山灰（AT）、三瓶山の池山降下火山灰で、これらを挟んで区分された文化層は、①縄文時代前期以前～浮布降下火山灰層以降、②浮布降下火山灰下位～姶良Tn火山灰上位層、③姶良Tn火山灰下位～池山降下火山灰上位、の3つである。第1文化層については、縄文時代草創期の可能性も指摘されているが、いずれにしても、この地域の旧石器文化を語る上で貴重な資料となった。今後の詳細な検討が期待される。

また、雲南省本次町では、家の後II遺跡（21）から出土した石器の中に旧石器時代の可能性のあるものが1点見つかっている。

縄文時代 斐伊川中・上流域は縄文時代の遺跡が多く分布する。この地域で最も古い縄文土器は、雲南省本次町川平I遺跡（19）から出土した縄文早期の押型文土器である。この川平I遺跡では、早期から晩期にかけての土器がほぼ途切れることなく出土している。また、宮ノ脇遺跡（18）、家の後II遺跡でも早期のものとみられる土器が出土した。そのほかに早期の遺跡としては、斐伊川上流部に所在する国竹遺跡や柏原遺跡などが知られる。

縄文時代前期の土器は、川平I遺跡、北原本郷遺跡（20）、家の後II遺跡のほか下鴨倉遺跡（35）



15. 垣ノ内遺跡 18. 宮ノ脇遺跡 19. 川平I遺跡 20. 北原本郷遺跡 21. 家の後II遺跡 22. 家の後I遺跡 23. ピノ平遺跡 25. 橋ヶ崎遺跡 29. 半田遺跡 35. 下鴨倉遺跡 67. 尾白I遺跡 88. 原山遺跡 89. 前田遺跡 90. 林原遺跡 94. 家ノ脇II遺跡 107. 巻地遺跡 113. 里田遺跡 116. 宮の前遺跡

第2図 旧石器・縄文時代の遺跡

第1表 奥出雲地方における縄文時代遺跡と出土土器編年

| 土時 | 遺跡名 | 川平 | 北原の内 | 墳後 | 家倉 | 下原 | 墓山 | 半山 | 板山 | 五明 | 下森 | 小門 | 神山 | 貝谷 |
|-------------------|---------------|----|------|-----|----|-----|----|-----|------|-----|------|----|-----|------|
| 層期 | 形式名 | I | II | III | IV | V | VI | VII | VIII | VII | VIII | V | VII | VIII |
| 第1 黑色 土層 | 沢山 | ■ | | | ■ | | | | ■ | | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 前池 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 谷尻 | | | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 蘿原 | ■ | | | | | | | | | | | | ■ |
| | 滋賀里3a | ■ | | | | ■ | | | ■ | ■ | ■ | | | |
| | 滋賀里2・岩田IV類 | ■ | ■ | ■ | ■ | (■) | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 滋賀里1 | | | (■) | | | | | | | | | | |
| | 福田K3・宮池・元住吉山2 | ■ | ■ | | | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 彦崎K2・西平・元住吉山1 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 四元・沖丈 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| 第1ハイカ（三瓶太平山降下火山灰） | | | | | | | | | | | | | | |
| 第2 黑色 土層 | 彦崎K1 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 津呉A・崎ヶ鼻 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 布勞・松ノ木式 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 福田K2 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 中津 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 里木3・福田C | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 里木2・船元4 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 船元3 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 船元2・波子 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 船元1 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| 第2ハイカ（三瓶角井降下火山灰） | | | | | | | | | | | | | | |
| 第3 黑色 土層 | 彦崎Z2 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 彦崎Z1・月崎下層 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 磯ノ森 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 羽島下層3 | | | | | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 西川津式 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 羽島下層2 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 羽島下層1 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | アカホヤ火山灰 | | | | | | | | | | | | | |
| | 織維土器 | | | | | | | | ■ | | ■ | | | |
| | 穂谷 | | | | | | | | | | | | | |
| 第4 黑色 土層 | 高山寺 | ■ | | | | | | | | | ■ | | | |
| | 黄鳥 | ■ | | | | | | | | | ■ | | | |
| | 帶狀施文押型文 | | | | | | | | ■ | | | | | |
| | 神宮寺 | | | | | | | | ■ | | | | | |
| | 大川 | | | | | | | | | | | | | |
| | 弘法塚IVa | | | | | | | | ■ | | | | | |
| 草創期 | 多縄文系 | | | | | | | | (■) | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | |

で確認され、続く中期の土器は平田遺跡（29）や下鴨倉遺跡、川平I遺跡、北原本郷遺跡、家の後I遺跡（22）、家の後II遺跡、垣ノ内遺跡（15）で出土している。このうち、垣ノ内遺跡は中期の土器の出土が非常に顕著である。

縄文時代後期になると、平田遺跡、下鴨倉遺跡、墓地遺跡（107）など、この時期の貴重な資料を提供した遺跡が数多く存在する。平田遺跡では、岡山県の福田貝塚出土土器と酷似した浅鉢や九州の鐘崎式系の上器が数多く出土しているほか、土坑の検出状況や土器の出土状況から土器埋設が行われた可能性も指摘されている。また、大量の石鐵や石斧が剥片を伴って出土しており、石器の製作工房跡があった可能性も高い。

下鴨倉遺跡は、かつて「縄文のデパート」と称されたように、縄文前期から晩期に亘る山陰・山陽の土器様式を網羅しており、さらには北部九州の影響を強く感じさせる土器もみられる。平田遺跡と同様に山陽・北部九州との関係が注目される遺跡である。また墓地遺跡では、縄文時代後期の土偶が3体出土している。一つの遺跡から3体の土偶が出土したのは、中四国地方では岡山県の津雲貝塚、福田貝塚に次いで3例目となった。この時期の土偶は、林原遺跡（90）でも試掘調査の際に1点出土している。林原遺跡では、縄文後期の土器や磨製石器も出土しており、本調査の結果が期待される。

この地域においては、近年、縄文時代後期から晩期にかけての上器埋設遺構の発見が相次いでいる。土器埋設が行われた遺跡としては、以前より雲南省三刀屋町の宮田遺跡や墓地遺跡が知られていたが、家の後II遺跡、北原本郷遺跡、原山遺跡、前田遺跡（89）でも確認された。埋甕の可能性が示された平田遺跡を含め、これらの出土例は、斐伊川中流域における縄文時代の墓制を考える上で非常に注目される。

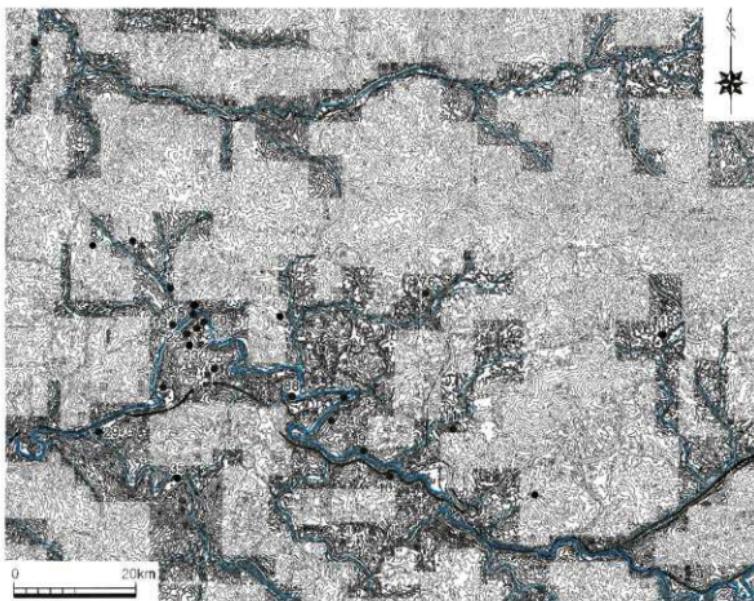
弥生時代 この地域における弥生時代の遺跡は、以前から縄文時代の遺跡に比べて希薄と言われていた。雲南省内では本次町の早稲田遺跡、木郷谷遺跡、奥出雲町では鹿谷遺跡、因竹遺跡、代山遺跡、横田高校グランド遺跡などが知られていたが、遺構が確認されていたのは国竹遺跡のみであり、この地域の弥生時代については不明な点が多かった。ところが、近年の発掘調査の増加に伴って、確認された弥生時代の遺構・遺物も増えてきており、徐々にこの時代の様相が明らかにされつつある。

弥生時代の集落跡として挙げられるのは、垣ノ内遺跡、北原本郷遺跡である。垣ノ内遺跡では、弥生時代中期後葉から古墳時代前期にかけての堅穴住居跡・建物跡が合計16棟、掘立柱建物跡が数棟確認された。ここでは中期の塩町式土器が出土しており、備後地方との関係が注目されている。

北原本郷遺跡では中期前葉から後期末にかけての堅穴住居跡が18棟、掘立柱建物跡が6棟見つかっている。いずれも住居跡や建物跡がまとめて検出されており、この地域における弥生集落の構造を探る貴重な資料である。また、墓地遺跡では消失住居1棟を含む中期後葉の堅穴住居跡が2棟検出されている。

平田遺跡では、円形に近い多角形の堅穴建物跡から4基の鍛冶炉が見つかり、それとともに鉄錬やその未製品、板状や棒状の鉄片、鋸、砥石なども出土した。ここは、鉄素材を鍛錬・加工する工房跡と考えられ、弥生時代末から古墳時代初頭における鉄器製作の様相を知る上で貴重な資料となつた。

この地域における弥生時代の墳墓については明らかでない。ただ、雲南省本次町寺領にある原口



1. 伝木次銅鐸出土地 8. 北原I遺跡 12. 寺田I遺跡 15. 塈ノ内遺跡 17. 宮サコ遺跡 18. 宮ノ脇遺跡
 19. 川平I遺跡 20. 北原本郷遺跡 21. 家の後II遺跡 22. 家の後I遺跡 23. 西ノ平遺跡 25. 横ヶ時遺跡
 28. 家の上遺跡 29. 平田遺跡 35. 下鴨倉遺跡 67. 尾白I遺跡 76. 長福寺遺跡 88. 原田
 遺跡 90. 林原遺跡 94. 家ノ脇II遺跡 99. 寺畠遺跡 107. 篠地遺跡 111. 須坂遺跡 113. 里田遺跡
 118. 芝原遺跡

第3図 弥生時代の遺跡

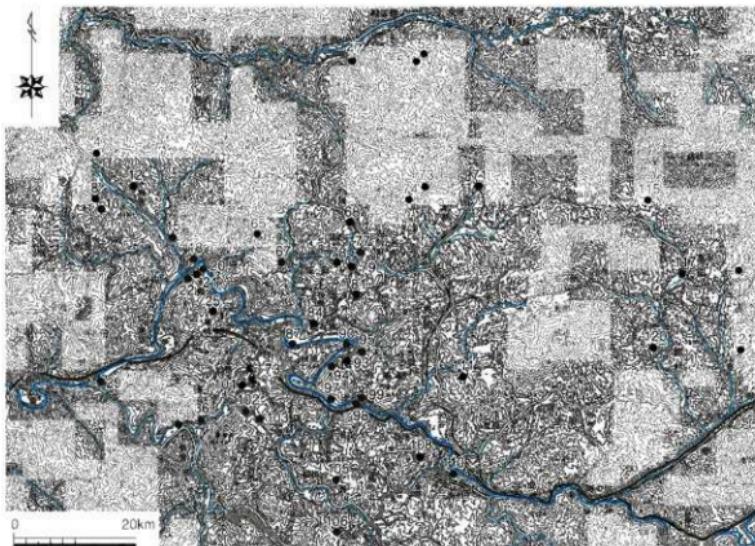
墳墓群では、1号墓で上部に列石を持つ墓坑が見つかっており、弥生時代の墳墓の可能性が指摘されている。また、最近、寺領小学校の南東丘陵の尾根上に数多くのマウンドが連なっていることがわかった。この丘陵は、もともと原口墳墓群と地続きであったとみられ、ここが弥生時代から古墳時代にかけての墓域であったものと考えられる。このほかには、斐伊川の支流、赤川沿いの丘陵上に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墳墓が広がっていた神原正面遺跡が知られている。

弥生青銅器の出土では、奥出雲町の横田八幡宮に伝えられている銅剣や、雲南省木次町日登で出土したと言われる伝木次銅鐸（1）が知られている。また、雲南省加茂町には全国最多となる39個の銅鐸が出土した史跡加茂谷遺跡がある。

古墳時代 斐伊川中流域には、景初三年銘の三角縁神獣鏡が副葬されていた雲南省加茂町の神原神社古墳や土井・砂遺跡（1号墳）、同市木次町の斐伊中山古墳群、同市三刀屋町の松本古墳群などの前期古墳が点在する。一方、中流域から上流域には、前期の古墳の可能性が指摘されているものとして奥出雲町三成の須坂遺跡（111）がある。ここでは、弥生時代後期の台状墓や前方後方墳1基を含む15基の墳墓が見つかっている。

中期の古墳はほとんど確認されておらず、円墳 2 基からなる丸子山古墳群（108）が中期末頃とされる程度である。

古墳時代後期になると横穴式石室を持つ古墳が出現する。その一つである常楽寺古墳（117）は、円筒埴輪 14 以上、馬形埴輪 1 、男子人物埴輪 3 、女子人物埴輪 2 など、多くの埴輪が出土したことから注目された。石室の内部は調査が行われていないため、被葬者の人物像について言及することはできないが、相当な有力者層の存在を推測することができる。築造時期は出土した須恵器から 6 世紀前半頃と考えられている。また、原田古墳（87）では、横穴式石室から双龍環頭大刀、金銅製馬具、ヒスイ製勾玉などの玉類のほか鉄器や多数の須恵器が出土した。築造時期は 6 世紀末とみられている。7 世紀前半頃とされる岩屋古墳では全長が 7 m にも及ぶ横穴式石室が確認されている。このほかに、横穴式石室を持つ古墳としては、穴観音古墳（73）、穴観古墳群（100）、郡屋敷古墳（110）などが知られる。



4. 茶屋の廻遺跡 8. 北原 1 遺跡 10. 下布施横穴墓群 12. 寺田 I 遺跡 15. 堀ノ内遺跡 18. 宮ノ脇遺跡
20. 北原本郷遺跡 21. 家の後 II 遺跡 22. 家の後 I 遺跡 25. 横ヶ峰遺跡 29. 平田遺跡 35. ド鴨倉遺跡
36. 光善寺古墳 47. 寺谷尻古墳 51. 八幡奥横穴群 52. 八幡奥古墳群 65. 尾白横穴墓群
67. 尾白 1 遺跡 68. 伊賀武社境内横穴墓群 71. 堂の前古墳 73. 穴観音古墳 74. 三出平古墳 77. 中山遺跡
78. 卡雲寺古墳群 79. 上布施横穴墓群 81. 上布施一畑山古墳群 84. 戰ヶ迫横穴墓群 87. 原山古墳
88. 原田遺跡 90. 林原遺跡 93. 家ノ脇遺跡 94. 家ノ脇 II 遺跡 95. 時松山横穴群 97. 家の前遺跡
98. 寺守根遺跡 99. 寺畠遺跡 100. 穴觀古墳群 101. 菅田古墳群 102. 比丘尼原横穴墓群
103. どげや古墳 105. 正覚古墳群 106. 八幡冢横穴墓群 108. 丸子山古墳群 110. 郡屋敷古墳
111. 頭板遺跡 115. 琴枕岩屋古墳 117. 常楽寺古墳 119. 岩屋古墳 120. コフケ横穴墓 121. 金床横穴墓

第4図 古墳時代の遺跡

横穴墓についても発見例が多い。この地域の横穴墓の形態は、玄室の平面が縦長方形、断面が三角形の妻入りとなるものがほとんどである。このうち、雲南省木次町の下布施横穴墓群（10）では、1号横穴墓から柄間に巻かれた紐が残るほど遺存状態が極めて良好な装飾大刀が出土した。柄縁に金箔・銀箔を貼ったもので、畿内で・括生産される一般の装飾大刀とは技術的な系譜が異なると言われている。また、平ヶ廻横穴墓では金銅装刀子が副葬されていた。奥出雲町の嚴ヶ廻横穴墓群（84）では、6穴のうちの1穴から、切り傷を負ったまま治癒することなく死亡した男性の人骨が発見されている。この人骨の切創部は添え木（副本）で固定されており、全国的にもまれな事例として注目されている。時仏山横穴墓では、前部、玄室内のいずれにも供獻土器がなく、被葬者が伏臥伸展位で葬られた女性の人骨が見つかった。ここでは、勾玉、切子玉、ガラス小玉といった玉類の出土が多いことが特徴的である。

奈良・平安時代 『風土記』によると、大原郡の郡家は斐伊郷、飯石郡の郡家は多福郷、仁多郡の郡家は三處郷に置かれた。このうち大原郡家は、斐伊郷に置かれる前には屋裏郷に置かれていた。大原という郡名は、この屋裏郷に置かれていた旧郡家付近に田が十町ほどあって広い「平原」をなしていたことに由来する、と『風土記』は伝えている。山野記事の筆頭に掲げられた「菟原野」の項には、「郡家の正東なり。即ち郡家に属けり。」という記載があることから、当時、大原郡家は「菟原野」付近にあったと理解される。この「菟原野」の意味地としては、雲南省木次町里方に「菟原」が見え、『風土記』では「野」を樹林のない草山に付していることから、大原郡家は現在のJR木次駅の北方に位置していたものと推定されている。

旧大原郡家は雲南省大東町前原のJR幡屋駅付近にあったと推定されているが、『風土記』の單程記載から推測したもので、明確な根拠となる遺跡や遺物は見つかっていない。この前原地区は、斐伊川の支流である赤川と、その支流の幡屋川の合流地点にあたるが、前原地区と同じ段丘上に統く仁和寺地区には「郡家（こおりや）」「郡垣（こおりがき）」という地名が残っている。ここは後に斐伊郷から再びこの地に移され近世に及んだ郡役所跡と伝えられているが、平成17年には、この「郡垣」付近で、規則性をもって並んだ大型の柱穴が検出されており、今後の調査が期待されている。

飯石郡家は芸南市掛合町郡にあったと推定されているが、この周辺に関連する遺跡は見つかっていない。一方、三處郷にあった仁多郡家については、墨書き土器や円面鏡・転用鏡、鳥帽子を被った人形木製品などが出土した奥出雲町郡村のカネツキ免遺跡が郡家関係遺跡として注目されている。近隣の芝原遺跡からは「厨」と墨書きされた上器や上馬などが出土しており、この付近に郡家に関わる遺跡が展開する可能性は高い。

『風土記』には寺院関係の記述もある。出雲国には「教吳寺」と、そのほかに10か所の「新造院」の存在が記されており、そのうち大原郡には斐伊郷に一所、屋裏郷に一所、合計3つの新造院があった。斐伊郷の新造院のうち一つは「郡家の正南一里なり。嚴堂を建立つ。僧五軀あり。大領勝部臣蟲麻呂が造りし所なり」と記され、JR木次駅付近にあったと推定されている寺院である。ここでは「塔の石」と呼ばれる礎石らしき石が掘り出されている。

もう一つは、「郡家の東北一里なり。嚴堂を建立つ。尼二軀あり。斐伊郷の人、樋印支知麻呂が造る所なり。」と記されたもので、『風土記』記載寺院の中で唯一の尼寺である。郡家からの單程から捉えた推定地・帶には「法花坊」という字が残っている。天平期に建立された国分尼寺は「法華

滅罪寺」と称されていたことから、尼寺と「法花坊」の関係も注視される。ここからも、礎石と思われる石が出土している。

尼裏郷の新造院は、「郡家の東北・十一里一百二十歩なり。塔を建立つ。僧一軀あり。前の少領、額田部臣押嶋が造る所なり。今の少領伊去美が從父兄なり。」と記され、雲南市大東町仁和寺の郡境の西方にあったと推定されている。ここにも礎石とみられる大きな石がある。

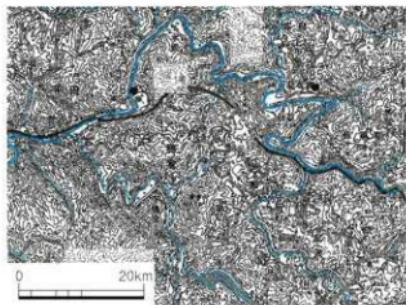
このほかには、奥出雲町高田に、8世紀後半のものとみられる軒丸瓦が出土した高田廃寺がある。この寺院については『風土記』に記載されていない。

神社については、『風土記』に大原郡に13所の神祇官社と16所の非神祇官社が、仁多郡には2所の神祇官社と8所の非神祇官社が記載されている。仁多郡の筆頭社として記されているのは三澤社で、阿須須伎高日子命を祀る現在の三沢神社である。『風土記』仁多郡三澤郷条には、この阿須須伎高日子命にまつわる地名起源伝承が記されているが、この中に、三澤郷には「御澤」があって、阿須須伎高日子命がこの湧き水で沐浴したことに因み、山雲国造が新任の際に神吉詞を奏上するため朝廷へ向かう時には、この「御澤」を用いて禊ぎをすることになっているという記事がある。この「御澤」の所在地については、未だ特定されるに至っていないが、この記事に關連して、雲南市本次町平山の家の上遺跡(28)の調査が注目を集めた。家の上遺跡は、古墳時代の終末期から奈良時代にかけての祭祀遺跡で、配石遺構から土馬や手づくね土器、土器などが出土した。ここには、『雲陽誌』に「古井 三澤氏鴨倉在城の時元朝の若水汲たる井の跡なり」と記された「前の舞の古井」と称される湧水があり、水に関わる祭祀遺物と言われる土馬が出土していることから、7~8世紀頃にこの場所で行われた祭祀は「水際の祭祀」と考えられている。先述した阿須須伎高日子命と山雲国造の禊ぎに関わる故事との関連が注目される遺跡である。

また、奥出雲町の円満寺遺跡(85)でも、湧水のある土器溜まりから大量の須恵器や土師器とともに土馬が出土している。

『風土記』には、仁多郡の4郷(三澤・三澤・布勢・横田)について、「以上の諸の郷より出す所の鐵、堅くして、尤も雜具を造るに堪ふ」と記されるが、この記事は、奈良時代にこの地域で良質の砂鉄が盛んに採取され、種々の鉄器が作られていたことを示している。本書において詳述する寺山I遺跡では、8世紀後半のものとみられる鍛冶遺構が確認され、この記事を裏付けるものとして注目される。ここは、精錬及び鍛錬を行った工房跡と考えられ、鋳造が行われた可能性を示す遺物も出土している。また、原山遺跡からは、鍛冶炉を持つ掘立柱建物跡が確認されており、芝原遺跡でも奈良時代末とみられる鍛冶遺構が確認されている。

横ヶ峰遺跡では、平安時代半ばと推定される製鉄炉跡や鐵滓などが出土し、類例が少なく不明な点の多い平安時代の鉄生産について貴重な資料を提供した。そのほかには、亀ヶ谷遺跡が11世紀末から12世紀初頭、家ノ前鉱跡(9)、上垣内たたら跡(27)が



28. 家の上遺跡 85. 円満寺遺跡

第5図 水際の祭祀遺跡



9. 家ノ前鉢跡 12. 寺山下遺跡 17. 宮サコ遺跡 25. 植ヶ崎遺跡
27. 上垣内たら跡 29. 平田遺跡 88. 原田遺跡 118. 芝原遺跡

第6図 古代の製鉄関連遺跡

12世紀後半の製鉄遺跡として注目される。

鎌倉・室町時代 承久の乱（1221年）以後は、日伊郷の比伊氏、大東庄の土屋氏、大西庄の飯沼氏、淀本庄の中沢（牛尾）氏、佐世郷の佐世氏など、大原郡内にも東国のお家人が進出してきた。また、尼子・毛利両氏の合戦期においては、この地が、尼子氏の本拠である宮田城の西方前哨にあたることもあって、牛尾氏の三笠城や高平城、佐世氏の佐世城、立原氏の近松城などの重要な城が築かれ、いたるところで激戦が繰り広げられた。

仁多郡では、信濃國の御家人であった飯島氏が、承久の乱の行賞により三沢郷に所領を許された。飯島氏は鎌倉時代末期に信州から三沢郷へ移り、姓を三沢と称して本格的な所領経営に乗り出したが、鴨倉山（要害山）に居城である三沢城（37）を構えると、隣接する阿井郷、布勢郷など周辺へ支配領域を拡大し、室町時代には横田庄にも進出した。三沢城は14世紀初頭の築城とされ、主郭を中心に大小14段以上の郭を持つ山城で、永正6（1509）年に横田庄内へ藤ヶ瀬城を築くまでは三沢氏の本拠地であった。三沢氏は、奥出雲地方の鉄生産と流通を掌握し、出雲国内で最大の国人へと成長する。天文12（1543）年には尼子氏に征服されるが、それでもなお、有力国人領主として影響力を保持し続けた。

下布施氏館跡（16）は、三沢氏の家臣下布施氏の居館跡と言っていたが、発掘調査により小規模な郭が5か所、堀切が1か所、通路状造構が1か所確認され、むしろ山城との見方が有力となった。出土した陶器片から、14世紀から16世紀後半のものと見られている。下布施氏は、天文9（1540）年、尼子経久が近江国竹生島の宝嚴寺に納めた奉賀帳に、尼子氏の家臣として名を連ねている仁多郡の国人である。

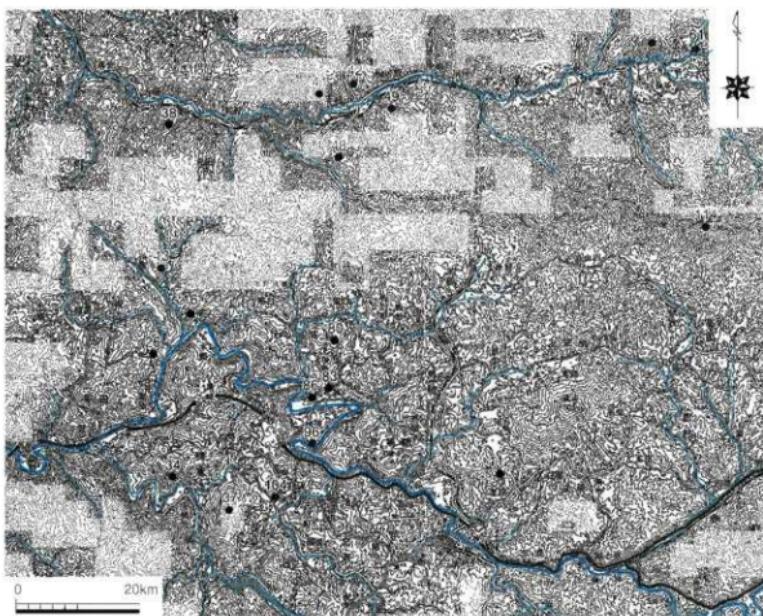
西尾社遺跡（86）も発掘調査が行われ、丘陵の先端部に城郭の虎口とみられる深い掘削り入口部が確認された。この丘陵は、三沢氏由来の出城の一つとされる水ノ手城跡（83）から派生しており、

水ノ手城の縄張りの一部と考えられている。

こうした戦乱期にあって、永禄12（1569）年には、奥出雲で生産された鉄などを斐伊川の舟運（水運）により輸送する「来次市庭中」と呼ばれる商人集団が組織されていた。来次市庭（市場）を拠点として他地域の市場と交渉を持ち、広く出雲地方を舞台に活躍していたと伝えられている。

この地域で古くから行っていた製鉄は、中世に入ってからも盛んに行われていた。このことは、広範に鉄滓等の散布地が数多く確認されていることからも窺い知ることができる。古代製鉄の流れを示す「野だたら」跡の調査例は増えてきており、近年では、枯木ヶ谷鉱跡（6）が13世紀後半の可能性を持つものとして注目された。調査例の増加は、古代から中世、そして近世へと、たたら製鉄の技術が進化して行く過程を検証していくことにつながり、今後の調査によって古代に遡るものがある。

本書に記載するゴマボリ遺跡（11）では、遺構は確認されてないものの、中世後期から近世初期の製鉄関連遺物が出土している。



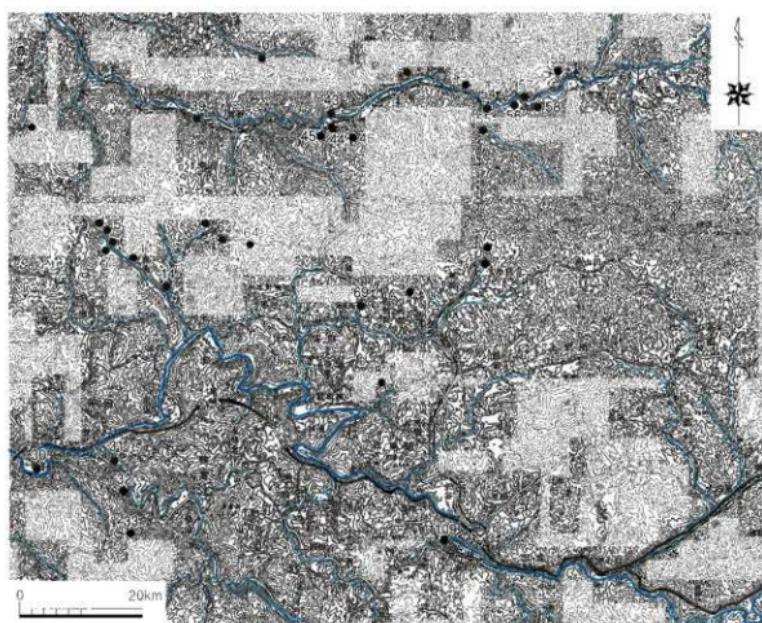
13. 案久寺遺跡 16. 下布施氏館跡 26. トヤケ丸城跡 34. 松木山城跡 37. 三沢城跡
38. 土守山城跡 41. 中垣内上脊跡 42. 戸原ヶ崎脊跡 48. 高丸城跡 49. 犀居敷館跡
60. 生山城跡 61. 寺山城跡 80. 佐白城跡 83. 水ノ手城跡 86. 西尾社遺跡 96. 小
廻上遺跡 104. 布広城跡 112. 右原城跡 114. 鎌坂城跡

第7図 城跡・城館跡

江戸時代 近世に入ると、この地域の鉄生産量は飛躍的に増加した。これは、奥出雲町には絲原家、ト歳家、櫻井家、雲南市吉田町には山部家など、豊富な山林資源を基盤とする有力な鉄師が現れたことによる。彼らは、「永代たら」と呼ばれる半永久的な地下構造を持った高殿たらを營み、極めて良質な生銅を産出した。一方、たら製鉄に必要な砂鉄を探取するため、河川に大量の砂を流す「鉄穴流し」が行われた結果、土砂の堆積が川底を上昇させ、たびたび河川の氾濫を招くこととなった。この地域には、この鉄穴流し跡も多く残っている。

たら製鉄に従事していた人たちの作業場や居住区を総称して「山内」と言うが、たら製鉄の技術者集団の日常生活はここで営まれていた。雲南市吉田町には、全国で唯一、この「山内」の跡が残っており、国指定の重要有形民俗文化財「菅谷たら山内」として現代に当時の名残を伝えている。

この地域を中心とする中国地方の製鉄は、江戸時代中ごろから明治の初め頃までが最盛期であり、



2. 木の郷鉄跡 3. 焼け鉄跡 5. 妻の原古鉄跡 6. 枯木ヶ谷鉄跡 7. 大歳鉄跡 11. ゴマボリ遺跡
14. 谷口遺跡 27. 上垣内たら跡 30. 半山鉄原鉄跡 31. 勝部宅前鉄跡 32. 雜波宅前鉄跡 33. 下鴨倉大沢鉄跡 39. 寺領梶原銀治屋跡 40. 茂地ヶ谷たら跡 43. 下梶原鉄跡 44. 叶原製鉄跡 45. 梶坂たら跡 46. 段たら跡 50. 叶谷野たら跡 53. 鈴廻たら跡 54. 井谷鉄跡 55. 小井谷たら跡 56. 一ノ瀬鉄跡 57. 中鉢野たら跡 58. 桜木原銀治跡 59. 遠日野たら跡 62. 下布施窓の上鉄跡 63・64. 佐白・大原山製鉄跡群 69. 佐白・原鉄跡 70. 庄田たら跡 72. 金原鉄跡 75. 金子松鉄跡 82. 亀ヶ谷遺跡 109. 三共鐵治屋小路遺跡

第8図 中・近世の製鉄遺跡

明治中期には全国の約60%以上を生産するに至っている。しかし、洋鉄の輸入が増え、国内でも鉄鉱石利用の製鉄技術が広まるようになると、たら製鉄は次第に衰退していくようになった。

【参考文献】

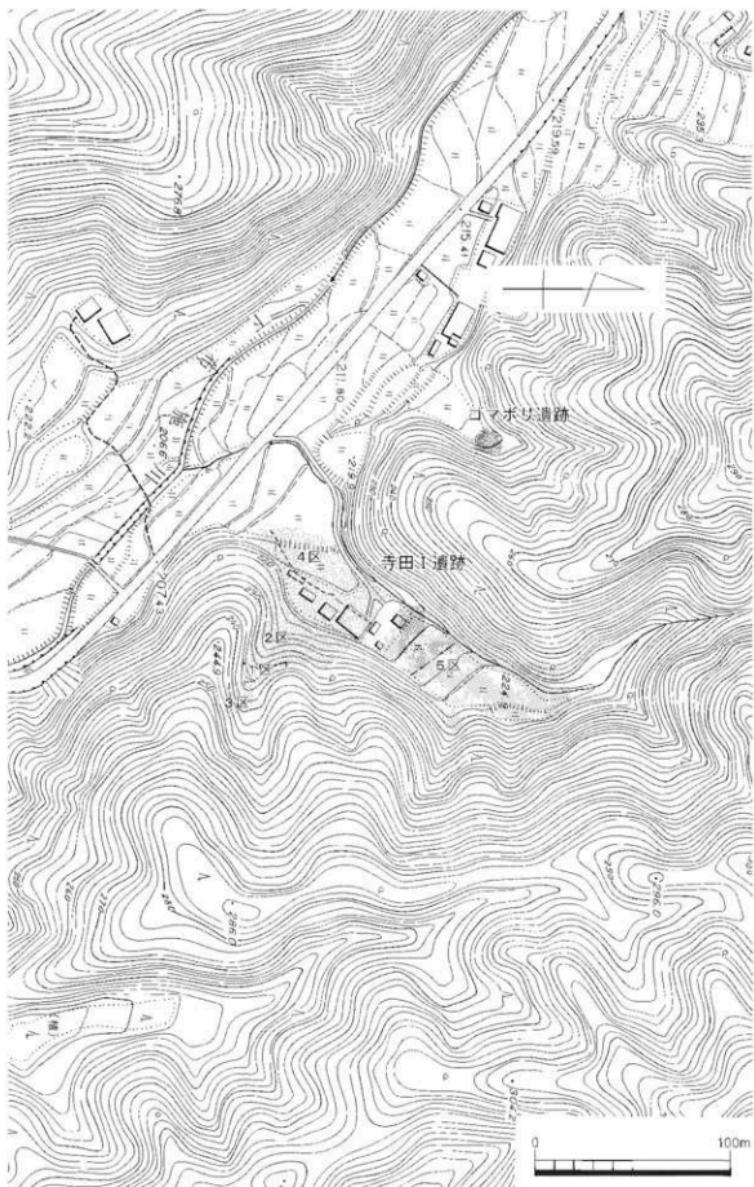
- 『雲陽誌』
『本次町誌』 1972
『三刀屋町誌』 1982
『加茂町誌』 1984
『大原郡誌』(復刻版) 1986 臨川書店
『仁多町誌』 1999
『新修本次町誌』 2004
『鳥取県歴史大年表』 2001 郷土出版社
加藤義成『修訂出雲国風土記参究』(改訂3版) 1981 松江今井書店
加藤義成『校注出雲国風土記』(修正6版) 1983 千鳥書房
加藤義成校注『出雲国風土記』(改版13刷) 1998 松江今井書店
関和彦「『出雲国風土記』註論(その六) 仁多郡条」『古代文化研究』第9号 2001 鳥取県古代文化センター
関和彦「『出雲国風土記』註論(その七) 大原郡条」『古代文化研究』第10号 2001 鳥取県古代文化センター
仁多町教育委員会「ド柳倉遺跡緊急発掘調査報告」 1981
仁多町教育委員会「常楽寺古墳」 1985
仁多町教育委員会「比丘尼原横穴群緊急発掘調査報告」 1986
仁多町教育委員会「下鴨倉遺跡(第二次発掘調査報告)」 1990
出雲考古学研究会「松本古墳群-斐伊川流域の前期古墳をめぐって」古代の山雲を考える7 1991
大東町教育委員会「大東町の遺跡IV-久野一」 1992
本次町教育委員会「斐伊中山古墳群-西支群」本次町文化財調査報告書第2集 1993
仁多町教育委員会「角・宮ノ崎横穴 柏原遺跡」 1994
仁多町教育委員会「日ヤケたたら跡 芝原遺跡」高田小学校建設予定地内発掘調査報告書 1994
木次町教育委員会「妙見山遺跡発掘調査報告書」木次町文化財調査報告書第3集 1995
木次町教育委員会「平田遺跡」本次町文化財調査報告書第4集 1997
仁多町教育委員会「須坂遺跡・他」中国第二中幹線ルート送電鉄塔建設予定地内遺跡調査報告書 1997
木次町教育委員会「家の上遺跡・石壇遺跡」尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1 1998
鳥取県教育委員会「出雲・隱岐の城跡」鳥取県中近世城館跡分布調査報告書(第2集) 1998
木次町教育委員会「上垣内たたら跡・北原I遺跡・茶屋の廻遺跡」尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2 1999
本次町教育委員会「平田遺跡第Ⅲ調査区、斐伊川広域一般河川改修工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2000
木次町教育委員会「朽木ヶ谷鉛遺跡」尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3 2000
仁多町教育委員会「殿ヶ迫横穴墓群 西尾社遺跡 亀ヶ谷遺跡 シベ石遺跡 時仏遺跡 時仏山横穴墓」尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2001
仁多町教育委員会「伊賀武社境内横穴墓」 2001
鳥取県教育委員会「湯の奥遺跡 登安寺遺跡 湯後遺跡 土井・砂遺跡」中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12 2001
木次町教育委員会「ト布施横穴墓群・案久寺遺跡」尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 2002

- 木次町教育委員会『家ノ前跡・谷口遺跡・宮サコ遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5
2003
- 島根県教育委員会『増補改訂島根県遺跡地図1（出雲・隠岐編）』2003
- 島根県教育委員会『尾白Ⅰ遺跡 尾白Ⅱ遺跡 家ノ脇Ⅱ遺跡3区 川平Ⅰ遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 2003
- 島根県教育委員会『家の後Ⅰ遺跡 垣ノ内遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 2003
- 加茂町教育委員会『神原神社古墳』2004
- 仁多町教育委員会『尋地遺跡』尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告Ⅲ 2004
- 島根県教育委員会『横ヶ峰遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 2004
- 島根県教育委員会『家ノ脇Ⅱ遺跡・原田遺跡1区・前山遺跡4区』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 2004
- 木次町教育委員会『西ノ平遺跡・コフケ遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6 2005
- 島根県教育委員会『前田遺跡（2）・下布施氏館跡・原田遺跡1区（分析編）』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 2005
- 島根県教育委員会『島根県雲南市宮ノ脇遺跡 家の後Ⅱ遺跡1』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6 2005
- 島根県教育委員会『北原本郷遺跡1-1~3・6区の調査-』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 2005
- 島根県教育委員会『島根県奥出雲町原田遺跡』『考古学研究』第52巻第4号 2006
- 奥出雲町教育委員会『円満寺遺跡Ⅰ・Ⅱ』尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書IV 2006
- 奥出雲町教育委員会『橋屋遺跡・水ノ手城跡上井平地区・小道上遺跡』尾原ダム建設予定地地内埋没文化財発掘調査報告書V 2006

第2表 周辺遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 旧石器 | 绳文 | 弥生 | 古墳 | 古代 | 中世 | 近世 |
|----|----------|---------|-----|----|----|----|----|----|----|
| 1 | 伝木次御深出土地 | 散布地 | | | | | | | |
| 2 | 木の御山跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 3 | 焼け跡跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 4 | 茶畠の跡遺跡 | 散布地 | | | | | | | |
| 5 | 委の原古伊跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 6 | 桔木ヶ谷伊豆跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 7 | 大歳伊跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 8 | 北原Ⅰ遺跡 | 故布地 | | | | | | | |
| 9 | 家ノ前御跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 10 | ト布施櫛穴墓群 | 横穴墓 | | | | | | | |
| 11 | ゴマボリ遺跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 12 | 寺田Ⅰ遺跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 13 | 案久寺遺跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 14 | 谷口遺跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 15 | 坂ノ内遺跡 | 集落跡 | | | | | | | |
| 16 | 下布施氏創跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 17 | 宮ナコ遺跡 | 散布地・製鉄? | | | | | | | |
| 18 | 宮ノ脇遺跡 | 散布地・集落? | | | | | | | |
| 19 | 川平Ⅰ遺跡 | 集落跡 | | | | | | | |
| 20 | 北原本郷遺跡 | 集落跡 | | | | | | | |
| 21 | 家の後Ⅱ遺跡 | 集落跡 | | | | | | | |
| 22 | 家の後Ⅲ遺跡 | 散布地 | | | | | | | |
| 23 | 西ノ半遺跡 | 散布地 | | | | | | | |
| 24 | コブケ遺跡 | 散布地 | | | | | | | |
| 25 | 植ヶ押遺跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 26 | トヤケ丸城跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 27 | 上越内たたら跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 28 | 家の上遺跡 | 祭祀遺跡 | | | | | | | |
| 29 | 平卫遺跡 | 製紙遺跡ほか | | | | | | | |
| 30 | 平田御原伊跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 31 | 勝部毛前金跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 32 | 雅波毛前金跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 33 | 下鶴丸大村金跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 34 | 松本山城跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 35 | 下鶴倉遺跡 | 散布地 | | | | | | | |
| 36 | 光善寺古墳 | 古墳 | | | | | | | |
| 37 | 三沢城跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 38 | 王守山城跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 39 | 守衛院城治屋跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 40 | 藤地ヶ谷たたら跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 41 | 中垣内上皆跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 42 | 戸見ヶ崎皆跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 43 | 下親原伊跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 44 | 町原製紙跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 45 | 橋坂たたら跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 46 | 段たたら跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 47 | 守谷尻古墳 | 古墳 | | | | | | | |
| 48 | 高丸城跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 49 | 殿柄敷鉢跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 50 | 叶谷野たたら跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 51 | 八幡奥櫛穴群 | 横穴墓 | | | | | | | |
| 52 | 八幡奥山古墳群 | 古墳 | | | | | | | |
| 53 | 伊選たたら跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 54 | 井谷金跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 55 | 小井谷たたら跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 56 | ノ瀬鉢跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 57 | 中御野たたら跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 58 | 佐木原殿治屋跡 | 製紙遺跡 | | | | | | | |
| 59 | 速日野たたら跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 60 | 生山城跡 | 城跡 | | | | | | | |

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 旧石器 | 縄文 | 弥生 | 古墳 | 古代 | 中世 | 近世 |
|-----|--------------|----------|-----|----|----|----|----|----|----|
| 61 | 寺山城跡 | 城跡 | | | | | | ■ | |
| 62 | 下布施溝の上印跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 63 | | | | | | | | | |
| 64 | 佐白・大原山製鉄跡群 | 製鉄遺跡 | | | | | | | |
| 65 | 尾白横穴墓群 | 横穴墓 | | | | ■ | | | |
| 66 | 尾白II遺跡 | 炭窯跡 | | | | ■ | | | |
| 67 | 尾白I遺跡 | 散布地 | | | ■ | ■ | | | |
| 68 | 伊賀武社境内横穴墓群 | 横穴墓 | | | | | | | |
| 69 | 佐白・風入跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | ■ | |
| 70 | 庄田たら跡 | 製鉄遺跡 | | | | | | ■ | |
| 71 | 章の前古墳 | 古墳 | | | | ■ | | | |
| 72 | 金原印跡 | 製鉄遺跡 | | | | ■ | | ■ | |
| 73 | 穴覗音古墳群 | 古墳 | | | | ■ | | | |
| 74 | 三出平古墳 | 古墳 | | | ■ | ■ | | | |
| 75 | 金子松谷跡 | 製鉄遺跡 | | | | | ■ | | |
| 76 | 長福寺遺跡 | 散布地 | | | | ■ | | | |
| 77 | 中山遺跡 | 散布地 | | | | | | | |
| 78 | 玉雲寺古墳群 | 古墳 | | | | ■ | | | |
| 79 | 上布施横穴墓群 | 横穴墓 | | | | | | | |
| 80 | 佐白城跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 81 | 上布施一畠山古墳群 | 古墳 | | | | ■ | | | |
| 82 | 龜ヶ谷遺跡 | 製鉄遺跡・散布地 | | | | ■ | | | |
| 83 | 水ノ手城跡(水手山城跡) | 城跡 | | | | | ■ | | |
| 84 | 取ヶ迫横穴墓群 | 横穴墓 | | | | ■ | | | |
| 85 | 円沼寺遺跡 | 祭祀遺跡 | | | | ■ | | | |
| 86 | 西尾社遺跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 87 | 原田古墳 | 古墳 | | | | ■ | | | |
| 88 | 原田遺跡 | 集落跡 | | | | ■ | | | |
| 89 | 前田遺跡 | 散布地 | | | | ■ | | | |
| 90 | 林原遺跡 | 集落跡・古墳 | | | | ■ | | | |
| 91 | シベ石遺跡 | 社跡 | | | | | | ■ | |
| 92 | 時仏遺跡 | 社跡 | | | | | | | |
| 93 | 家ノ脇遺跡 | 散布地 | | | | ■ | | | |
| 94 | 家ノ脇II遺跡 | 散布地 | | | | ■ | | | |
| 95 | 時仏山横穴群 | 横穴墓 | | | | ■ | | | |
| 96 | 小堀上遺跡 | 城跡 | | | | | ■ | | |
| 97 | 家の前遺跡 | 散布地 | | | | ■ | | | |
| 98 | 寺宇根遺跡 | 散布地 | | | | ■ | | | |
| 99 | 寺畠遺跡 | 散布地 | | | | ■ | | | |
| 100 | 穴覗古墳群 | 古墳 | | | | | | | |
| 101 | 青山古墳群 | 古墳 | | | | | | | |
| 102 | 比丘尼草横穴墓群 | 横穴墓 | | | | | | | |
| 103 | 三けや古墳 | 古墳 | | | | | | | |
| 104 | 布引城跡 | 城跡 | | | | | ■ | | |
| 105 | 正覚古墳群 | 古墳 | | | | ■ | | | |
| 106 | 八頭城横穴古墳 | 古墳 | | | | | | | |
| 107 | 暮地遺跡 | 集落跡・散布地 | | | | ■ | | | |
| 108 | 丸子山古墳群 | 古墳 | | | | ■ | | | |
| 109 | 三成鍛冶屋小路遺跡 | 製鉄遺跡 | | | | ■ | | | |
| 110 | 郡塙敷古墳 | 古墳 | | | | | | | |
| 111 | 須坂遺跡 | 散布地 | | | | ■ | | | |
| 112 | 石原城跡 | 城跡 | | | | | | | |
| 113 | 里田遺跡 | 散布地 | | | ■ | ■ | | | |
| 114 | 鍋坂城跡 | 城跡 | | | | ■ | | | |
| 115 | 琴枕岩屋古墳 | 古墳 | | | | ■ | | | |
| 116 | 宮の前遺跡 | 散布地 | | | ■ | ■ | | | |
| 117 | 善楽寺古墳 | 古墳 | | | | ■ | | | |
| 118 | 芝原遺跡 | 製鉄遺跡 | | | | ■ | | | |
| 119 | 岩原古墳 | 古墳 | | | | ■ | | | |
| 120 | コフケ横穴墓 | 横穴墓 | | | | ■ | | | |
| 121 | 金床横穴墓 | 横穴墓 | | | | | | | |



第9図 ゴマボリ遺跡・寺田 I 遺跡の位置と周辺の地形

第3章 ゴマボリ遺跡

第1節 発掘調査の経過と概要

ゴマボリ遺跡は、島根県雲南市木次町北原822番地に所在する遺跡である。本遺跡は、木次町北原と同町東日登を結ぶ市道に面した狭小な谷間に位置している。本遺跡は、平成13年3月に島根県教育委員会によって行われた分布調査で、鉄滓が表採されたことにより野獣跡が存在するものと推定されていた。

発掘調査については、旧木次町が平成14年4月1日付けで国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所と委託契約を締結して実施した。なお、平成14年度の委託契約には、後述する寺田1遺跡の1~4区の発掘調査も含まれている。

発掘調査にあたっては、4月15日付けで島根県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘調査の通知（旧第58条の2第1項）を提出し、4月24日より現地調査を開始した。調査の対象面積は200m²である。

調査は、まず重機による表土除去作業から開始した。谷の中央には、上層観察用に縦断のベルトを設定し、その両側を掘削した。土層を観察すると、表土下約70cmより下層には砂土が厚く堆積しており、調査区の南北側では、この砂土の堆積が4m以上にも及ぶことが確認された。砂土の上層からは土師器片が出土したが、これは北東側から流入したものと判断された。

鉄滓は、主として縦断ベルト左半の砂土、その上に堆積した地山ブロックを多く含む灰褐色粘質土や表層土から出土した。炉床などの遺構は確認されていない。調査区北東にはわずかに狭小な緩斜面が残されるが、東南と北西の斜面は急峻で、島根県教育委員会が行った事前の試掘調査では、この斜面からは遺構は見つかっていない。しかし、発掘調査時に、調査地の北寄り標高237mの急斜面に設けられたトレッチの堆土から流動滓の小破片を確認している。このため、鉄滓はさらに高所の尾根近くに位置するものと推定された。

また、調査区北壁の右半には地山に亀裂の入った跡が見られた。上層を観察すると、この亀裂は谷間の西側（左半）に何らかの影響で地滑りが生じた結果と推定された。5月31日には北壁土層断面の写真撮影を行い、縦断ベルトを除去して現地での調査を終了した。

第2節 墓序と出土遺物

1. 墓序

調査区は、幅約45m、奥行き約65mの緩斜面である。調査区の東南と北西は丘陵の急斜面になっている。調査区南端付近で試掘を行ったところ、前述したように砂土が4mにも及んで堆積していたことから、掘削は無遺物層位で終了した。

調査区北西側の斜面を試掘したところ、地滑りなどによって地山が急激に下降していることがわかった。この厚い砂層は、漸次、周囲の斜面から流れ込んだ地山上とみられる。地山土の急激な流れ込みが終わった段階の堆積と考えられる暗褐色砂土上層で土師器片が混入していた。この砂層の



第10図 ゴマボリ遺跡 調査区位置図

上層には、地山ブロックを多く含んだ灰褐色粘質土が不均質に堆積しており、調査区上手から地山を含んだ土砂が運ばれた可能性が窺われる。しかし、これがたたら施設築造に伴うものかは判断できなかった。耕作に伴う地ならしの可能性も残される。

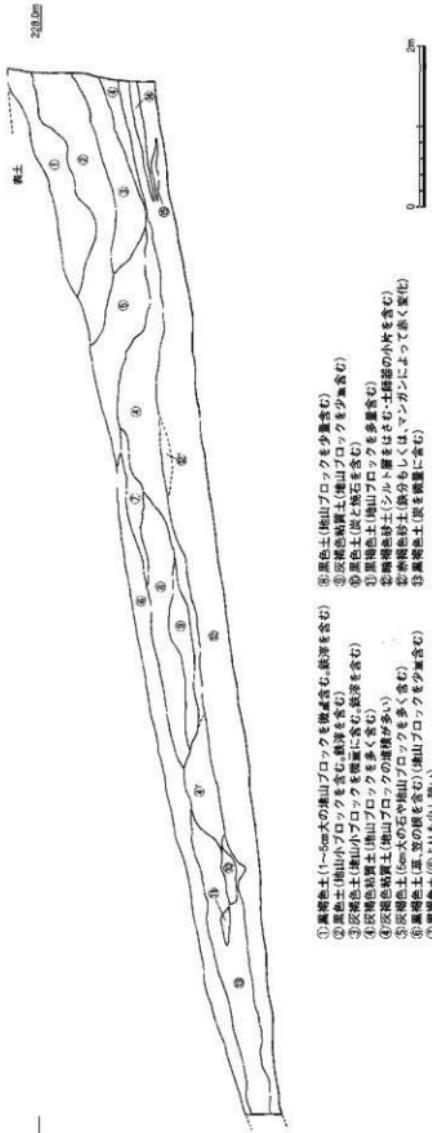
調査区上手では、黒色土から灰褐色土に鉄滓が含まれる。いわゆる排溝場にみられる鉄滓の密な出土状況と違い、土砂に混じって出土しており、間近に排溝場が存在する可能性は低いと考えられた。

調査区の北壁では、第12図にみられるように特異な土層を確認した。土師器片を包含する13層の堆積後、調査区北東寄りで地山に亀裂があり、その隙間に2層が入り込んだとみられる。剥離された地山の厚さは南側へ下るほど厚くなっていた。地山ブロックを含む6層、8層や7層は、亀裂が入った後に北西側の斜面から流出したものと考えられる。

2. 出土土器

本遺跡からは、製鉄関連遺物のほか上器及び陶磁器、木炭が少量出土したが、いずれも小片のため固化は主なものに留めた。

第13図1は、土師器壺のII縁部である。鉄滓を含む遺物包含層の下層に堆積した砂層から出土した。

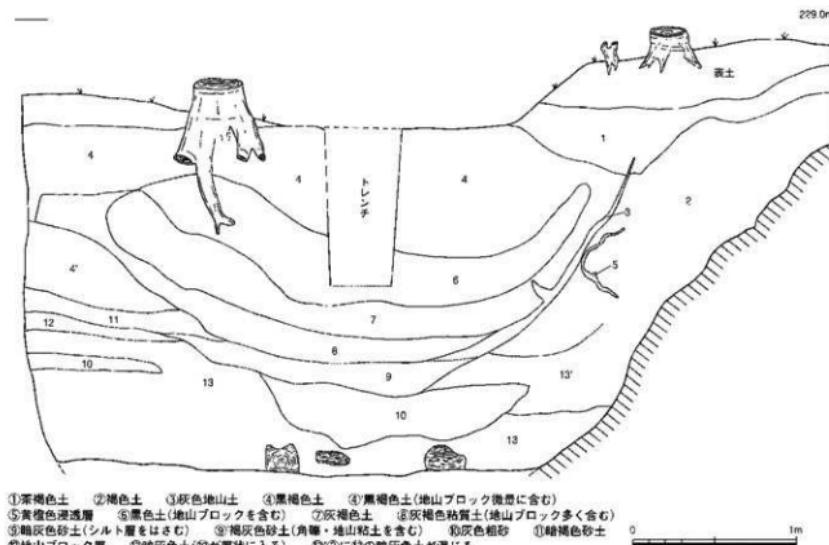


第13図1 ゴマボリ遺跡中央ベルト土層図

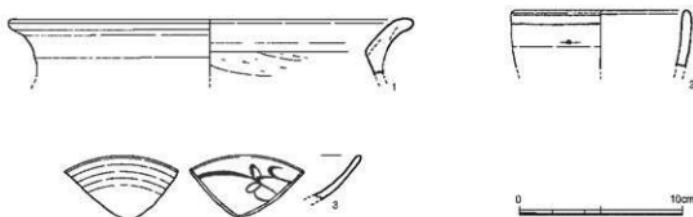
2、3はいずれも肥前系の陶磁器片である。2は碗で体部から口縁部にかけて直立もしくはごく僅かに外傾する。内外面ともに回転ナデの後、施釉される。外面の口縁部下に2条の圈線が巡り、その下方にはツル草様の植物文が描かれている。3は皿で、口縁端部はやや尖り気味である。外面にはロクロの回転痕が残り、内面には草花文が描かれている。両面とも施釉されている。

製鉄関連遺物は、そのほとんどが谷の奥部にあたる調査区北寄りから出土した。遺物の出土割合としては流動滓が最も多く、次いで炉内滓であるが、これらに比較すると炉壁は著しく少なく小形で、炉底塊も少量であった。以下、遺物のいくつかを図示し、種類別に特徴を記す。

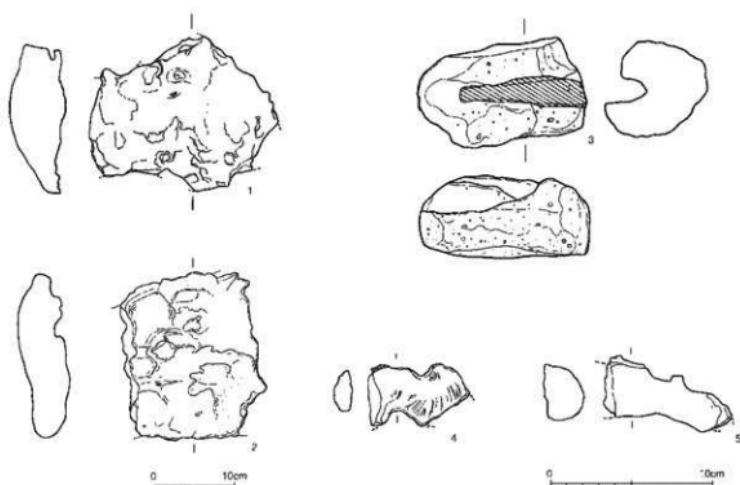
流動滓は、表面が光沢のある赤紫色を帯びたものが多く、流動の単位は幅の広いものが目立つ。



第12図 ゴマボリ遺跡調査区北壁土層図



第13図 ゴマボリ遺跡出土土器



第14図 ゴマボリ遺跡出土製鉄関連遺物

製錬滓と考えられる。第14図1・2は流出溝滓で、1は幅12.5cm、2は20.5cmを測る。滓下面には砂礫が固着する。3は流出孔滓である。断面はU字形を呈し、表面全体や破面に気泡が目立つ。上面には幅0.6~1.8cm、深さ1~2cmの工具痕様の痕跡が認められる。

4は単位流動滓で、断面が半円形を呈し、径3.3cmを測る。表面及び断面には細かな発砲が多数見られる。5は流動滓である。表面には光沢があり、ひだ状となる。また、本遺跡から出土した炉壁には、胎上にスサを含むものがある。

第3節 まとめ

ゴマボリ遺跡では、製鉄関連遺物が確認されたものの、遺構を検出することはできなかった。出土した製鉄関連遺物の量が極めて少ないのであるが、調査区内でたらが操業された可能性は低いと思われる。むしろ、調査区後背の尾根近くで営まれていたことも想定に含んでおくべきであろう。

出土した木炭の¹⁴C年代測定では、概ね13~15世紀代の値が得られた。時期としては、出土遺物の性格とほぼ一致しており、この木炭がたらが操業に伴うものとすれば、本遺跡の周辺に中世のたらが存在した可能性は高い。この時期は、下布施地内で最も野だたらが盛んに営まれた時期と一致しており、中世、この地域で野だたらが盛んに操業されたことが窺われる資料となった。

第3表 ゴマボリ遺跡出土木炭放射性炭素年代測定分析結果

1. 試料と方法

| 試料名 | 地点・層準 | 種類 | 前処理・調整 | 測定法 |
|----------------------------------|-------|-----|------------|--------------------|
| NO. 1 ゴマボリ遺跡 C-7 深色砂土上層 | | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | β 線法 (標準) |
| NO. 2 ゴマボリ遺跡 E-4 上層砂土 (たらん関連) | | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | β 線法 (標準) |

2. 測定結果

| 試料名 | ^{14}C 年代 (年BP) | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) | 補正 ^{14}C 年代 (年BP) | 暦年代 | | 測定No. (Beta-) |
|-------|-----------------------------|------------------------------|--------------------------------|------------------|---------------|------------------|
| | | | | 交点 (1 σ) | (AD1400~1440) | |
| NO. 1 | 510±70 | -24.7 | 520±70 | AD1420 | | 185122 |
| NO. 2 | 860±60 | -27.1 | 820±60 | AD1230 | (AD1180~1270) | 185123 |

1) ^{14}C 年代測定値

試料の ^{14}C / ^{13}C 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 ^{14}C / ^{13}C 比を補正するための炭素安定同位体比（ ^{13}C / ^{12}C ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 ^{14}C / ^{13}C の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正是10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ 値が表記される場合もある。

(分析：環境考古研究会)

第4章 寺田 I 遺跡

第1節 発掘調査の経過と概要

寺田 I 遺跡は、島根県雲南市木次町北原1221番地外に所在する遺跡である。本遺跡は、下布施川の左岸から北東に入り込む谷に位置し、木次町北原と同町東日登を結ぶ市道に面した谷間に所在する。遺跡は、かつて水田として耕作されていた谷部と、これを取り巻く緩斜面に広がっている。

本遺跡は、平成13年3月に島根県教育委員会によって行われた分布調査で、鉄滓が表採されたことにより周知された。同年12月には工区番号106として島根県教育庁埋蔵文化財調査センターにより試掘調査が行われた。調査は、谷間を北に延びる旧水田と、宅地跡から東に入り込む谷斜面に合計25か所のトレチングが設定され、石器、上師器、須恵器、製鉄関連遺物等が出土した。これにより、少なくとも古墳時代以降の遺跡の存在が確認されたことから、遺跡の名称を寺田 I 遺跡として、平成14年2月5日付けで、事業主体者より島根県教育委員会へ遺跡発見届が提出された。

本遺跡の調査は、尾原ダム建設に伴う市道（旧木次町道）北原日登線付替工事の進捗状況等に応じて、平成14・15・17年度の3か年にわたり実施した。第1次となる平成14年度には1～4区、第2次の平成15年度には5区、第3次の平成17年度には3区の発掘調査を行っている。平成14・15年度の発掘調査については旧木次町が、町村合併後の平成17年度については雲南市が、それぞれ国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所と委託契約を締結して実施した。



第15図 寺田 I 遺跡調査区配図

第1次調査（平成14年度）

第1次の調査については、旧木次町が平成14年4月1日付けで委託契約を締結し、6月3日付けで島根県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘調査の通知（旧第58条の2第1項）を提出、翌6月4日より現地調査を開始した。調査の対象は、遺跡の南半分にあたる2,700m²である。

調査は、まず平成13年度に行われた試掘調査で、鍛冶溝を伴う製鉄遺物や焼土面が検出された谷斜面の表土除去から始めた。この谷斜面は、鍛冶溝を伴う製鉄遺物が検出された下手の斜面と、その上部に炭窯跡が残存する平坦面、さらにこの平坦面から東側上方へ続く緩斜面になっており、下手の斜面を2区、平坦面を1区、上方に続く緩斜面を3区と呼ぶこととした。

1区では炭窯跡近くの平坦面から粘土貼り面を検出した。2区では南西に面した斜面で排溝場を確認し、その東側上手では木炭の残存する焼土面や箱式石棺を検出した。さらに北側の斜面では古墓を数基確認したため、調査区をさらに拡張して精査を行った。この間、7月16日には前掲のゴマボリ遺跡と併せて第1回の発掘調査指導会を行った。

この時点で、2区では近世の鍛冶遺構の存在が想定されていた。しかし、9月3日になって排溝場上方のトレンチから須恵器が出土し、排溝場からは引き続いて須恵器壺片、土師器片及び鉄滓、羽口、鍛造剣片付着の石などが出土したため、9月9日には排溝場に50cmのメッシュを設定し遺物の取り上げを行った。そして排溝場周辺を慎重に精査したところ、10月1日になって排溝場上方のわずかな平坦面から鍛冶炉が検出された。そこで急遽、鍛冶炉周辺に20cmのメッシュを設定し、覆土の採取を行った。

また、10月11日からは谷部に広がる旧水田と2区が交わる宅地跡を4区として掘削を開始した。4区では川跡が検出され、この川跡からは流れ込みによる鉄滓のほか、縄文から近世までの土器片が出土した。

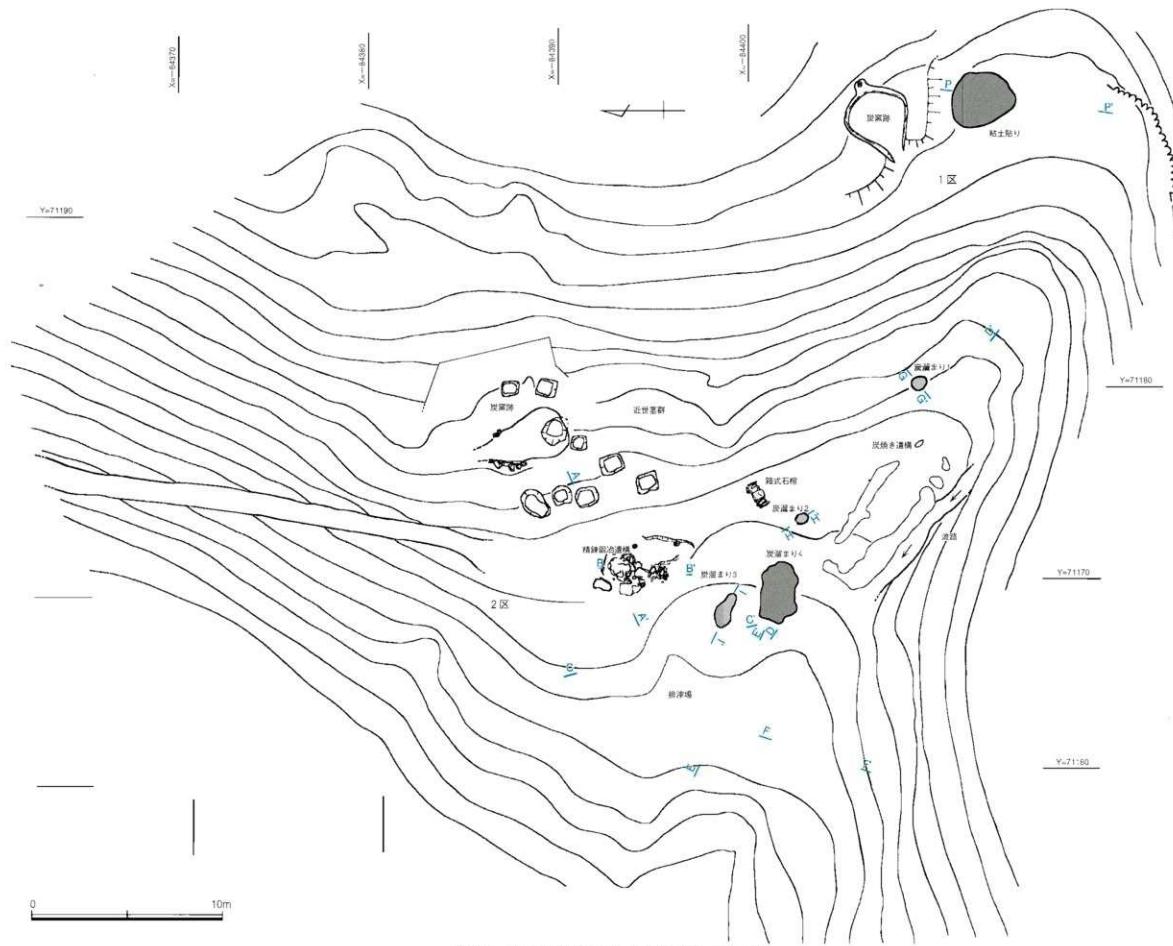
併行して調査を進めていた2区において各種の遺構が発見されたこともあり、10月20日には現地説明会を開催して調査の成果を一般に公開した。雨模様の中ではあったが、多くの見学者の参加を得た。

その後、2区では鍛冶遺構の柱穴や小削場、鍛冶炉の精査を行った。遺構の重要性から、鍛冶炉周辺の表面剥ぎ取り保存について国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所と協議を行い、剥ぎ取り保存処理が認められた。これを受けて11月14日に剥ぎ取り作業を行い、同日、ラジコンヘリによる本遺跡の空中写真撮影を行った。そして、11月20日には地磁気年代測定のサンプリングを行い、第1次の現地調査を終了した。

なお、鍛冶遺構の地磁気年代測定により、本遺構が8世紀後半という時期を示す成果が得られ、鍛冶遺構上面から須恵器や丹塗り土師器が出土していたことから、この鍛冶遺構が古代に遡る可能性が想起された。そこで、平成15年3月7日、島根県埋蔵文化財調査センターにおいて鍛冶遺構の調査検討会を行い、この鍛冶炉が奈良時代後半の銅の鑄造を伴った精錬鍛冶遺構と判明した。そのため、4月10日に寺田I遺跡の精錬鍛冶工房と出土遺物について報道発表を行った。

第2次調査（平成15年度）

第2次の調査については、旧木次町が平成15年4月1日付けで委託契約を締結し、5月6日付けで島根県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘調査の通知（旧第58条の2第1項）を提出した。



第16図 寺田I遺跡1区・2区遺構配置図(1:200)

平成15年度の調査対象地は、平成14年度に調査した4区の北東方向に続く水田跡及びその西側丘陵斜面である。遺跡の北半にあたるこの区域を5区と呼ぶこととし、5月26日より現地調査を開始した。対象となる面積は3,000m²である。

5区は、東西から山の斜面が迫る狹小な谷となっており、谷間の幅は26~30mを測る。調査区の北端より北方約100mのところには滝があり、調査区西側の山根沿いには、ここから続く谷川が流れている。平成13年に行われた試掘調査では、旧水田奥部のトレンチから鉄滓や土器等が出土したが、南寄りの5区では遺構・遺物は確認されていない。

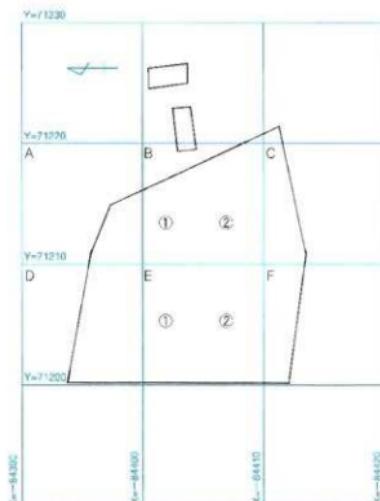
調査は、調査区の北側に位置する丘陵の緩斜面から実施した。この緩斜面からは、近世以降に操業されたとみられる炭窯跡が1基確認された。続いて旧水田を掘削したところ、砂層から多数の精錬滓や炉壁が出土した。これらの製鉄関連遺物は調査区のほぼ全域から出土している。

遺構としては、炭窯跡1基と石列2か所を検出したほか、調査区西側の谷川沿いでは、水の流れを利用した土地の嵩上げ法として、かつて行われていた「流し込み」と呼ばれる水路の堰き止め箇所を確認した。また、排溝場の位置は明確にならなかったが、炉壁や鉄滓が比較的まとまって出土した場所から大型の炉底塊が出土した。これについては、現地調査後の遺物整理時に中世たらで造られた鉢塊であることがわかった。そのほか、本調査区からは縄文土器、弥生土器、土器、須恵器、陶磁器などが出土した。最終的には、これらの遺物包含層を掘り下げ、無遺物層である砂層を確認して10月11日に現地調査を終了した。

第3次調査（平成17年度）

第3次の調査は、平成17年4月1日付けで委託契約を締結した。5月2日付けで斐伊川・神戸川総合開発工事事務所長から島根県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘の通知（第94条第1項）が提出されたことを受け、5月6日付けで県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘調査の通知（第99条第1項）を提出した。

平成17年度の調査対象地は、市道北原日登線付替工事の設計変更により新たに調査が必要となった場所で、1区の東側上方の斜面に位置する。平成14年度の第1次調査の段階で試掘調査を行った3区の一部にあたり、トレンチ内から鉄滓（楕円形鐵冶洋）が出土していたものの、工事区域外として発掘調査対象から除外されていた箇所である。調査の対象面積は300m²で、南北に緩やかなV字状を呈し、東側から西側へ下傾する谷地形となっている。



第17図 寺田1遺跡3区グリッド設定図

発掘調査は、表土上の草木を伐採・除去した後、平成17年6月1日に開始した。

まず、調査区全体を覆っていた表層土を掘削し、さらに黒色土層上面まで掘り進めた。調査にあたっては、調査区全体を包括するようにメッシュを組み、10m×10mを1つの単位としてA～Fの6つのグリッドに分けた。さらに土層観察用の畦をX軸とY軸上に設定し、各グリッド単位で掘削を進めた。

検出した遺構は、自然流路と谷の傾斜を利用して造られた炭焼き遺構1基である。炭焼き遺構は、掘削が表土下約20cmに至った段階で焼土と多量の炭の検出によって確認された。焼土は斜面に沿って東西方向に延びており、炭の出土が焼土北側に集中していたことから、ここに2区の斜面で検出された炭焼き遺構と同様の遺構が存在するものとみて調査を進めた。調査の結果、この焼土の東端部は調査区外に続いていることがわかり、焼土の北側で多量の木炭を検出した。

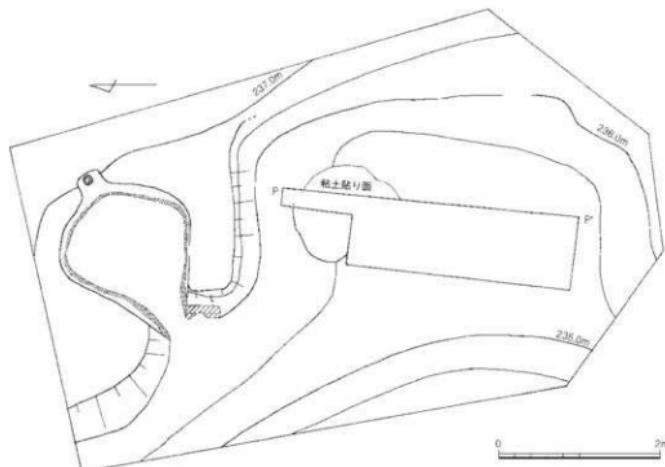
遺物に関しては、炭焼き遺構付近から羽口及び鉄滓が出土した。また、炭焼き遺構より下層で確認された自然流路からは、羽口や鉄滓、須恵器、土師器が出土した。これらは、谷の斜面上手から流れ込んだ遺物と考えられ、本調査区より東側に製鉄に関連する何らかの遺構があるものと推測された。

最終的には、これらの遺物を取り上げ、その他の遺構が存在しないことを確認して、8月12日に現地調査を終了した。

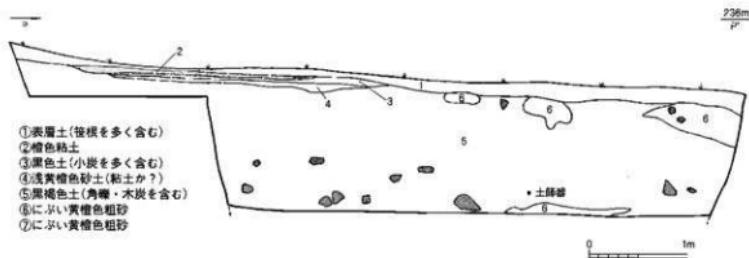
第2節 遺構と出土遺物

1区の調査

1区は、2区と3区に挟まれた谷斜面に位置する約30m足らずの平田地である。標高は235.5mを



第18図 寺田I遺跡1区平面図



第19図 寺田I遺跡1区トレンチ土層図

測る。斜面下方に位置する2区との間は崖面となっており、2区東端との比高差は5.5mほどある。本調査区は、南北に延びる丘陵斜面に挟まれたV字状の谷筋にあたるため、角礫を含んだ黒褐色の崩落土砂が厚く堆積していた。

1. 遺構

1区平坦地の北端には炭窯が築かれていた。窯面は全面が割石積みで、最大幅約3.0m、奥行きは約3.7mを測る。平面プランはいちじく形を呈し、煙道は本ショウジ（本シャージ）と呼ばれる主煙道のみで備長窯の類であろう。犬井は完全に崩落していた。かつて地元に在住の方の情報によると、この炭窯は昭和初期まで使われていたとのことである。

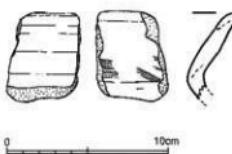
炭窯の横では粘土貼りの面を検出した。ここにトレンチを入れたところ、この粘土貼りは厚さが4~6cmあり、平面プランは径が3.18mの不整円形と推定された。粘土貼り面の下層には厚さ2~6cmの小炭を多く含んだ黒色土が平坦に堆積していることから、この粘土貼りはかつて操業されていた炭窯の床面の可能性が高い。

1区では、谷を横断するように南北にトレンチを設定した。1.8m×5.6mの範囲を掘削したが、遺物は土師器片が2点と僅かであった。

2. 出土遺物

第20図は土師器の口縁部である。トレンチ下層の黒褐色土から出土したもので、斜面上方の3区あたりから流れ込んだものであろう。

頸部は「く」字に曲屈し直線状に開く。口縁端部を丸くおさめる。調整は外側がナデ、内側は口縁部がハケのちナデ、肩部はケズリとなる。



第20図 1区トレンチ出土土器

2区の調査

1区の西側下方にあたる2区は、断面がV字状を呈した緩勾配の谷筋が中心となる。長さは約24m、谷幅は約4~10mを測る。谷の西側は急勾配の斜面となるが、谷が開ける辺りの東側は西向きの緩やかな斜面となっている。谷筋の土層状況を把握するため、谷の中央に縱断の畦を残して掘下げたが、V字状で谷が深いこともあり、掘削は無遺物層を確認するまでに留めた。

西向きの斜面については、島根県が実施した試掘調査箇所上方の斜面に、幅約50cmのトレンチを設定して造構の有無を確認した。

1. 造構

本調査区のうち谷筋からは炭焼き遺構（1）、箱式石棺（1）、炭溜り（4）、西向き斜面から精錬鍛冶関連遺構（1）、近世墓（9）、炭窯跡（1）を確認した。詳細については調査の順序は前後するが、精錬鍛冶関連遺構、炭焼き遺構、炭溜まり、箱式石棺、近世墓群の順に述べることとする。

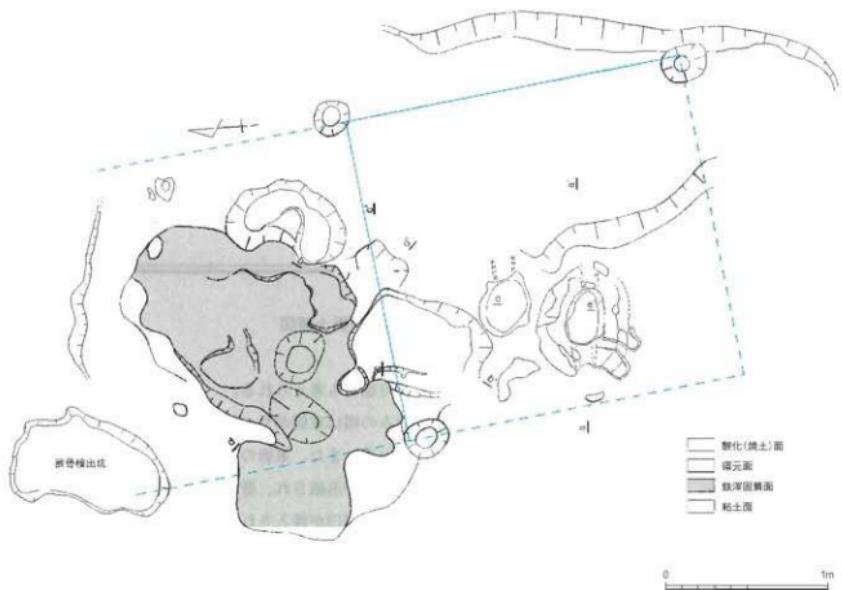
精錬鍛冶関連遺構

西向き斜面の中腹に位置する狹小な平坦面から検出した精錬鍛冶関連遺構は、鍛冶炉を含む作業施設と排滓場からなっている。ここに設定したトレンチから鉄滓や羽口が出土したことから、この斜面のさらに上方に関連の造構が存在することが予想されたため、トレンチを上部に延長して造構の有無確認を行った。その結果、上部の斜面下から近世墓を検出し、狹小な平坦面からは焼土面を確認した。上面からは鉄滓や鍛造剥片も検出されたことから、この平坦面が鍛冶関連遺構である可能性が高まった。

このように、トレンチ調査の結果、平坦面上部斜面に近世墓の存在が指摘されたため、耕土処理の関係から先に斜面上部の調査を行った。そして、近世墓群を精査した後、排滓場及び鍛冶遺構の精査を行っている。



第21図 寺田I遺跡2区近世墓群・精錬鍛冶遺構縦断土層図



第22図 寺田I遺跡2区精錬鍛冶遺構平面図

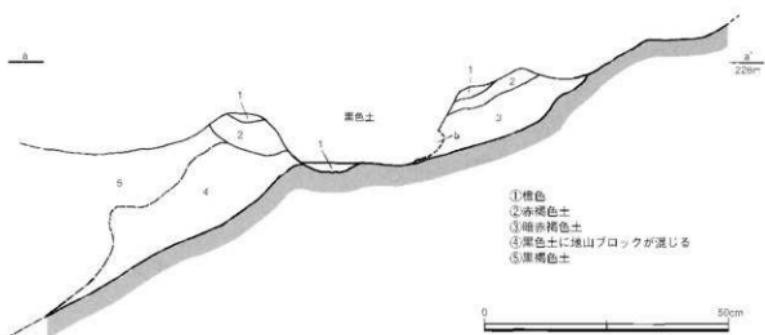
(1) 精錬鍛冶遺構

精錬鍛冶遺構は、西向き斜面を緩くカットした平坦面の表上下約25cmで検出した。遺構は、粗く削られた地山に粘土を貼り、その上に設けられているが、粘土の質は地山土とよく似ており地山との境は判然としない。あるいは地山上に直接設けられている可能性も否定できない。遺構面の標高は226mで、遺構の規模は幅約4.3m、奥行約2.5mを測る。平面形は概ね長方形を呈する。後背は緩い傾斜となっているが、後述する近世墓群が造られる際にいくらか斜面が削平された可能性も考えられる。

鍛冶遺構からは、鍛冶炉2基と併置き場様遺構、再結合溝の周結部、焼土面、柱穴を検出しており、順に詳述する。

1号鍛冶炉 鍛冶遺構の南端から検出した鍛冶炉で、外形は推計で長軸68cm、短軸55cmである。平面は楕円形を呈する。遺存状態は極めて良好で炉の外観が保たれ、最終時まで使われていたものとみられる。この鍛冶炉は、地山ではなく黒色土に埋り込まれており、外周には幅15cm～20cmの粘土塊が巡る。粘土塊の内側は還元色、外側は酸化色を呈する。この粘土塊は所々に溝が入っており、この鍛冶炉を焼くために仕込まれた粘土というより、再利用された粘土という印象を与える。

炉底部は長軸32cm、短軸16cm、深さ15cmである。炉底には地山が現れていたが、底に溜まった鍛



第23図 寺田I遺跡2区1号炉縦断土層図

治溝を取り出すたびに地山上が取り除かれ深くなつた可能性も考えられる。

鍛冶炉長軸の両脇には僅かな窪みが認められる。窪みの幅は東側が9~10cm、西側は約13cmで、西側の窪みの面は炉底に対して約32度の傾斜がついている。また、東側の窪みの下段壁面には溝が周結している。おそらく東側から差し込まれた羽口の先端が溶融され、壁面に付着したものと考えられる。これらのことから、1号鍛冶炉は東西の両方から羽口が挿入された、いわゆる両吹きの鍛冶炉であった可能性が指摘されている⁽¹⁾。

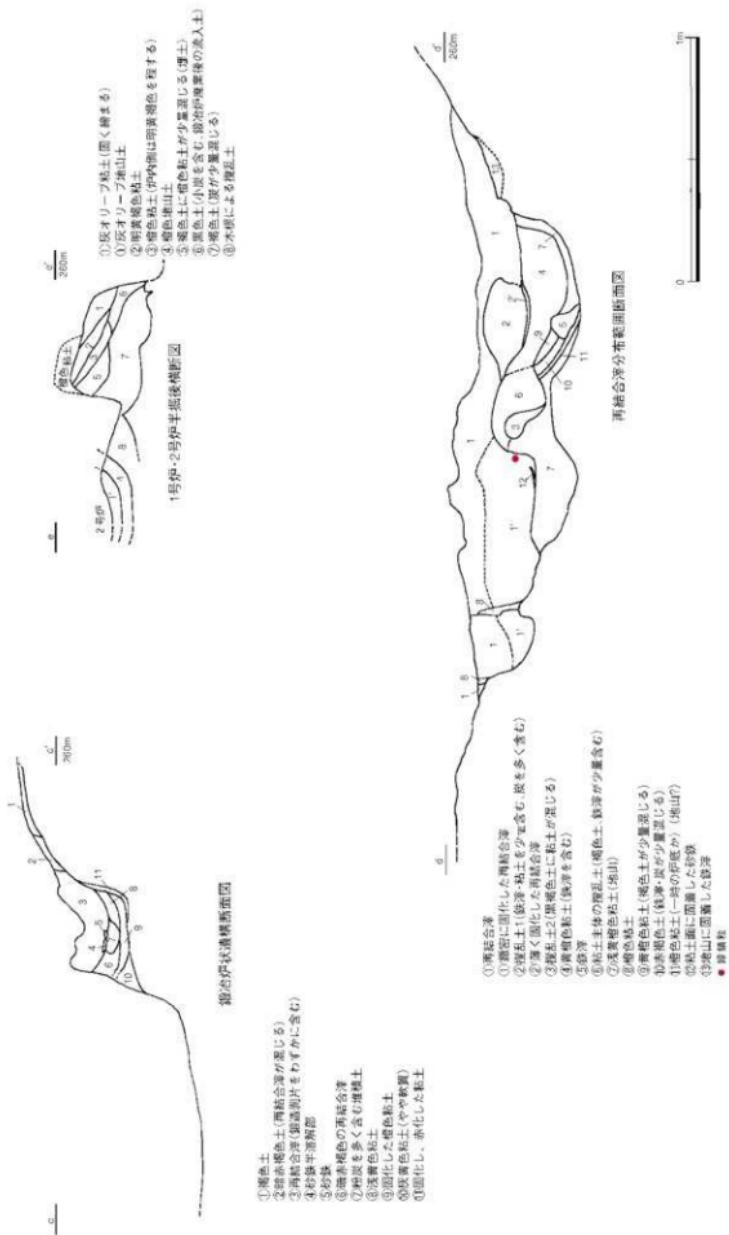
1号鍛冶炉では関連する遺構、遺物の自然科学分析を行った。鍛冶炉全体の地磁気年代測定ではAD1430±40の数値が示された。一方、鍛冶炉内に堆積混入した木炭の放射性炭素年代測定を行ったところ、AD640~670もしくはAD620~690となった。また、鍛冶炉の南側から出土した鉄床石の傍で検出された木炭からはAD780(AD690~880)の結果が得られた。いずれも年代に差が認められるが、精鍊鍛冶遺構上面から出土した須恵器の坏は底部のやや内側に低い高台をもち、体部は外方に真っ直ぐ立ち上がる形式で、8世紀中葉と考えられ、3点の中では鉄床石の傍から検出された木炭の年代に近いと考えられる。

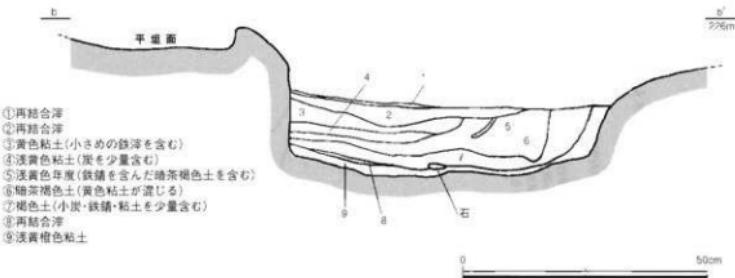
2号鍛冶炉 2号鍛冶炉は、1号鍛冶炉の北隣に位置する。炉底部のみ残存する。平面は梢円形で、長軸は41cm、短軸は30cmである。炉底の表面はカチカチに固結し、内側は32×24cmの範囲で還元色となり、その周りは2~5cmの幅でリング状に酸化色を呈する。還元色の部分でも断面を見ると内部は固くしまった橙色となっている。このことから2号鍛冶炉は地山に掘り込まれたものとみられる。

2号鍛冶炉でも、炉底に接する東側の斜面に幅12~13cmの窪みが認められた。東西の長軸に対してやや西側に寄っているが、この窪みも羽口の挿入部の可能性がある。反対の西側にはこのような痕跡がないことから、2号鍛冶炉は東側からの送風による片羽口の鍛冶炉であろう。また、鍛冶炉の整体跡とみられる酸化色範囲の幅が数cmであり、炉高も高くないとみられることから、精鍊よりも小鍛冶に用いられた鍛冶炉と推定される。

なお、2号鍛冶炉の西隣に幅6~12cm、長さ32cmの半月形をした緑灰色の粘土が検出された。還元色を呈しているが、この部分が鍛冶跡かどうかは不明である。

2号鍛冶炉の地磁気年代測定では、AD740±15またはAD1100±20の年代値が示された。後述





第25図 寺田I遺跡2区耕状遺構縦断土層図

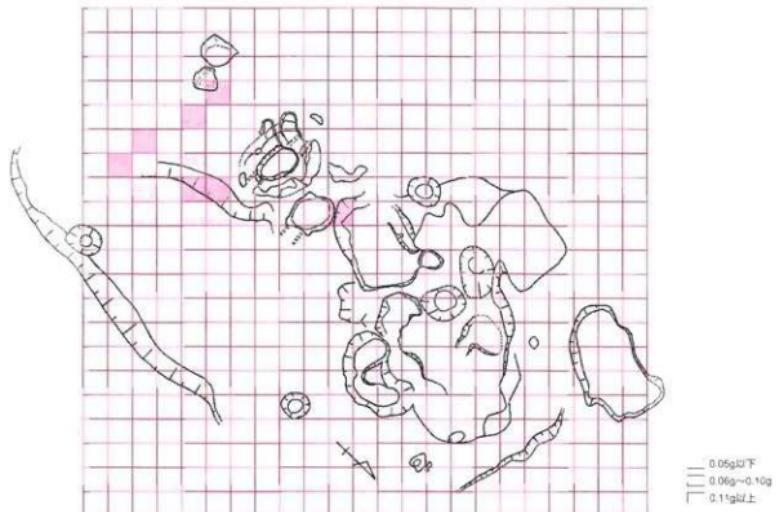
するように、本精錬鍛冶遺構では1号鍛冶炉が最終の鍛冶炉と考えられることから、本鍛冶炉においては前者の年代が推定される。

枠形状遺構 この遺構は、精錬鍛冶遺構のほぼ中央、再結合渋固結部と2号鍛冶炉との間に南北方向を縦軸として位置する。長軸は上場が77cm、下場が66cm、短軸は上場が50~60cm、下場は36~40cmを測る。深さは7~12cmである。平面は概ね長方形を呈し、平坦であるが南寄りが北寄りに比べ2cmほど低くなっている。北東寄りのコーナーはほぼ直角で整っているが、他の三方ははっきりしない。特に縦軸の西半分には、平面形が弧状をなした幅16cm前後の落ち込みがみられる。落ち込み部の底面は、この遺構の平面よりも8cm程度下がっているが、この落ち込みが何なのかはわからない。遺構面は周囲の表面と同様に再結合渋が固着している。長軸側を半分に切断したところ、この遺構では、鍛造剥片を多量に含む土や再結合渋が層状に堆積していることがわかった。この層状の堆積は、北寄りでは顕著であるが南寄りはやや不明瞭である。遺構検出時、ちょうどこの南寄りの部分には最大長40cm、最大幅23.5cm、厚さ9.4cmの台状の焼け石が斜めになっていた状態で置かれていた。この焼け石には鉄滓がわずかに付着している。

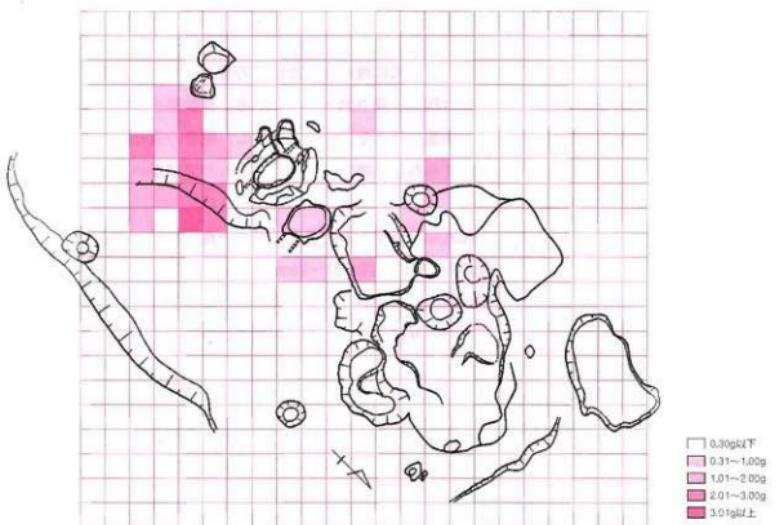
再結合渋固結部 再結合渋固結部の範囲は東西が約1.85m、南北は約1.88mで、精錬鍛冶遺構のほぼ北半分を占めている。堆積の厚さは薄いところで2cm程度であるが、西側の先端部では約9cmほどである。表面の所々に渋の塊が粒状に固着する。

固結部のほぼ中央には東西2箇所に平坦面が認められる。東側の平坦面は枠形状遺構の北隣に位置している。緩やかな済み状で、長軸の下場が最大で約30cm、短軸の下場は18~25cmあり、平面形は概ね長方形を呈する。下面には2cmほど再結合渋が固着している。この平坦面の北寄りで覆土中に鍛造剥片が認められたことから、この平坦面には鉄床石が置かれていた可能性が考えられる。また、西側の平坦面は、この平坦面から北西に70cm離れた場所にある。僅かに済み状となっており、30×20cmの楕円形を呈する。この西側平坦面の北隣は再結合渋固結部の北端にあたるが、楕円形を呈したおよそ60×35cmの範囲には、固結部の表面に鍛造剥片の付着が認められ、粒状渋も検出された。この平坦面も金床石が置かれていた可能性が考えられる。

再結合渋の固結部については、精査の段階で中央部を東西に断ち割った（第24図）。中央部では再結合渋が厚いところで約15cmに達し、一部ではカチカチに固結している。東寄りでも地山が掘り込まれ、15cmほど再結合渋が堆積していた。第24図c-c'上の東端に僅かな済みが見られたた



第26図 寺田 I 遺跡 2区 精錬鋳冶遺構粒状滓分布図



第27図 寺田 I 遺跡 2区 精錬鋳冶遺構鋳造削片分布図

め、この部分の再結合済を上面からおよそ8cmほど取り除いたところ、長軸24cm、短軸21cmの円形状を呈した固結部が認められた。この固結部には半溶解の砂鉄の塊が点々と付着していた。さらにこの部分を半掘したところ、固結部の下層は厚さ2~3cmの粘土で、被熱のために赤化し、特に斜面側は橙色でカチカチに固化していた。この被熱は高温の火力によるとみられることから、1号、2号鍛冶炉で鍛冶が行われていた以前に、この場所にも鍛冶炉があったことが推定される。 $d-d'$ 中央辺りでも再結合済の下部に砂鉄の周着が見られ、固結層の間からは緑青の粒が検出された。また、固結部下層の搅乱土や粘土層では流動済も検出された。特に、先述した鍛冶炉の存在が推定される場所の前方でも地山が掘り込まれ、さらにその西側にも2箇所の掘り込みがあり、ここに再結合済が充填されていた。このことから元々はこの中央部にいくつかの鍛冶炉があった可能性がなくもない。

なお、再結合済固結部は西側に張り出しているが、そのすぐ前方は地山が下降し、黒色土が堆積する排溝場となっている。

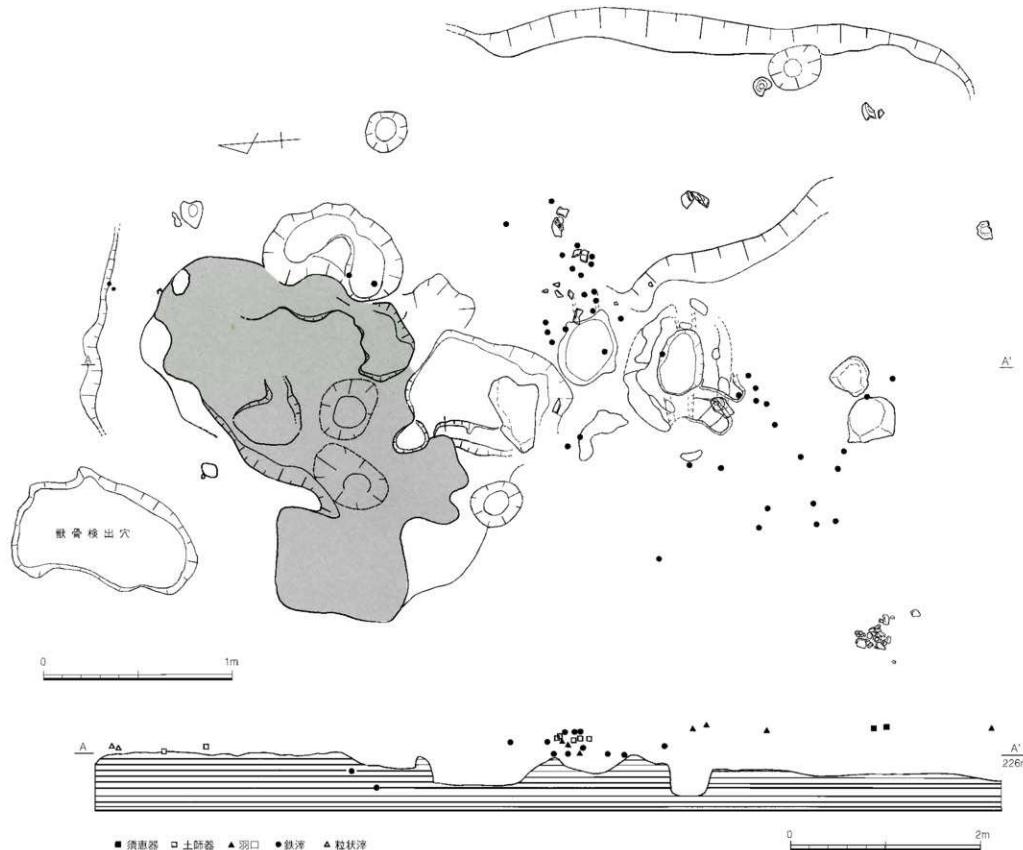
焼土面 焼土面は、精錬鍛冶造構の北東の隅に集中し、再結合済固結部の西側にも1箇所が認められた。概して規模は小さく、長軸は10~14cm、短軸は8cm前後で、表面が橙色を呈する程度である。一方、最も北東の隅に位置する焼土面は、長軸が15cm、短軸が11cmとやや大きい。中央部は6×4cm、厚さ4cmの範囲で緑灰色となり、還元色を呈している。周囲の上はそれほど固化していないことから鍛冶炉の可能性は低いと考えられる。

なお、再結合済固結部の東側で、固結部に接して平面が半円形の掘り込みを検出した。大きさは上場が長軸75cm、短軸は38cmである。掘り方は中央がやや浅く、出っ張りがあるため底面は弧状を呈する。深さは約25cmである。南側の落ち込みの底面近くで鍛冶済を2点検出している。精錬鍛冶作業に伴って掘られたものとみられるが、落ち込みの底面や内面に特に熱を受けた痕跡は見られず、用途は不明である。

また、表土除去作業中、平坦面の西前方で穴に埋められた山羊の骨とみられる獸骨を検出した。穴の大きさは上場で長軸が98cm、短軸は50cm、深さ24~30cmである。精錬鍛冶造構に接する位置にあったため、出土状況を実測するなど慎重に精査を行った。しかし、獸骨の遺存状態が良いことから、後世になって埋められたものと考えられ、精錬鍛冶造構に伴うものではないと判断した。このため掘り方を固化するのに留めた。

柱穴 本精錬鍛冶造構から検出した柱穴は3穴である。P1は平面が楕円形で、直径が22~29cm、底で9cm、深さは24cm、P2は平面が円形で、直径が21~24cm、底が11~12cm、深さ約21cmである。P3は平面が不整円形で、直径が23~27cm、底が11~14cm、深さ約17cmを測る。P1、P2は地山に掘り込まれているが、P3は褐色土に掘り込まれていた。1号鍛冶炉に近い南寄り前側にも柱穴があると推定されるが、この辺りは黒褐色土が堆積しており確認できなかった。柱穴の間隔は、P1とP2が概ね2m10cm、P2とP3が2mである。

元々は南北を軸方向とする桁行き2間、梁行き1間の掘立柱建物跡と推定されるが、柱穴の位置関係には、ややズレがみられる。検出できなかった北側の柱穴は、おそらく近世の墓地の造営などによって消滅したと考えられる。



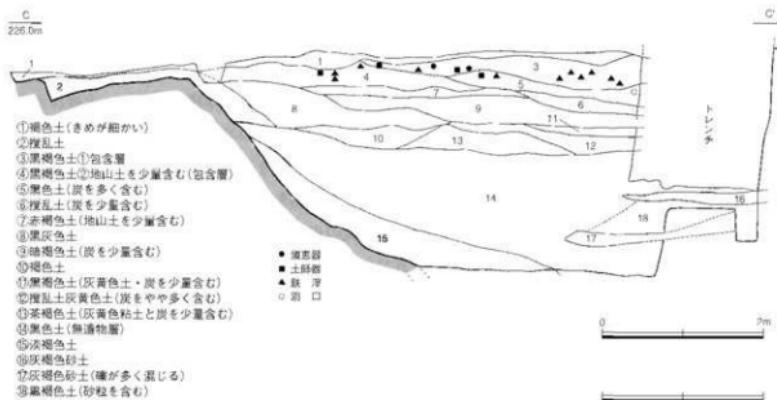
第28図 寺田I遺跡2区精錬鍛冶遺構遺物出土状況

(2) 排滓場

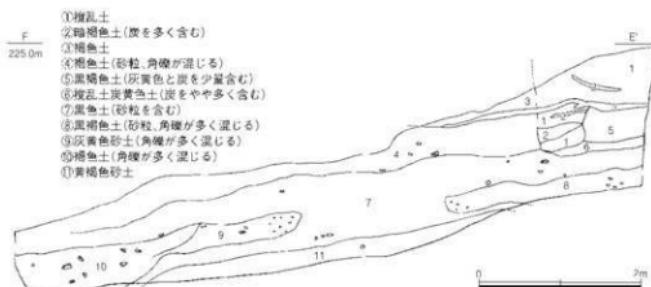
排滓場は、精錬鍛冶造構の西側前方斜面に位置している。排滓場の範囲は長さ14m、幅10.5mである。精錬鍛冶遺構の前方で地山が急に落ち込んでいるため堆積土の厚さは2m以上となるが、精錬鍛冶関連遺物の出土は上層の黒褐色土層に限られている。遺物包含層の厚さは概ね30~50cmで、この包含層直下の土層上面は、その下層と比べて堅く締まっていることから、この面が鍛冶操業前の地表とみられ、精錬鍛冶の操業に伴ってこの斜面がそのまま排滓場にされたものと考えられる。

この排滓場から出土した関連遺物は、量的には中央部が最も多く、グリッドではG11、F11にある。G11グリッドは精錬鍛冶造構の僅か4~5m前方にあり、鍛冶炉から取り出した滓などは工房から直接投棄されたのかもしれない。G11グリッドから出土した楕円形鍛冶滓に付着した木炭の放射性炭素年代測定では、A.D.780 (A.D.710~810, A.D.840~860, A.D.680~890) の年代値が示された。

なお、排滓場西端の斜面では、黒褐色土を掘り込んでシジミ貝や赤貝の殻が堆積していた。その



第29図 寺田I遺跡2区廃滓場・横断土層図



第30図 寺田I遺跡2区谷部前方縦断土層図

範囲はおよそ45×45cmで、厚さ7cm程度であった。このシジミ貝の多くは最大長が3~3.3cmで、中には最大で3.5cmのシジミ貝もあった。シジミ貝の大きさから、採取された時期は相当遅る可能性がある。

炭焼き遺構

炭焼き遺構は、谷筋の斜面中央に位置している。前述したように、この谷筋では縦断の畦を残しながら掘削を行った。これにより、谷筋では上方から角礫を含んだ土砂が暫時流下堆積していった様子が窺われた。谷筋の中央付近では、炭焼き遺構や後述する炭溜まりの一部が畦の中に包含される形となり、これら同時期の2種の遺構は5層及び12層に掘り込まれていることから、この層の上面が炭焼き遺構や炭溜まりの時期の地表面と推定された。

炭焼き遺構は、勾配が約12度の斜面に沿って設けられている。長方形の遺構で、大きさは推計で長さ8.3m、幅2.7~3mである。遺構は、炭焼き場の周囲を粘土で囲っただけの簡易な施設と推定される。粘土は暗褐色上を浅く掘り込んで敷かれ、大部分は熱を受けて橙色を呈していた。粘土は所々に残存するが、下方側での残りがよい。粘土の幅は狭いところで20cm、広い所では60cmを測る。厚さは約8~15cmである。

遺構下方端部の北西寄りには、上場が0.93~1.2m、下場が60~80cm、深さ約28cmの楕円形状の掘り込みが確認された。この掘り込みには小炭が多く泥じった黒色上が堆積しており、上層ほど炭が多く含まれていた。斜面の下端に位置することから炭焼きの火口の可能性が考えられる。また、遺構の中段辺りでは木炭が交差状に出土し、一部は粘土の下に潜り込んでいた。このことから、始めて炭焼き場で木炭が交差状に組まれ、その後、炭焼きの範囲を粘土で囲った可能性もある。

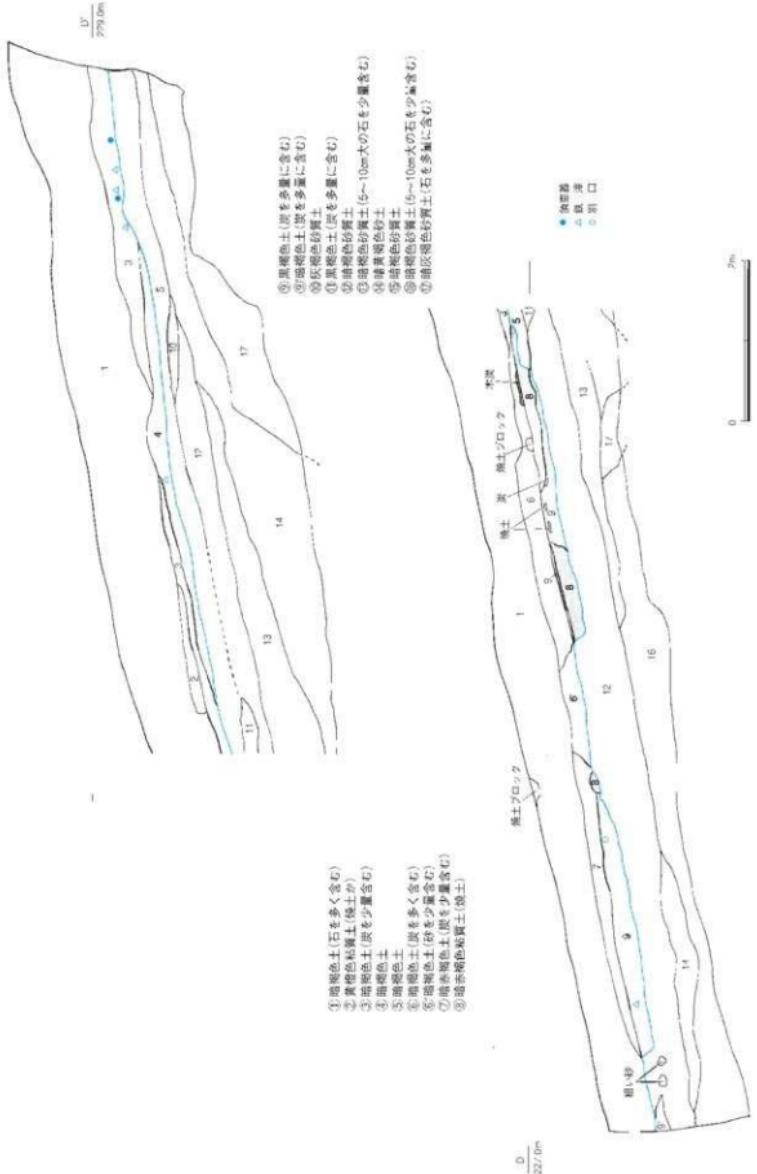
遺構の上方ではほとんど粘土が消滅していたが、小炭の出土範囲でプランが推定された。残存していた小炭には径が2cmの枝木が含まれる。下方でも最小で径1.2cmの小枝の炭が確認されている。これらを炭木材とするには効率が悪過ぎると考えられることから、炭焼きの焼成室の燃焼効率を上げるために、木炭を組んだ上に小枝を被せて空気の通しを良くし、さらにその上に土を被せるなどして炭焼きを行ったものと推定される。

炭焼き遺構の下端部北西寄りコーナーの粘土の下にも、径10cm前後の木炭が格子状に交差する形で挟まっていた。このうち最下部にあった木炭と遺構中段部から出土した木炭2点の放射性炭素年代測定を行ったところ、いずれも $\Delta D 1160$ ($\Delta D 1030\sim 1210$) の結果が得られた。さらに、焼上の地磁気年代測定では、 $\Delta D 260$ と $\Delta D 1270$ の二時期が示されている。

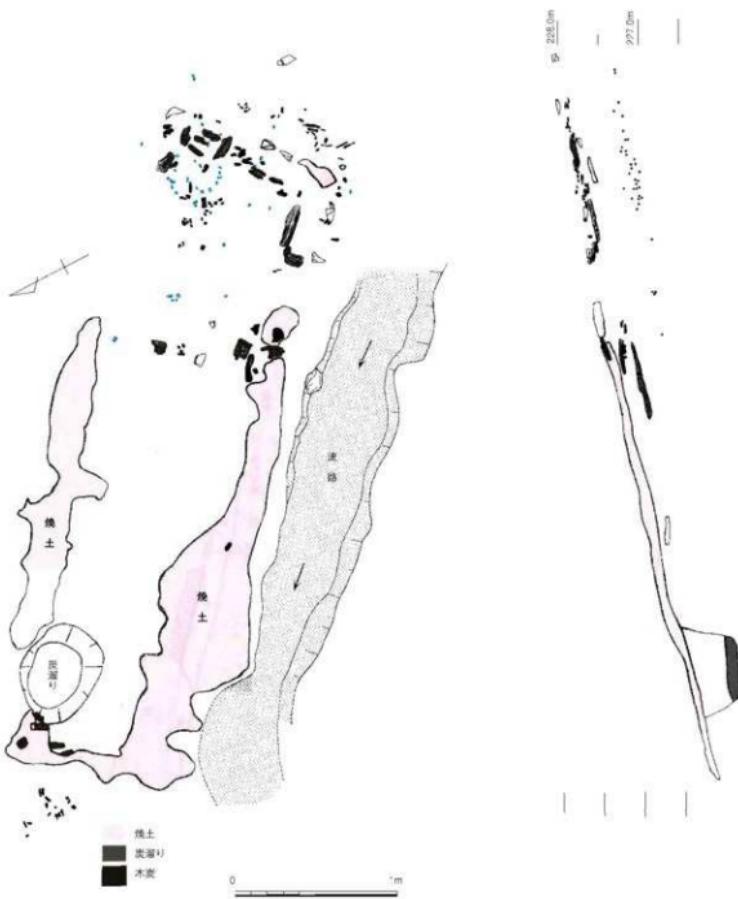
なお、本遺構の南側では遺構に沿って自然流路とみられる水路跡が検出された。炭焼き遺構中段の辺りでは水路の幅が1.4m、深さ34cmを測る。堆積土は角礫を多く含んだ粗砂で、鉄滓も少量含まれる。この水路跡は2区の下方では最大幅90cm、深さは約93cmになる。上方からの流れ込みによるものであるが、堆積土に含まれる鉄滓は、後述する3区から出土した鉄器遺物と同類かと思われる。

炭溜まり

2区では4箇所で堆積土に小炭が含まれる範囲を検出し、便宜上、炭溜まりと呼称した。いずれも谷の中央より北側に設けられている。



第31図 寺田1遺跡2区谷部断面図

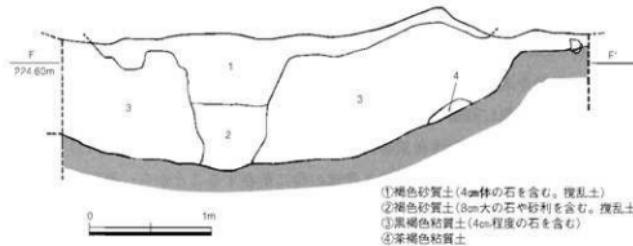


第32図 寺田Ⅰ遺跡2区炭焼き遺構実測図

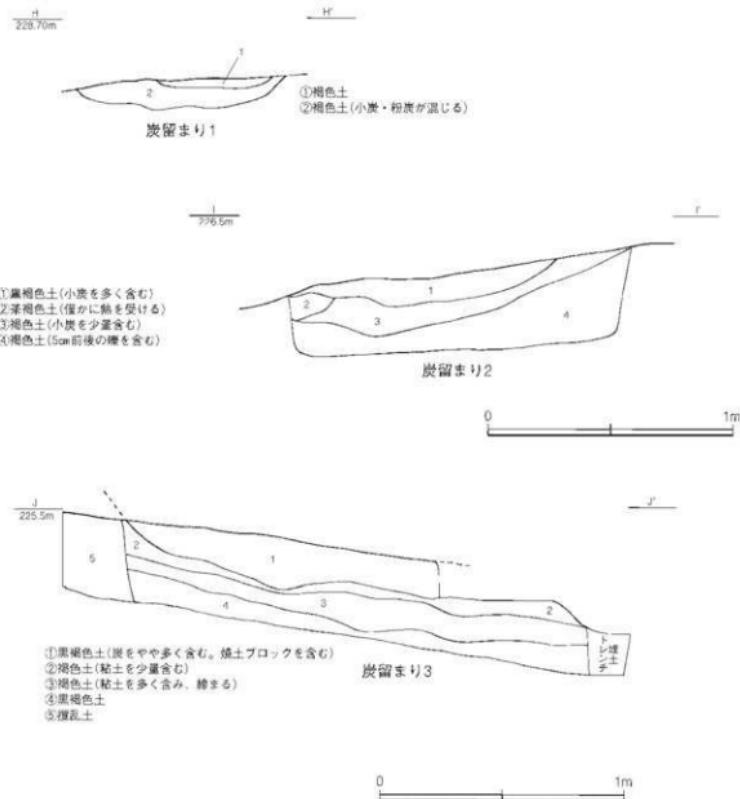
炭溜まり1は、谷の最も奥部に近い斜面に位置する。広さは上場が縦80cm、横65cm、下場は縦60cm、横36cmを測る。深さは12cmほどで、堆積土は褐色土に小炭や粉炭が混じる。西寄りの上場は被熱のためか橙色を呈する。炭溜りから出土した木炭の放射性炭素年代測定では、AD890（AD790～980）の年代値が示された。

炭溜まり2は、谷の中ほど、炭焼き遺構の傍に位置する。広さは縦68cm、横45cm、深さ23cmを測る。中ほどには小炭を多く含む黒褐色土が、その周りに小炭を少量含む褐色土が堆積する。

炭溜まり3は、1号鍛冶炉の南西3.2mの谷の中寄りに位置する。炭溜りの範囲は上場で長さ1.88



第33図 寺田Ⅰ遺跡2区流路横断土層図



第34図 寺田Ⅰ遺跡2区炭留まり断面土層図 (1:20)

m、最大幅90cmを測り、平面は長楕円形を呈する。堆積土の厚さは最大で20cmあり、炭をやや多く含む。また、焼土塊の小片も少量含まれる。出土した木炭の放射性炭素年代測定値は、AD1230(AD1180~1270)であった。

炭溜まり4は、炭焼き造構下端と炭溜まり3との間に位置している。4箇所中、最も範囲が広く、最大長3.07m、最大幅1.92mで小炭を含む堆積土は厚いところで10cmを測る。平面は不整楕円形を呈する。出土した木炭の放射性炭素年代測定を行ったところ、AD1270(AD1230~1290)の年代値が示された。なお、この造構は炭焼き造構の傍に所在することから、現地調査の時点では炭置き場と考えていた。いずれの炭溜まりも褐色~黒褐色土に設けられていて、時期差や性格については不明であるが、炭溜まり4については、広さからみて一時期に炭が置かれていた可能性も考えられる。

箱式石棺

箱式石棺墓は2区中央部の東側斜面直下に位置し、斜面に平行するように築かれている。石棺の東端は丘陵の裾にはば接しており、意図的に谷筋を避けて設けられたような印象を受ける。調査の開始当初から盛り土は確認されず、表土掘削の段階で蓋石を確認した。おそらく調査開始の時点で蓋石の上部はすでに露出していたと思われる。

石棺の石材は、本遺跡周辺でよく見られる花崗閃緑岩で、石棺の全長は約1.8m、幅77~117cmを測る。また、内法は長さ1.37m、幅は45cm前後とみられる。底石ではなく、棺内は地面が剥き出しあった可能性もある。石棺内に遺物は残されていなかった。

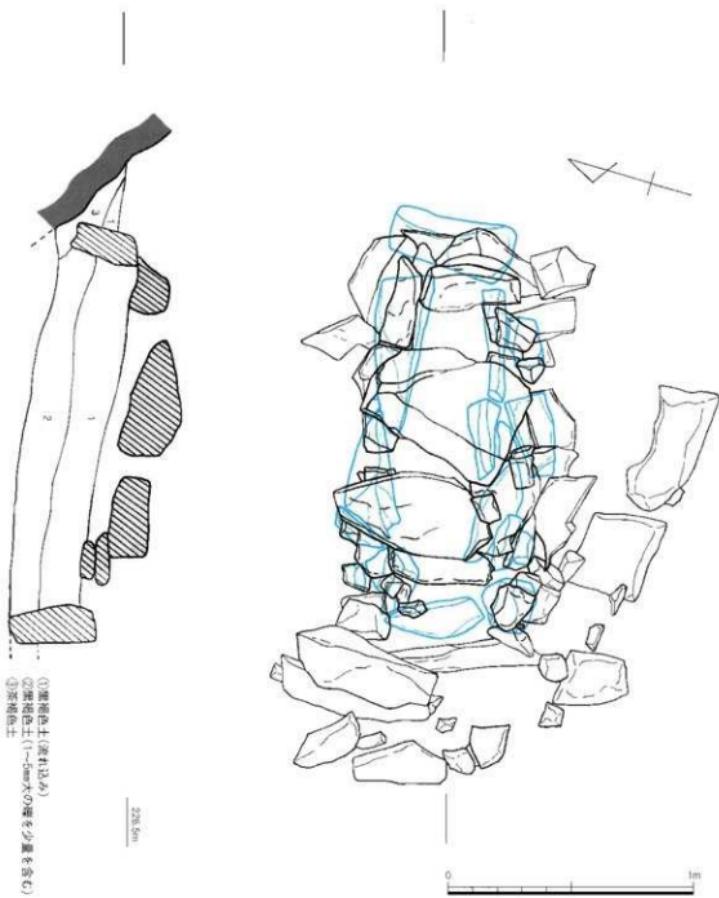
検出した蓋石は2枚である。そのうち大きい方の蓋石は棺の中央部に置かれていたもので、最大長70cm、最大幅50cm、厚さは最大で23cmを測る。西隣にもこれよりやや小形の蓋石が置かれていたが、蓋石間には最大で13cmほどの隙間があり、中央の蓋石の東側も側石の内側との間が最大で22cm開いていた。蓋石が石棺の長軸に対してやや斜めに置かれていることからも、当初からこの蓋石のままの状態であったと考えにくい。おそらく後世になって蓋石の一部が取り除かれ、二枚の蓋石もこの際に若干移動したのであろう。

石棺は堆積した黒褐色土に配置されているため、側石の掘り方については判然としないが、地表から概ね8~14cmほど掘り込んで据えられているものと推定される。側石は大きめの石材を粗削りしたものである。幅は9~23cmと寸法がまちまちで、決して丁寧な造りとは言い難い。側石は二段に積まれ、隙間には内側から角礫が挿入されている。側石の外側には補強を意識したのか、控え積み様の角礫が置かれている。また、石棺は水平ではなく西側がやや下降している。後世になって地盤の変動があったことも想像される。

このように、検出された箱式石棺墓は検討材料に乏しいところであるが、その造りと立地、規模から、概ね古墳時代後期のものと考えられる。

近世墓群

近世墓群は、精錬鍛冶造構後背の西向き斜面に所在する。近年までこの斜面の一角に墓地が営まれていた。発掘調査開始当初、鍛冶造構の存在を確認する目的で排水溝北端のトレンチをこの墓地の直下まで延長した際、トレンチ内から小鉄洋を検出したことから、この斜面も調査範囲に含める

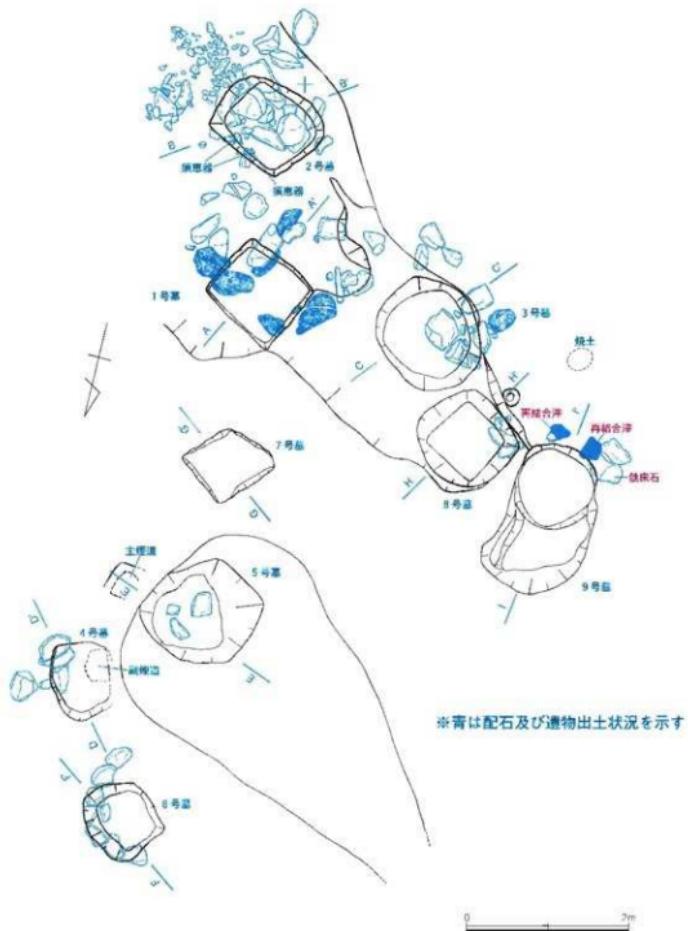


第35図 寺田I遺跡2区箱式石棺検出状況

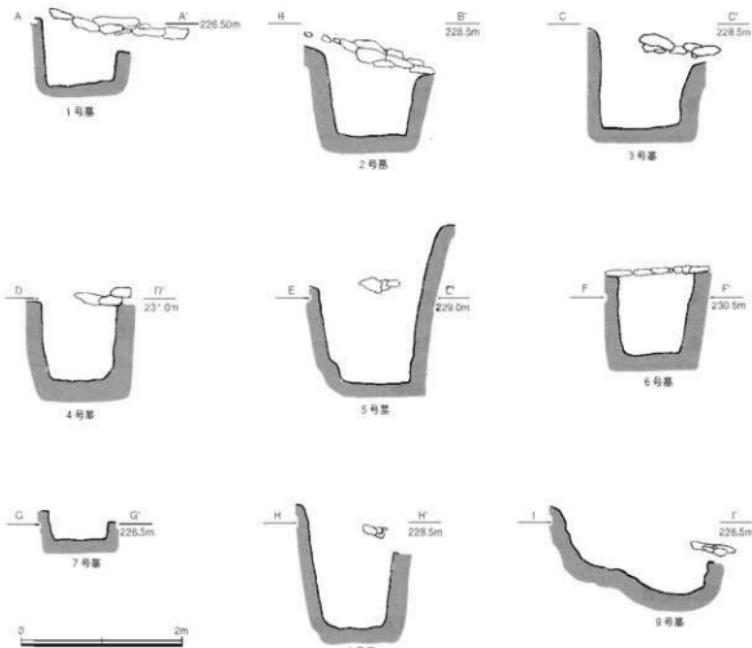
こととした。表土を除去していくところ、下方から数箇所に配石状の山石が現れ、また、錢貨や陶磁器も出土したことから古墓群であることを確認した。

検出した古墓は9基である。このうち平面形が方形のものが5基、円形が2基、不整方形ないし円形が2基である。各々の古墓の概要については別表で示す。9基のうち、6号墓、4号墓と5号墓、7号墓はそれぞれ隣り合って位置しており、一群となる可能性が考えられる。とすればこれらの墓の時期は、後述する炭窯跡より以前であることがわかる。7号墓は近代の造墓により墓坑の底のみ残存していた。

もう一方の一群は、斜面前方部に横に並ぶ形で位置している。ほとんどの古墓上には配石か標石状の山石が置かれているが、すべて移動しており原位置を保つものは少ない。これらの石の大半は焼けたり煤が付着している。また、9号墓の墓上の回りには、長軸29.5cm、短軸29cmの再結合甃と長軸29cm、短軸20cmの再結合甃が置かれ、さらに銷の塊が数箇所に付着した、重量が55.6kgもある長方体状の山石が置かれていた。1号墓でも配石の間から再結合甃の小塊が出土し、また、2号墓の近くでは同じく石の脇から須恵器の長頸瓶片が出土している。のことから、斜面部の墓で埋葬



第36図 寺田I遺跡2区近世墓群平面図



第37図 寺田I遺跡2区近世墓群断面図

が行われた時期には4.5mほど下方に所在する精錬鍛冶遺構からこれらの遺物を取り出すことが可能であり、内結合窯などが標石に使われたことが推定される。墓に運ばれた長方体状の山石は鉄床石と確認された。

炭窯跡

炭窯跡は、上方の近世墓群のある斜面を平坦にカットし、さらに5号墓に石を入れて埋め込んで築かれている。平面形は細長いいちじく形状で、規模は奥行きが4.5m、幅2.6mと推定され、高さは不明である。煙道は、主煙道と左側の脇ショウジ（副煙道）が確認された。脇ショウジは4号墓の上端床面を掘り込んで設置されていた。炭窯前部の両端には大きめの山石が地山に埋め込まれ、しっかりと造りになっている。また、床面の中央付近には焼けたり煤の付着した石が、炭窯の壁十とみられる橙色の粘土塊とともに寄せ集められていた。前述した近世墓のうち、斜面寄りの一群に使われた焼け石や煤付着の石はこの炭窯跡から運ばれた可能性も考えられる。

なお、この炭窯跡で地磁気年代測定を行ったところ、AD 1760±35の年代値が示された。

第4表 寺田I遺跡2区近世墓群概要一覧表

| 遺構名 | 土壌平面形 | 規模(cm) 長軸×短軸×深さ | 出土遺物 | | 備考 |
|----------|-------|--------------------|------------------|--|-----------------------------------------|
| | | | 寛永通寶・煙管・簪 陶磁器 | | |
| 1号墓 方形 | | 120×95×100 | 寛永通寶・煙管・簪 陶磁器 | | 上部に配石状の集石あり（焼石が多く含まれる）。石の脇から須恵器片出土。小兒か。 |
| 2号墓 方形 | | 125×100×100 | 寛永通寶 | | 上部に煤付着の集石あり。 |
| 3号墓 不整円形 | | 140×120×110 | 寛永通寶・煙管・人骨 | | 上部に組み石状の集石あり、成人男性か。 |
| 4号墓 方形 | | 90×70×100 | 寛永通寶 | | 炭窯築造のためか土壌の脇に石が寄せ集められている。 |
| 5号墓 不整方形 | | 130×120×130 | 寛永通寶・人骨 | | 土壌内に石が投げ込まれ、埋め戻されて炭窯の床面となる。 |
| 6号墓 方形 | | 90×85×110 | 寛永通寶・人骨 | | 掘り方の周囲に整然と並べられた石が残存する。 |
| 7号墓 方形 | | 110×95×43 | 陶磁器 | | |
| 8号墓 円形 | | 115×105×118 | 寛永通寶・陶磁器・人骨 | | 底面形は方形、上部に少數の集石あり。40歳代後半の成人女性か。 |
| 9号墓 円形 | | 100×95×72 | 寛永通寶・煙管・簪 人骨 | | 土壌周囲に鉄床石と再結合萍の大塊あり。 |

2. 出土遺物

2区では、各遺構やその上面から須恵器、土師器、陶磁器、錢貨のほか、精鍊鍛冶関連の遺物が出土した。また、箱式石棺や炭焼き遺構、炭溜まり等が検出された谷部上方の包含層でも、須恵器、土師器が出土している。以下、図化が可能であったものについて述べる。

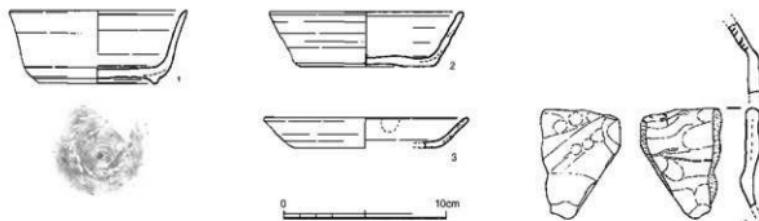
なお、精鍊鍛冶関連遺物のうち、鍛冶・鑄鋼に関係する鉄器類、羽口、鉄床石、石鎚、銅滓、坩埚については、ここでは概略を述べるに留め、他の鍛冶関連遺物とともに次節で詳述する。

(1) 精鍊鍛冶遺構上面出土土器

須恵器 第38図1は坏で、精鍊鍛冶遺構ピット1の傍の遺構上面から出土した。しっかりとした低い高台を持ち、体部は直線的に立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、器厚は端部に向かって薄くなる。胎上に砂粒をほとんど含まず、緻密で硬質な焼成である。底部には、円弧を描くように稻穂の茎葉様の爪痕がある。時期は8世紀中葉とみられ、精鍊鍛冶遺構の時期を考える上で非常に重要な遺物である。

土師器 2、3は精鍊鍛冶遺構に南北方向のトレチを入れた際に出土した。2は坏で、体部は強い回転ナデのため凹凸があり、逆「ハ」字状に開く。底部を除く外面には赤色顔料が塗布されている。3は皿で、器壁は薄く、体部は逆「ハ」字状に開く。口縁端部は僅かに外反する。底部を除く外面に赤色顔料が塗布されている。

4は器種不明の土師器で、2・3と同様のトレチから出土している。形状は、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。器形の歪みが顕著で、手捏ね状を呈する。口縁端部には刻目状の痕があり、一見すると金具状のもので挟まれた跡のような印象を受ける。外面は二次的な被熱のせい



第38図 寺田I遺跡2区精錬鍛冶遺構上面出土土器

か表面が荒れており、胎土の色調と異なって外面は灰白色を呈する。埴堀に使用された可能性もある。

(2) 排滓場出土土器

須恵器 第39図1は壺で、体部は内湾しながら立ち上がり、僅かに肥厚する口縁端部へと続く。1の縁端部はノミ刃状に仕上がる。底部の回転系切り痕からは、人念な切り離しの状況が見て取れる。底部はやや上底状を呈し、体部との境は明瞭な稜をなしている。2は大型壺の破片で、胴の下半部にあたるとみられる。内面には2.5cm大の鉄滓が付着している。

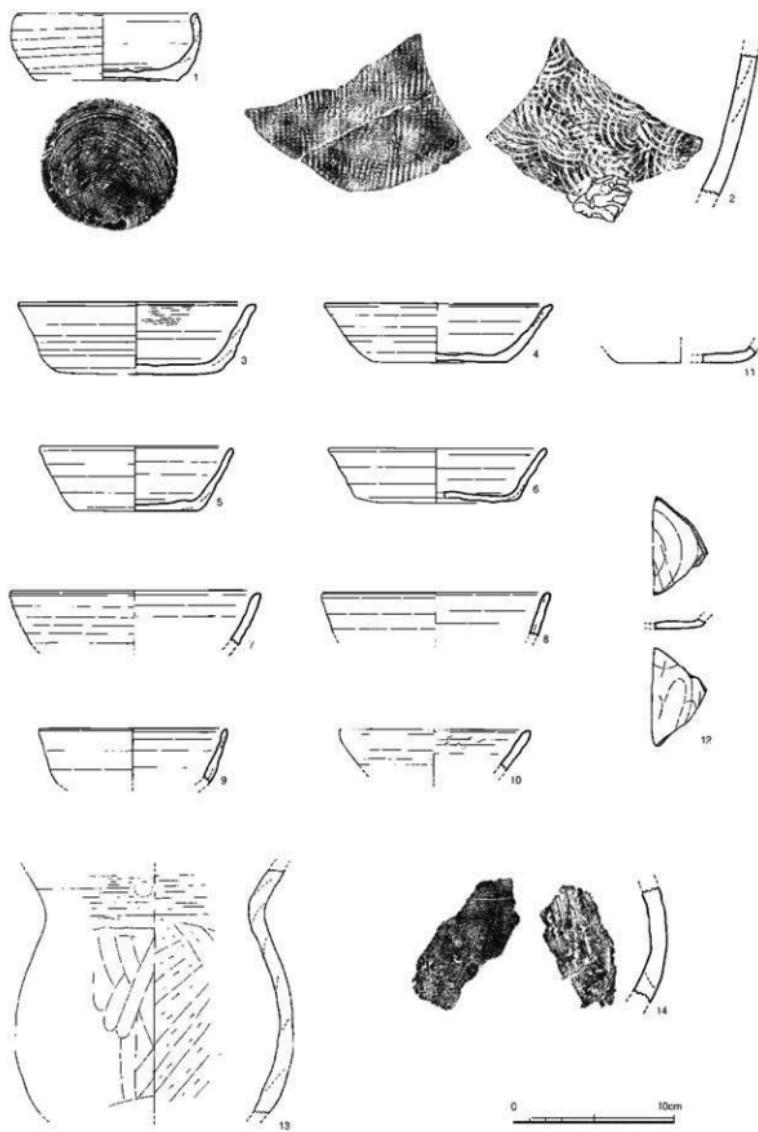
土師器 3～12は壺で、体部から口縁部にかけて僅かに内湾しながら直線的に立ち上がるもの（3～5・7～10）と、緩やかに外反しながら立ち上がるものの（6）がある。3～5・7・8は体部に強い回転ナデが施され、特に3・7・8は著しい凹凸を持つ。壺の口縁端部は概して丸くおさまるが、4は端部内面が面取りされたようにノミ刃状を呈する。ほとんどの個体の内外面には赤色顔料が塗布されているが、底部外面に顔料が施されないものが多い。

13・14は壺である。13はやや器厚の厚い壺で胎土は粗く、3～5cmの砂粒を多く含む。体部内面は粗いケズリで外面はナデが施される。色調は浅黄橙色を呈するが、一部に外から高温で熱を受けたと思われる橙色の変色部が認められる。

(3) 鍛冶・鋳銅関連遺物

2区では、検出された精錬鍛冶遺構に関連する様々な遺物が出土した。これらの遺物は、後述するように精錬鍛冶遺構だけでなく近世墓群周辺からも出土している。これらの遺物を詳細に観察すると、いずれも本精錬鍛冶遺構に作る遺物の可能性が高いことから、ここで一括して取り上げ、種別ごとに分類することとした。

また、なかでも鍛冶や鋳銅に用いられた各種の道具類がまとめて出土していることから、これらを中心に概略を述べることとする。



第39図 寺田I遺跡2区排溝場出土土器

鉄器 第40図は、いずれも切鉄あるいは鉄塊とみられる鉄素材である。1は、1号鍛冶炉の南1.8mにあたる排滓場の範囲から出土した。黒褐色土を掘り下げたところ、1の割鉄とともに3点の鉄塊系遺物も出土した。これらの遺物を取り上げた後、さらに掘り下げたところ、下部からも同様の鉄塊系遺物が出土した。結局、長さ23cm、幅14cm、深さ20cmの範囲に約30点の切鉄を含む鉄塊系遺物のまとまりが確認できた。この鉄塊系遺物の大きさはほとんどが3～5cm程度で、メタル度が特Lを示すものも含まれている。これらが意図的に埋められたものかどうかは不明である。

2は、排滓場の中央付近から出土した切鉄で、形状も1とよく似ている。成形された完成品であろうか。3は、1から南に1.1mの地点から出土している。断面の厚みは1、2よりやや厚く、鍛打成形する前の切鉄の可能性も考えられる。

第41図1は鉄鉗である。結合部からはさみ部の先端までが3.7cmと短い。掘り部は、結合部から10.6cmの所で欠損している。はさみ部の幅は先端部で9mmを測るが、相対する鉄鉗の形状が現存する鉄鉗とほぼ同じであったとすると、はさみ部が相互に接する部分は僅かであったと推定される。なお、鉄鉗の使用にあたっては、掘り部が折損した後も先端を枝木などを差し込んで再使用された可能性も残れる。

2は、中央部に比べ両端部がしだいに細くなる棒状の鉄器である。中央部は断面が隅丸長方形であるが、両端は径4mmの円形を呈する。工具の可能性もあるが、用途は不明である。3は、幅1.5cm、厚さ0.5cmの鉄素材に径0.6cmの孔が穿たれている。吊り手状の鉄製品の一部であろうか。4は、ほぼ完形の小型鑿である。鍛冶・鋳銅関連遺物が最も多く出土した排滓場中央部のグリッドから出土した。第39図1に鑿の使用痕が認められるが、これらの割鉄の成形加工に用いられた可能性も残される。

第42図1は、V字状に成形された鉄器未製品である。本遺跡の発掘調査以降、この遺物を動かして紹介してきたが、未製品であるにしても、各部位の厚みが不揃いで極めて小型でもあることから、動かすを訂正して鉄器未製品としておきたい¹⁰⁾。

2は、端部に内径0.8cmを測る、孔を持った棒状鉄製品の一部である。もう一方の端部が折損しており用途は不明であるが、馬具の一部の可能性をもつ。3は、鎌の先端部である。刃部の厚さは薄いところで0.1cmと薄手である。4は、鑿状鉄器である。先端近くが反り返っているのが気になるが、鉤のように先細状になるとは思えない。基部には木質が残存する。

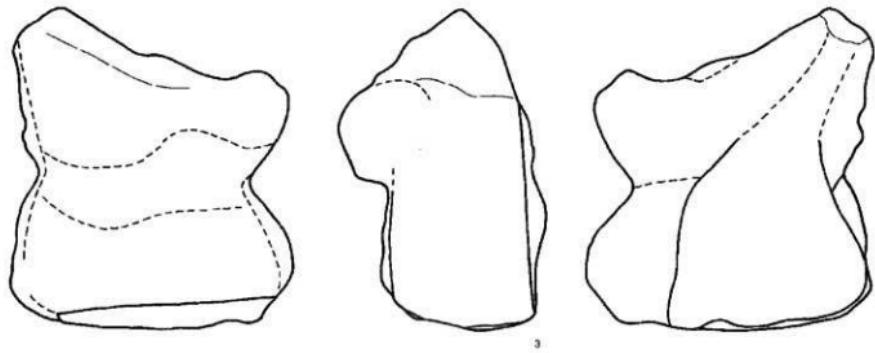
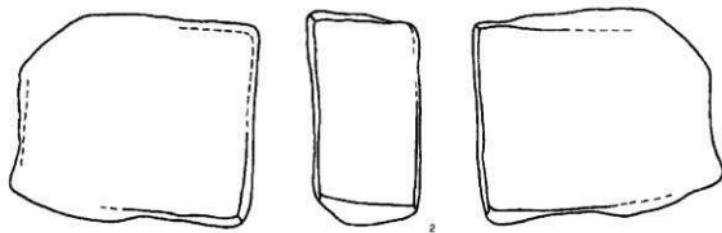
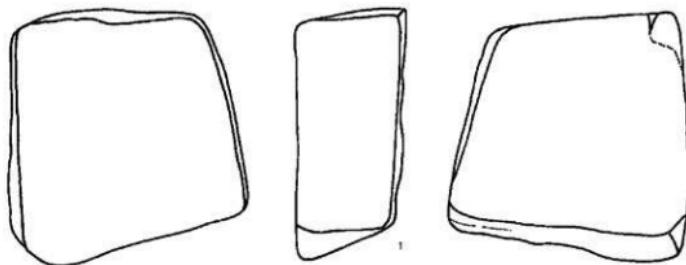
5、6は鉄片状の鉄器である。一見すると、切り屑のようにも見え、鉄素材を鉋で切り離した切れ端の可能性も考えられる。

第43図は螺旋状の鉄器である。長さ19.2cm、幅1.2～1.5cm、厚さ0.4～0.6cmを計る板状の鉄素材を螺旋状に巻いたもので用途は不明である。先端から12.6cmのところで屈曲しており、別の鉄素材が鍛接されている可能性も考えられる。

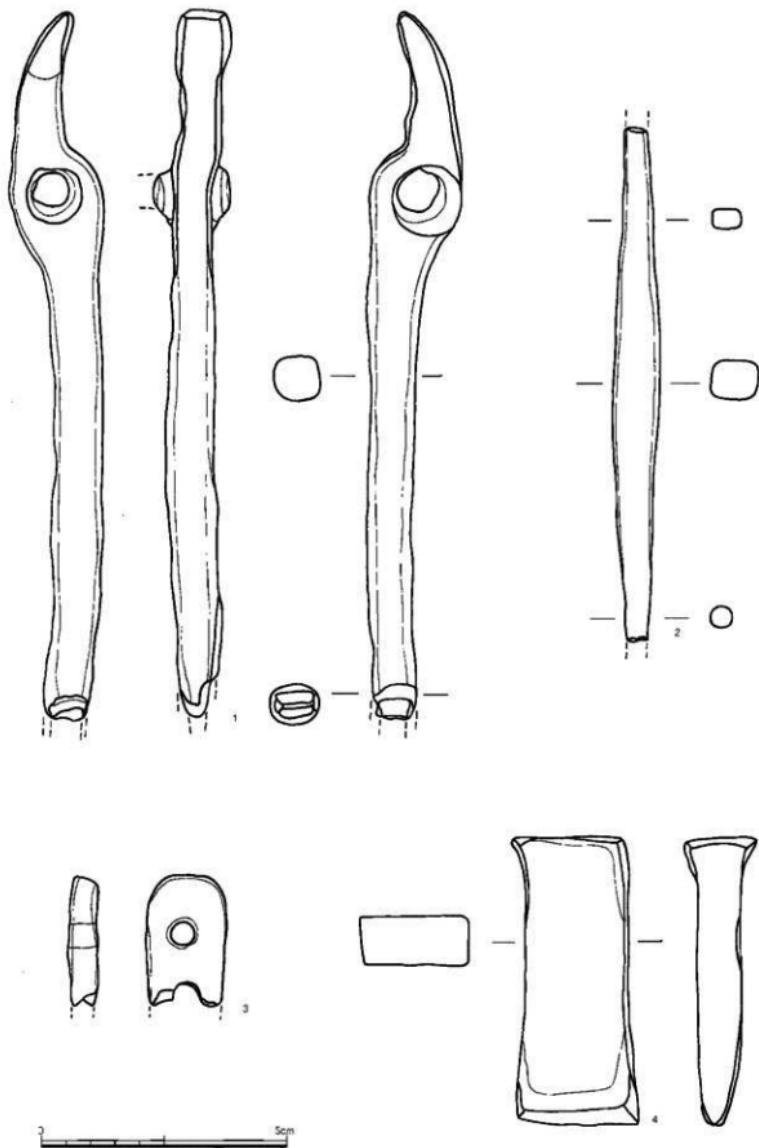
羽口 第44、45図には遺構から出土した羽口のいくつかを取り上げている。古代とりわけ古墳時代の羽口については、基部の形態からいくつかの分類が示されている¹¹⁾。本遺構でもいくつかの形態を持つ羽口が出土しているが、分類等を含めた考察は第4節で触ることとして、本節では本遺構から出土した羽口に見られる特徴について述べることとする。

〔精鍛鍛冶に伴う羽口〕

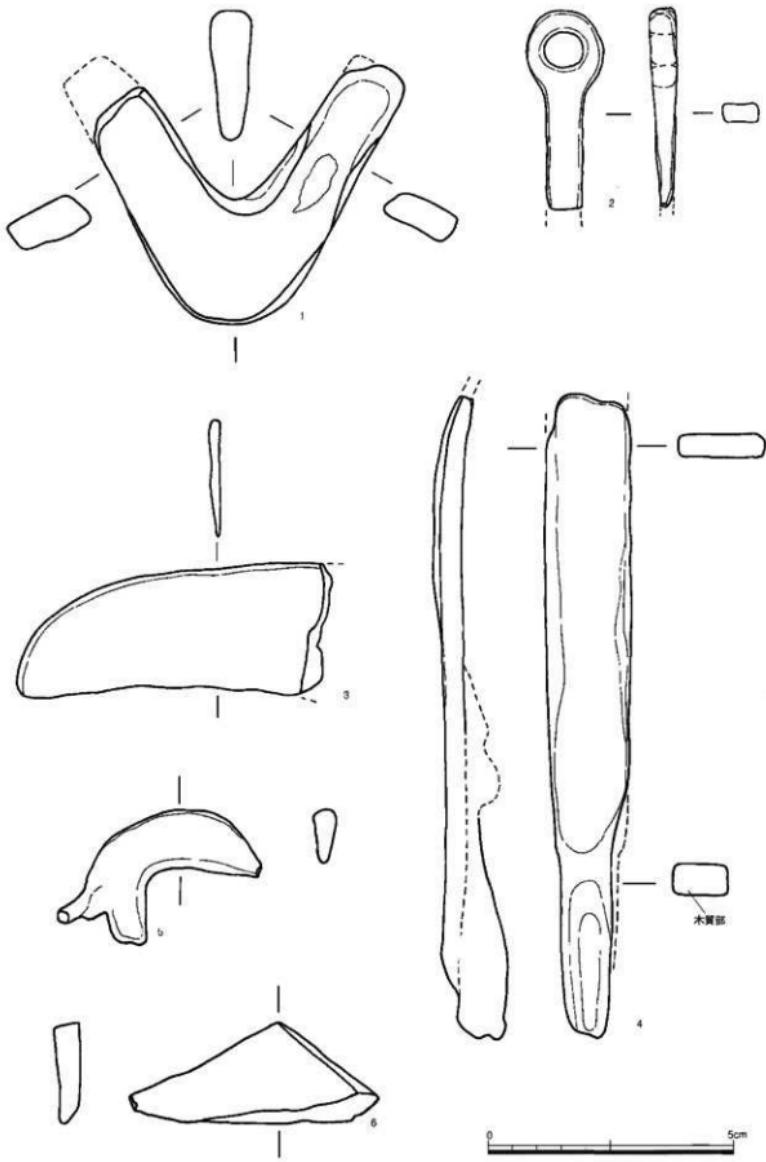
①外径、通風孔とも、基部に向かって放射状に聞くもの（第44図1・3、第45図2）



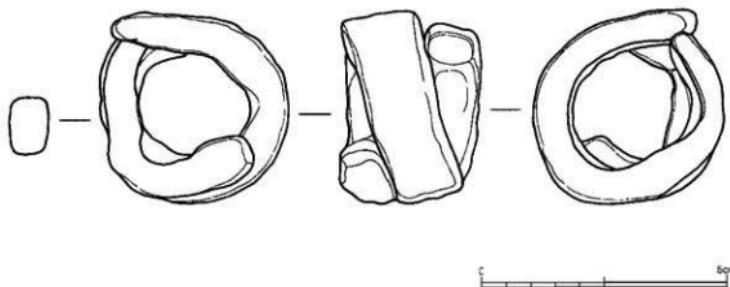
第40図 寺田Ⅰ遺跡2区出土銀冶・銅冶関連遺物（切鉄）



第41図 寺田I遺跡2区出土鍛冶・鋳銅関連遺物（鉄器1）



第42図 寺田I遺跡2区出土鍛冶・鋳銅関連遺物（鉄器2）



第43図 寺田I遺跡2区出土鍛冶・鋳銅関連遺物（鉄器3）

- ②基部側の断面形が楕円形を呈するもの（第44図1・2）
- ③通風孔の断面形が楕円形を呈するもの（第44図1、第45図6）
- ④外面に縱方向のスマキ痕のあるもの（第45図2・4）
- ⑤羽口の焼成が硬質なもの（第45図5）

〔鋳銅に伴うと考えられる羽口〕

- ⑥羽口の先端部が紫紅色を呈するもの（第44図5・6）
- ⑦羽口の外径が小形のもの（第44図6、第45図7）

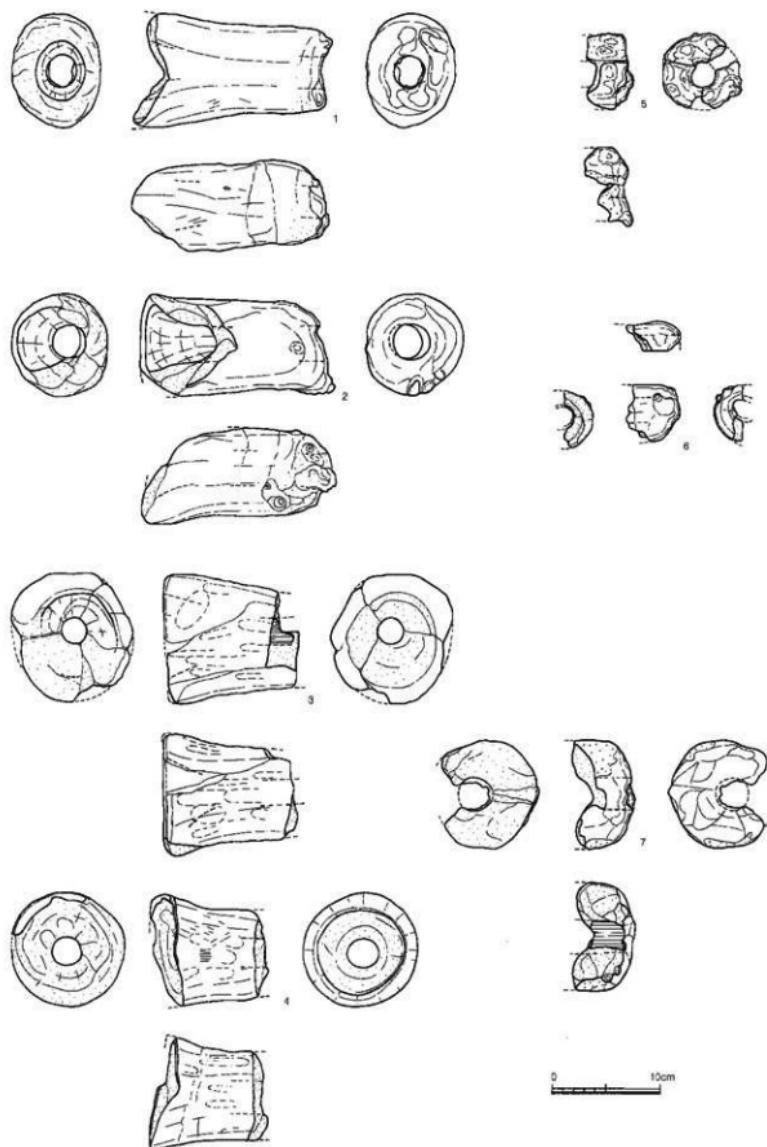
このように、本遺構では多様な羽口が出土している。大半の羽口が胎土にスサを含み、まれに3回前後の石英粒を多く含むものもある。また、先端が確認できる羽口は約33点であるが、このうち先端部が紫紅色または橙色を呈する羽口が4点ある。⑦に関しては、先端部の外径が4.5~6.2cmを測るものがあるが、色調に紫紅色の見られないものもあり、それらも鋳銅に用いられたものかどうかは判断できない。また、両種の羽口には、粘土が二層に巻かれているものも認められる（第45図2）。

鉄床石 第46図は鉄床石である。1は、第47図1の石錠とともに1号鍛冶炉の南1mの地点から出土した。鍛冶操業の最終時に使用されていたものであろうか。石材は花崗岩である。側面は一面のみが原形を保っており、平滑で被熱痕がある。上面には鍛造剥片が付着する。

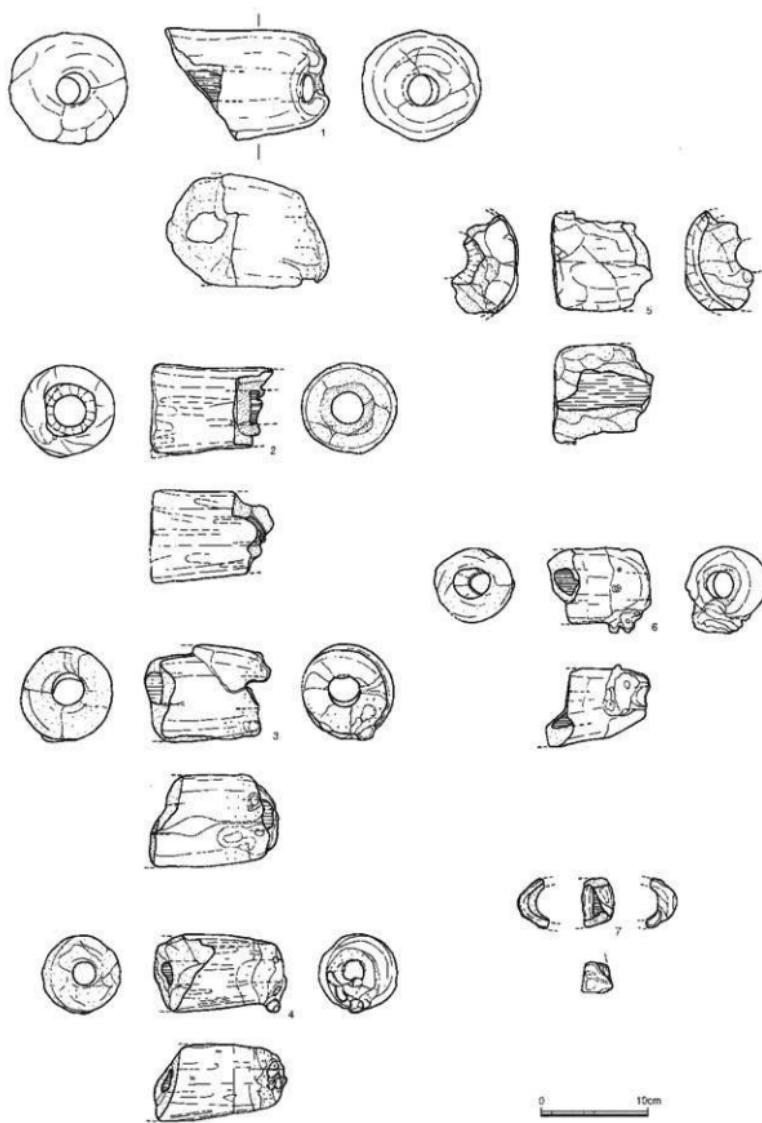
2は、枠形様遺構中に残されていたものである。点々と礫化物が付着しているものの、鍛造剥片の付着はなく、鉄床石あるいは荒砥石とも推定されている。何らかの台に用いられた可能性も捨てきれない。

3は、重量56.5kgを計る大型の鉄床石である。全面が被面となっており、2と同様に点々と酸化物が付着する。この鉄床石は、鍛冶遺構後背斜面の近世墓群9号墓上から出土している。なお、この鉄床石の直近では再結合溝も出土しており、後世になって墓石に代用されたことも考えられる。

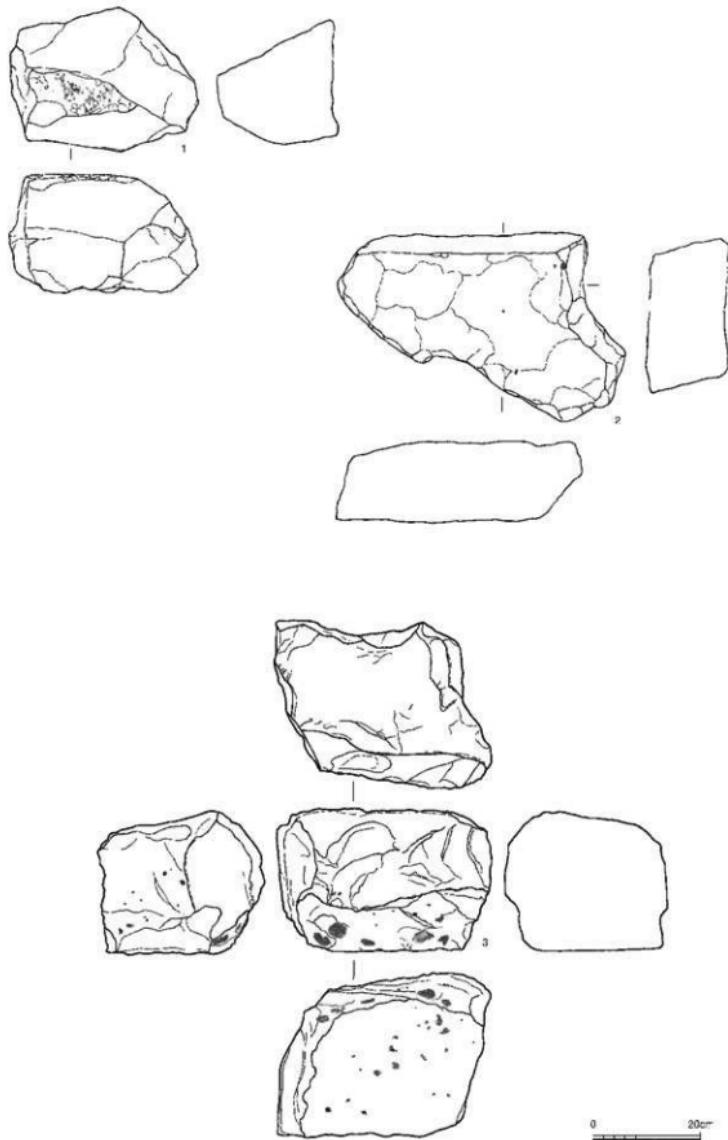
石錠 第47図・第48図1~3は石錠である。1を除く全てが排溝場から出土している。石錠は幅の厚いすんぐりしたものと、幅がやや薄く表面が扁平なものとに分けられる。石材は第47図4のみが



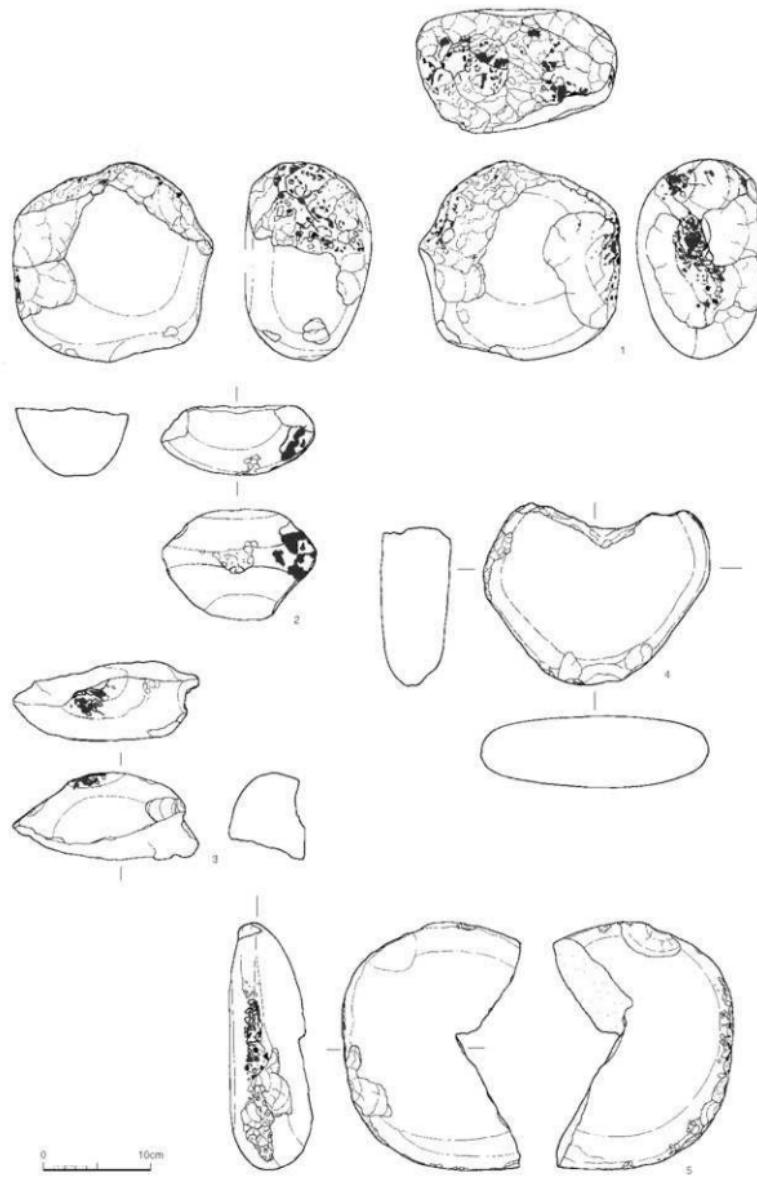
第44図 寺田I遺跡2区出土鍛冶・鋳銅関連遺物（羽口1）



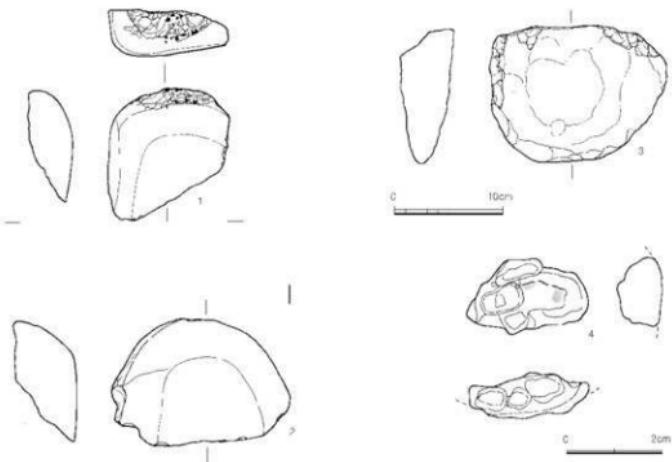
第45図 寺田I遺跡2区出土銀冶・鉄鋳物連遺物（羽口2）



第46図 寺田I遺跡2区出土銀冶・銅冶連遺物（鉄床石）



第47図 寺田I遺跡2区出土鍛冶・銄銅関連遺物（石錫1）



第48図 寺田I遺跡2区出土銀冶・銅鋳物（石錠2・銅津）

閃雲花崗岩で、他は全て化崗閃綠岩もしくは石英閃綠岩である。川原から持ち込まれたものとみられる。点数としては7点が確認された。このうち厚みのある右鍔は第47図1・2の2点のみである。1は、第46図1の鉄床石と同じ場所から出土したもので、最大幅は11.5cmを測る。打面には鍛造剥片が固着する。鍛打によって欠落部が見られるが、残存重量は4.26kgあり、おそらく片手で持ち上げることは困難であったろう。5は、厚さ4.0～6.5cmを測る扁平な石槌である。最大幅は23cmを測るが、両手で持ち上げて鍛打したのであろうか。なお、2区の発掘調査終了後、これら7点の右鍔とは別に、精錬鍛冶構から谷を抜んだ向かい側の斜面に所在する荒神塚の集石の中から、いずれも扁平で鍛造剥片が付着した花崗岩2点と鉄物が僅かに付着した流紋岩1点を検出している。

銅津 第48図4は銅津で、他に4点を検出したが図化はこの1点に留めた。いずれも排津場から出土したものである。銅津は全て小形で、最小が長さ1.8cm、最大でも3.2cmを測る。4は長さ2.5cm、厚さ0.8cmを測る。津の表面には発泡が見られ、その間に緑青が詰まっている。また、表面の一部には堆積に見られたような橙色を呈する部分も認められる。

堆積 第49図1～13は堆積である。概して器壁が分厚く、二次的被熱により変色や変形が著しい。表面の荒れも見られる。

1・2は楕円形の堆積である。いずれも体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。1の口縁部はガラス質状で、発泡が見られる。1の内面には3.5mm大の緑青粒、2の内面には黒色の溶解物が付着する。3は単純口縁の深鉢形が筒形碗とみられる。4は口縁部の小破片で、外側の口縁部下には幅4.5mmの溝がある。5はずんぐりとした楕円形の堆積で、体下半部が極端に分厚く、器厚は3cmを測る。口縁部に不整な折り返しや溝が見られ、4と同一の可能性が高い。6は体部から内湾しながら立ち上がる口縁部で、縁部にクシ状の工具痕がある。7は口縁部で、内面の一部



第49図 寺田I遺跡2区出土鋳冶・鋸銅関連遺物（坩堝）

部が僅かにガラス質化している。内面のほぼ全面が紫紅色を呈する。

8～11・13は、土師器壺の胴部あたりを利用したとみられる上器転用増堀である。8～10は壺の体下部片で、やや内湾しながら立ち上がる。8～11は内面に溶融物が付着している。12は浅鉢状で、口縁端部は幅広い平坦面をなす。側面に変形した凹孔がある。

14・15は単純深鉢形の土師質の土器である。14は手捏ね状の作りで、口縁端部に刻目がある。

第38図4と似た形状で、外面には第38図4と同様に灰白色に変色した部分が見られる。15は器厚が12mmの肉厚な上器で注口部のような径26mmの穿孔を持つ。外面に溶解物様の付着物が認められる。

(4) 谷部上方包含層出土遺物

須恵器 第50図1は平底の壺で、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部が肥厚する。強いナデのため、体部内面には凹凸が著しい。2・3は皿で、体部が逆「ハ」字状に開き、やや尖り気味の口縁端部へと続く。4は体部が短く、口縁部は僅かに外反し、端部はやや尖り気味である。須恵器の皿とみられるが焼成が不良ではっきりとしない。

15は単純口縁の壺である。頸部が「く」字状に大きく屈曲し、口縁部は短い。体部は球形で大きく膨らむ。

土師器 5・6・7・8・10・12・13は壺である。体部が逆「ハ」字状で直線的に立ち上がるものと、逆「ハ」字状でやや外反気味に立ち上がるもの、やや内湾気味に立ち上がるものがある。また、ほとんどの土器の内外面には赤色顔料が塗布されている。

5は断面が三角形の高台を持ち、底部は薄い。口縁部はやや肥厚し、端部内側はノミ刃状に仕上げている。6は口縁端部が肥厚する。5と同様に強い回転ナデのため器面に凹凸が生じている。7の内面には多条の平行線痕が見られる。

9・11は皿である。いずれも平底で、口縁端部は丸くおさまる。9は底部を除く外面に、11は内面と底部を除く外面に赤色顔料が塗布されている。

14は単純口縁の壺で、口縁部は逆「ハ」字状に大きく開き、端部を丸くおさめる。頸部は「く」字状に屈曲、肩部はなで肩である。

石器 水晶が1点出土した。現存長3.7cm、現存幅2.1cm、現存厚1.9cm、重量18gを測る。

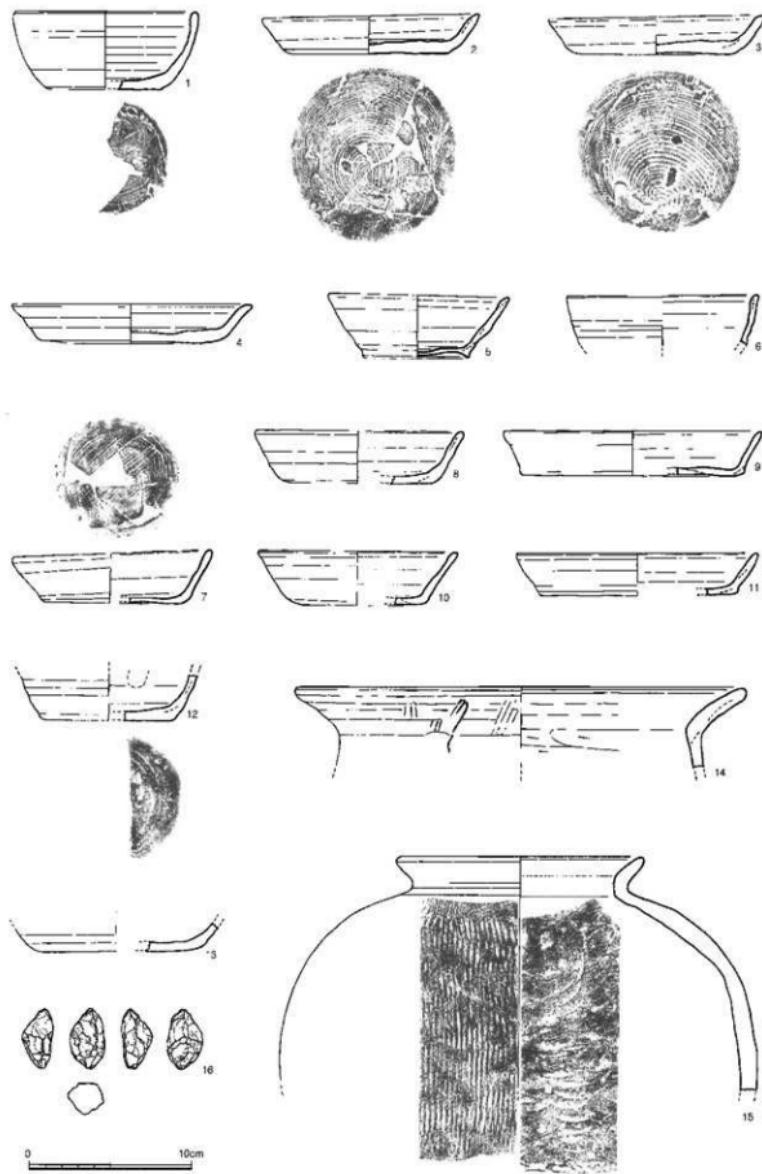
(5) 近世墓群出土遺物

須恵器 第51図1は長頸壺の体部と見られる。底部には平坦面が見られ、体下部の器厚は4～7mmと不揃いで内湾しながら立ち上がり、上部に向けて強く内湾する。扁球形の胴部を持つ。内面には強いナデ痕が残っている。

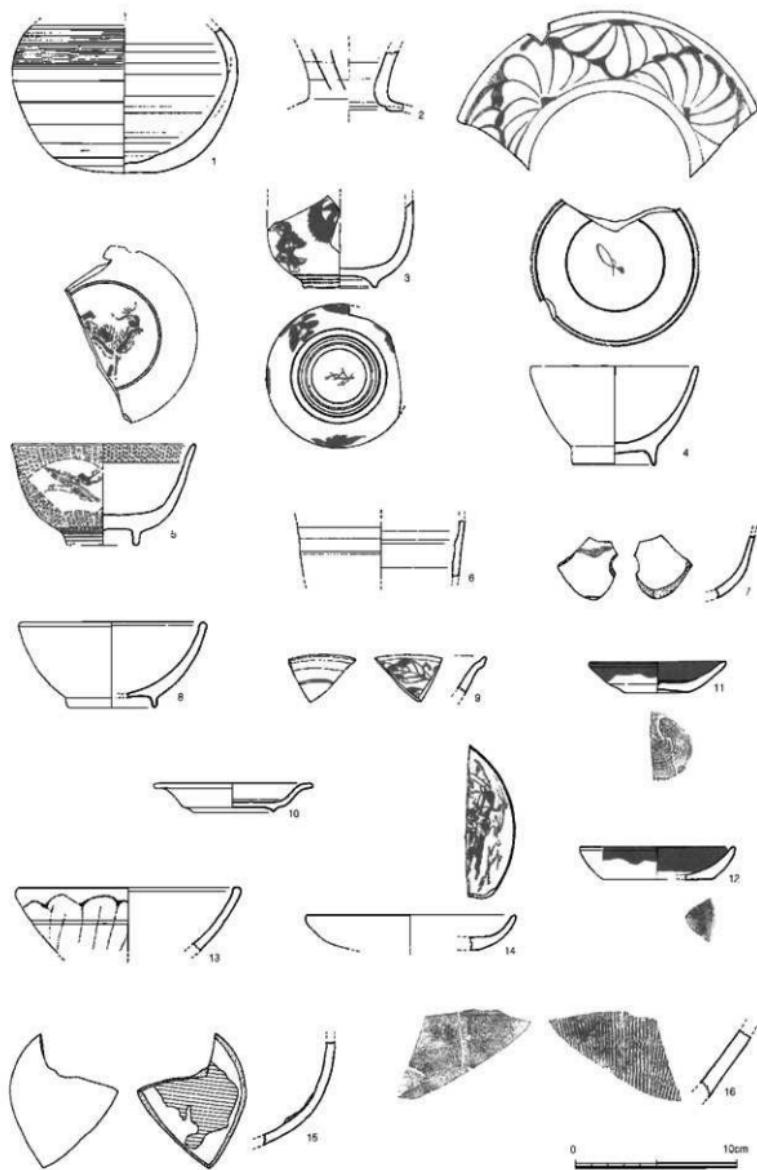
2は長頸壺の頸部の破片であろう。頸部から肩部へは「L」字状に屈曲し、口縁部へは外傾しながら立ち上がる。外面の一部にヘラ状工具痕と薄い輪が見られる。1と2は接合できないが同一個体の可能性もある。

陶磁器 3～8は碗である。3は18世紀後半のもので、体部外面に鶴と松が描かれる。底部から体下部へは内湾して立ち上がり、体部の中～上位は直立する。

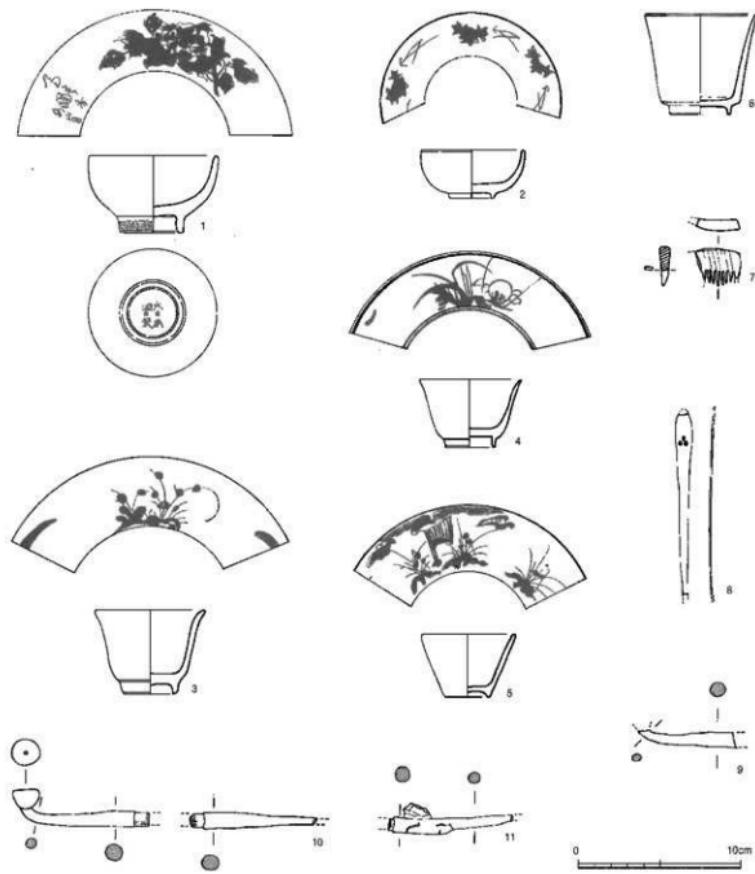
4は19世紀初頭の伊万里系のもので、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、高台は僅かに外側へ張り出す。外面口縁下部から体部にかけて菊文様の帯が巡る。5は底部から体部にかけて済曲



第50図 寺田I遺跡2区谷部上方包含層出土土器・石器



第51図 寺田I遺跡2区近世墓群出土遺物 (1)

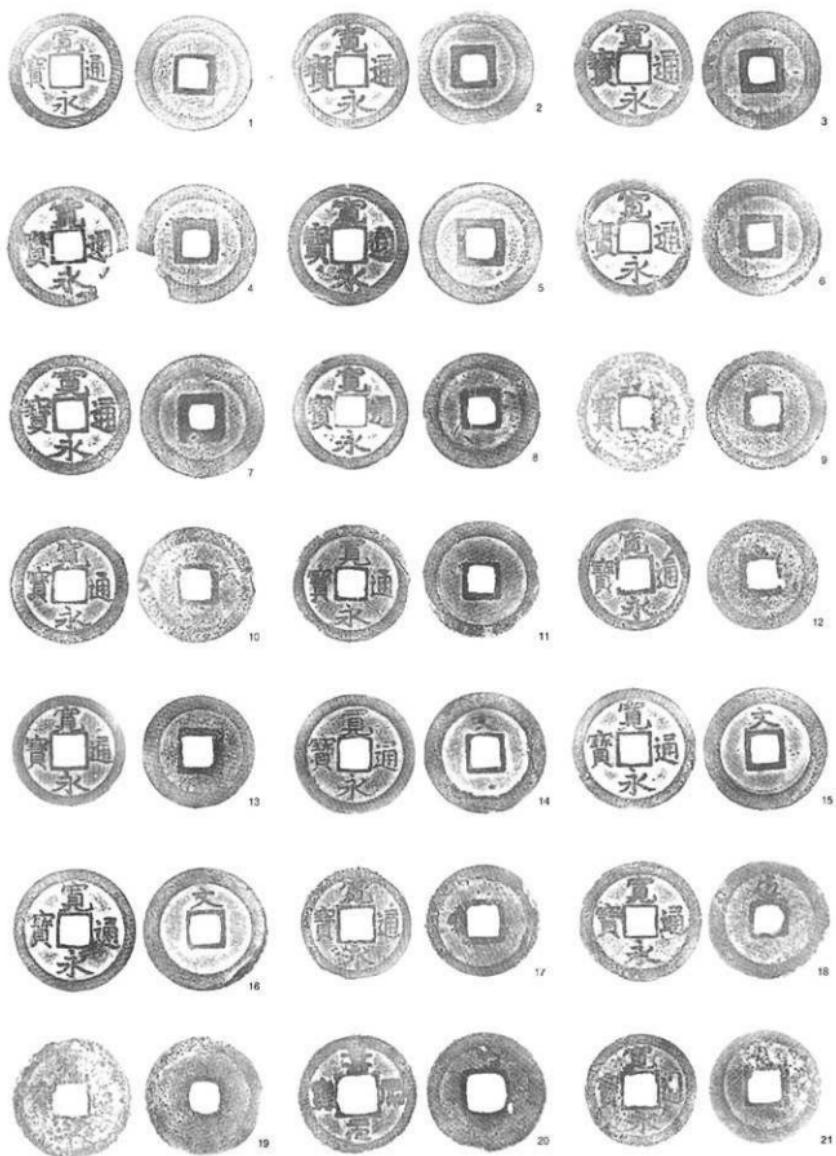


第52図 寺田I遺跡2区近世墓群出土遺物(2)

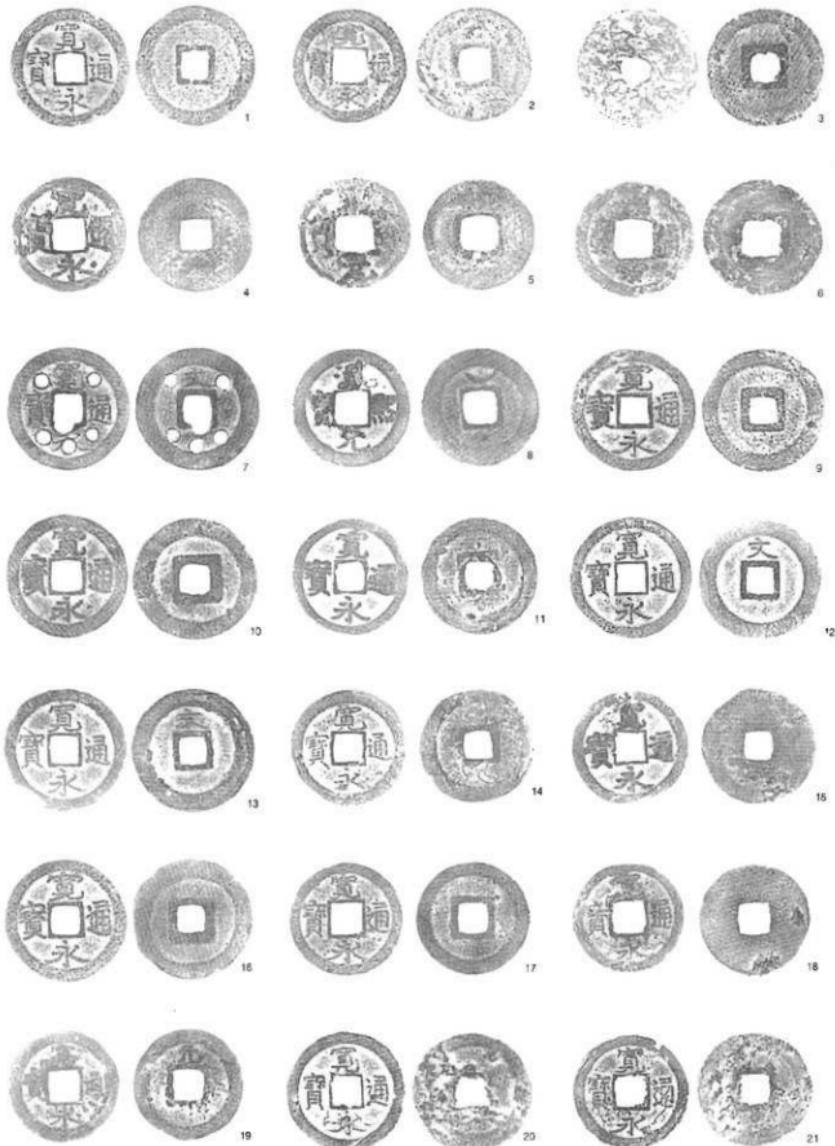
して立ち上がり、体中部より逆「ハ」字状に開く。口縁端部付近は僅かに外反する。体部外面には肩棒に鶴が描かれる。

8は在地産の陶器で、浅黄橙色の胎土は非常に緻密である。底部から口縁部へは緩やかに内湾して逆「ハ」字状に開く。

9～12・14は皿である。9の口縁部は複合口縁状に折れる。10は19世紀前半のもので、口縁部は大きく外反する。高台を持ち、底部、体部の境は稜をなしている。11の底部は上げ底状で、回転糸切り痕を有する。体部から口縁部にかけては大きく開く。12の底部は平底で、回転糸切り痕を有する。体部と底部の境には鋭い稜があり、体部から口縁部にかけては僅かに内湾して開く。

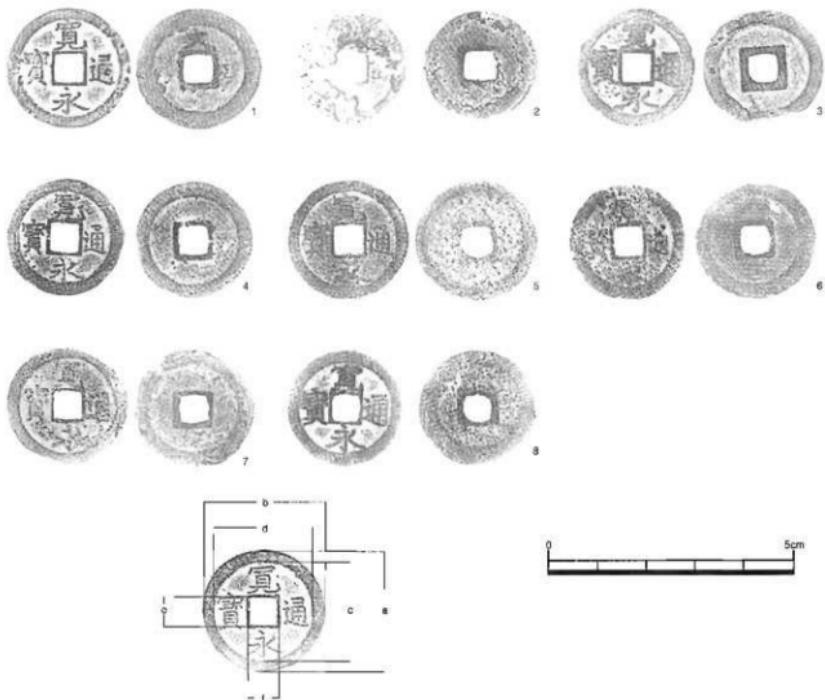


第53図 寺田I遺跡2区近世墓群出土銭貨（1） 1:1



第54図 寺田I遺跡2区近世墓群出土錢貨（2）

1:1



第55図 寺田1遺跡2区近世墓群出土銭貨(3) 1:1

14は19世紀後半のものである。底径が大きく、体部へは内湾して移行、口縁端部へは逆「ハ」字状に開く。15は鉢で、体部が円弧状に内湾する。内面に有機物が付着している。16は近世の擂鉢片で、全面に擦り目がある。

第52図1は湯呑茶碗であろうか。口縁部から体部にかけて凹球状に湾曲する。高い高台が垂直に付く。2は盃で、底部から体部へは大きく内湾して立ち上がり、直立状の口縁へと続く。3は猪口で、体部は直線的に立ち上がり、緩やかに外反する口縁部へと続く。4は19世紀後半のもので、直立した高台が付く。口縁部は僅かに外反する。猪口であろうか。

5は体部から底部まで一体的な作りとなる。底部から口縁部にかけては直線的に開きながら立ち上がる。盃であろうか。6も猪口で、直立する口縁を持ち、体部は僅かに外反しながら直線的に立ち上がる。

その他の遺物 その他の出土遺物としては、櫛、簪、煙管、錢貨がある。

第52図7は小型の木製櫛片で、台は内湾し、齒の断面は長方形を呈する。8は頭部に3つの小孔を穿った銅製の簪、9～11は煙管である。

錢貨は幕廻内及びその周辺で57枚出土した。ほとんどが寛永通寶で、中国銭や鉄錢が若干混じる。

第5表 寺田I遺跡2区出土土器観察表

| 件番 番号 | 遺物 番号 | 草寫 記載 | 出土地点 | 種類 | 法 品 (cm) | | | 調査・検定 | | 毛器・文様の特徴 | 備考 |
|----------|----------|--------------|------|----|----------|------|-----|-----------------------|-----------------------|------------------------------------|--------------------------------------------|
| | | | | | 口径 | 底径 | 高さ | 外面 | 内面 | | |
| 38 1 | | 縫治間溝 遺構上部 | 縫治器 | 坏 | 11.0 | 7.4 | 4.5 | 凹輪ナゲ・ナゲ | 毛器ナゲ・ナゲ・指 | 圓輪底切り削上に凹 底を抜く底板 | - |
| 38 2 | | 縫治間溝 遺構上部 | 土師器 | 坏 | 12.6 | 8.2 | 3.4 | 凹輪ナゲ・ナゲ指 | 凹輪ナゲ・ナゲ指 | 強い凹輪ナゲにより 底部外縁を除き赤色 顔料塗布 | - |
| 38 3 | | 縫治間溝 遺構上部 | 土師器 | 坏 | 12.6 | 9.0 | 1.9 | 凹輪ナゲ | 凹輪ナゲ・ナゲ指 | - | 全面に赤色顔料塗布 |
| 38 4 | | 縫治間溝 遺構上部 | 土師器 | 坏 | - | - | - | ナゲ | ナゲ | - | 口縁端部に削付・凹 凸著しい二次的削 底による唇形の底み (外縁) |
| 39 1 | | 縫治場 | 縫治器 | 坏 | 11.4 | 8.9 | 4.2 | 凹輪ナゲ | 凹輪ナゲ | 凹輪六切り | 内外面に指付着 |
| 39 2 | | 縫治場 | 縫治器 | 陶 | - | - | - | タタキメ浅カキメ | タタキメ | - | 内面に铁錆付着 |
| 39 3 | | 縫治場 | 土師器 | 坏 | 14.6 | - | 4.0 | 凹輪ナゲ・底部ナゲ | 底部:凹輪ナゲ 底部:ナゲ・底部ナゲ | 強い凹輪ナゲにより 全面に赤色顔料塗布・ 底部にスズ付着 | - |
| 39 4 | | 縫治場 | 土師器 | 坏 | 14.0 | 8.6 | 3.6 | 凹輪ナゲ 底部:ナゲ | 底部:凹輪ナゲ 底部:ナゲ・ナ | - | 全面外縁を除き赤色 顔料塗布 |
| 39 5 | | 縫治場 | 土師器 | 坏 | 12.0 | 8.2 | 4.0 | 凹輪ナゲ 底部:ナゲ・底部直 | 底部:凹輪ナゲ | - | 底部外縁を除き赤色 顔料塗布 |
| 39 6 | | 縫治場 | 土師器 | 坏 | 13.8 | 10.2 | 3.4 | 直輪ナゲ・内腹底 底部:ナゲ・指付底 | 底部:直輪ナゲ 底部:凹輪ナゲ・ナ | - | 底部外縁を除き赤色 顔料塗布 |
| 39 7 | | 縫治場 | 土師器 | 坏 | 15.4 | - | - | 凹輪ナゲ | 凹輪ナゲ | 強い凹輪ナゲにより 全面に凹凸 | 赤色顔料塗布 |
| 39 8 | | 縫治場 | 土師器 | 坏 | 14.0 | - | - | 凹輪ナゲ | 凹輪ナゲ | 強い凹輪ナゲにより 全面に凹凸 | 赤色顔料塗布 |
| 39 9 | | 縫治場 | 土師器 | 坏 | 11.6 | - | - | 凹輪ナゲ | 凹輪ナゲ | - | 赤色顔料塗布 |
| 39 10 | | 縫治場 | 土師器 | 坏 | 11.7 | - | - | 凹輪ナゲ | 凹輪ナゲ | - | 赤色顔料塗布 |
| 39 11 | | 縫治場 | 土師器 | 坏 | - | 7.4 | - | ナゲ | ナゲ | - | - |
| 39 12 | | 縫治場 | 土師器 | 坏 | - | - | - | ナゲ | 凹輪ナゲ・ナゲ | - | 全面に赤色顔料塗布 |
| 39 13 | | 縫治場 | 土師器 | 陶 | - | - | - | ナゲ(シケ工法使用) 指工法 | ハケメ・粉石底 | - | 内側底に指付着 |
| 39 14 | | 縫治場 | 土師器 | 陶 | - | - | - | タテ・ヨコハケ接ナ ゲ | ケズリ | - | 外裏に爆付着 |
| 50 1 | | 新潟上方 窓含層 | 縫治器 | 坏 | 11.0 | 7.0 | 4.8 | 直輪ナゲ | 凹輪ナゲ | 強い凹輪ナゲにより 底部に凹凸 周縁本切・直 | - |
| 50 2 | | 新潟上方 窓含層 | 縫治器 | 陶 | 13.4 | 9.7 | 2.5 | 縫治ナゲ | 凹輪ナゲ | - | - |
| 50 3 | | 新潟上方 窓含層 | 縫治器 | 陶 | 13.4 | 9.8 | 2.5 | 凹輪ナゲ | 凹輪ナゲ | - | - |
| 50 4 | | 新潟上方 窓含層 | 縫治器? | 陶 | 14.5 | 11.0 | 2.5 | 凹輪ナゲ・ナゲ | 凹輪ナゲ | - | - |
| 50 5 | | 新潟上方 窓含層 | 土師器 | 坏 | 11.2 | 6.6 | 4.0 | 凹輪ナゲ | 凹輪ナゲ | 強い凹輪ナゲにより 全面に凹凸 | 赤色を除き赤色顔料 塗布 |
| 50 6 | | 新潟上方 窓含層 | 土師器 | 坏 | 12.0 | - | - | 凹輪ナゲ | 凹輪ナゲ | 強い凹輪ナゲにより 全面に凹凸 | 赤色を除き赤色顔料 塗布 |
| 50 7 | | 新潟上方 窓含層 | 土師器 | 坏 | 12.4 | 8.4 | 3.4 | 凹輪ナゲ・ナゲ 底部:指工法 | 凹輪ナゲ | 全面内面に多条の半 円状線 | 底部を除き赤色顔料 塗布 |
| 50 8 | | 新潟上方 窓含層 | 土師器 | 陶 | 13.0 | 9.4 | 3.3 | 凹輪ナゲ・ナゲ | 凹輪ナゲ | - | 全面に赤色顔料塗布 |
| 50 9 | | 新潟上方 窓含層 | 土師器 | 陶 | 16.0 | 13.2 | 2.8 | 凹輪ナゲ・ナゲ | 凹輪ナゲ・ナゲ 底部:指工法 | - | 底部を除き赤色顔料 塗布 |

| 器物番号 | 出所 | 寸法 | 寸法 | 寸法 | 法観(2) | | | 調査・技法 | | | 系譜・文献の特徴 | 備考 |
|-------|--------------|-----|----|------|-------|-----|--------------------|-------|--------|--------------------------|-----------|----|
| | | | | | 14種 | 英語 | 最高 | 外 | 面 | 内 | | |
| 50 10 | 谷部上方 瓦含器 | 土器 | 环 | 12.4 | 8.3 | 4.4 | | 直板ナゲ | 直形、陶土板 | | 京都を除き赤色細削 | 墨 |
| 50 11 | 谷部上方 瓦含器 | 七叶器 | 环 | 15.0 | 11.8 | 2.6 | 直板ナゲ・ナゲ | 直板ナゲ | | 京都を除き赤色細削 | 墨 | |
| 50 12 | 谷部上方 瓦含器 | 土器 | 环 | — | 7.8 | — | 直板ナゲ・ナゲ | 直板 | 捺印 | 直板各切り装 | | |
| 50 13 | 谷部上方 瓦含器 | 三脚器 | 环 | — | 8.6 | — | 直板ナゲ・ナゲ | | | 内外面に赤色削削 | 墨 | |
| 50 14 | 谷部上方 瓦含器 | 三脚器 | 直 | 28.0 | — | | ハケ抜きコナゲ・ナゲ | | ナゲ・ケズリ | | | |
| 50 15 | 谷部上方 瓦含器 | 七叶器 | 环 | 15.2 | — | | ナゲ・タキメ・指生痕 | | | | | |
| 51 1 | 近世器 | 原底器 | 直 | — | — | — | 体部上～中段：方 下部：ケズリ | 直板ナゲ | 底器は草擬造 | 2と同様 | 墨跡 | |
| 51 2 | 近世器 | 原底器 | 直 | — | — | — | 直板ナゲ後へり状 工具痕 | | | 外観：部分的凹痕 | | |
| 51 3 | 近世器 | 陶器部 | 直 | — | 4.6 | — | | | | 文様：桃 | | |
| 51 4 | 近世器 | 陶器部 | 直 | — | | | | | | 文様文様：鶴・松 | | |
| 51 5 | 近世器 | 陶器部 | 直 | 11.4 | 4.6 | 6.3 | | | | 体部文様：二重文 | | |
| 51 6 | 近世器 | 陶器部 | 直? | — | | | | | | 内側文様：二重文 | | |
| 51 7 | 近世器 | 陶器部 | 直 | — | | | | | | 外側文様：直線文 | | |
| 51 8 | 近世器 | 陶器 | 直 | 11.6 | 5.6 | 5.5 | | | | 内側文様：直線文 | | |
| 51 9 | 近世器 | 直 | — | — | — | | | | | 外側文様：直文 | | |
| 51 10 | 近世器 | 陶器部 | 小直 | 9.8 | 4.8 | 1.8 | | | | 内側文様：植物（茎）文様 | 内外面施墨 | |
| 51 11 | 近世器 | 陶器部 | 小直 | 8.6 | 4.1 | 1.9 | | | | 外表面：墨跡 | 19世後半 施墨 | |
| 51 12 | 近世器 | 陶器部 | 小直 | 9.5 | 6.8 | 2.0 | | | | 直板各切り | 外表面：墨跡 | |
| 51 13 | 近世器 | 陶器部 | 小直 | — | | | | | | 外表面：墨跡？ | 施墨 | |
| 51 14 | 近世器 | 陶器部 | 直 | 13.0 | | | | | | 内側部：内側文様：水、波、本丸、19世後半 施墨 | | |
| 51 15 | 近世器 | 陶器部 | 直 | — | | | | | | 内面：有植物文様 | | |
| 51 16 | 近世器 | 横模 | 直 | — | — | — | ナゲ | | | 施墨 | | |
| 52 1 | 近世器 | 陶器部 | 素焼 | 8.0 | 4.0 | 1.8 | | | | 外側：直線文 | 19世後半 施墨 | |
| 52 2 | 近世器 | 陶器部 | 直 | 11.5 | 2.8 | 3.0 | | | | 外表面：紅葉・松 | 施墨 | |
| 52 3 | 近世器 (8号器) | 陶器部 | 焼口 | 6.8 | 3.4 | 5.2 | | | | 外表面：植物文様 | 施墨 | |
| 52 4 | 近世器 | 陶器部 | 素焼 | 6.4 | 3.2 | 4.2 | | | | 外表面：植物文様 内側文様：有植物文様 | | |
| 52 5 | 近世器 (1号器) | 陶器部 | 素焼 | 5.8 | 2.8 | 3.0 | | | | 外表面：植物文様 | 施墨 | |
| 52 6 | 近世器 | 陶器部 | 焼口 | 7.0 | 3.8 | 6.3 | | | | 外表面：口縁端部無墨 | | |

第6表 寺田I遺跡2区近世墓群出土銭貨一覧表

| 博岡 番号 | 遺物 番号 | 写真 版 | 出土地点 | 銭種 | 寸法(cm) | | | | | | 備考 | |
|----------|----------|---------|----------|------|--------|------|------|------|------|------|------|--------------|
| | | | | | a | b | c | d | e | f | 厚さ | |
| 52 | 1 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.35 | 2.30 | 1.90 | 1.85 | 0.70 | 0.70 | 0.10 | 新寛永 |
| 52 | 2 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 2.00 | 0.70 | 0.70 | 0.70 | 0.10 | 古寛永 |
| 52 | 3 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.45 | 2.45 | 1.95 | 1.95 | 0.65 | 0.65 | 0.16 | 山寛永 |
| 52 | 4 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.45 | 2.45 | 2.00 | 2.00 | 0.70 | 0.70 | 0.12 | 古寛永 |
| 52 | 5 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.50 | 2.45 | 2.10 | 2.00 | 0.75 | 0.75 | 0.10 | 古寛永 |
| 52 | 6 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 1.95 | 1.95 | 0.65 | 0.70 | 0.11 | 古寛永 |
| 52 | 7 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.50 | 2.50 | 2.00 | 2.00 | 0.70 | 0.70 | 0.10 | 古寛永 |
| 52 | 8 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.35 | 2.35 | 2.40 | 2.35 | 0.65 | 0.65 | 0.10 | 古寛永 |
| | | | 1号墓 | 寛永通寶 | — | — | — | — | — | — | — | 山寛永 |
| 52 | 9 | — | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 2.00 | 2.00 | 0.70 | 0.70 | 0.11 | 新寛永 |
| 52 | 10 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 1.90 | 1.90 | 0.75 | 0.75 | 0.12 | 新寛永 |
| 52 | 11 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 1.95 | 1.95 | 0.65 | 0.65 | 0.10 | 新寛永 |
| 52 | 12 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.30 | 2.30 | 0.11 | 1.90 | 0.75 | 0.75 | 0.10 | 新寛永 |
| 52 | 13 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.30 | 2.30 | 1.85 | 1.90 | 0.75 | 0.75 | 0.11 | 新寛永 |
| 52 | 14 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.45 | 2.50 | 2.00 | 2.00 | 0.70 | 0.70 | 0.12 | 新寛永・佐・柏原銭 |
| 52 | 15 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.50 | 2.50 | 2.10 | 2.10 | 0.70 | 0.70 | 0.12 | 新寛永・文銭 |
| 52 | 16 | | 1号墓 | 寛永通寶 | 2.50 | 2.50 | 2.10 | 2.05 | 0.70 | 0.70 | 0.10 | 新寛永・文銭 |
| 52 | 17 | | 2号墓 | 寛永通寶 | 2.30 | 2.30 | 1.95 | 1.90 | 0.75 | 0.75 | 0.14 | 新寛永 |
| 52 | 18 | | 2号墓 | 寛永通寶 | 2.45 | 2.45 | 1.95 | 1.95 | 0.70 | 0.70 | 0.12 | 新寛永・佐・柏原銭 |
| 52 | 19 | | 2号墓 | 錢種不明 | 2.50 | 2.40 | 2.00 | 2.00 | 0.75 | — | 0.10 | 寛永通寶か? |
| 52 | 20 | | 2号墓 | 嘉祐元寶 | 2.40 | 2.40 | 1.95 | 1.95 | 0.85 | 0.85 | 0.10 | 宋銭 |
| 53 | 21 | | 4号墓 | 寛永通寶 | 2.30 | 2.30 | 1.90 | 1.90 | 0.70 | 0.75 | 0.10 | 新寛永 |
| 53 | 1 | | 4号墓 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 1.95 | 1.95 | 0.70 | 0.65 | 0.12 | 新寛永 |
| 53 | 2 | | 4号墓 | 寛永通寶 | 2.30 | 2.30 | 1.85 | 1.85 | 0.75 | 0.75 | 0.10 | 新寛永 |
| 53 | 3 | | 5号墓 | 銘銭 | 2.40 | 2.45 | — | — | — | — | 0.14 | |
| | | | 5号墓 | 錢種不明 | — | — | — | — | — | — | — | 2枚同着(内1枚:銘銭) |
| | | | 5号墓 | 錢種不明 | — | — | — | — | — | — | — | |
| 53 | 4 | | 6号墓 | 寛永通寶 | 2.35 | 2.35 | 1.95 | 1.95 | 0.75 | 0.75 | 0.11 | 古寛永 |
| 53 | 5 | | 6号墓 | 錢種不明 | 2.30 | 2.30 | 2.00 | 1.95 | — | — | 0.10 | 宋銭? 下字:「元」? |
| 53 | 6 | | 6号墓 | 皇宋通寶 | 2.40 | 2.40 | 1.95 | 1.95 | 0.85 | 0.85 | 0.10 | 宋銭 |
| | | | 6号墓 | 錢種不明 | — | — | — | — | — | — | — | 2枚同着 |
| | | | 6号墓 | 銘種不明 | — | — | — | — | — | — | — | |
| 53 | 7 | | 6号墓 | 寛永通寶 | 2.50 | 2.50 | 2.00 | 1.95 | 0.75 | 0.70 | 0.10 | 新寛永・文銭、孔5穴 |
| 53 | 8 | | 6号墓 | 淳熙元寶 | 2.40 | 2.40 | 1.85 | 1.85 | 0.75 | 0.75 | 0.12 | 宋銭「月」・「星」 |
| 53 | 9 | | 8号墓 | 寛永通寶 | 2.50 | 2.50 | 2.00 | 2.00 | 0.70 | 0.70 | 0.12 | 古寛永 |
| 53 | 10 | | 8号墓 | 寛永通寶 | 2.50 | 2.50 | 2.00 | 2.00 | 0.75 | 0.75 | 0.10 | 古寛永 |
| 53 | 11 | | 9号墓 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 2.00 | 2.00 | 0.70 | 0.70 | 0.11 | 古寛永 |
| 53 | 12 | | 9号墓 | 寛永通寶 | 2.50 | 2.50 | 2.00 | 2.00 | 0.65 | 0.65 | 0.12 | 新寛永・文銭 |
| 53 | 13 | | 9号墓 | 寛永通寶 | 2.50 | 2.50 | 2.00 | 2.00 | 0.65 | 0.65 | 0.11 | 新寛永・文銭 |
| 53 | 14 | | 墓地跡 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 1.85 | 1.85 | 0.70 | 0.70 | 0.13 | 新寛永 |
| 53 | 15 | | 墓地跡 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.35 | 1.90 | 1.90 | 0.65 | 0.65 | 0.09 | 古寛永 |
| 53 | 16 | | 墓地跡 | 寛永通寶 | 2.50 | 2.50 | 2.00 | 2.00 | 0.70 | 0.70 | 0.10 | 山寛永 |
| 53 | 17 | | 墓地跡 | 寛永通寶 | 2.30 | 2.30 | 1.90 | 1.90 | 0.75 | 0.75 | 0.10 | 新寛永 |
| 53 | 18 | | 墓地跡 | 寛永通寶 | 2.25 | 2.25 | 1.80 | 1.80 | 0.80 | 0.80 | 0.11 | 新寛永 |
| 53 | 19 | | 墓地跡 | 寛永通寶 | 2.25 | 2.25 | 1.75 | 1.75 | 0.70 | 0.70 | 0.10 | 新寛永「元」高津銭 |
| 54 | 20 | | 墓地跡 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 2.00 | 2.00 | 0.70 | 0.70 | 0.12 | 新寛永 |
| 54 | 21 | | 墓地跡 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 1.90 | 1.90 | 0.70 | 0.70 | 0.14 | 新寛永 |
| 54 | 1 | | 墓地跡 | 寛永通寶 | 2.50 | 2.50 | 2.00 | 2.00 | 0.70 | 0.70 | 0.12 | 新寛永・文銭 |
| 54 | 2 | | 墓地跡 | 銘銭 | 2.30 | 2.30 | — | — | — | — | 0.13 | |
| 54 | 3 | | 墓地跡 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 2.00 | 2.00 | 0.75 | 0.75 | 0.14 | 古寛永 |
| | | | 墓地跡 | 銘種不明 | — | — | — | — | — | — | — | |
| | | | 墓地跡 | 銘種不明 | — | — | — | — | — | — | — | |
| 54 | 4 | | 2号~3号間斜面 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 1.90 | 1.90 | 1.90 | 0.70 | 0.12 | 新寛永 |
| 54 | 5 | | 2号~3号間斜面 | 寛永通寶 | 2.45 | 2.45 | 2.00 | 2.00 | 0.70 | 0.70 | 0.90 | 新寛永 |
| 54 | 6 | | 2号~3号間斜面 | 寛永通寶 | 2.40 | 2.40 | 1.90 | 1.85 | 0.70 | 0.70 | 0.10 | 新寛永 |
| 54 | 7 | | 斜面表採 | 寛永通寶 | 2.45 | 2.45 | 1.90 | 1.90 | 0.65 | 0.65 | 0.12 | 新寛永 |
| 54 | 8 | | 1号墓? | 寛永通寶 | 2.35 | 2.35 | 1.80 | 1.90 | 0.70 | 0.70 | 1.10 | 古寛永 |

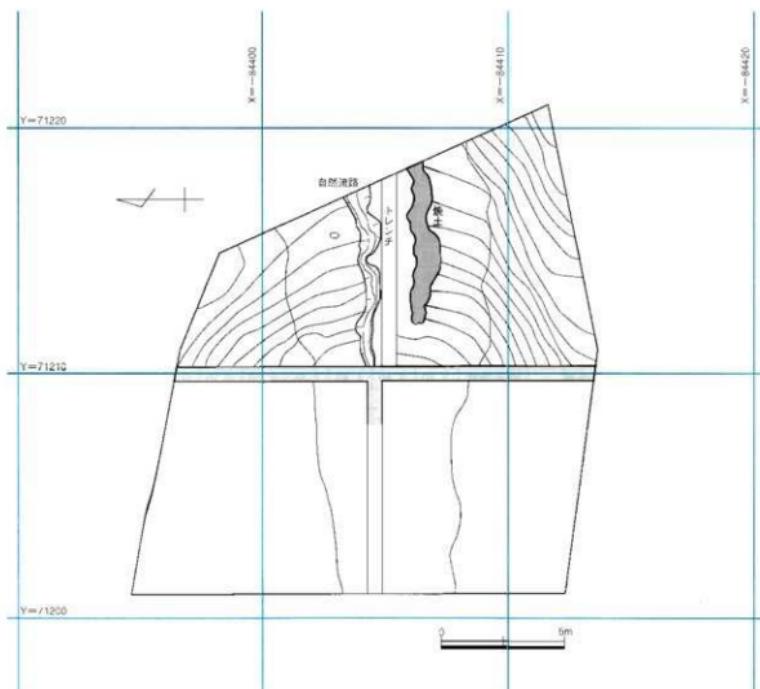
3区の調査

3区は、1区の東側斜面上方に位置する。傾斜の急な谷斜面で、調査前の調査区東端と西端の比高差は7mを測る。調査区の東側（調査区外）には傾斜が緩やかな平坦地があり、事前の試掘調査では、ここに設定したトレンチのひとつから桃形鍛冶津が出土している。

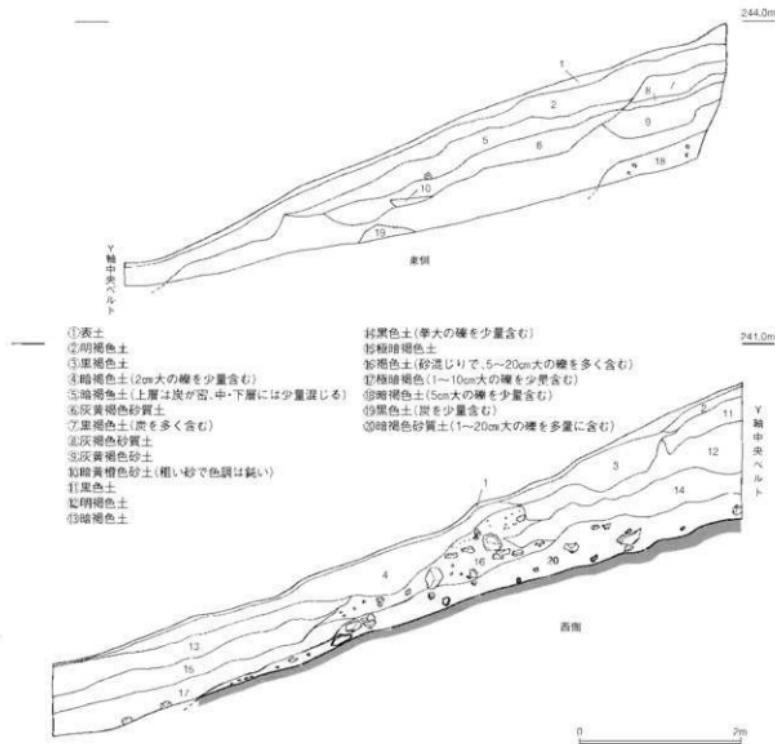
調査にあたっては、土層観察のための畦をX=-84,404ライン（縦断）とそれに直交するY=71,210ライン（横断）に設定した。この2つの中央ベルトを残して掘削したところ、調査区内には東側斜面上方及び南北のV字状斜面からの流出土がいく堆積しており、特に南側斜面の中層から下層には、黒色土や暗褐色土の中に30cmにも及ぶ大きな礫が流れ込んでいることがわかった。これらの大きな礫が掘削の障害となつたが、Y軸横断ベルトより下方（西側）については、大きな礫を含んだ地山層まで掘削し、表土から地山面までの層序を確認した。谷地形という性格を示すように、斜面上方より流れ込んだ流入土が何層にも重なつてゐることがわかる。

調査によって検出した遺構は自然流路と炭焼き遺構1基で、いずれもY軸横断ベルトより東側の斜面上方で見つかった。炭焼き遺構は、谷に厚く堆積した黒色流入土の上に造られており、その遺構の一部を押し流すような位置関係で自然流路が検出されている。

遺物としては、土師器、須恵器のほか、羽口や鉄滓などの製鉄関連遺物が出土した。



第56図 寺田I遺跡3区平面図（1:200）



第57図 寺田I遺跡3区中央ベルト(X軸)縦断土層図

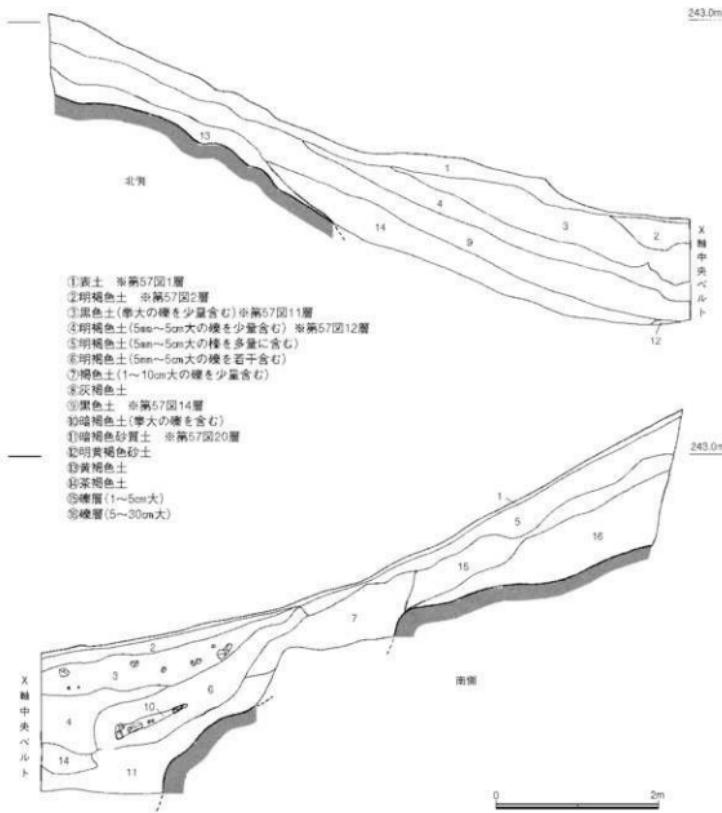
1. 遺構

炭焼き造構・自然流路

東から西へ下傾する斜面に沿って造られたもので、高さ約30~40cmほどの焼土が約7mの長さで壁状に延びている。焼土は、やや粘質で赤褐色を呈していた。この焼土の東端（斜面上方）は調査区外に続いており、造構の長軸は8m程度になるものと推測される。造構の上方（東側）と下方（西側）の比高差は約1.8mである。

この造構は、谷に堆積した黒色土や暗褐色土上に造られており、焼土より北側では木炭が多量に検出された。これと同様の造構が2区でも見つかっていることから、その調査成果を踏まえて炭焼き造構であると判断した¹⁴⁾。

当初、炭の南側の焼土と対になるべき北側の焼土は、B-①グリッド内もしくはX軸縦断ベルト内に存在するものと考えていたが、B-①グリッド内では焼土が検出されず、土層観察・実測後に土を取り扱った際にも焼土は見つからなかった。このグリッド内には、X軸縦断ベルトに沿うよう



第58図 寺田I遺跡3区中央ベルト(Y軸)横断土層図

に斜面上部から下部へ水が流れ出した痕跡があり、これによって削られた黒色土の中には砂質土が堆積していた。このことから、炭焼き遺構の北側焼土は流失した可能性が高いとみられる。

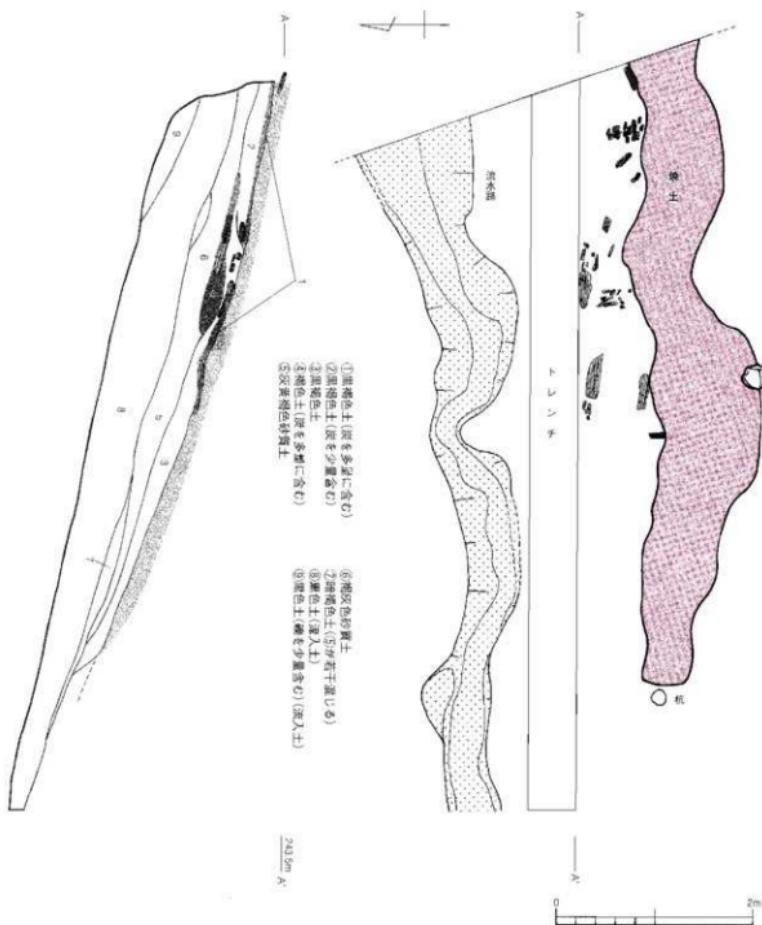
この自然流路と南側焼土との間隔は、その内側で1.3~1.7mを測ることから、遺構の幅は焼土内側間で概ね1.5m程度、壁状になった焼土を含む最大幅で2m程度と推測される。

炭化材の焼成状況は決して良好ではない。斜面を利用して下方からの風の通りを良くし、焼成の熱効率を向上させる構造にはなっているが、構造が簡易であるため良質の炭を焼くことはできなかつたと考えられる。この炭焼き遺構で、何度も炭を焼いたのかどうかという点については、壁状に延びた焼土や遺構内面に堆積した木炭層の状況、遺構周辺に散った小炭の堆積状況を見ても、明確な答えは導けなかった。

焚き口にあたる南側焼土の西端(斜面下部)には、直径約7cmの杭が1本打ち込まれていた。見

た日は新しく、上端部が折れた状態で検出された。北側の焼土を失っている現状において、これに対応する杭が北側焼土の西端にあったのかどうか定かではないが、この杭が、焚き口を塞ぐための何らかの構造物の存在を示す可能性も否定できない。

この炭焼き造構と同様の造構は、2区の谷斜面でも検出されている。構造的には、簡易な炭焼き法の一つとして現在でも行われている「伏せ焼き」に酷似する。この「伏せ焼き」を参考に、2区及び3区の造構における炭焼きの方法を推定してみると、



第59図 寺田I遺跡3区炭焼き造構実測図



第60図 寺田I遺跡3区東壁(X軸縦断ベルト以北)土層図

- ①斜面に沿って長細く地面を掘り下げる。
 - ②斜面下方に焚き口を、斜面上方には煙道を設ける。
 - ③掘り下げた窪地の長軸方向に沿って敷き木となる丸太材を置く。
 - ④その丸太材に直交するように木材を並べ、さらにその上に木材を直交させながら数段積み重ねる。
 - ⑤木材の積み上げ後、小枝や枯れ草、糞などで覆い、さらにその上から土をかけて窯を完成させる。
 - ⑥焚き口から着火し、木材を炭化させる。
 - ⑦木材が炭化するのを見計らって焚き口を塞ぐ。
 - ⑧その後しばらくして煙道を引き抜き、そのまま熱を冷ます。
 - ⑨炭を取り出す。
- という流れが考えられる。(⑥)、(⑦)、(⑧)の工程は遺構の検出状況からは確認することができないが、概ねこのような工程で行われたものと考える。

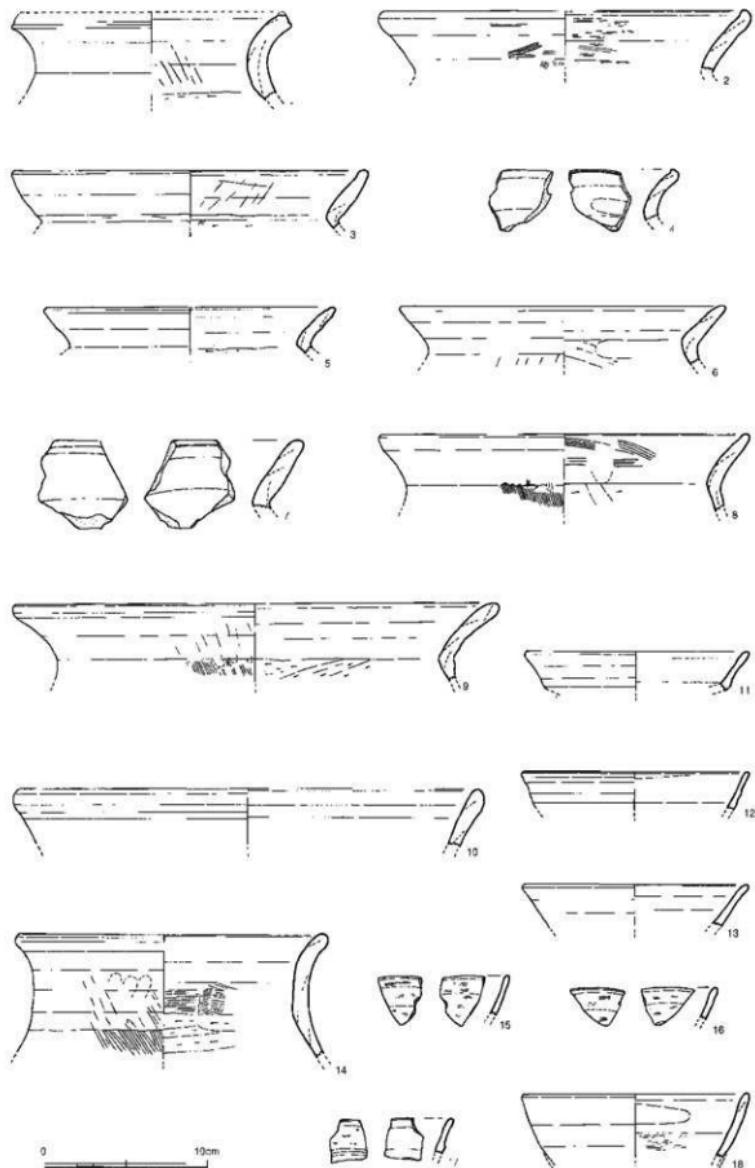
2. 出土遺物

出土した遺物は、弥生土器のほか土師器・須恵器、製鉄関連遺物としては羽口・鍛治溝、鉄塊等がある。いずれも図化可能なものを選別して掲載した。

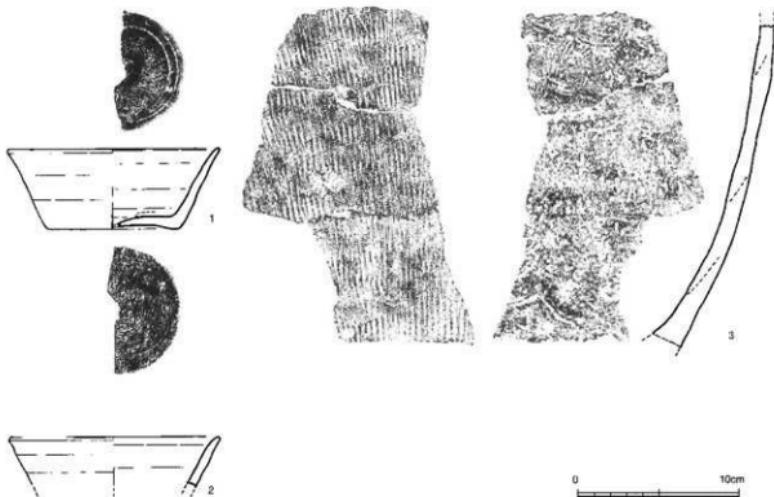
弥生土器 第61図1は壺で、口縁部から頸部が弓状に溝曲して外反する。口縁部付近は小さく搦み出し、端部はナメに平抑面を作つて凹線を施す。V-1様式とみられる。

土師器 第61図2～9・14、第62図3は壺で、口縁部の形状が明らかなものは全て単純口縁である。また、第61図10は鉢か壺かのいずれかとみられる。2は逆「ハ」字状に開き、端部付近は僅かに内傾気味になる。外面には棒状工具による「く」字状の痕跡がある。内面にはナデ痕がハケメ状に残る。3は炭焼き遺構の上位木炭層の直下から出土した。口縁部は僅かに内済して逆「ハ」字状に開く。「く」字状に加曲して頸部へと至るが、肥厚する口縁部に対して薄手となる。

4は、口縁部が逆「ハ」字状に開き、端部では内側に小さく折り込む。頸部は「く」字状に屈曲する。古式土器の可能性がある。



第61図 寺田I遺跡3区出土土器 (1)



第62図 寺田I遺跡3区出土土器 (2)

5は2つの破片からなるが、そのうち1片はB①グリッド包含層、もう1片は自然流路内の砂質土層から出土した。口縁部は逆「ハ」字状に開き、頭部は「く」字状に屈曲する。11縁端部の内側には浅い段状の「返り」がみられ、布留式と判断できた。したがって古墳時代前期のものであろう。

6は口縁部が逆「ハ」字に直線的に開く。頭部が「く」字状に屈曲する。7は器壁の厚い大型の破片で、口縁部は逆「ハ」字状に直線的に開き、端部は丸くおさまる。内面の口縁端部付近には、1条の沈線状のナデ痕がある。8は炭焼き遺構の上位木炭層の直下から出土した。内外面に煤が付着するが、これは炭焼きに伴うもの的可能性もある。9は口縁端部が僅かに肥厚して丸みを持つ。14は口縁部から頭部にかけて緩く弓状に屈曲し、口縁端部付近は外反・肥厚する。体部上方は「なで肩」状を呈する。外面頭部以下は粗いナナメハケ、内面の口縁部及び頭部には多条の平行条線が残る。炭焼き遺構の上位木炭層から出土した。

第62図3は壺の体下半部で、底部付近の破面に剥離痕がみられる。外面には縱方向平行タタキ目、内面には同心円状のタタキ目が施される。

第61図11は皿もしくは壺である。薄手の良好な作りで、口縁端部は肥厚し丸みを持つ。底部と体部の境は湾曲する。内外面に赤色顔料が施されている。

12・13・15~18は壺である。いずれも薄手で内外面に赤色顔料が塗布されており、器面に多条のナデ痕がみられる。全般的に強いナデが確認できるが、特に17は強いヨコナデにより、体部に凸状の隆起が生じている。

須恵器 第62図1・2は壺である。1は底部が上げ底状を呈し、体部との境が僅かに丸みを帯びる。体部から口縁部にかけては、外反して逆「ハ」字状に開く。内面の底部中央は、焼成前の整形段階

で円形に窪ませている。

2は体部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端部付近で小さく外反気味となる。端部では内面を押さえ、片刃状となる。

羽口 第63図1は太身の羽口先端部で、自然流路内から出土した。外径11~11.2cm、通風孔の内径は先端部で2.5~3cm、基部側で約3.4cmを測る。残存部は先端から7.7cmほどであるが、成形は良好である。胎土にスサと2mm前後の石英を含む。先端部の表面は黒色から一部紫紅色に溶変するが、タレの付着は僅かである。

後述するように、この調査区内で椀形鍛冶滓も出土していることから、この羽口は精錬鍛冶に伴うものと考えられるが、2区から検出された鍛冶遺構に伴う羽口と比べ、法量には格段の差がある。とは言え、同地区出土の椀形鍛冶滓がとりわけ大型でもないことから、どういった過程でこのような羽口が用いられたかは不明である。

2は、羽口の先端部破片で、下面にはタレが舌状に溶着する。外径は推計で10.5cmと考えられ、1よりやや細身となる。炭焼き遺構の下層部から出土している。

鉄塊系遺物 3は、強い磁着を持ち、メタル度が特しを示す鍛冶鉄塊系遺物である。自然流路上層の肩部から出土した。厚みのある板状鉄塊で片面が平坦になっており、半製品の可能性もある。6の椀形鍛冶滓とひとかたまりで出土した。

椀形鍛冶滓 4~7は椀形鍛冶滓である。4、5には上面に刺突痕が認められる。形状はいずれも円形を呈する。

2区の排滓場から出土した椀形鍛冶滓と比べると、破面には気孔が少なく緻密で重量感がある。また、この4点を見る限り、2区排滓場出土の椀形鍛冶滓に多く見られた木炭の喰み込みは見られない。一方、6はメタル度が少しで底面に鏽ぶくれがあり、2区の椀形鍛冶滓と同じ形容を示している。このことから、3区から出土した鍛冶関連遺物が一体のものとすれば、持ち込まれた鍛冶原料は2区の精錬鍛冶に用いられた鍛冶原料より滓分の多い原料であったことが窺われる。

本調査区内では、鍛冶遺構はもちろん排滓場も確認されていないが、事前の試掘調査の段階で、調査区外となる斜面上方から椀形鍛冶滓が出土していることから、これらの鍛冶関連遺物に伴った遺構は、さらに上方に所在する可能性が強まったと言える。



第63図 寺田I遺跡3区出土製鉄関連造物

第7表 寺田I遺跡3区出土土器観察表

| 番号 | 植物 番号 | 写真 版図 | 出土地点 | 種類 | 器種 | 法 量 (oz) | 口径 底径 高さ | 容積 外 面 | 調査・技法 | | 色 調 | 形態・文様の特徴 | 備 考 |
|-----|------------------|-------------|------|-----|--------------|-------------|----------------|--------------|--------------------------------|----------------------------|----------------------|-----------------------------|----------------------|
| | | | | | | | | | 内 面 | 外 面 | | | |
| 60 | - | 盆穿 | 弥生土器 | 壺 | - | 17.2 | - | - | ヨコナガ | ハテ、ヨコナガ | 外面：緑い褐色 内面：緑い褐色 | 口部外側に1箇 以上の凹窓を有す | V-1 |
| 2 | - | 盆穿 | 土師器 | 壺 | - | 23.0 | - | - | ヨコナガ 底面：タマハケ | ハテ、ヨコナガ | 外面：緑い褐色 内面：緑い褐色 | 外周に横状工具による「く」字状の凹窓 | |
| 3 | - | 洗流き湯沸 土器 | 土師器 | 壺 | - | 23.0 | - | - | ヨコナガ | 口部：ヨコナガ (タマ、ナメハケ後) | 外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色 | | No.59 |
| 4 | E 新潟西端 | 盆穿 | 土師器 | 壺 | - | - | - | - | ヨコナガ | ヨコナガ(門面) (足) | 外面：緑い褐色 内面：緑い褐色 | 古式土器の要か | |
| 5 | - | 盆穿 | 自然泥路 | 土師器 | 壺 | 18.0 | - | - | ヨコナガ | 口部：ヨコナガ 底面：ヨコナガ | 外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色 | | No.44・58 等式(古墳前段) |
| 6 | A タマフ | 盆穿 | 土師器 | 壺 | 30.1 | - | - | - | ヨコナガ 底面：タマハケ ハタケナガ | 口部：ヨコナガ 底面以下：タマハ ケ後) | 外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色 | | |
| 7 | 盆大頭 タマフ | 盆穿 | 土師器 | 壺 | - | - | - | - | ヨコナガ | ヨコナガ | 外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色 | 口部形状が外側 に「U」字の比較的ア クセ | |
| 8 | - | 盆穿 | 土器 | 土師器 | 壺 | 33.0 | - | - | ヨコナガ 底面：タマハ ケ後(ナメハ ケ) | 口部：ヨコナ ガ(タマハ ケ後) | 外面：緑い黄褐色 内面：緑い黄褐色 | | No.38 外側に平行 |
| 9 | - | 盆穿 | 二耳器 | 壺 | 29.9 | - | - | - | ヨコナガ 底面：タマハ ケ後(ナメハ ケ) | 口部：ヨコナ ガ(タマハ ケ後) | 外面：緑い黄褐色 内面：緑い黄褐色 | | |
| 10 | 盆穿 タマフ | 土器 | 土師器 | 壺 | 39.0 (90) | - | - | - | ナガ | ナガ | 外面：緑い黄褐色 内面：緑い黄褐色 | | |
| 11 | - | 盆穿 | 土師器 | 壺 | 14.0 | - | - | - | ヨコナガ | ヨコナガ | 外面：緑い褐色 内面：緑い褐色 | 表面に凹窓 | 内外面に赤色顔料 塗布 |
| 12 | 盆穿 タマフ | - | 土師器 | 壺 | 15.0 | - | - | - | ヨコナガ (門面) | ヨコナガ (門面) | 外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色 | | 裏に 内外面に赤色顔料 塗布 |
| 13 | 盆穿 | - | 土師器 | 壺 | 15.0 | - | - | - | ヨコナガ | ヨコナガ | 外面：緑い黄褐色 内面：緑い黄褐色 | | |
| 14 | 洗流き湯沸 土器 | 土器 | 土師器 | 壺 | 19.8 | - | - | - | ナメハケ後 ヨコナガ(ナメ ハケ後) | ヨコナガ (ナメハ ケ後) | 外面：緑い褐色 内面：緑い褐色 | | No.47 外側に平行 |
| 15 | 洗流き湯沸 土器 | 土器 | 土師器 | 不 | - | - | - | - | ヨコナガ | ヨコナガ | 外面：緑い黄褐色 内面：緑い黄褐色 | | 全面に赤色顔料塗 布 |
| 16 | 盆穿 | 土器 | 土師器 | 不 | - | - | - | - | ヨコナガ | ヨコナガ | 外面：緑い褐色 内面：緑い褐色 | | 全面に赤色顔料塗 布 |
| 17 | ○ セブ トランシ | 土器 | 土器 | 壺 | - | - | - | - | ヨコナガ | ヨコナガ | 外面：緑い赤褐色 内面：緑い赤褐色 | | 全面に赤色顔料塗 布 |
| 18 | 2① セブ トランシ | 土器 | 土器 | 壺 | 14.0 | - | - | - | ナガ | ナガ | 外面：緑い褐色 内面：緑い褐色 | | 全面に赤色顔料塗 布 |
| 6-1 | 盆穿 タマフ | 頸壺器 | JG | 壺 | 15.0 | 8.0 | 8.0 | 15.0 | ヨコナガ (門面) | ヨコナガ (門面) | 外面：灰黄色 内面：灰黄色 | 口部が切り取られ 底部部中央をJGにこぼれる | |
| 2 | 盆穿 タマフ | 頸壺器 | JG | 壺 | 15.0 | - | - | - | ヨコナガ | ヨコナガ | 外面：灰黄色 内面：灰黄色 | | No.22 |
| 3 | 盆穿 自然泥路 | 土器 | 土器 | 壺 | - | - | - | - | タマキモ(門面 タマ) | タマキモ(門面) (足) | 外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色 | | No.39・54 |

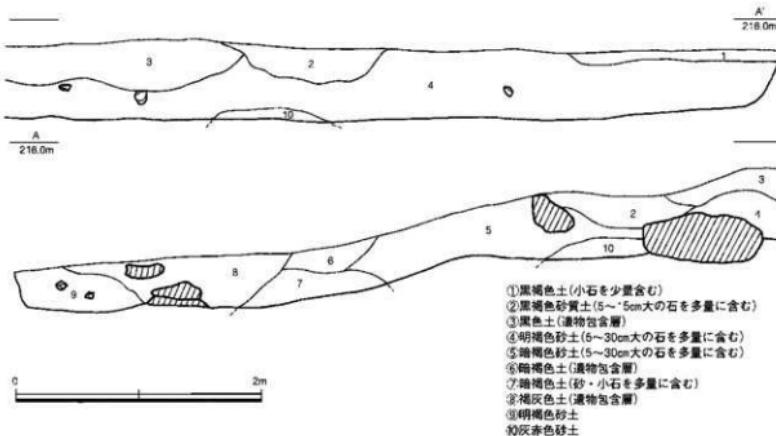
4区・5区の調査

4区は、かつて宅地や水田、畑地があったところで、平坦面としては最も広い面積を持つ。5区は東西から山の斜面が迫る狹小な谷となっているが、4区とは地続きであり、調査の工程上、便宜的に区分けをしたものであるため一括して述べることとする。

4区及び5区は狭小な斜面に挟まれた谷地形である。調査区西側には山丘に沿って幅0.6~2m前後の水路があり、5区の北方約100mの地点に小規模な滝が所在する。また、5区の西側山丘は急峻な斜面となっていて、流れ出した水が山際に沿って溝状に流れている。このためか調査区は基本的に上流部から流れ出した土砂や岩石の堆積が著しい。

5区は全体的に厚い砂層に覆われ、一部では西側の山丘から崩落したとみられる70cm大の山石が堆積していた。一方、調査区西側を流れる水路の幅は、近代までは現在より広いものであったと思われ、徐々に堆積した土砂によって水路が嵩上げされ、水田が広くなるとともに水路も狭くなっているものと考えられる。また、水路から東寄りで堆積した土砂の上層には、圃場整備による客土が入れられ、この客土中には鉄滓など製鉄関連遺物や土器等が含まれている。

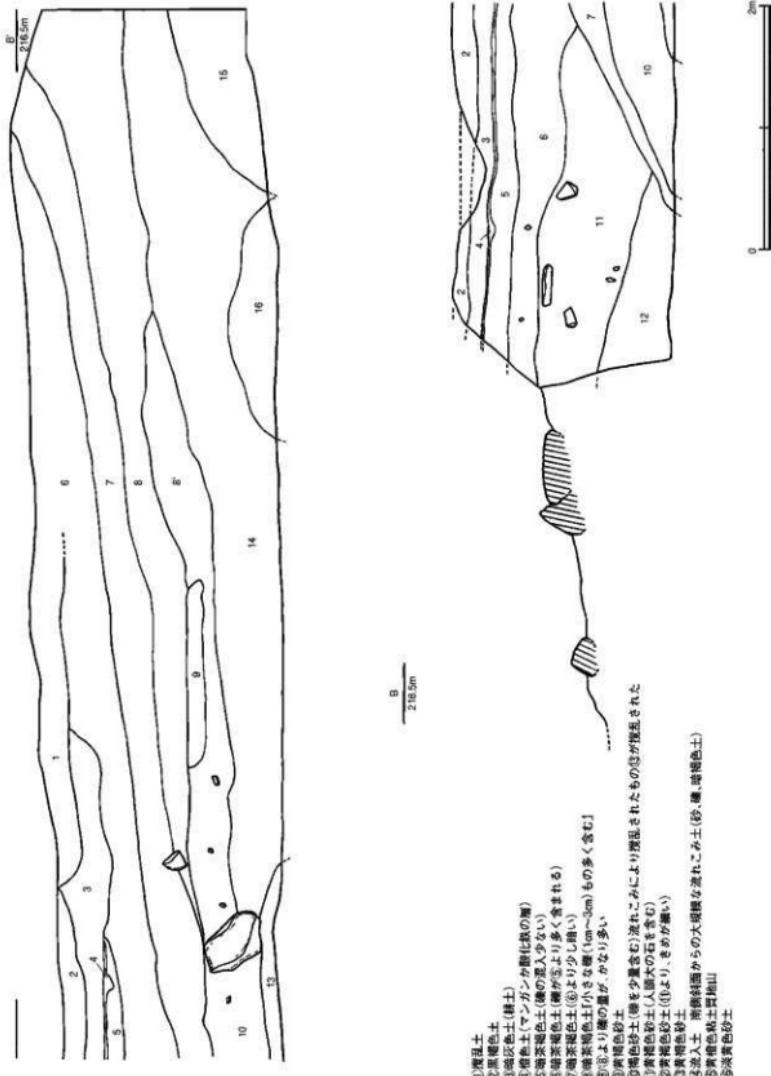
なお、5区北寄りの西側の山際では、当地域で近年まで行われていた土地の嵩上げ法のひとつである「流し込み」の痕跡が認められた。この「流し込み」とは、土地を拡張して平地を広げる際、まず上流に水路をせき止めて水を溜めておき、下流の低地部では幅の狭い箇所をせき止めて水抜き穴をあけておく。こうして上流部の堰を外すとともに溜まった土砂を一気に下流に搔き出して下流側の堰に土砂を堆積させ、これを数回繰り返して土地の嵩上げを行うものである。流し込みが行われた個所の縦断土層では砂層や微砂が交互に堆積し、埋められた個所には流下した土砂が暫時堆積した様子が見られた。また、流された土砂には角礫のほかに鉄滓や炉礫が含まれており、上流部



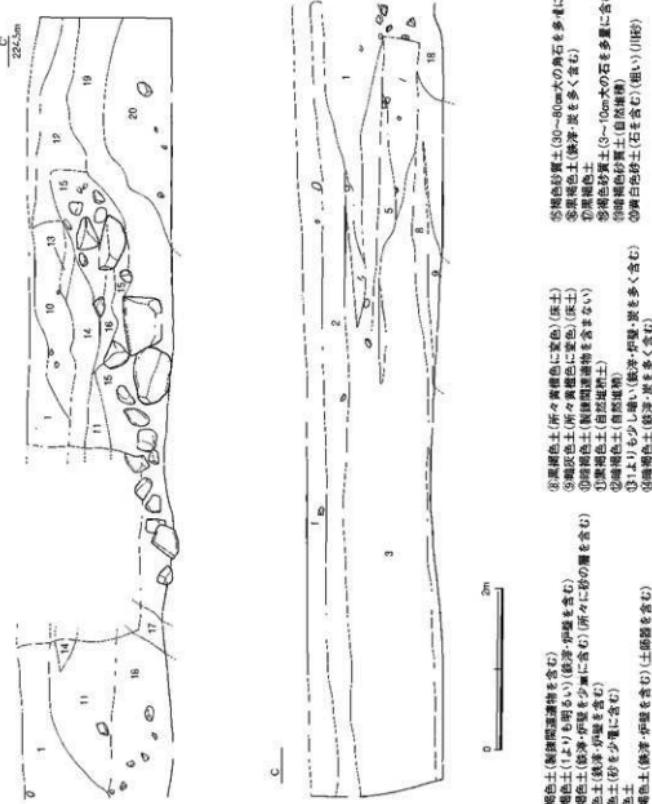
第64図 寺田I遺跡4区横断土層図（北側）



第65図 寺田I遺跡4区河道跡平面図 (1:200)



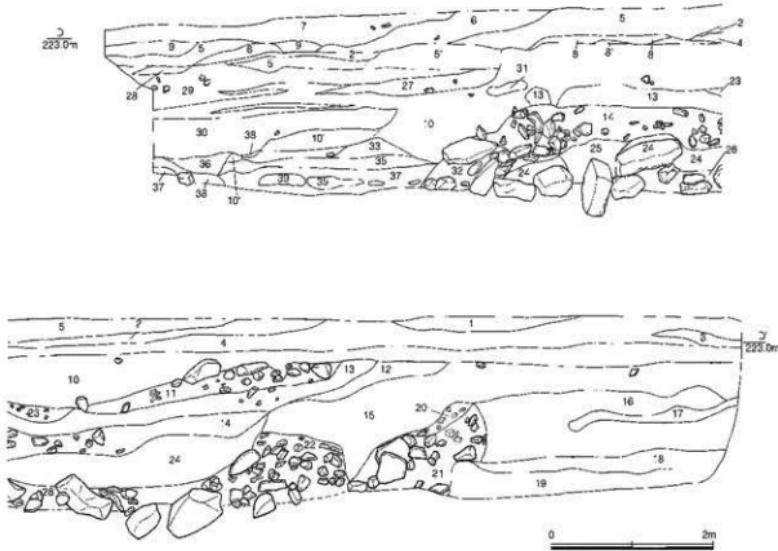
第66図 寺田I遺跡4区横断土層図（南側）



第67図 寺田I遺跡5区北側西壁土層図 (S=1/60)



第68図 寺田 I 遺跡 5区 平面図 (1 : 300)



あるいは本調査区の周辺でかつて鉱が営まれていたことが窺えた。

5区の南半において、谷に沿って継続したトレーニングを入れたところ、数次にわたる流下砂土の堆積が確認されたが、4区に見られたような遺物を包含する有機質土層は確認できなかった。

一方、5区の下流域にあたる4区では、上砂が流出した水路の幅は8m以上あったと推定され、ここを河道跡とみることができる。北寄りでは河道跡中央部の砂層上あるいは砂層を挟んで黒色上や褐色土の堆積が見られた。これらは上流から運ばれたものが徐々に堆積したものとみられ、繩文土器や須恵器などの土器片を含んでいる。4区の南側では、2区が所在する斜面の上方から流れ出した上砂が河道跡に流れ込んで堆積している。

1. 遺構

4区については河道跡のみを検出したが、概要については上述したのでここでは省略する。5区の遺構については炭窯跡、炭溜り、石列を検出している。

なお、5区には炉底塊や灰燼、鉄滓などがある程度まとめて出土した箇所がある。これらを分析に出す際に出土地点を「排溝場」とし、分析結果にも「排溝場」の名称が用いられているが、調査区の層序や周辺の上層観察では、積極的に「排溝場」の位置を示す根拠は見出せなかった。したがって、「排溝場」については遺構として取り上げていない。ただ、このことが「排溝場」の存在を否定するものではない。

炭窯跡1

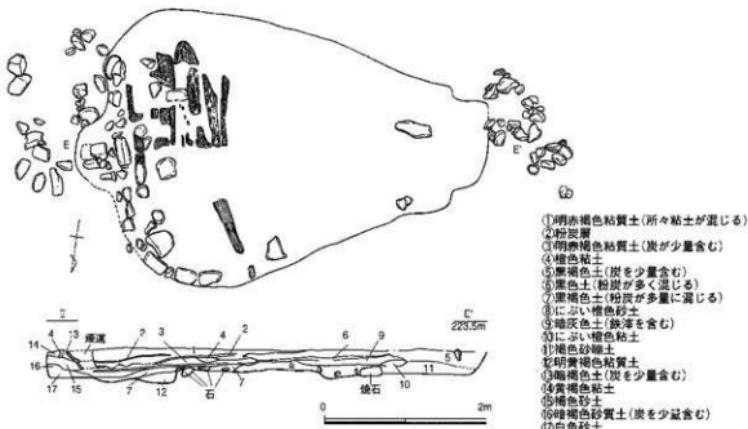
炭窯跡1は、5区東側の山丘、標高229.7mの斜面に所在する。平面形は奥が横に広く、入り口に従って狭くなり、一見扇形を呈する。床面の最大幅は1.85m、上場の最大幅2.0m、奥行約2.8m、入り口幅35cmを測る。燃焼室は人頭大の石で壁を築いている。煙道は奥側中央の主煙道のみで、先端は奥壁から70cm後方の斜面に設けられている。先端の煙道口は内径15cmを測り、外周は径27~34cmにわたって粘土で固めてある。

床面は全面が粘土貼りで、表面は灰白色を呈し、紛糞が少量付着する。この炭窯は、特色として燃焼室の壁が石材で造られていること、窯の規模が比較的小規模であること、平面形が江津市常々炭窯跡に類似することなどが挙げられる。築窯の時期は近世まで遡ることはないと考えられ、白炭と黒炭のどちらが焼かれたかは不明である。

炭窯跡2

炭窯跡2は、5区の中央からやや北寄りの旧水田下で床面のみを検出した。流下堆積した砂層上に築かれている。上層の均し土には炭窯の壁土が混じっているため、岡場整備されるまで炭窯は残存していた可能性がある。炭窯跡の平面形は不整長円形で、燃焼室の最大幅は3.4m、煙道部を除いた奥行残存長は4.7mを測る。煙道は本ショウジ（主煙道）と腰仲ショウジ（副煙道）を持ち、本ショウジ（主煙道）は床面から出張り状に設けている。

床面の奥側には、外周に沿って15~30cmの大被熱した山石が並んだ状態で残存していた。床面を僅かに掘り窪めて粘土で固定してあり、おそらく燃焼室の壁には石が積み上げられていたと考えられる。また、奥側の床面には幅4~18cm、厚さ約1cmの板が数枚横に並べられた状態で出土した。



第70図 寺田I遺跡5区炭窯跡2実測図

これらは全て炭化していた。床面の縦断土層からは炭窯が築かれた当初に粘土が貼られた様子が見られず、粉炭の層からみて少なくとも2回炭焼きが行われた後に粘土が貼られ、以降炭窯は使われなくなった様子が窺える。

『鉄山必用記事』によると、たたら製鉄に使用される炭を焼く窯を大炭焼窯と呼び、水が引ける場所で焼いた炭は外見が美しいのだという⁽¹⁾。本炭窯跡は、同書に記される窯の規模より一回り小さいが、燃焼室の壁が石で築かれること、煙道に腰仲ショウジ(副煙道)を持つことなどから大炭焼窯の可能性が高い。操業時期については自然科学分析を行っておらず詳細は不明であるが、この形態を持つ炭窯は、江戸時代中期から明治時代初年頃まで使われていたと言われている⁽²⁾。

炭溜り

炭溜りは、炭窯跡2の北寄り6mの地点で検出した。平面形は不整長円形で、広さは長軸3.9m、短軸は2mを測る。この炭溜りは前述した炭窯跡と標高がほぼ同レベルにあるが、炭窯跡の下層にある砂層上ではなく砂層堆積 \times 域外にある褐色土上に設けられている。炭溜りには約12~37cmの厚さで木炭が堆積しており、径13cm、長さ40cm前後の木炭がいくつか残存している。確証はないが炭窯跡2に伴う炭置き場の可能性が考えられる。

石列1・2

石列1は、炭窯跡2から東寄り約4mの位置に所在する。残存する長さは2.8mほどであるが、おそらく石列は西に延びており、圃場整備の際に破壊されたものと考えられる。この石列は土台石が3つあり、その大きさは最大で長さ95cm、幅47cm、小形のものでも長さ47cm、幅34cmである。これを一列に置き、その上に14~36cm前後の石を並べていた。上に並べた石の多くは被熱したり煤が付

着している。これらの石は炭窯跡2に使われていた可能性が高く、炭窯が取り壊された後、何らかの火画のために築かれたものと考えられる。

石列2は、調査区東側の山際に位置する。石列が認められるのは2.5mほどであるが、この石列の延長上にも大小の石を列状に検出しており、これも石列とすれば長さは7.5~11.5mとなる。これらの石は、砂層上に特に粘土で固めて置かれているわけではなく、石も長さが手のひら大から70cm前後と不揃いである。

石列の平均レベルは標高224.9~225.1mである。石列1とほぼ平行になると推察されるが、石列1のレベルが標高223.8mで概ね1.2mの比高差があり、同一の遺構ではないことがわかる。木田用の畦の基礎とも考えにくく、性格は不明である。

2. 出土遺物

4区及び5区から出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器のほか、炉底塊や灰壁、鉄滓などの製鉄関連遺物である。これらの遺物は直接遺構に伴うものではなく、いずれも包含層からの出土となる。

ここでは、4区及び5区を一括し、図化が可能であった遺物について年代的に古いものから見ていくこととする。

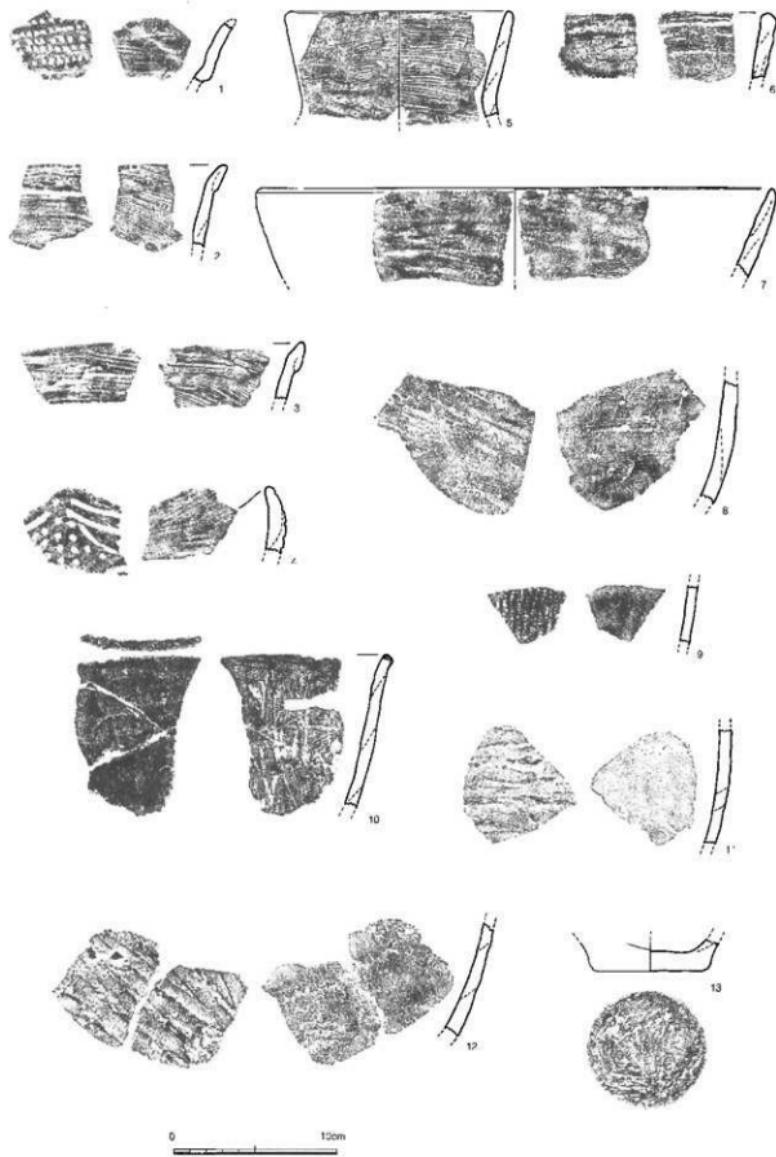
縄文土器 第71図1~3は西川津A式とみられる深鉢である。1は外反して開く口縁部を持つ。口縁端部を欠いているためはっきりしないが、端部は尖り気味になるものと思われる。外面には5条の刺突文が連続する。2は体部が外傾し、口縁部は肥厚して段となる。折り返しによるものかもしれない。外面には二枚貝条痕が見られる。3も2と同様の形状を持ち、口縁部は折り返しによって肥厚させているとみられる。口縁部は丸くおさまる。縄文時代前期を示すこれら3点の上器は、本遺跡で最も古い時期の土器である。

4は、波状口縁をもつ深鉢の口縁部である。小さく内湾する波状部の外面に「ハ」字状の凹線を入れ、その下に列点状の円形文を施す。中期末の矢部奥田式併行と考えられる。

5~12は粗製深鉢である。5は、頸部で緩やかに「く」字状に屈曲し、口縁部に向けて逆「ハ」字状に開く。内外面に一枚貝条痕が施される。中津~五明田式併行とみられる。6は、体上部が小さく外傾し、口縁部に向けてやや肥厚する。崎ヶ鼻式であろうか。7は外傾して聞く口縁部で、端部は尖る。9は、LRの単節縄文が施された土器の体部である。10は、胎土がやや緻密で破面の色調は灰色を呈し、土器の外面は灰褐色となる。口唇の2箇所に巻貝の押圧痕が見られる。在地の土器とは様相が異なり、搬入品の可能性がある。13は、平底の深鉢底部である。底径は7.2cmを計る。体部との境は明瞭で、絞り痕が見られる。底面にはケズリ様の痕跡がある。

弥生土器 第72図は壺である。1・2は口端部が直線的に立ち上がり、口縁外周が肥厚する。1の口縁外周には浅い凹線が施されているように見え、2には2条の凹線が確認できる。3・4は口縁が内傾するタイプで、口縁端部は3が先細く、4は丸くおさまる。3の口縁部には3条の凹線、4には凹線状の沈線が3条施されている。4の頸部には「、」状の刺突がある。

5は、丸型の壺胴部で、外面には3~4段の刺突文が一周する。内面はケズリを施す。時期は弥生中期末とみられる。



第71図 寺田I遺跡4区・5区出土土器 (1)

6・7は底部～下体部で、壺と思われる。7の外面は、胴下部に丁寧なナデ、底部にミガキが施される。内面は平坦ではなく緩やかに立ち上がる。

8・9は、口縁外面にそれぞれ2条、4条の凹線と頸部内面にケズリを施す。草田1期、弥生後期初頭とみられる。10は、口縁を直線的に立ち上げ、外底をナデたのち2条の凹線を施す。肩部外面はナデ、内面はケズリとなる。草田1期とみられる。

11、12は、壺の肩部から胴部である。肩部外面は、11がナデのち櫛歯工具による連続刺突文、12はナデのち爪形の連続文が巡る。内面はいずれもケズリとなる。13は、分厚い口縁をもち、端部を丸くおさめる。頸部内面は横方向のケズリとなる。草田1期であろうか。

第73図1～7は複合口縁の壺である。1、2は、口縁部にやや密な凹線文を施す。草田2期とみられ、弥生後期前葉であろう。3～7は口縁部に凹線を持たないもので、4、6、7は口縁が外反し、頸部との境に稜が立つ。これらは草田4～5期と考えられる。

土師器 第73図9は複合口縁の壺で、口縁内面に1条の凹線が見られる。口縁端部が平坦となり、口唇部は僅かに突出することから草田6～7期におさまるものと思われる。実年代では古墳時代初期に位置付けられる。

10～15は、単純口縁の土師器である。10、12、13、15は口縁が「く」の字状に外反する。いずれも肩部のあまり張らない壺である。13は布留式併行の壺で、胴上半部内面は斜め方向のケズリ、外面はハケのちナデが施される。頸部には煤が付着する。11は、胴部の張らない小型の壺である。口縁は外向気味に立ち上がり端部を丸くおさめる。時期としては6世紀から7世紀代であろうか。

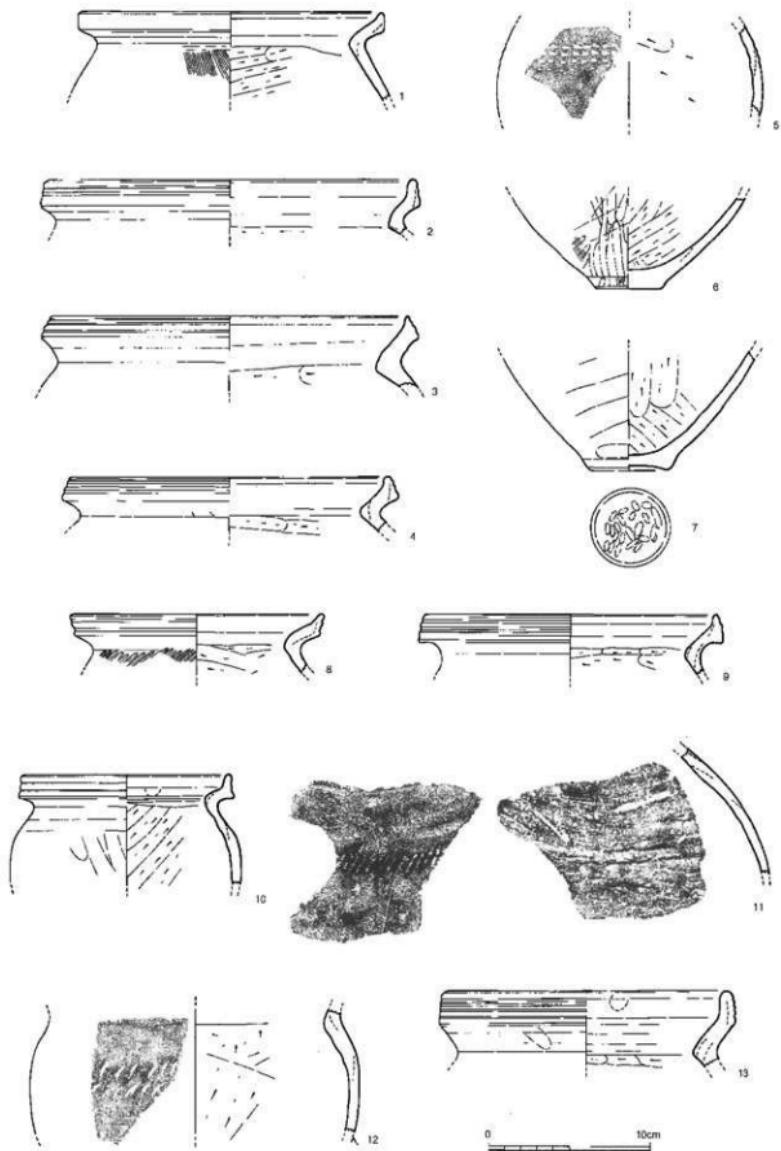
第74図は器形の異なる土師器である。1は壺である。2は、壺の胴下部とみられる。外面は縱方向の粗いハケ目、内面はケズリとなる。焼成後に施した穿孔が見られる。

3は高坏で、器高9.8cm、口径15cmを測る。坏部は底部から内湾して立ち上がり、逆「ハ」字状に開く。深い楕形を呈している。坏部内面の上半部には櫛状工具による多条線が残り、口端部はヘラ状に其痕が横方向に巡る。この工具痕は口端部外面にも一周している。脚部は筒状となった部位からゆっくり「ハ」字状に開き、丸みを帯びた接端部へと至る。坏部と脚部は円盤充填法により接合される。

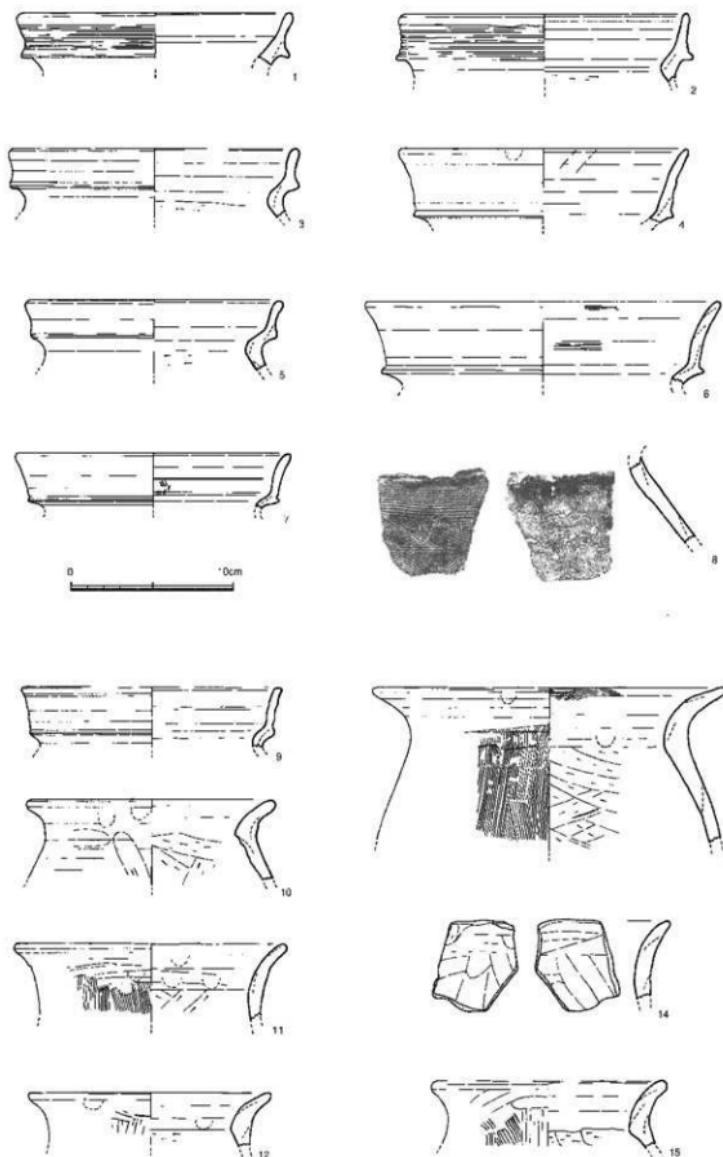
4は高坏の坏底部で、坏部は平坦な皿状となる。外面はミガキのちナデ、内面にはナデが施される。脚の接合部には2点の孔が見られる。3と同様、円盤充填法により坏部と脚部が接合されていたとみられる。

5～7は、赤色塗彩の坏である。いずれも体部は逆「ハ」字状に開き、口縁端部を丸くおさめる。5は薄手で良質な作りである。7の体部外向には煤痕が認められる。胎土は微細で肌色を呈する。**須恵器** 第75図は須恵器である。1・2は坏蓋で、口縁部のみが残存し、天井部の調整は不明である。1はやや内湾気味に下降し、端部を丸くおさめる。肩部外面に1条、口縁端部の内側に1条の沈線を施す。調整は内外面とも回転ナデとなる。2は、肩部から急角度で下降し、口縁端部内側を細くすぼめる。口端部の内側に沈線を1条、肩部に2条の平行沈線を施す。調整は内外面とも回転ナデとなる。大谷編年での坏蓋における口縁端部の分類によれば、1・2とも β 類の範囲に収まるところから、編年としては出雲4期と考えられる。

3は、低めの返りを持つ坏身で、体部が直線状に伸びる。調整は内外面とも回転ナデとなる。大谷編年出雲6d期と考えられる。4は、おそらく輪状つまみの付く坏蓋であろう。口径は推計で14



第72図 寺田I遺跡4区・5区出土土器 (2)



第73図 寺田I遺跡4区・5区出土土器 (3)

cmである。口縁端部は逆「く」字状に屈曲し、口縁端部は内び外向して端部を丸くおさめる。肩部に2条の平行沈線を施す。大谷編年山雲7期と考えられる。

6は、ほぼ完形で出土した輪状つまみの付く坏蓋である。体部は緩く傾斜し口縁は屈曲して端部は垂直に下降する。体部外面は回転ケズリのち回転ナデ、内面は回転ナデが施される。胎土に2mm前後の砂粒を含む。4と同様大谷編年山雲7期と考えられる。

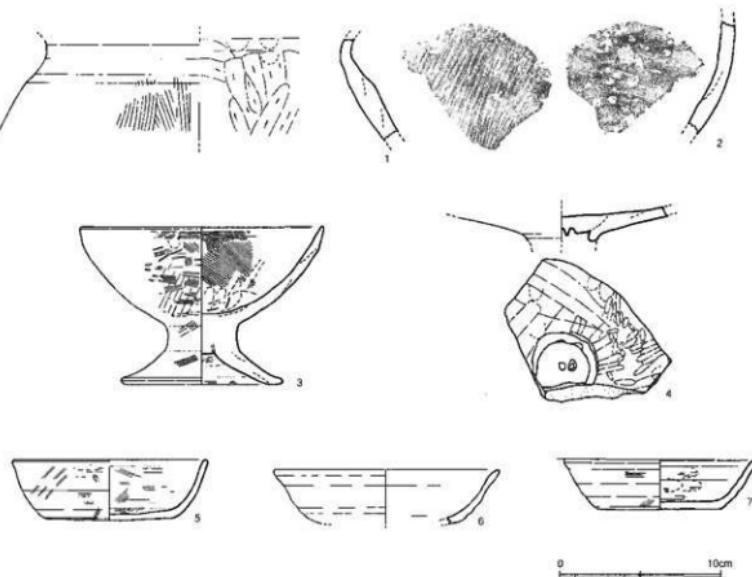
8・9・10は、皿状の坏である。体部は逆「ハ」字状に外方して端部を丸くおさめる。いずれも底部の切り離しは回転系切りで、体部の調整は回転ナデとなる。時期は奈良時代頃であろうか。

11は、高台付坏である。底部の切り離しは回転ケズリで、のちに高台が貼り付く。体部は内湾して立ち上がる。12は、脚部に透かしを持たない高坏である。体部は緩く内湾して立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。脚部は「ハ」字状に開き、端部はやや肥厚して稜を持つ。調整は、体部が回転ナデ、脚部はケズリのち回転ナデとなる。大谷編年山雲6d期と考えられる。

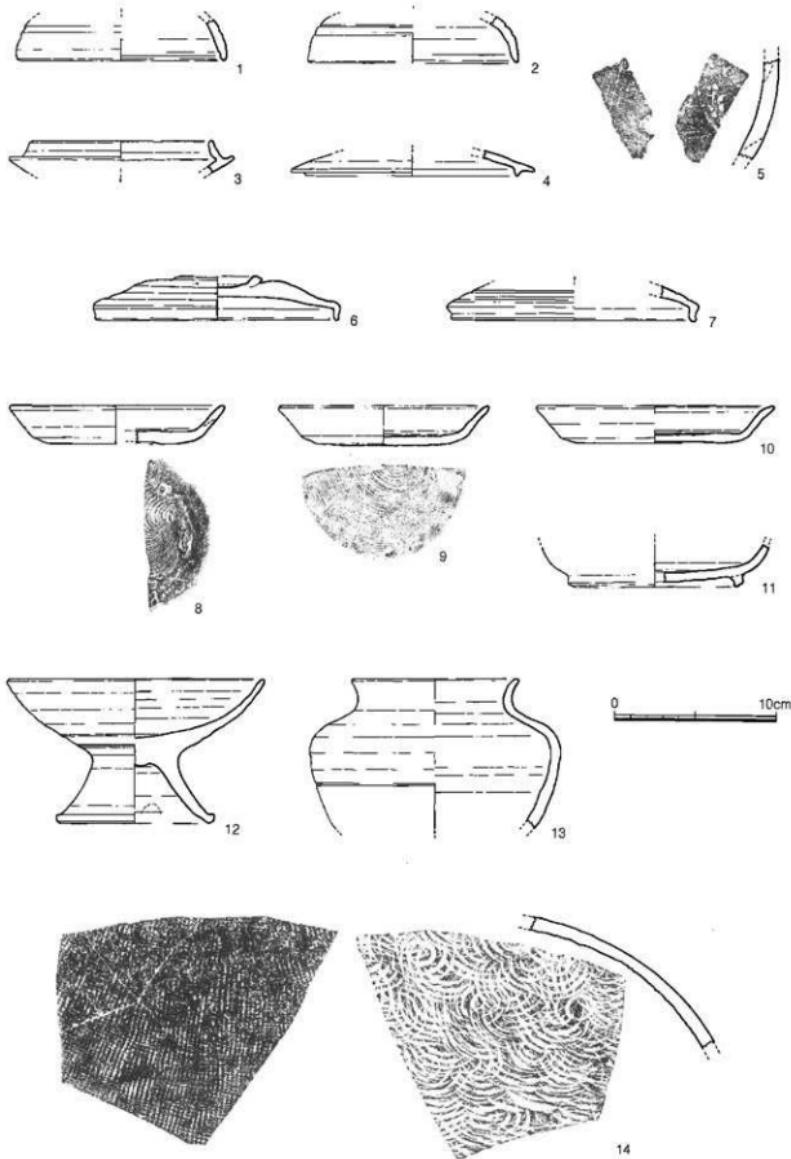
13は、短頸壺である。5区の西側山丘から流れ出した水が調査区に合流する地点の水際から出土した。肩が張り気味の小型壺で、口径10cmを測る。時期は奈良時代頃であろうか。

14は、壺の体部である。調整は内面が同心円状のタタキ目、外面は平行タタキ目のちカキ目を施す。

石器 第76図1は黒曜石の削器で、下部の1面が刃部となっている。2も黒曜石であるが、母岩からの剥離片とみられる。3は蛤刃石斧の先端部である。石材は安山岩とみられる。4、5は、磨行

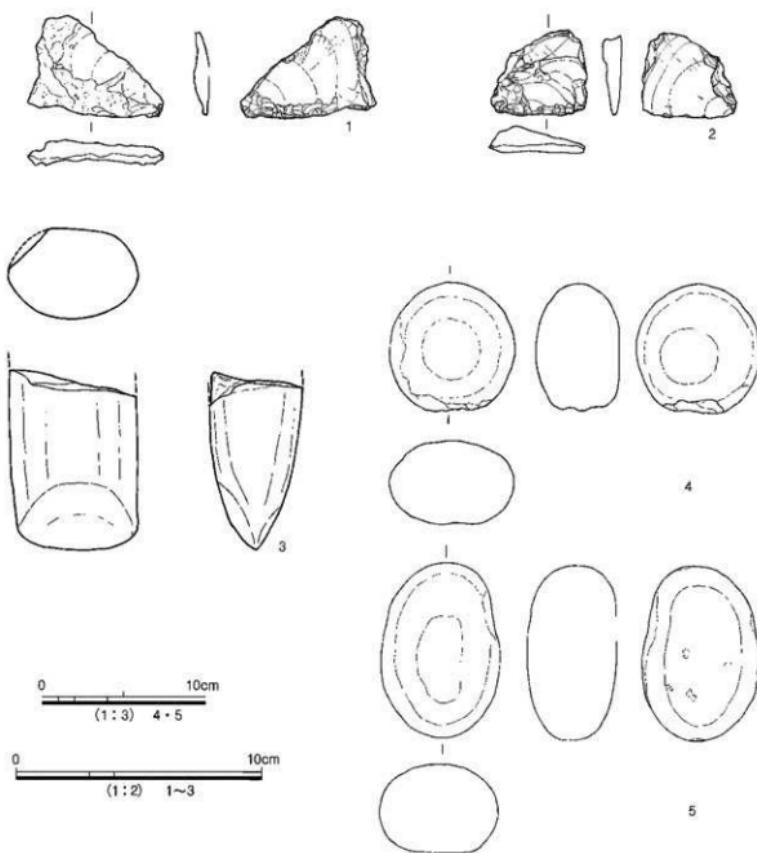


第74図 寺田I遺跡4区・5区出土土器(4)



第75図 寺田I遺跡4区・5区出土土器(5)

である。石材は4が泥岩、5が砂岩である。4は下面の平面部分に、5は両面に砥面が認められる。このほか5区では試掘調査の時点では石鎚が1点出土している。



第76図 寺田I遺跡4区・5区出土石器

第8表 寺田I遺跡4区・5区出土土器観察表

| 標印 番号 | 遺物 名 | 基盤 形状 | 出土地点 | 施 繖 | 装飾 | 法 規 (cm) | 調査・技術 | | 形態・文様の特徴 | 備 考 |
|----------|---------|----------|------|------|-----|-------------|-------------------|---------------------------------|------------------------------------------|----------------------|
| | | | | | | | (横 直径) | (幅 高) | 外 国 | 内 国 |
| 71 1 | 5区 | 縄文土器 | 深鉢 | — | — | — | ナゲ・条痕 | 口縁部に段 外基部5系の側突文 | 西) 泥丸式 内面に條付帶 | |
| 71 2 | 5区 | 縄文土器 | 深鉢 | — | — | — | 口縁部:ナゲ 二枚貝条痕 | 一枚貝条痕 | 口縁部に段 西) 泥丸式 内面に條付帶 | |
| 71 3 | 5区 | 縄文土器 | 深鉢 | — | — | — | 二枚貝条痕 | 二枚貝条痕 | 口縁部に段 西) 泥丸式 内面に條付帶 | |
| 71 4 | 4区 | 縄文土器 | 深鉢 | — | — | — | 二枚貝条痕 ナゲ | 口縁部に段 ハ) 子孫四維文 円形文 | 先部周囲式排列 内面に條付帶 | |
| 71 5 | 3区 | 縄文土器 | 深鉢 | — | — | — | 二枚貝条痕・ナゲ | ナゲ・条痕 | 中津~苏明口 | |
| 71 6 | 5区 | 縄文土器 | 深鉢 | — | — | — | ナゲ | ケズリ模調整 | | 電製 縦ナス式 |
| 71 7 | 5区 | 縄文土器 | 深鉢 | — | — | — | ナゲ | 巻貝条痕?・ナゲ | | 縦裂 外側に條付帶 |
| 71 8 | 5区 | 縄文土器 | 深鉢 | — | — | — | ケズリ模調整・ナゲ | ケズリ模調整・ナゲ | | 粗製 |
| 71 9 | 4区 | 縄文土器 | 深鉢 | — | — | — | ナゲ? | 外耳:レヌ半周縫文 | | |
| 71 10 | 4区 | 縄文土器 | 深鉢 | — | — | — | 条痕・ナゲ | ケズリ | 口縁部周縫に毛見の 押出痕(2点) | 外底に條付帶 |
| 71 11 | 5区 | 縄文土器 | 深鉢 | — | — | — | 条痕 | ナゲ | | 粗製 内面に條付帶 |
| 71 12 | 5区 | 縄文土器 | 深鉢 | — | — | — | 卷貝条痕? | ナゲ | | 粗製 内面に條付帶 |
| 72 1 | 4区 | 弥生土器 | 要 | 19.0 | — | — | ナゲ 体部:ハケ後ナゲ | 口縁部:ナゲ 体部:ケズリ | 口縁部に浅い凹痕? | N-2? 外側に條付帶 |
| 72 2 | 4区 | 弥生土器 | 要 | 23.0 | — | — | ナゲ | 口縁部:ナゲ 体部:ケズリ | 口縁部:2条の凹痕 | N-2 or V-1 外側に條付帶 |
| 72 3 | 3区 | 弥生土器 | 要 | 30.0 | — | — | ヨコナゲ | 口縁部:ナゲ 体部:ケズリ(底ナゲ?) | 口縁部:3条の凹痕 | V-1? 口縁部に條付帶 |
| 72 4 | 4区 | 弥生土器 | 要 | 16.8 | — | — | 面部:ナゲ | 口縁部:ヨコナゲ 面部:ケズリ | 口縁部:3条の凹痕 状況 面部:1-, 2-の刻痕 | V-1 外側に條付帶 |
| 72 5 | 5区 | 弥生土器 | 要? | — | — | — | ナゲ(身体部はミガキ か?) | ケズリ | 完成した3段の側突文 | N-2 or V-1 |
| 72 6 | 4区 | 弥生土器 | 要 | — | 4.0 | — | ミガキ・ハケ・ナゲ | ケズリ | | N-2? 内面に條付帶 |
| 72 7 | 4区 | 弥生? | 要? | — | 5.0 | — | ナゲ 底部:ナゲ後ミガキ | ケズリ | | N-2? 外側に條付帶 |
| 72 8 | 5区 | 弥生土器 | 要 | 15.8 | — | — | ヨコナゲ | 口縁部:ヨコナゲ 底部:ケズリ(底ナゲ) (ヨコ) | 口縁部:2条の凹痕 直底縫文 底部直下「ノ」状のハ ラ括き文様 | V-1 口縁部前面に條付帶 |
| 72 9 | 5区 | 弥生土器 | 要 | 18.0 | — | — | ナゲ | 口縁部:ナゲ 底部:ケズリ(底ナゲ) | 口縁部:4条の凹痕 直底縫文(クシ状工 具?) | N-2 内面に條付帶 |
| 72 10 | 4区 | 弥生土器 | 要 | 13.0 | — | — | ナゲ | 口縁部:ナゲ 底部:ケズリ | 口縁部:2条の凹痕 | N-2 内面に條付帶 |
| 72 11 | 4区 | 弥生土器 | 要 | — | — | — | ナゲ | ケズリ(ヨコ) | 面部:粗面状工具に よる透徹窓突文 | V-1 |
| 72 12 | 5区 | 弥生土器 | 要 | — | — | — | ナゲ | 面部:ナゲ 底部:ナゲ | 面部:1, 2-の段の糸 透徹窓突文 | V-1? |
| 72 13 | 5区 | 弥生土器 | 要 | 17.8 | — | — | ナゲ | 口縁部:ヨコナゲ 底部直下:ケズリ (ヨコ) | 口縁部:4条の平行 沈縫文 | V-2 |

| 番号 | 物名 品目 | 年表 箇所 | 生土地点 種類 | 器種 | 口径 底径 高さ 器高 | 法 量(cm) | 調査・技術 | | 形態・文様の特徴 | 備考 |
|-------|----------|----------|------------|------|----------------------|------------|--------------------------------------------|--------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------|
| | | | | | | | 外 面 | 内 面 | | |
| 73 1 | 4区 | 淤川土器 | 甕 | 17.0 | — | — | ナメ平行(丸底文)(多角) | ヨコナメ | 複合口縁 外面: 多角平行 丸底文 | — |
| 73 2 | 4区 | 淤川土器 | 甕 | 18.0 | — | — | 「頭底」ナメ | ナメ | 複合口縁 外面: 多角平行 丸底文 | — |
| 73 3 | 4区 | 淤川土器 | 甕 | 18.0 | — | — | 頭底: ナメ | ナメ | 複合口縁 外面: 多角平行 丸底文 | — |
| 73 4 | 4区 | 淤川土器 | 甕 | 18.0 | — | — | ナメ | ナメ | 複合口縁 | V-4 外面に捺付文 |
| 73 5 | 4区 | 淤川土器 | 甕 | 16.0 | — | — | ナメ | ナメ・ケズリ | 複合口縁 | — |
| 73 6 | 4区 | 淤川土器 | 甕 | 22.0 | — | — | ヨコナメ | ヨコナメ | 複合口縁 | V-4 外面に捺付文 |
| 73 7 | 4区 | 淤川土器 | 甕 | 17.0 | — | — | ヨコナメ | ナメ・ハケ(ナメ) 後ナメ | 複合口縁 後部直ちに凹縫状 の出現 | V-4 |
| 73 8 | 4区 | 淤川土器 | 甕 | — | — | — | ヨコナメ・タテハケ | 頭部底下: ナメ 底部以下: ケズリ (ヨコ) | 上半部: 多角平行 丸底文(タシ灰工具) 下半部: 波紋文(タ シ灰工具) 中程: ナメの多角 底 下半部: 多角平行 丸底文(タシ灰工具) 中位: 波紋文 | V-4 |
| 73 9 | 4区 | 上部器 | 甕 | 16.0 | — | — | ヨコナメ | ヨコナメ | 複合口縁 口縁部に1条の凹縫 | 古墳頭? |
| 73 10 | 4区 | 土器 | 甕 | 18.4 | — | — | ナメ | ナメ 体上部: ハケ後ナメ | 口縁部: ナメ 体部: ケズリ | — |
| 73 11 | 4区 | 土器 | 甕 | 16.8 | — | — | ナメ | ナメ 体上部: ハケ | 口縁部: ナメ 体上部: ハケ | 外面に捺付文 |
| 73 12 | 5区 | 云雷器 | 甕 | 18.0 | — | — | ナメ | 口縁上部: ナメ 底部: ハケ後ナメ ハケ後ナメ | 口縁部: ナメ 底部: ナメ | — |
| 73 13 | 3区 | 上部器 | 甕 | 22.0 | — | — | ナメ | ナメ 体下部: ハケ後ナメ | 口縁上部: ナメ 口縁下部: ナメ 体下部: ケズリ | — |
| 73 14 | 4区 | 土器 | 甕? | — | — | — | ナメ | ナメ | — | — |
| 73 15 | 5区 | 上部器 | 甕 | 14.6 | — | — | ナメ 口縁下部: ハケ ハケ後ナメ | 口縁部: ナメ 体下部: ケズリ | — | — |
| 74 1 | 4区 | 土器 | 甕 | — | — | — | ナメ | ナメ 体上部: ハケ後ナメ | 頭部: ナメ 体上部: ケズリ | — |
| 74 2 | 3区 | 上部器 | 甕 | — | — | — | ハケメ | ケズリ | — | — |
| 74 3 | 4区 | 上部器 | 高杯 | 15.0 | 0.0 | 9.8 | ナメ ヨコナメ 中位底下: ハケ+ミ サガ 脚部: ヨコナメ | 口縁部: ヨコナメ ナメハケ 底部付近: ナメ | 環部と脚部: 円錐形 環法により複合 環部のナメは粗い波 紋状 | 外面に捺付文 |
| 74 4 | 4区 | 上部器 | 高杯 | — | — | — | ミガキ・ナメ | ナメ | 外縁と脚部: 円錐形 環法 | — |
| 74 5 | 4区 | 土器 | 甕 | 12.0 | 7.9 | 3.8 | ヨコナメ | ヨコナメ | 外面: 細い柔軟状 の凹縫1条 | 外面述述を除き紫色 釉付石器 |
| 74 6 | 4区 | 土器 | 甕 | 18.7 | — | — | 五輪ナメ 下部: ケズリ | 五輪ナメ | — | — |
| 74 7 | 4区 | 土器 | 甕 | 11.9 | 7.8 | 3.1 | ヨコナメ | ヨコナメ | 強いヨコナメにより 底部に凹凸 | 外面底部を除き紫色 釉付石器 |

| 探査番号 | 部位番号 | 不規則度 | 出土地点 | 種類 | 器種 | 法長(cm) | 構造・技法 | | 形成・文様の特徴 | 備考 |
|-------|------|------|------|----|------|--------|-------|------|----------------|--------------------------------------|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | |
| 75 1 | | 4区 | 須恵器 | 瓦 | 13.0 | - | - | 回転ナデ | 回転ナデ | 外縁：全体と天井部の境に1条の凹溝 外底：U字形底直上に1条の凹溝 |
| 75 2 | | 4区 | 須恵器 | 瓦 | 13.0 | - | - | 回転ナデ | 回転ナデ | 人月谷と仰鉢の境に2条の平行溝 大谷通年A 3期 |
| 75 3 | | 4区 | 須恵器 | 环 | 14.0 | - | - | 回転ナデ | 回転ナデ | 大谷通年B 1期 |
| 75 4 | | 4区 | 須恵器 | 瓦 | 15.0 | - | - | 回転ナデ | 回転ナデ | 立ち上がりは高めで内窓 |
| 75 5 | | 4区 | 須恵器 | | | | - | ナデ | 格子状のヘア模文 | |
| 75 6 | | 5区 | 須恵器 | 瓦 | 15.0 | 2.8 | 司紀ナデ | 回転ナデ | | 中継7期 |
| 75 7 | | | 須恵器 | 瓦 | 15.1 | | 回転ナデ | 回転ナデ | 口沿端部が外反して下降 | 山雲7~8枚 |
| 75 8 | | 4区 | 須恵器 | 环 | 13.2 | 2.9 | 回転ナデ | 回転ナデ | 回転余切り | |
| 75 9 | | | 須恵器 | 环 | 13.0 | 2.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 回転余切り | |
| 75 10 | | | 須恵器 | 环 | 14.8 | 2.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | 回転余切り | |
| 75 11 | | 5区 | 須恵器 | 环 | 10.7 | | 回転ナデ | 回転ナデ | | |
| 75 12 | | 5区 | 須恵器 | 高环 | 15.8 | 9.7 | 9.0 | 回転ナデ | 回転ナデ | 山雲6~8期 |
| 75 13 | | 5区 | 須恵器 | 瓦 | 10.5 | | 回転ナデ | 回転ナデ | | |
| 75 14 | | 5区 | 須恵器 | 瓦 | | | 回転ナデ | 回転ナデ | 内窓：同心円状ナデ キ | |

第3節 製鉄関連遺物の考古学的観察

1. 製鉄関連遺物の調査

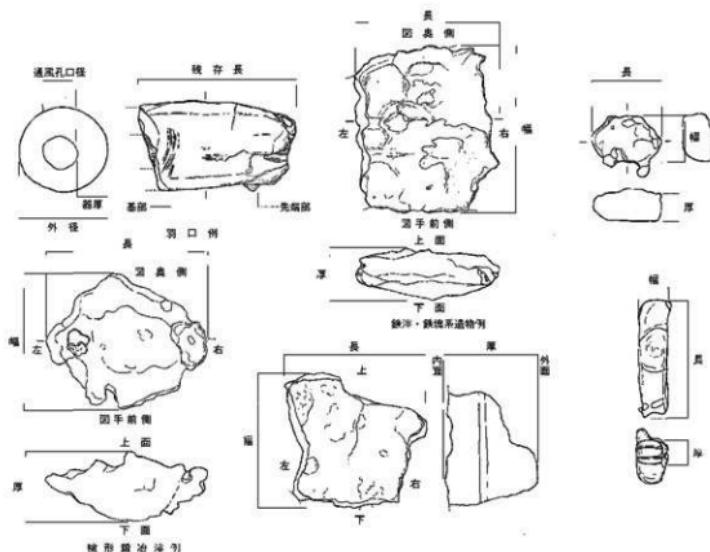
(1) 調査の手順

2区および5区で出土した製鉄関連遺物については、遺構の機能や製鉄の工程を的確に把握するため、強力磁石（TAJIMA PUP-M）と小型特殊金属探知器による抽出、および肉眼観察による考古学的な遺物の分類を行った。この中から、各遺構の機能や工程を示すと思われる代表的な遺物を選択し、遺物観察表と実測図の作成、写真撮影を行った。また、これらの遺物については、それぞれ本来の方向に戻して平面に配置した上で、実測の基準マークや管理番号をつける作業を行った（「遺物の構成」）。統いて、こうして構成された遺物を遺構単位や一定のまとまりごとに記録した構成図を作成した。構成図には、遺物形状の略図や管理番号、分析遺物の番号も記入した。さらに、これらの遺物の中から、特に金属学的分析が必要なものを抽出し、分析資料詳細観察カードを作成した。

資料の抽出や遺物観察表の作成は、穴澤義功氏の指導のもとで行い、併せて分析資料の切断箇所の指示も受けた。金属学的分析については、㈱九州テクノリサーチに委託して実施し、その成果については第5章第5節及び第6節に掲載した。

(2) 製鉄関連遺物の見方

製鉄関連遺物の観察表及び本文における各部位の呼称は第77図のとおりである。



第77図 製鉄関連遺物各部位の名称

(3) 遺物観察表の見方

遺物観察表は、島根県飯南町板屋Ⅲ遺跡⁽¹⁾における製鉄関連遺物の検討で採用された様式を基本とし、島根県雲南市木次町横ヶ峰遺跡⁽²⁾の報告様式と同様に、分析項目などを加えた様式を用いている。主な項目の見方は以下のとおりである。

- 1) 遺物種類 金属学的分析を行う前に、考古学的な観察によって判定した遺物の種類。
- 2) 法量 資料の現存最大長、最大幅、最大厚、重量を計測したもの。
- 3) 磁着度 鉄滓分類用の「標準磁石」を用い、6mmを単位として資料との反応の程度を数字で表現したもの。数値が大きいほど磁性が強い⁽³⁾。
- 4) 遺存度 資料が完形品か破片かを示す。
- 5) 破面数 資料が破片の場合、破面がいくつあるかを記す。
- 6) メタル度 埋蔵文化財専用に整備された小型金属探知器によって判定された金属鉄の残留程度を示すもの。

【基準感度】

- H(○)：Hは最高感度で、ごく小さな金属鉄が残留することを示す。
M(◎)：Mは標準感度で、一般的な大きさの金属鉄が残留することを示す。
L(●)：Lは低感度で、やや大きな金属鉄が残留することを示す。
特L(☆)：特Lはごく低感度で、Lの倍以上の大きな金属鉄が残留することを示す。

- 7) 分析どの分析を、どの部分について行うかを○印で示す。
- 8) 所見外形や破面・断面の状況、木炭痕や気孔の有無、および付着物やその他の状況について記す。
- 9) 分析部位資料のどのような部分をどのような目的で調査・分析するのかを記す。また、観察表下の実測図の網掛け部分は、分析に供した試料の採取位置を示す。
- 10) 備考資料がどのような場所でどのように生成されたと予想されるか等を記す。

註

- (1)島根県教育委員会『板屋Ⅲ遺跡、志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5 1998
(2)島根県教育委員会『横ヶ峰遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 2004
(3)小林信一、「製鉄遺跡の発掘調査と整理について」[『研究連絡誌』第32号 (財)千葉県文化財センター]

2 区

第9表 寺田1滑路2区鉱治・鉄鉱物相察表

| 機械名 | 造機名 | 機物名 | 寸法圖 | 重量(kg) | 箱重(kg) | 箱形寸法 | 箱形寸法 木から量 |
|-------------|--------------------|-------------------|--------------------------|---------------|-----------------|------|--------------|
| 58 11-10-11 | 製油機(工兵機械科) | — | 長さ 36 幅 5.1 高さ 1.2 | 40 | 6 | H(C) | — |
| 59 G-11-2 | 製油機(工兵機械科) | — | 4.1 — — | 4.5 | 1.3 | 61 | 3 合 L |
| 60 F-13 | 製油機(工兵機械科) | — | 5.5 — — | 5 | 1.3 | 109 | 2 H(O) |
| 61 F-11 10 | 機械油箱 (機械科) | — | 6.3 — — | 10 | 3.5 | 335 | 8 H(O) |
| 62 G 12 13 | 機械油箱 (工具機械科) | — | 4.2 — — | 4.1 | 2 | 78 | 5 H(D) |
| 63 G-12 13 | (大、上部油箱、附油箱、合機) | 機械油箱 | 16.5 — — | 89 | 2.5 | 986 | 5 H(C) |
| 64 G 11-12 | (大、工具機械科、油箱、合機) | 機械油箱 | 14.5 — — | 11 | 5 | 1280 | 4 伸(合) |
| 65 G 11 9 | 機械油箱 (上部油箱、附油箱) | 機械油箱 | — — (半油箱右付) | 8.8 — — | 4.1 | 584 | 3 なし |
| 66 H-9-16 | — | 機械油箱 (半油箱右付) | — — (半油箱右付) | 6.5 — — | 4.9 — — | 174 | 5 なし |
| 67 G-11 3 | 機械油箱 (半油箱右付) | 機械油箱 | — — (半油箱右付) | 6.7 — — | 3.3 — — | 113 | 4 なし |
| 68 G 11 | — | 機械油箱 (半油箱右付) | — — (半油箱右付) | 8.5 — — | 7 — — | 226 | 6 L(●) |
| 69 G 11 | — | 機械油箱 (半油箱右付) | — — (半油箱右付) | 11 — — | 10.4 — — | 472 | 4 なし |
| 70 I G-11-5 | — | 機械油箱 (半油箱右付) | — — (半油箱右付) | 15 — — | 14.4 — — | 1016 | 6 L(●) |
| 71 H-11-13 | 機械油箱 (P、二前) | 機械油箱 | — — (大、R、半油箱右付) | 9.5 — — | 11.15 — — | 906 | 5 なし |
| 72 G-11-15 | — | 機械油箱 (中、二後、合機) | — — — | 16 | 9 — — | 938 | 7 L(●) |
| 73 G-10-16 | (大、R、半油箱右付) | 機械油箱 | — — — | 19 | 13 | 2040 | 1 H(C) |
| 74 G 11-8 | — | 半油箱 | — — — | 25 | 3 | 69 | 10 なし |
| 75 F 12 | — | 半油箱 | — — — | 3 | 2.7 | 22 | 1 なし |
| 76 G | — | 半油箱 | — — — | 35 | 3 | 13 | 27 2 なし |

| 測定番号 | 測定名 | 計測値 (cm) | | 測定度 | メダル度 |
|--------------|----------------|----------|-----|-----|------|
| | | 長さ | 幅 | | |
| 96-1 F 11 15 | 鏡台 (合計) | 4.3 | 6.3 | 3 | 146 |
| 96-2 F 11-15 | 鏡台 (合計) | 5.8 | 4 | 3 | 173 |
| 97 G 12-15 | 鏡台 (合計、鏡面 1 枚) | 6 | 6.4 | 1.2 | 43 |
| 98 G-11.3 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 5 | 3.5 | 3 | 77 |
| 99-1 G-9-21 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 3.5 | 5.5 | 2.5 | 97 |
| 99-2 G 9-12 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 7.5 | 5.2 | 3 | 135 |
| 100 G-9-12 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 3 | 4.5 | 2 | 76 |
| 101 G-9-12 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 6 | 4 | 2 | 157 |
| 102 Q-9-13 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 7 | 4.5 | 2.5 | 10 |
| 103 F 12 16 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 4 | 1.3 | 1 | 18 |
| 104 G-12 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 4.5 | 2 | 3.5 | 21 |
| 105 F-11 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 6.2 | .8 | .3 | 24 |
| 106 G 12-13 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 2.5 | 2.3 | 1 | 24 |
| 107 G-11 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 4 | 2.6 | 1.2 | 24 |
| 108 G 10 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 4 | 2.4 | 1.5 | 20 |
| 109 F 12-15 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 3.5 | 2.2 | 1.7 | 39 |
| 110 G-11 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 4.4 | 2.7 | 2 | 43 |
| 111 鏡台 ドレンチ | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 1.39 | 2.9 | 1 | 50 |
| 112 | 鏡台 (鏡面 2 枚) | 4.2 | 2.8 | .4 | 37 |

| 検査No. | 通称名 | 品種名 | 計画(%) | | 組成(%) | 組成(%) | モデル被 |
|-------|---------|------------|-------|-----|-------|-------|---------------|
| | | | 長さ | 幅 | | | |
| 111.2 | F-11-15 | 長葉系被物(被物系) | 4.2 | 7 | 1 | 60 | 7 なし(は) |
| 111.3 | C-12-13 | 黄葉系被物(被物系) | 4 | 5 | 1.1 | 64 | 6 なし(は) |
| 111.4 | F-12 | 黄葉系被物(被物系) | 5.5 | 3.5 | 2 | 64 | 9 なし(は) |
| 112 | F-13 | 黄葉系被物(被物系) | 3 | 3.5 | 3 | 74 | 8 なし(は) |
| 113 | H-9-8 | 黄葉系被物(被物系) | 3 | 3 | 2.4 | 76 | 6 なし(は) |
| 113.2 | H-12-6 | 黄葉系被物(被物系) | 5.5 | 4.7 | 2.5 | 100 | 7 なし(は) |
| 114 | G-9-12 | 黄葉系被物(被物系) | 5 | 4.2 | 1.8 | 108 | 9 なし(は) |
| 115 | G-9-6 | 黄葉系被物(被物系) | 5 | 5 | 3 | 123 | 7 なし(は) |
| 116 | | 黄葉系被物(被物系) | | | | | |
| 117 | C-10-24 | 黄葉系被物(被物系) | 5 | 7.9 | 4.3 | 280 | 9 なし(は) |
| 118 | D-56 | 被物系(4.5) | — | — | — | — | なし(は) |
| 119 | F-7 | 被物系(16.2) | 15 | 9.5 | 8 | 108 | 6 なし(は) |
| 120 | | 被物系(16.2) | | | | | |
| 121 | セ系9号上 | 被物系 | 1 | 26 | 20 | 10 | 6400 なし(は) |
| 122 | | 被物系 | 21.5 | 19 | 9 | 4200 | 5 なし(は) |
| 123 | セ系9号下 | 被物系 | 29 | 26 | 10 | 8800 | 6 なし(は) |
| 124 | H-10-10 | 被物系(合体) | 5.2 | 3 | 3.8 | 129 | 7 目(C) |
| 125 | P&G(9) | 被物系(合体) | 9 | 7.8 | 4 | 280 | 7 目(C) |
| 126 | F-7 | 被物系(合体) | 2.5 | 5.6 | 5.2 | 371 | 6 被物(は) |

| 通称名 | 通物名 | 新規(㎝) | 新規(㎝) | 新規(g) | 新規 | アダラ坂 |
|-------|------------------|---------|-------|-------|------|----------------------------------|
| | | 長さ | 幅 | さ | | |
| 127 | 4.2野 両輪台車(合板) | 15 | 16.4 | 5.2 | 1880 | 6 H(2) |
| 128 | 新津地 新津地 | — | — | — | 4.3 | 1.3 66 50 |
| 129 | G-11-1 | — | — | — | 6.5 | 2.5 1 70 |
| 130 | G-12 | ノ 1枚板製品 | 13 | 1.4 | 56 | — |
| 131 | 新津地 新津地 | — | — | — | 10.5 | 1 1 26 |
| 132 | H-11 | 新津地(合) | 4.6 | 4.6 | 2 | 189 L(●) |
| 133 | 新津地 新津地 | — | — | — | 5 | 4.6 1.8 239 9 幅(1.6) |
| 134 | G-11-26 | 新津地製品 | — | — | 5.6 | 2.8 2 46 9 幅(1.6) |
| 135-1 | — | 新津地製品 | — | — | 2.2 | 3.1 0.9 — |
| 135-2 | — | 新津地製品 | — | — | 1.8 | 2 1 — |
| 136-1 | F-12-4 | 新津地製品 | 1.8 | 3.4 | 1 | 21 6 L(●) 幅(1.6) |
| 136-2 | — | 新津地製品 | — | — | 1.8 | 4 1 — |
| 137 | — | 新津地製品 | — | — | 2.2 | 3.4 1 — |
| 138 | — | 新津地製品 | — | — | 2 | 3.8 0.9 — |
| 139 | — | 新津地製品 | — | — | 2.3 | 1.9 0.7 — |
| 140-1 | F-11-12 | 新津地製品 | 5 | 5 | 1 | 54.4 7 幅(1.6) |
| — | — | 新津地製品 | — | — | — | — |
| 140-2 | — | 新津地製品 | — | — | 2.5 | 5.8 0.9 — |
| 141 | — | 新津地製品 | — | — | 6 | 2.2 0.9 — |
| 142 | — | 新津地製品 | — | — | 4.5 | 2.3 0.7 — |

| 標記番号 | 通称名 | 形状 | 長さ(φ) | 幅(φ) | 厚さ(φ) | 重量(g) | 用途 | メカニズム |
|-------|---------------------|----------|-------|------|-------|-------|------|-----------------------------------------|
| 144-1 | 新器具製品 | 新器具製品 | 6 | 2 | 0.9 | — | — | — |
| 144-2 | 新器具製品 | 新器具製品 | 3.6 | 3 | 1.5 | — | — | — |
| 144-3 | F-12 新器具(未製品) | 新器具(未製品) | 1 | 5 | 0.9 | 13 | M(O) | 分析装置(M) 分析装置(M)用器具を含む。 |
| 144-4 | G-11-1 新器具(未製品) | 新器具(未製品) | 1 | 3 | 0.6 | 11 | 6 | 1.(●) 分析装置(M) 分析装置(M)用器具を含む。 |
| 144-5 | G-12 新器具(未製品) | 新器具(未製品) | 0.9 | 3.5 | 0.7 | 6 | 4 | 絞り(△) 新器具(未製品)用器具を含む。新器具(未製品)用器具を含む。 |
| 144-6 | G-10-4 新器具(未製品) | 新器具(未製品) | 1 | 6.3 | 0.5 | 11 | 7 | H(O) 新器具(未製品)用器具を含む。新器具(未製品)用器具を含む。 |
| 144-7 | PNa102 新器具(未製品) | 新器具(未製品) | 1.3 | 4.2 | 0.6 | 11 | 7 | M(O) 新器具(未製品)用器具を含む。 |
| 145-1 | G-11-10 新器具(未製品) | 新器具(未製品) | 7 | 3.3 | 0.2 | 30 | 4 | H(O) 新器具(未製品)用器具を含む。 |
| 145-2 | G-11-10 新器具(未製品) | 新器具(未製品) | 3.5 | 3 | 0.3 | 7 | 4 | H(O) 新器具(未製品)用器具を含む。 |
| 145-3 | 新器具 新器具 | 新器具 | — | — | — | — | — | 新器具(未製品)用器具を含む。 |
| 145-4 | G-14 新器具(未製品) | 新器具(未製品) | 4.1 | 2.4 | 0.3 | 10 | 7 | H(O) 新器具(未製品)用器具を含む。 |
| 146-1 | 新器具(未製品) | 新器具(未製品) | 2.6 | 1.5 | 0.7 | — | — | — |
| 146-2 | G-11-1 新器具(未製品) | 新器具(未製品) | 2.8 | 3 | 0.5 | 11 | 6 | 1.(●) 新器具(未製品)用器具を含む。 |
| 146-3 | 新器具 新器具 | 新器具 | — | — | — | — | — | 新器具(未製品)用器具を含む。 |
| 147 | 新器具 新器具 | 新器具 | — | — | — | — | — | 新器具(未製品)用器具を含む。 |
| 148 | 新器具 新器具 | 新器具 | — | — | — | — | — | 新器具(未製品)用器具を含む。 |
| 149 | 新器具 新器具 | 新器具 | — | — | — | — | — | 新器具(未製品)用器具を含む。 |
| 150 | 新器具 新器具 | 新器具 | — | — | — | — | — | 新器具(未製品)用器具を含む。 |

| 測定品名 | 測定部位 | 測定法(試験法) | | 測定範囲 | メモ(誤差) |
|------------------|------------|----------|------|------|--------|
| | | 表式 | 統計式 | | |
| 15. F 11. 15 | 表面部(体外不感部) | -5 . 6 | 0.4 | 10 | H(C) |
| 15. F -1. -5 | 不感部(体外不感部) | 2 | 6.2 | 0.1 | 3 |
| 15.2 F -10. -5 | 感覚部(体外不感部) | 1 | 5.2 | 0.5 | 10 |
| 15.3.1 F -1. -16 | 感覚部(体外不感部) | 0.5 | 3.5 | 0.6 | 5 |
| 15.3.2 F -1. -16 | 感覚部(体外不感部) | - | - | 4 | 絶対(△) |
| 134. 1 9. 8 | 感覚部(体外不感部) | -1.1 | 5 | 6.9 | 11 |
| 15.4.2 G 11. 16 | 感覚部(体外不感部) | 1.2 | 3.2 | 1.1 | 10 |
| 15.5.2 G 1. 22 | 感覚部(体外不感部) | 0.9 | 3.2 | 1 | 5 |
| 15.6.1 1 -0. -6 | 感覚部(体外不感部) | - | 1 | 3.2 | 0.8 |
| 15.6.2 F -1. -13 | 感覚部(体外不感部) | 22 | - | 0.8 | 4 |
| 15.6.3 G -11. -7 | 感覚部(体外不感部) | 22 | 1.2 | 0.5 | 8 |
| 158. 1 - | 感覚部 | - | 5 | 4 | 1 |
| 158. 2 F -13 | 感覚部 | - | 5 | 4 | 12 |
| 158. 3 | 感覚部 | - | 4.5 | 1.5 | 4.5 |
| 159. | 感覚部 | - | 4.5 | 1.5 | 4.5 |
| 160. | 感覚部 | 41 | 29 | 27 | 50000 |
| 16. F -11. -9 | 感覚部 | - | 34 | 28 | 9.5 |
| 162. | 感覚部 | - | 35 | 26.5 | 11 |
| 163. F -12 | 感覚部(厚字) | - | 35 | 16.2 | 7.5 |
| 164. F 15. 2 | 感覚部(厚字) | 19.5 | 18.6 | 11.4 | 3520 |

| 標本名 | 通称名 | 種 物 名 | 小頭部 (cm) | | 重量 (g) | 組合せ | アカモロ |
|-------------|---------------------|-------|----------|------|--------|------|------|
| | | | 長さ | 幅 | | | |
| .66 G-1-2 | 石林(渕み) | — | 3.35 | 4.4 | 9.8 | <280 | なし |
| .66 G-12-7 | 石林(渕下) | — | 10 L. | 7.5 | 1060 | 1 | なし |
| .67 鹿空 1 | 石林(渕子) | — | 39.6 | 16.6 | 54 | 3200 | なし |
| 168 G-11-12 | 石林(渕下) | — | 33.8 | 2 | 8.6 | 2520 | なし |
| 169 G-11-2 | 石林(渕子) | — | 36.2 | 19.5 | 6.2 | 4280 | なし |
| 170 P-1-16 | (渕子、鶴林) | — | 5.4 | 6.2 | 4.3 | 106 | なし |
| 171 G-11-9 | 中里(渕谷)、鶴林(渕) | — | 9.2 | 3.8 | 5.6 | 220 | なし |
| 172 G-11-17 | 中里(渕谷)、鶴林(渕) | — | 6.7 | 8 | 3 | 290 | なし |
| 173 G-11-3 | 中里(渕谷)、鶴林(渕) | — | 6.3 | 10.2 | 7 | 400 | なし |
| 174 G-11-8 | 中里(渕谷)、鶴林(渕) | — | 10 | 7.7 | 2.5 | 209 | なし |
| 175 G-11-16 | 中里(渕谷)、鶴林(渕) | — | 3 | 9.8 | 3.5 | 463 | なし |
| 176 2-13 | 中里(渕谷)、鶴林(渕) | — | 9.3 | 8.6 | 2.5 | 160 | なし |
| 177 G-1-9 | 和歌(渕谷)、鶴林(渕) | — | 7.9 | 1.5 | 3 | 160 | なし |
| 178 1-9-1-2 | 和歌(渕谷)、鶴林(渕) | — | 4.6 | 9.2 | 3.5 | 33 | なし |
| 179 Pm977 | 羽口(渕谷合点)、鶴林(渕) | — | 9 | 7 | 8 | 367 | なし |
| 180 G-11-4 | 羽口(渕谷合点)、鶴林(渕) | — | 12.2 | 7 | 7.8 | 489 | なし |
| 181 G-1-2 | 羽口(渕谷合点)、鶴林(渕) | — | 2.5 | 7.4 | 6.2 | 518 | なし |
| .82 G-1-2 | (D) (D) (D) (D) (D) | — | 15.6 | 8.8 | 6 | 1065 | なし |
| .83 G-1-2 | 羽口 (D) (D) (D) (D) | — | 17.8 | 8 | 10.8 | 130 | なし |

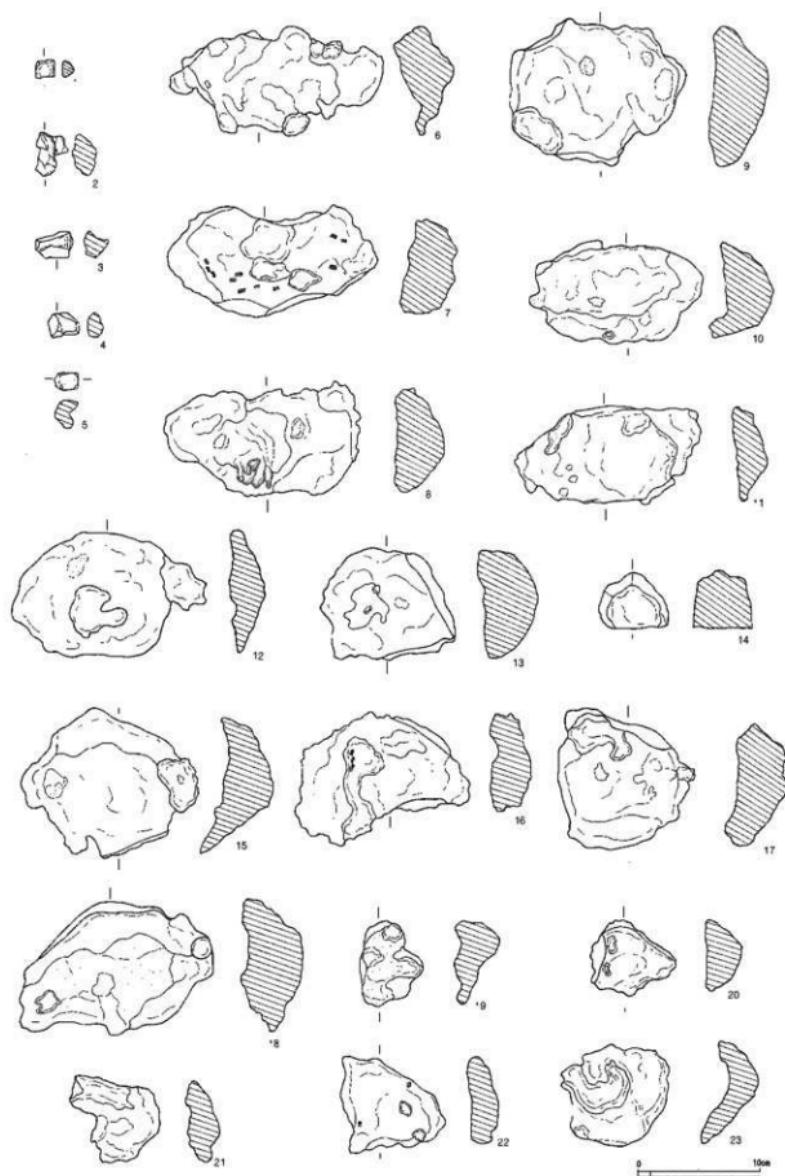
| 標本名 | 通称名 | 道 市 名 | 斜深さ(cm) | 底質(粒) | 底質(粒) | 底質(粒) | 底質(粒) |
|-----|-----------------------------|------------|---------|-------|-------|-------|-------|
| 184 | 前令横磯 | 羽1(底質の底、礁) | 11.8 | 0.2 | 754 | 4 | なし |
| 185 | 前令底質凹凸 | 羽1(底質の底、礁) | 5.8 | 9.1 | 10 | 279 | 5 |
| 186 | 羽1(底質の底、礁) | 羽1(底質の底、礁) | 6.4 | 8 | 9 | 555 | 5 |
| 187 | G-8 | 羽口(底質の底、礁) | 16.2 | 11.6 | 11.2 | 1130 | 4 |
| 188 | 1-9-11 | 羽1(底質の底、礁) | 17 | 10.4 | 8.8 | 1180 | 3 |
| 189 | — | 羽1(底質の底、礁) | — | — | — | — | なし |
| 190 | 羽1(底質、礁) | 羽1(底質、礁) | 3.1 | 5 | 6.5 | 43 | 4 |
| 191 | 羽1(底、礁) | 羽1(底、礁) | 5 | 5.2 | 6.1 | 77 | 6 |
| 192 | 1-9-11 | 羽口(底質、礁) | 5.1 | 5.2 | 6 | 104 | 6 |
| 193 | G-11-5 | 羽1(底質) | 5 | 9.8 | 10 | 190 | 4 |
| 194 | G-12-7 ₁ II-9 | 羽1(底質、礁) | 6 | 8 | 10 | 219 | 6 |
| 195 | Y | 羽口(底質、礁) | 6.7 | 5 | 8.2 | 259 | 5 |
| 196 | G-12-6 | 羽1(底質、礁) | 7 | 5.6 | 8.7 | 380 | 4 |
| 197 | 1-9-3 | 羽1(底質、礁) | 6 | 9.2 | 9 | 305 | 1 |
| 198 | Z-11-10 | 羽1(礁) | 9 | 7.8 | 8 | 319 | 1 |
| 199 | 底質底質凹凸 | 羽1(礁) | 6.3 | 7.9 | 8.4 | 406 | 2 |
| 200 | G-11-5 | 羽1(礁) | 9.7 | 8 | 8.4 | 606 | 1 |
| 201 | 1-9-3 | 371(体2) | 6.4 | 8.8 | 10.4 | 620 | 3 |
| 202 | G-11-5 | 371(体2) | 9.8 | 8.6 | 9.2 | 606 | 2 |

| 標記番号 | 通称名 | 品種名 | 計測部位 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 結果 | メモ |
|------|---------|----------------|------|---------|--------|---------|--------|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 203 | C-11-11 | 平口 (棒棒) | — | 11.8 | 8.6 | 11 | 1070 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には軽度の凹凸がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 204 | H-10-9 | 平口 (棒棒) | — | 7.2 | 6.7 | 3 | 152 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 205 | F-11-14 | 平口 (棒棒) | — | 8.8 | 7.6 | 3 | 214 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 206 | H-9-16 | 平口 (棒棒)、(棒棒) | — | 4.6 | 8.8 | 4 | 173 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 207 | F 11 13 | 平口 (棒棒)、(棒棒) | — | 5.5 | 8.5 | 3.2 | 182 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 208 | H-10-10 | 平口 (棒棒)、(棒棒) | — | 5.4 | 6 | 3.4 | 105 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 209 | PMS43 | 平口 (棒棒)、(棒棒) | — | 5.1 | 4.3 | 3.1 | 38 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 210 | G 11 6 | 平口 (棒棒)、(棒棒) | — | 9.3 | 8.5 | 4.5 | 233 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 211 | G 11 6 | 平口 (棒棒)、(棒棒) | — | 6.1 | 8.1 | 3.2 | 141 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 212 | — | 平口 (棒棒) | — | 10.4 | 8.2 | 3.2 | 331 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 213 | F-11 | 平口 (棒棒) | — | 7.6 | 8.1 | 4 | 323 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 214 | F-12 | 平口 (棒棒)、(棒棒) | — | 12 | 8 | 7.6 | 614 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 215 | F 11-14 | (棒棒)、(棒棒)、(棒棒) | — | 13.8 | 8 | 7.6 | 780 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 216 | F 11-12 | 平口 (棒棒) | — | 3.2 | 5.1 | 2.8 | 66 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 217 | H-9-8 | 平口 (棒棒) | — | 3.2 | 5 | 2.6 | 63 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 218 | H-10-10 | 平口 (棒棒) | — | 6.8 | 4.2 | 2.8 | 76 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 219 | G-10-8 | 土苔葉型 | — | 4.4 | 4.3 | 0.7 | 20 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 220 | G-11-10 | 土苔葉型 | — | 4.1 | 4.5 | 0.8 | 10 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |
| 221 | G-11 5 | 土苔葉型 | — | 4.8 | 6.1 | 0.7 | 20 | なし | アーチの低い楕円形。表面は滑らかで、底面には白い筋がある。外側は黒褐色の地に白い筋が走る。内側は白色で、底面には白い筋がある。 |

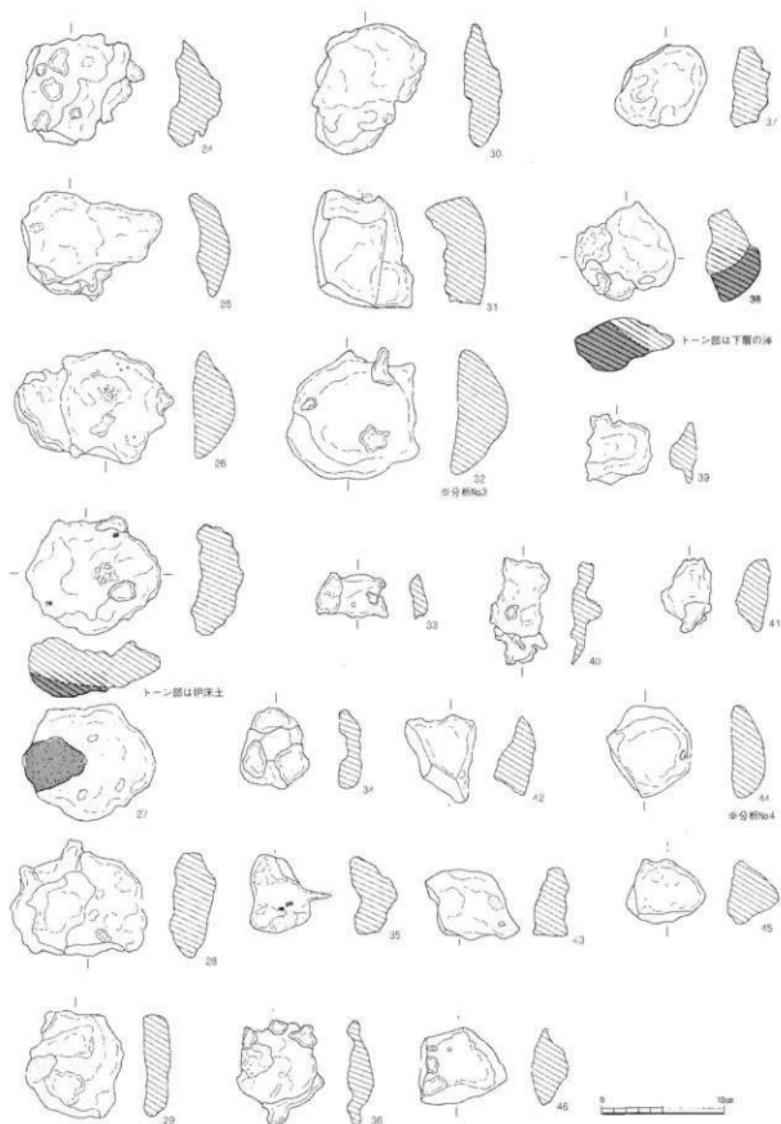
| 種別名 | 種 物 名 | 計量 (kg) | | 組番号 | タリヤ |
|--------------------------|-----------------------|---------|-----|-----|-----|
| | | 長さ | 幅 | | |
| 222 G 11-9 | 上部用ラブダ | 3.2 | 5.3 | 20 | なし |
| 223 G 10-8 | 下部用ラブダ | — | 4.1 | 24 | なし |
| 224 G 11-11 | 上部用ラブダ | — | 8 | 8.4 | 60 |
| 225 G 11-15 [△] | 上部用ラブダ | 6 | 6.5 | 8.5 | なし |
| 226 G 11-13 [△] | 上部用ラブダ | 6.1 | 6.2 | 6.0 | なし |
| 227 G 11-16 | 下部用ラブダ | 2 | 7 | 5.1 | 10 |
| 228 G 11-16 | 上部用ラブダ | — | 3 | 3.7 | 1 |
| 229 H-11 | 革袋(ラブダ) (腰袋) | 7.4 | 11 | 1.5 | 66 |
| 230 G 11-12 | 出張ラブダ (腰袋) (合皮) | 3 | 4 | 1. | 20 |
| 231 G 1-14 | 革袋(ラブダ) (合皮) | 4 | 5.5 | 0.5 | 40 |
| 232 G 11-4 | ラング(腰袋) | — | 3.2 | 4.5 | 35 |
| 232-G-1 | ラング(腰袋) | — | 3.7 | 1.5 | 1 |
| 233 H 9 | 小型ラブダ(皮革) | 5 | 5.3 | 1.2 | 40 |
| 235 G 12 | 小型ラブダ(皮革) | 6.5 | 5.5 | 2 | 30 |
| 236 1.5 [△] | 開脚(皮革) | 2.5 | 3.4 | 12 | 8 |
| 237 G 11-3 | (ルーベ内筒)手帳 | 6 | 4.5 | 1.1 | 20 |
| 238 G 11-2 | (ルーベ内筒)手帳 | 4.4 | 4.1 | 1.2 | 27 |
| 239 C-11 | 開脚(皮革) | 5.1 | 5.5 | 1 | 35 |

| 試験No. | 通番名 | 変種名 | "葉緑素 (mg) | | 葉緑素 (g/g) | 葉緑素濃度 | メチル紫 |
|-------|----------|-------------|-----------|-----|-----------|-------|------|
| | | | 長さ | 幅 | | | |
| 240 | G-11-7 | (ツバキ) (葉緑素) | 2.8 | 3.2 | 0.6 | .0 | なし |
| 241 | G-11-3 | (ツバキ) (葉緑素) | 4.5 | 5.3 | 1.3 | .45 | なし |
| 242 | — | (ツバキ) (葉緑素) | 4.7 | 6 | 1.1 | — | なし |
| 243 | G-11-5 | (ツバキ) (葉緑素) | 5 | 6.5 | 2.2 | 0 | なし |
| 244 | G-11-6 | (ツバキ) (葉緑素) | 5.2 | 6 | 1.3 | .60 | なし |
| 245 | H-10-13 | (ツバキ) (葉緑素) | 3.8 | 3.5 | 0.5 | 1.4 | なし |
| 246 | G-11-11 | (ツバキ) (葉緑素) | 2.4 | 3.8 | 0.6 | 1.6 | なし |
| 247 | H-11-4 | (ツバキ) (葉緑素) | 1.6 | 2.3 | 0.7 | 1.6 | なし |
| 248 | — | (ツバキ) (葉緑素) | 3.2 | 3.2 | 1.2 | .87 | なし |
| 249 | G-11-15 | (ツバキ) (葉緑素) | 2 | 2.6 | 0.7 | 5 | なし |
| 250 | E-1件記 | (ツバキ) (葉緑素) | — | — | — | — | なし |
| 251 | P-11-92 | (ツバキ) (葉緑素) | — | — | — | — | なし |
| 252 | G-11-4 | (ツバキ) (葉緑素) | 3.6 | 1.5 | 1.3 | 10 | なし |
| 253 | F-9 | (ツバキ) (葉緑素) | 1 | 1.2 | 0.6 | 5 | なし |
| 254 | G-11 | (ツバキ) (葉緑素) | 4 | 4 | 1.7 | 50 | なし |
| 255 | Y-11-12 | (ツバキ) (葉緑素) | 4.2 | 5.3 | 2.8 | 22 | なし |
| 256 | G-11-122 | 相1(葉緑素) | 4 | 6.1 | 4.9 | 120 | なし |
| 257 | C-11 | — | — | — | 5.5 | 6 | なし |
| 258 | — | — | — | — | 2 | 1 | なし |

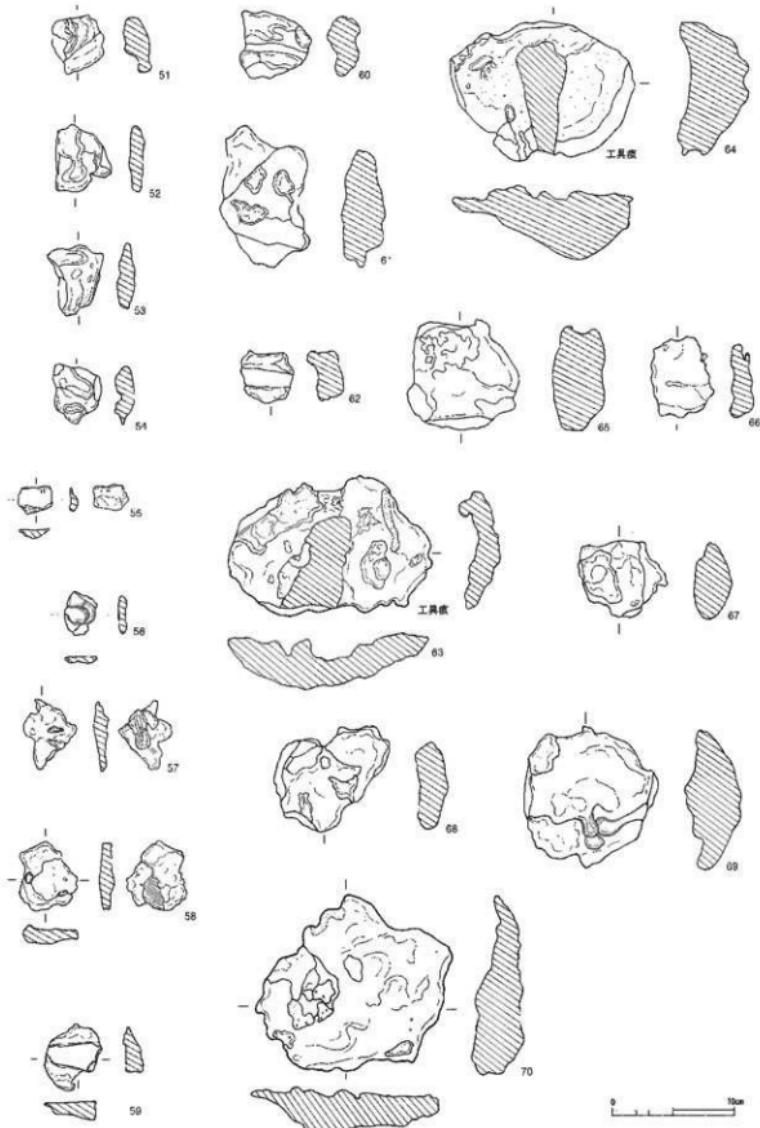
| 種類 | 種類名 | 通 募 名 | 科属 | 分類群 | 分類群 | ノミクシ |
|-----|-------------|---------|------|-----|-----|------------|
| 229 | 1号砂場 | 本次 | 2.2 | 11 | 1 | 全 し |
| 260 | R-10-12 | 本次 | 4.5 | 2 | 0.9 | 3 1 全 し |
| 261 | 白島原(Pho-54) | 浜家原(浜原) | 14.7 | 25 | 2.3 | 200 8 M(?) |
| 262 | 浜原 | 本次 | 4.9 | 22 | 1.2 | 8 1 なし |



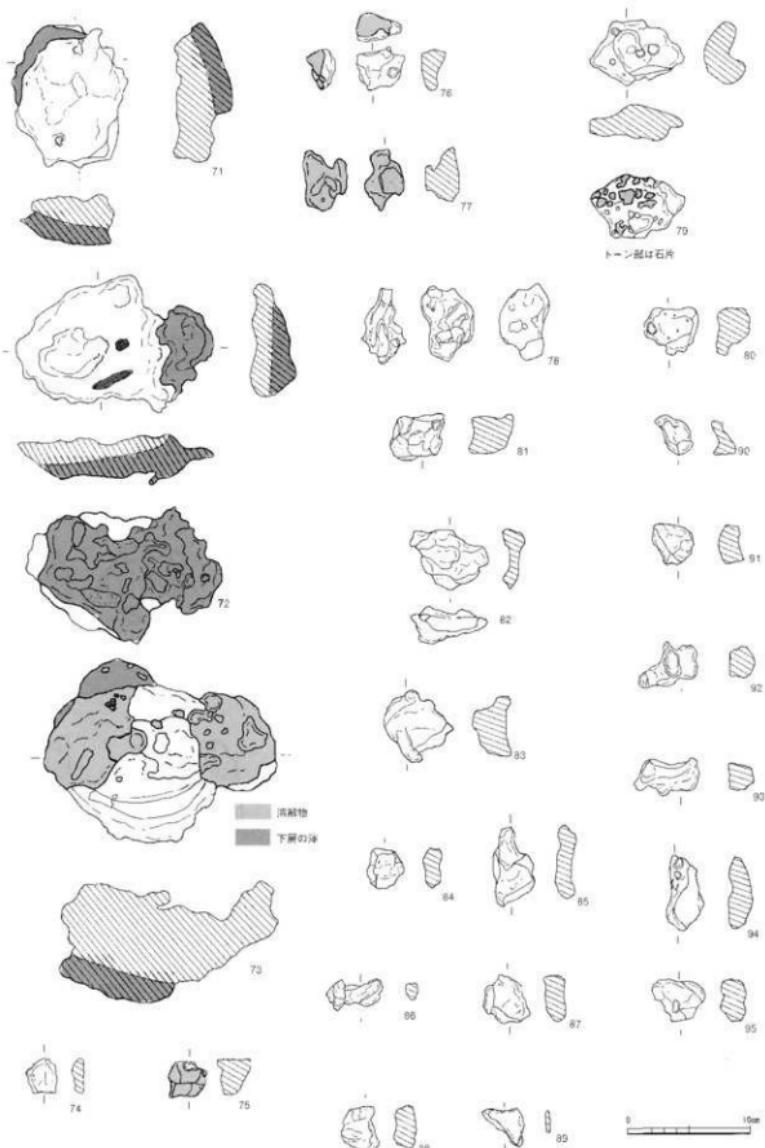
第78図 寺田I遺跡2区銀冶・銅冶遺物実測図(1) (S=1/2)



第79図 寺田I遺跡2区鍛冶・鋳銅関連遺物実測図(2) (S=1/2)



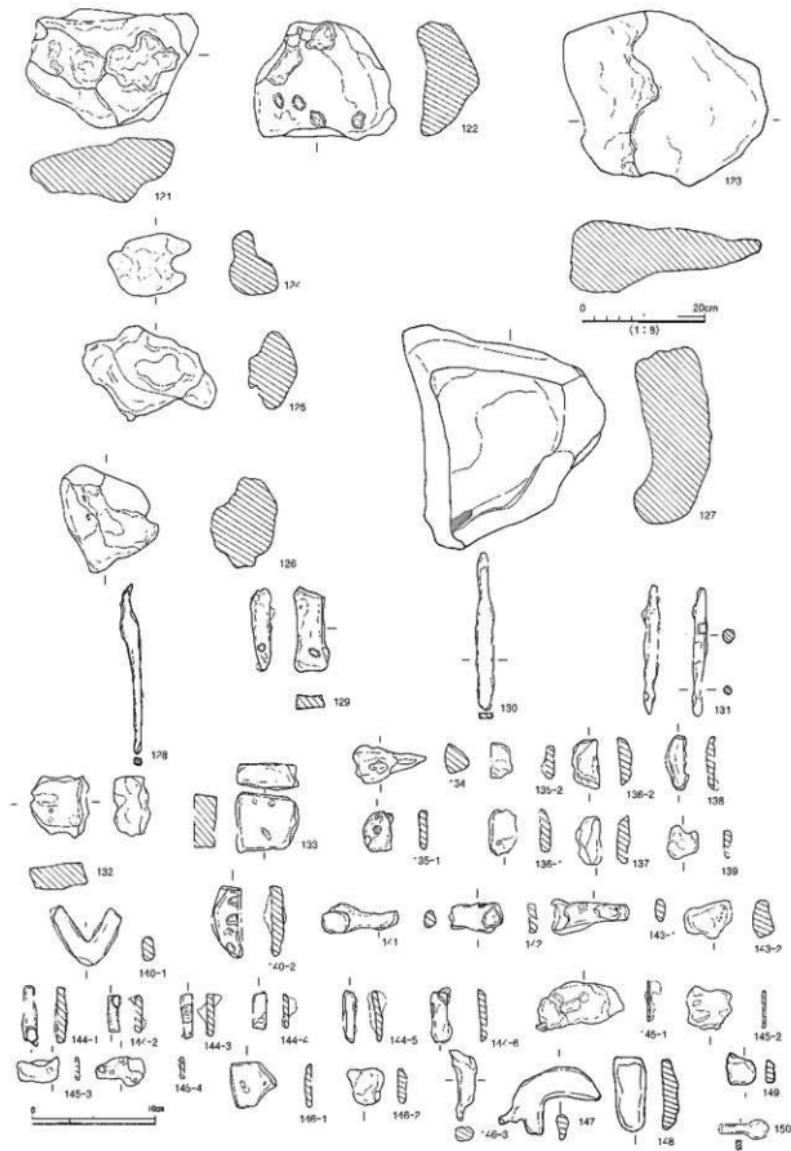
第80図 寺田I遺跡2区鋳冶・鉄銅関連遺物実測図(3) (S=1/2)



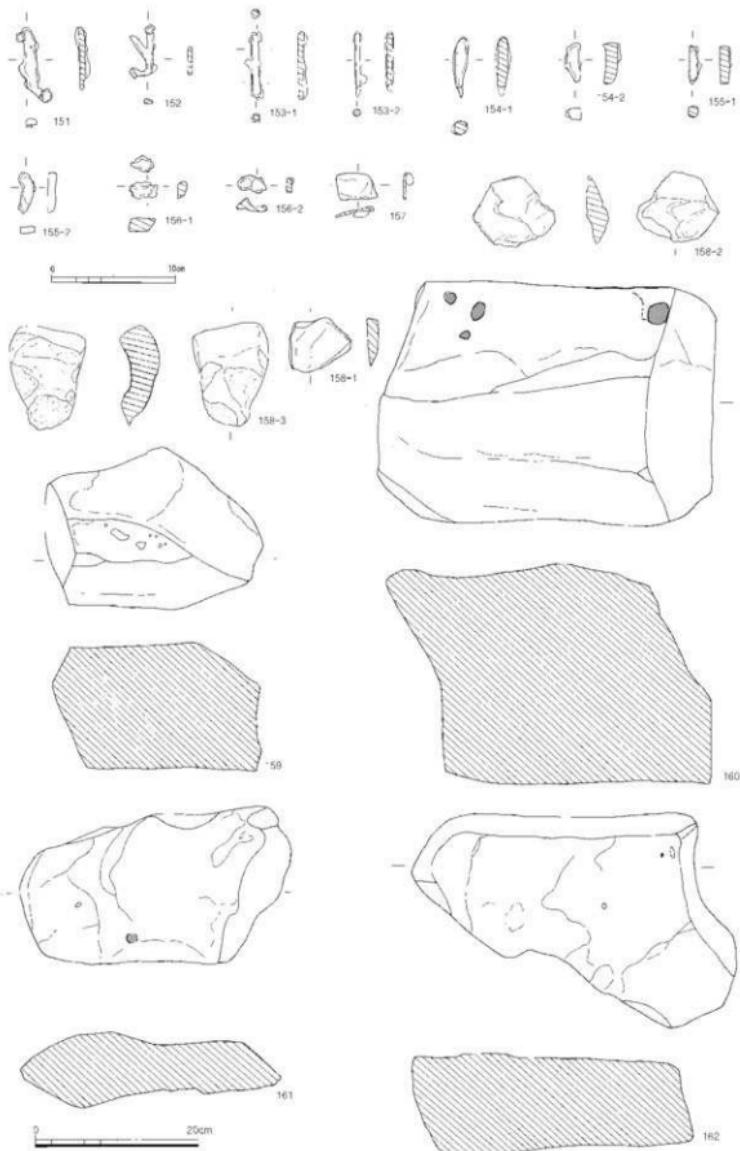
第81図 寺田I遺跡2区鋳冶・鋳銅関連遺物実測図(4) (S=1/2)



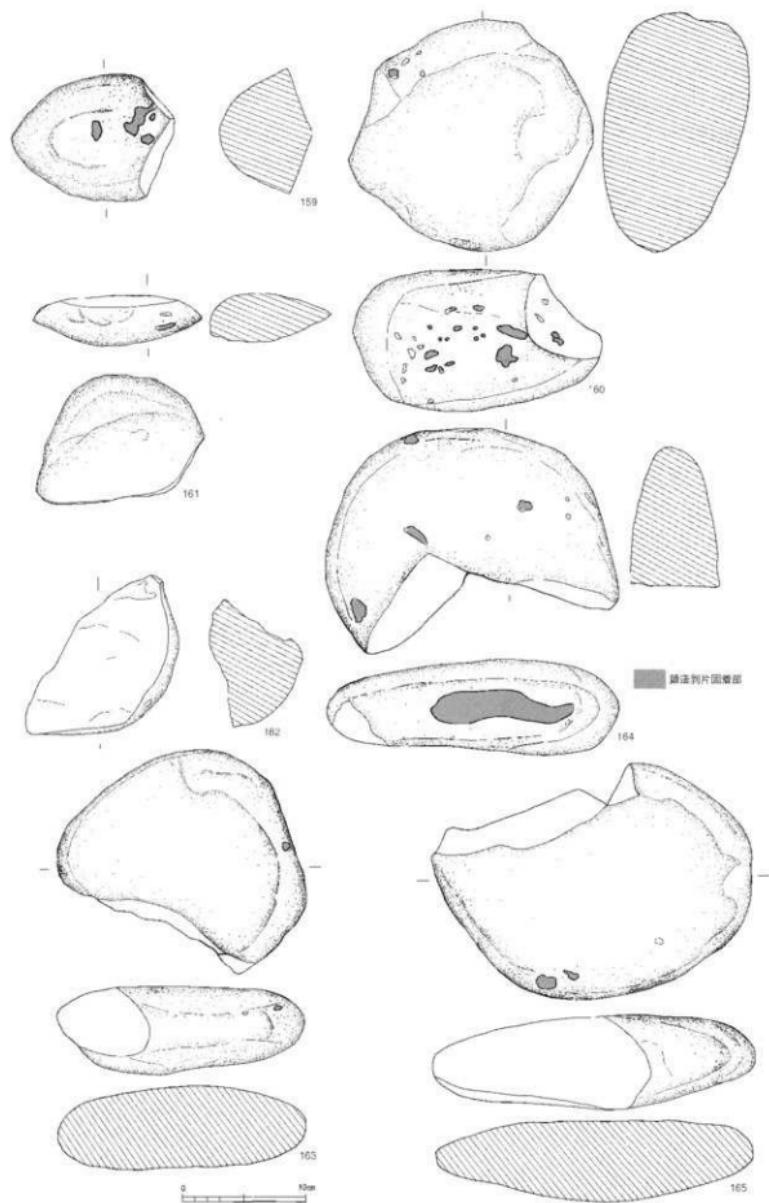
第82図 寺田I遺跡2区鍛冶・銅器関連遺物実測図(5) (S=1/2)



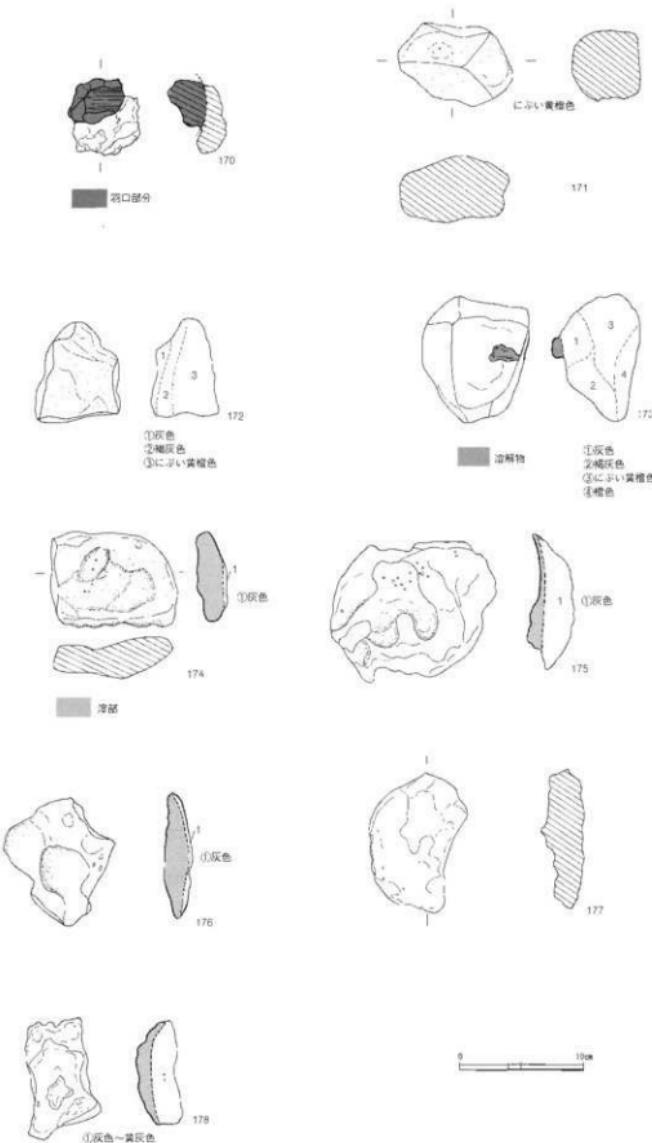
第83図 寺田I遺跡2区鋳造・鋳銅関連遺物実測図(6) (S=121~123 1/8 他1/4)



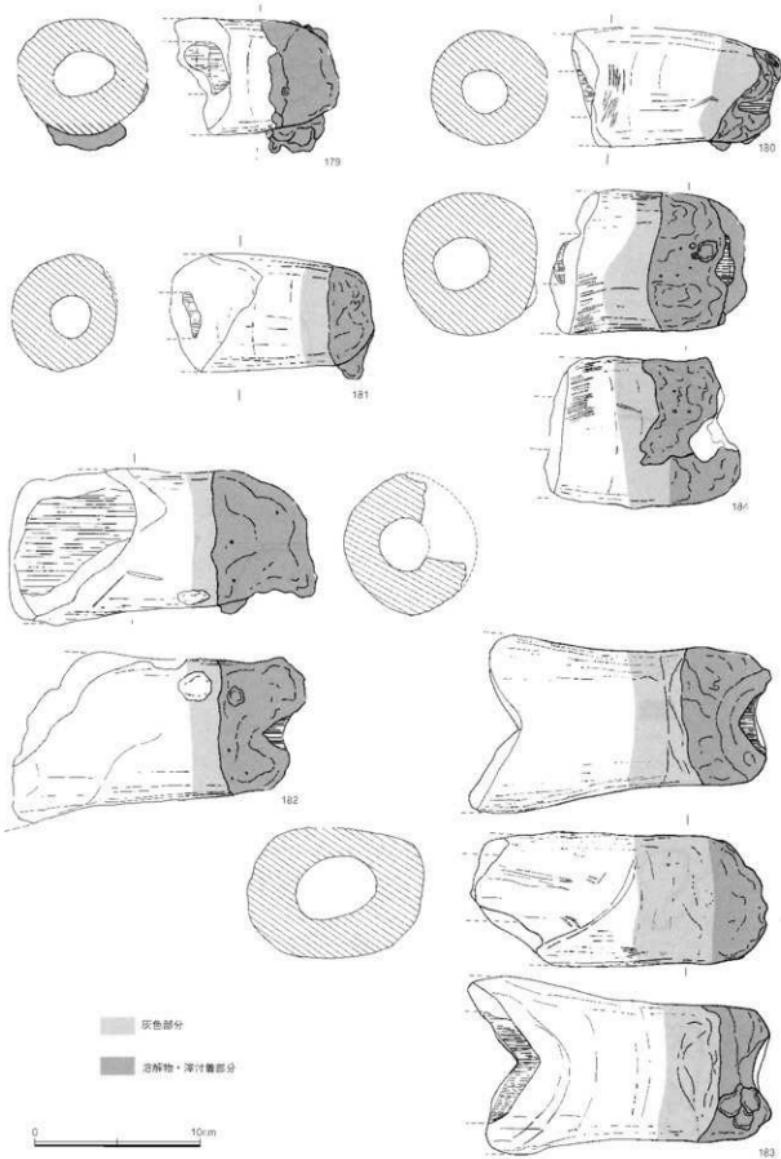
第84図 寺田I遺跡2区銀冶・鉄銅関連遺物実測図(7) (S=159~162 1/6 他1/4)



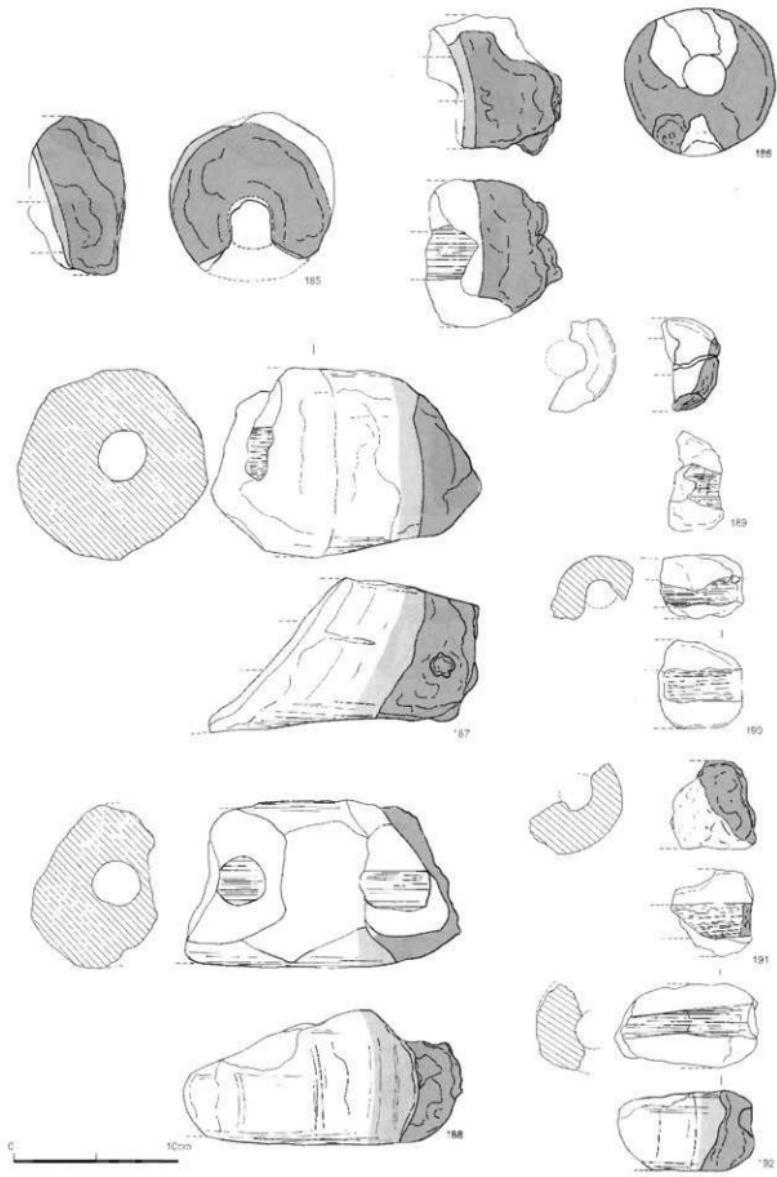
第85図 寺田I遺跡2区鍛冶・銅鑄造連遺物実測図(8) (S=1/2)



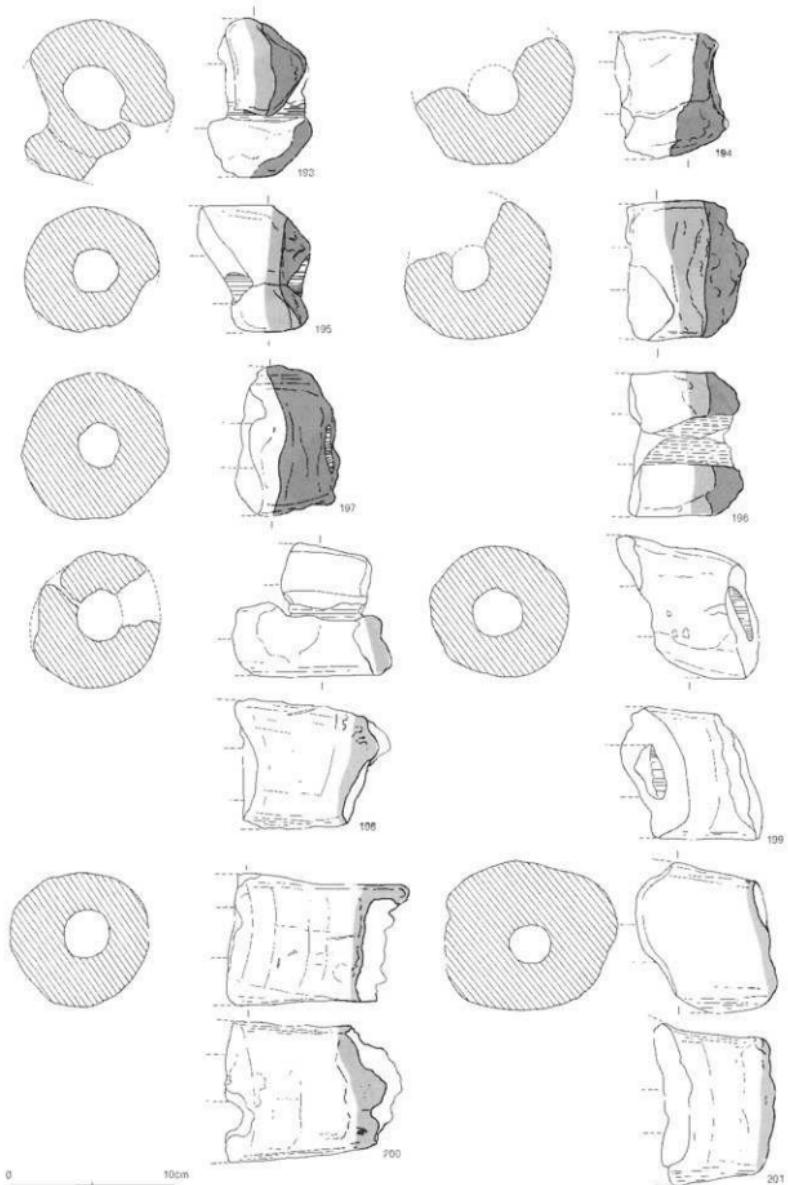
第86図 寺田I遺跡2区鋳冶・鉄銅関連遺物実測図(9) (S=1/2)



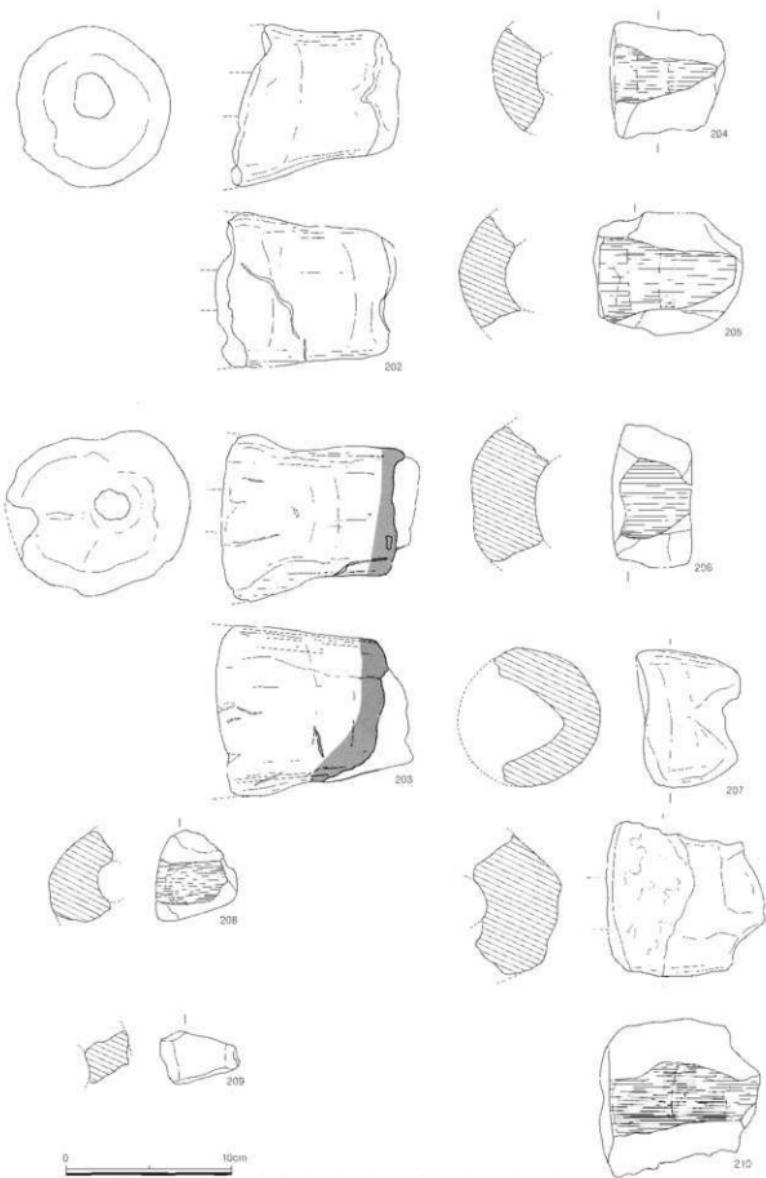
第87図 寺田I遺跡2区鋳冶・鉄銅関連遺物実測図(10) (S=1/3)



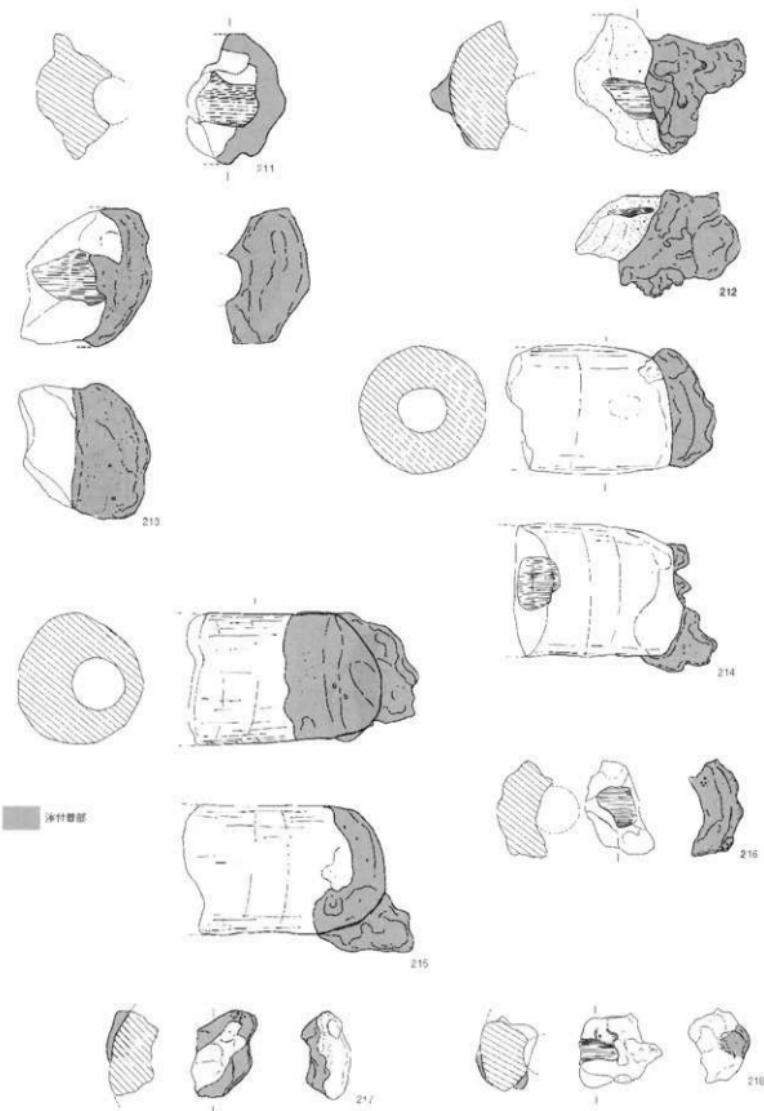
第88図 寺田I遺跡2区鋳造・鉄銅関連遺物実測図(11) (S=1/3)



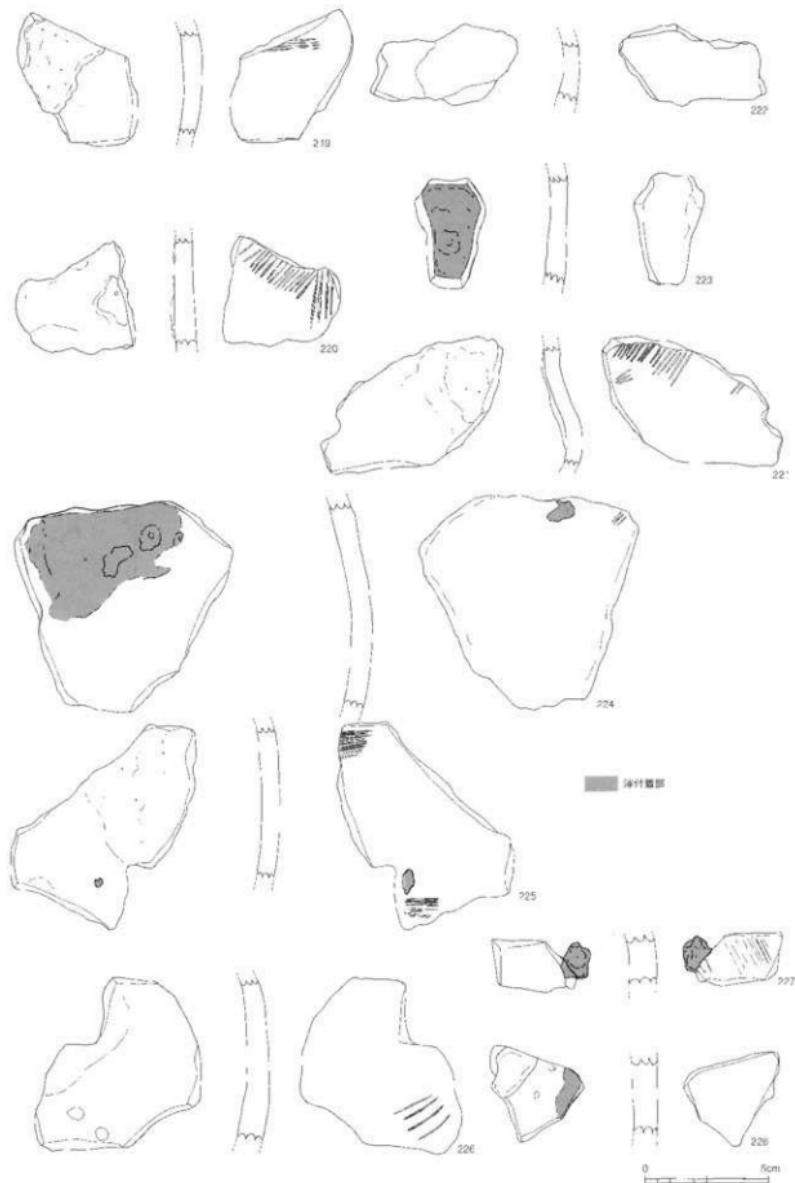
第89図 寺田I遺跡2区鍛冶・鋳銅関連遺物実測図(12) (S=1/3)



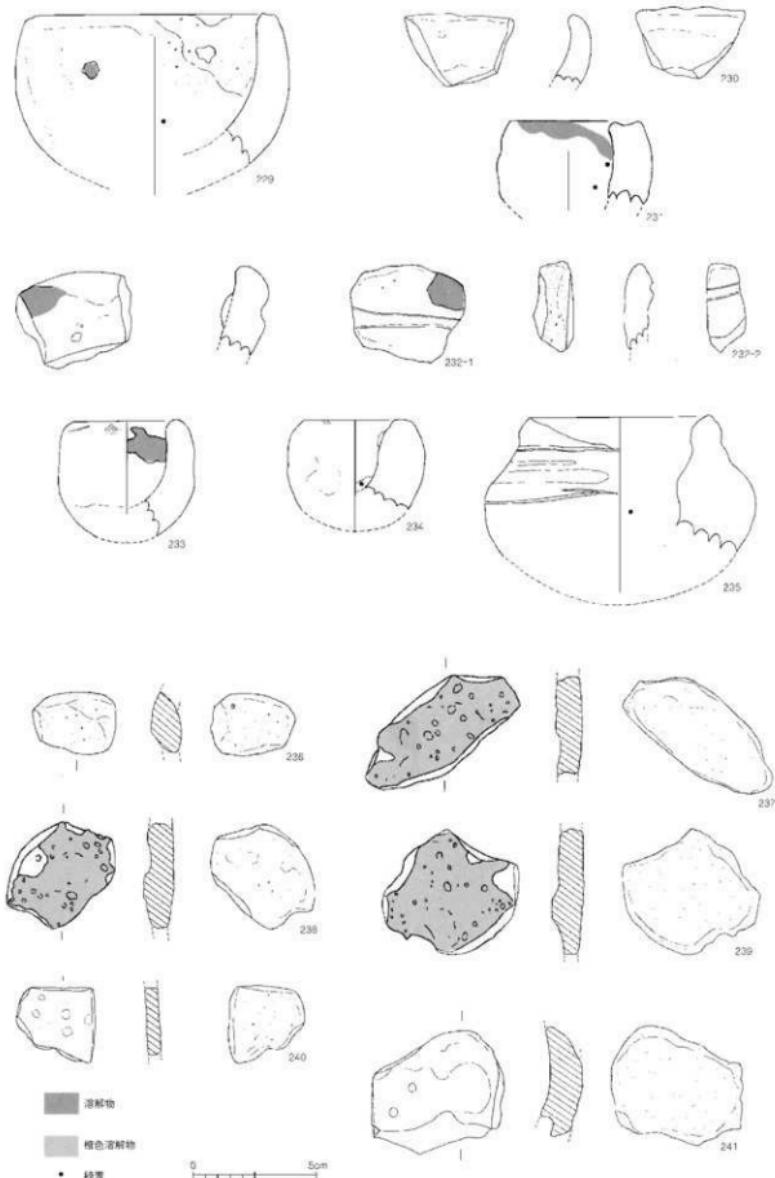
第90図 寺田I遺跡2区鋳冶・銅関連遺物実測図(13) (S=1/3)



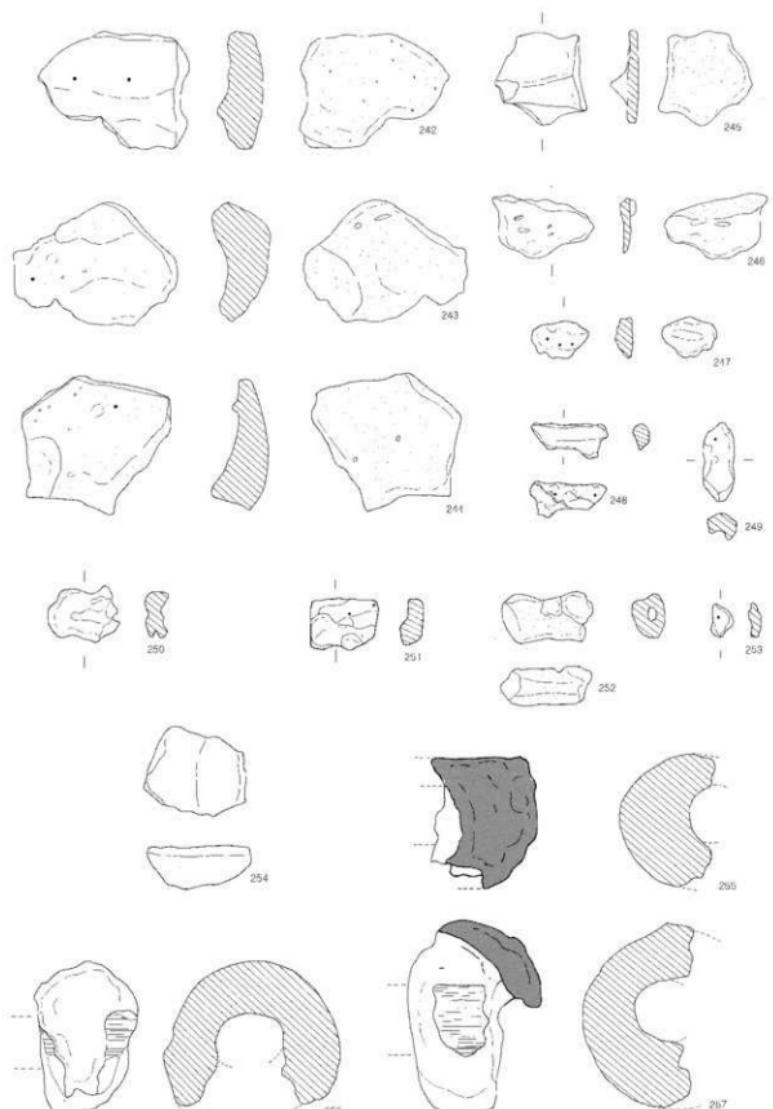
第91図 寺田I遺跡2区銀冶・銅鑄関連遺物実測図(14) (S=1/3)



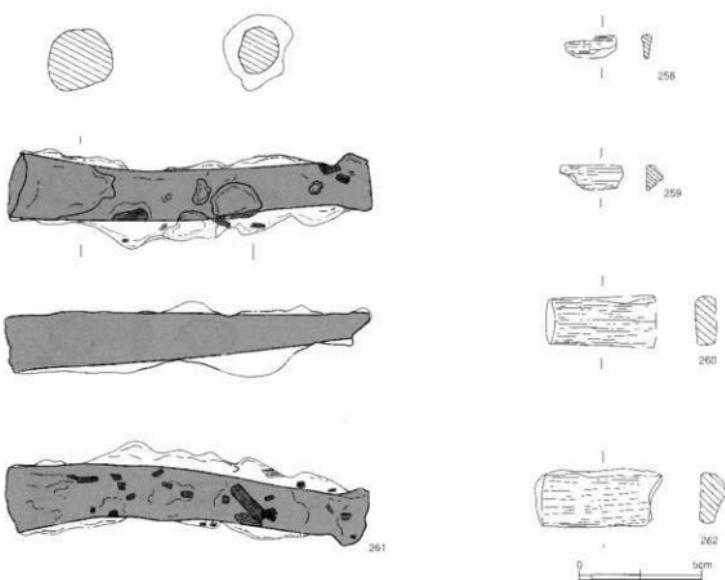
第92図 寺田 I 遺跡2区鍛冶・銅鋳物関連遺物実測図(15) (S=1/2)



第93図 寺田I遺跡2区鍛冶・鋳銅関連遺物実測図(16) (S=1/2)



第94図 寺田I遺跡2区鍛冶・銅鑄関連遺物実測図(17) (S=1/2)



第95図 寺田I遺跡2区鋳冶・鉄銅関連遺物実測図(18) (S=1/2)

| 流動津 | 砂鉄焼結塊 | 楕円鋸治津(大) 両吹き(含鉄) | 楕円鋸治津(大) 含鉄 | 楕円鋸治津(大) 含鉄 | 楕円鋸治津(中) 含鉄 | 楕円鋸治津(中) 含鉄 | 楕円鋸治津(小) 含鉄 | 楕円鋸治津(小) 含鉄 | 楕円鋸治津 マグネット 含津付 | 鋸治津(流動状) 工具痕付 | 楕円鋸治津 工具痕付 | 楕円鋸治津 | 楕円鋸治津 | 楕円鋸治津 (中、二段) | 半溶解石 |
|----------|-------|---------------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------------|------------------|---------------|-------|-------|-----------------|------|
| 精錬系? | H(○) | L(●) | L(●) | L(●) | 特L(☆) | L(●) | 特L(☆) | | | | | | | | |
| 1 | 4 | 6 | 9 | 15 | 19 | 24 | 29 | 33 | 39 | 51 | 55 | 61 | 66 | 71 | 74 |
| | | | | | | | | | | 56 | 62 | | | | |
| | M(○) | 10 | 16 | 20 | 25 | 30 | 34 | 40 | | 鋸治津 (流動状) | | 67 | 68 | 72 | 75 |
| 2 | 7 | 11 | 17 | 21 | 26 | 31 | 35 | 41 | 52 | 57 | 63 | 64 | 68 | 76 | 77 |
| | | | | | | | | | | 58 | | | | | |
| | 12 | 18 | 22 | 27 | 36 | 43 | 47 | 53 | 59 | 65 | 69 | 73 | 79 | 80 | 81 |
| | 13 | 19 | 23 | 28 | 32 | 38 | 44 | 45 | 50 | 56 | 60 | 64 | 68 | 72 | 75 |
| ※分析資料No1 | 3 | 5 | 8 | 14 | | | | | | | | | | | |
| 分析 | 1 | | | | 1 | | 1 | 1 | | | | | 1 | | 1 |

第96図 寺田 I 遺跡2区鉄関連遺物構成図 No.1

(構成番号47～50は削除)

| 粘土質溶解物 | 鐵治滓 (含鉄) H(O) | | 鐵治滓 (含鉄) L(●) | | 鐵塊系遺物 (精錬系?・含鉄) H(O) | | 鐵塊系遺物 (鐵治系?・含鉄) L(●) | | 粒状滓 特L(☆) | | 鍛造削片 | | 再結合滓 (含鉄) | | 鐵鋸 | | 鐵製品 未製品、その他 | | 鐵製品 | | | |
|--------|---------------------|------|---------------------|------|----------------------------|------|----------------------------|--|--------------|-----|-------|-------|--------------|-----|----------------------------|------------------|----------------|-------|-------|-------|-------|--|
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 80 | | 84 | | 89 | | 98 | | 103 | | 109 | | 112 | | ※分析資料No14 120 | | 124 | | 134 | | 145-1 | |
| | | | 90 | | 91 | | 99-1 | | 104 | | 110 | | 113-1 | | ※分析資料No10 111-1 ★ 113-2 | | 128 | | 140-2 | | 151 | |
| | 81 | | 85 | | 92 | | 99-2 | | 105 | | 111-1 | | 113-2 | | ※分析資料No11 111-2 | | 121 | | 132 | | 141 | |
| | | M(O) | | 93 | | 99-2 | | | | 106 | | 111-2 | | 114 | | ※分析資料No12 118 | | 125 | | 135-1 | | |
| | | | 86 | | 94 | | 100 | | | | 111-3 | | 115 | | ※分析資料No13 粒状滓 119 | | 129 | | 142 | | 145-3 | |
| | | | | 95 | | | | | 107 | | 111-4 | | 116 | | ※分析資料No12 118 | | | | 143-1 | | 153-1 | |
| | 82 | | 87 | | 96-1 | | 101 | | | | 111-5 | | 117 | | ※分析資料No13 鍛造削片 122 | | 130 | | 146-1 | | 153-2 | |
| | | | | 96-2 | | | | | 108 | | | | | 123 | | 131 | | 146-2 | | 154-1 | | |
| | | | | 96-2 | | | | | | | | | | 127 | | | | 146-3 | | 154-2 | | |
| | 83 | | 88 | | 97 | | 102 | | | | | | | | 133 | | | | 146-4 | | 155-1 | |
| 分析 | | | | | 2 | | 1 | | | | 2 | | 1 | | 1 | | 1 | | 140-1 | | 144-6 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | 150 | | 157 | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | 150 | | 157 | | |

第97図 寺田I遺跡2区鐵関連遺物構成図 No2

| 板石 | 金床石 | 石錐(厚手) | 石錐(薄手) | 炉壁 鍛冶炉・羽口付き | 炉壁 鍛冶炉・淨化 | 羽口(鍛冶系) 細身 | 羽口(鍛冶系) 太身 | 羽口(先端部) 細身 | 羽口(先端部) 太身 | 羽口(体部) | 羽口(基部) 軟質 |
|-------|-----|--------|--------|----------------|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|--------|--------------|
| 158-1 | | | | | | | | | | | |
| 158-2 | | | | | | | | | | | |
| 158-3 | | | | | | | | | | | |
| 分析 | | | | | | | | | | | |

第98図 寺田I遺跡2区鉄開連遺物構成図 No.3

| 羽口(基部) 硬化 | 羽口(漆付) | 羽口(漆化) | 土器転用ルツボ | 小形ルツボ 青銅系 | 銅漆 | 銅漆 | 鳥管骨 漆付 | 羽口 青銅系 | 木炭 | 炭素道具 | 炭素木炭 |
|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
|  |  | |  |  |  |  | |  |  | | |
|  | | |  |  | |  | |  | | | |
|  |  | |  |  |  |  | |  |  |  |  |
|  | | |  |  |  |  | |  | | | |
|  |  |  | |  |  |  |  | | | | |
|  | | |  |  |  | | | | | | |
| | | |  |  |  |  | | | | | |
| | | |  |  |  | | | | | | |
| | | |  | |  | | | | | | |

第99図 寺田I遺跡2区鉄関連遺物構成図 No.4

第10表 寺田1遺跡2区製錬副産物分析資料一覧表

| 資料番号 | 地区 | 標名 | 成層 | 遺物種類 | 重量(g) | メタル度 | 分析コメント | マクス | 耐火性分析度 | 分析定量法 | 採取方法 | 組合 | カタログ | 実測 | 新開測合 | 前測合 | ラム | モルタル |
|------|-----|---------|----|-------------------|--------|------|--------|------------|--------|-------|------|----|------|----|------|-----|----|------|
| | | | | | | | | P | M | A | Y | W | Y | W | Y | W | Y | W |
| 1 | K-2 | 南北トレンド | | 3.溶剤洗 | 20.0 | 3 | なし | 津波を | - | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 2 | K-2 | F-12 | | 18.機械冶津(含鉄、人) | 104.0 | 10 | 特1.(☆) | メタル部を中心にして | - | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 3 | 2区 | G-11-7 | | 32.機械冶津(含鉄、巾) | 467.0 | 7 | 特1.(☆) | メタル部を中心にして | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 4 | 2区 | G-12-4 | | 44.機械冶津(含鉄、小) | 185.0 | 5 | 特1.(☆) | メタル部を中心にして | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 5 | 2区 | G-11-5 | | 70.機械冶津(半溶解石付き) | 1016.0 | 6 | L.(●) | 津波を中心にして | - | ○ | - | ○ | - | - | - | - | - | - |
| 6 | 2区 | G-11-7 | | 78.機械冶津(半溶解石付き) | 52.0 | 1 | なし | 半溶解石として | - | ○ | - | ○ | - | - | - | - | - | - |
| 7 | 2区 | G-11-13 | | 96-2.溶治灰(金鉢) | 174.0 | 9 | 特L.(☆) | メタル部を中心にして | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 8 | 2区 | G-11-4 | | 97.溶治灰(鉛製品付き) | 43.0 | 8 | L.(●) | メタル部を中心にして | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 9 | 2区 | G-9-12 | | 101.鉛塊系遺物(銅錫系?) | 157.0 | 9 | 特L.(☆) | メタル部を中心にして | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 10 | 2区 | F-12-8 | | 113-2.鉛塊系遺物(銅錫系?) | 100.0 | 7 | 特L.(☆) | メタル部を中心にして | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 11 | 2区 | G-9-12 | | 114.鉛塊系遺物(銅錫系?) | 108.0 | 9 | 特L.(☆) | メタル部を中心にして | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 12 | 2区 | D-5 | 他 | 118.粒状灰(4点) | - | - | なし | 粒状物として | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 13 | 2区 | F-7 | | 119.溶渣洗片(6点) | - | - | なし | 金造削片として | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 14 | 2区 | F-7 | | 120.再結合灰 | 1068.0 | 6 | なし | 再結合灰として | - | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 15 | 2区 | G-11-16 | | 134.灰?灰未品(切り口?) | 46.0 | 9 | L.(●) | メタル部を | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 16 | 2区 | F-12-4 | | 136-2.鉛輪(板状未品) | 21.0 | 6 | L.(●) | メタル部を | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 17 | 2区 | F-12 | | 144-1.鉛輪(角棒状未品) | 13.0 | 7 | M.(○) | メタル部を | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 18 | 2区 | G-11-1 | | 146-2.器具(鑿?) | 11.0 | 6 | I.(●) | メタル部を | ○ | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 19 | 2区 | F-11 | | 213.羽口(銀溶渣付き) | 323.0 | 3 | なし | 鍊治羽口として | - | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 20 | 2区 | G-11-10 | | 223.上部灰用ルツボ | 10.0 | 1 | なし | 津波を中心にして | - | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 21 | 2区 | G-11-14 | | 231.小型ルツボ(含鉄・青銅系) | 40.0 | 2 | 鉄化(△) | 津波を中心にして | - | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 22 | 2区 | G-11-3 | | 241.網添(ルツボ内強り) | 45.0 | 1 | 鉄化(△) | 津波を中心にして | - | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 23 | 2区 | G-11-15 | | 249.網(含鉄) | 5.0 | 1 | 鉄化(△) | 津波を中心にして | - | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 24 | 2区 | G-11 | | 254.羽口(青銅系) | 50.0 | 1 | なし | 鋼羽口として | - | ○ | - | - | - | - | - | - | - | - |

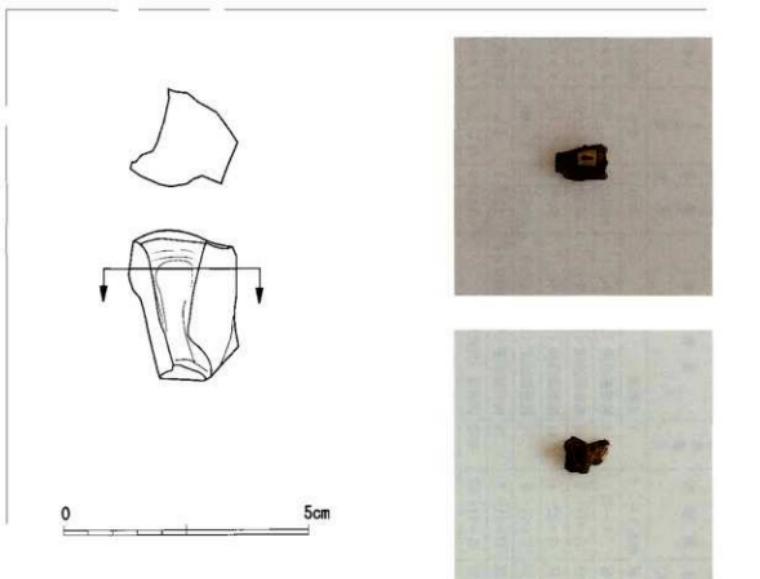
資料番号 1

| 出土状況 出土位置 | 遺跡名 | 寺田I遺跡 2区 | 遺物名 | 3 | 測定:標識 8世紀後半:出土土器 | 項目 | 測 メトリ |
|-------------------------------|------------|----------------|--------------------|------------|---------------------|--------------------------------------------------------------------------|----------|
| | 東北トレンチ | 特徴:標識 | 美:紫紅色~黒褐色 地:黒褐色 | 保存度 破片数 | | | |
| 試料記号 化 学: TER-I 放射性: —— | 長 度 幅 度 | 3.0cm 2.1cm | 色 調 | — | — | 分 類 度 E P M A X 線回折 化 学 耐 大 度 カロリー 数 値 化 X線透視 | — |
| 遺物種類 (名称) 泥動土 (製鍊系?) | 厚 度 重 量 | 2.0cm 20.0g | 結着度 メケル度 | 3 なし | 開口度 断面形状 | — | — |

観察所見 流動性の小破片である。上下面が平きており、両方は小破片に施されている。表面紋は3を放える。溝は流動性が高く、上下2枚が重複しており。表面は紫紅色が強い。下部にはわずかに水痕痕を残す。上部はさらに下層の溶鉄系の割離由のためか、深い模様に富んでいる。深は黒褐色で、横方向に通る穴孔が1つ立つ。色解は表面が黒褐色から黒褐色で、底は黒褐色である。

分析部分: 長軸部4/5を直角状に切削し、薄削を分析に用いる。残材返却。

備考: 流動性の高い溶鉄系が重要なしたもので、溝の裏面は紫紅色が強い。寺田I遺跡Ⅱ区からは3点ほど本資料に似た流動性が出土している。数も少なく整體の連携を伴わないことから、鐵冶窯の一種という可能性も残るが、外観的には製鍊系の炉内溶出物に似ているといえる。寺田I遺跡にはさらに上部に目皿があり、ここからは目皿と当時の鐵冶窯関連遺物を確認している。また、毎年の鋳区ではとして製鍊系の鉢形遺物が散布しているという条件下にあり、製鍊系の溝があるって不思議ではないかもしれない。



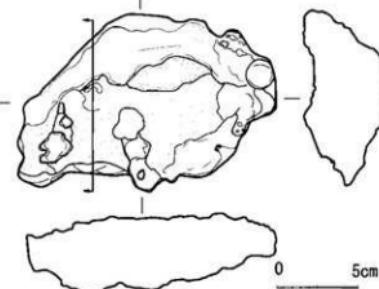
資料番号 2

| 岩土状況 内・外観 | 寺田1遺跡 2区 F-12 | | 遺物名 時期: 推測 8世紀後半: 土出土器 | 18 | | 項目 マクロ | メタル マクロ | |
|----------------------------|--------------------------------------|---------------------------------|------------------------------|----------------------|------------------|------------------|--------------------|---|
| | 横: 通: TBR-2 化: 単: TBR-2 放射化: - | 長: 幅: 法: 比: 17.0cm 11.0cm | | 表: 黒褐色～黒褐色 地: 黑褐色 | 薄: 厚: 幅: 15cm | 透: 青: 灰: 色: 0 | ばら葉形 分類 | |
| 薄: 厚: 幅: 比: (各軸) | 透: 青: 色: (各軸、大) | 保存度: 頭部欠損 | 100.0g | メタル度: 希少(貯) | 頭部欠損 | ○ | カロリ: 放射化 又解消 | ○ |

鉱物所見: すり、不整粒円形をした含鉄の柄形磁器である。上面は基本的に生きており、左側面には骨頭を中心とした凹面が残されている。表面は4面を数える。本来の平面形そのものも左側面が斜めに剥離しており、残存的な形状である。上面は細やかな直線状の筋に覆われており、右側の筋は特に流動状である。下面は中央部が左右方向に突出し、右方向に向かって徐々に厚くなっている。そのため右側面には弓のへき状である。右側面を中心とした鉄頭部の鉄頭土の可能性を持つ灰褐色の土色で、それ以外の面は今面が不規則な凹凸や斜面鏡面に覆われている。上面中央部部には墨痕があり、墨痕的に残るものの欠けが確認できる。拓面もその付近が最も高い。底面の穴孔は横方向に延びる直線なもののが多い。左側は底面が黒褐色から黒褐色で、他は黒褐色である。

分析部分: 鉄頭部1/3を直角鉄に切断し、メタル度を中心に分析に用いる。断面兆候分布。焼成過程。

備考: 丁字形が長方形領域で、両次元の可能性の高い空筒の柄形磁器である。左側面が斜めに剥離しているのは鉄頭部の加熱度合いのためか。含鉄部は上面を通りを中心としており全体に重量も高い。長方形の底面は左側面が最も厚くしておらず、右側面に向かって徐々に厚くなる。また底面石突起には鉄頭部の含鉄土が山形に剥離しており、剥離度合であったとしても、左右の間に内側が異なる可能性もある。板に直面しても鉄頭が想定される上位には、鉄頭角部が強めで、素社鉄の要素量を上げる目的があるのかもしない。



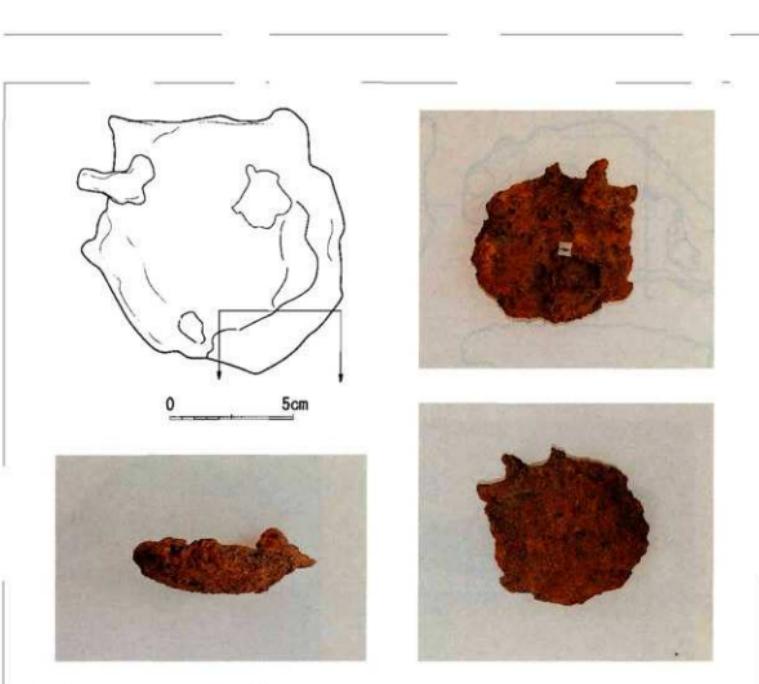
資料番号 3

| 遺跡名 | 寺内遺跡 2区 | 遺物名 | II | 目 | 海 | メタル |
|---------------------------------|----------------------------|-----------------------------------------|------------------------------|----------------------------|---|-----|
| 出土状況 出土位置 | G-11-7 | 特徴: 横棒 | | マテリアル | ○ | |
| 地層: TER-3 試料記号化: 一 放射化: — | 長 縦 10.0cm 法 短 縦 11.0cm | 8世紀前半: 出土土器 基物色: 一深茶褐色 漆表面色: 一茶褐色 | 諸存度: 完好 破面数: 0 | 密度 | ○ | |
| 遺物種類 (名稱) | 陶器調査 (合瓦、中) | 厚 約 4.5cm 重 量 407.0g メタル無 | 7 漆合皮: — 特徴(玄): 漆面剥離 ○ | 分析度 力口リー 放射化 X線透視 | | ○ |

調査所見 平(山)が小盆地をした。やや渾沌の典型的な扇形鉢である。上下蓋が浅い複形で肩部の一部が突出する。上面は縦やかなV字に盛み、うっすらと木炭痕が残っている。肩部前の2カ所に別個位の漆片が接着している。一方は粘土質でもう一方はやや緑の強い緑である。側面から下部はきれいな直角なし。その表面は微細な粒状構造に覆われている。はっきりとした漆表面の上部上の凹凸は確認できないが、部分的に漆表面色の上部が囲まれており、これらがその可能性を持つものかもしれない。它調査在山の漆場跡から漆表面色で、地は漆表面色である。

分析部分 真輪塗器角1/5を真鍮状に切削し、メタリックを中心分析に用いる。表面剥離部を、残材互換。

備考 考 中型の扇形鉢の典型的な扇形鉢を示している。上面がきれいなV字をなし、左右の厚みも特に盛りがない。



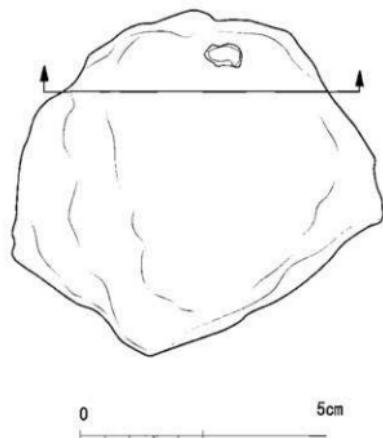
資料番号 4

| 出土状況 | 遺跡名 | 寺町1番路 2区 | | 遺物名 | 44 | | 項目 | 測メタル |
|--------------|-----------------|----------|--------|-------------------------------|--------|-------|---------|------|
| | | 出土位置 | C 12.4 | | 時期 | 初期 | | |
| 試料記号 | 標識: TER 4 | 長径 | 7.5cm | 表: 淩茶褐色 裏: 淩茶褐色 色: ~墨褐色 | 直徑 | 7.4cm | 分類 | ○ |
| 成形化 | — | 法 | — | 厚さ | 3.0cm | 5 | E P M A | — |
| 成形化 | — | 法 | — | 重 量 | 95.0 g | 鉛含量 | X線回折 | — |
| 遺物種類 (名前) | 模形鉄冶治 (合体。小) | 量 | — | 測定 (台) | 鉛質鉄 | ○ | 化學 | — |
| | | | | | | | 電気式 | — |
| | | | | | | | カロリー | — |
| | | | | | | | 放射化 | — |
| | | | | | | | X線透視 | ○ |

鏡形薄片、片面、不整円形をした小型で合体の複合鉄冶治である。上下面が反対おり片面が鋳型となる。鋳型面は2ヶ所ある。上面は中央部が隆起し、右肩寄りには瘤状にこみり出ぶくのが確認される。動作する木挽車は1ヶ人以下で、肩部は比較的小さいな特徴を示している。下面は全体的には瘤状で、底面の中心部を取り置む様にコブソリした突出部が左脚を中心と見ている。この突出部を含め底面全体に1ヶ人以下の木挽車や木挽のこみ込みが確認される。並列中央部の瘤みも木挽車の可能性が高い。這は反対は右側の方が強く、合体部が右寄りに底面間に広がっているものと推定される。色調は表面が濃赤褐色で、地は濃赤褐色から墨褐色である。

分析箇所: 表面全体1/4を直線状に切削し、メタル部を中心に分析に用いる。背面側斜面部。残存部。

説 春 寺: 鉄冶治が欠けているが小型の複合鉄冶治である。上面に比べて下部の凹凸が激しいのは鋳型かの如き上の木挽車に支えられる様にして形成されているからであろう。一部の突出部はその木挽車の底面に差し込むような形で形成した可能性が高い。資料全体の1/3程度が缺損と推定され、鋳型の最終段階または底面の鋳型後後に伴うものであろうか。



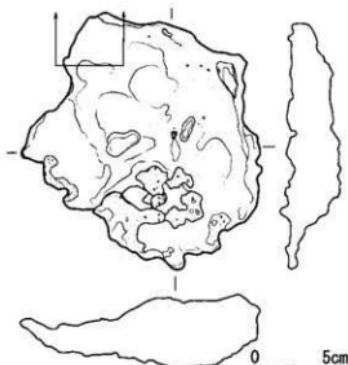
資料番号 5

| 出土状況 | 省略名 | 寺田工場跡 2区 | 備考 | 70 | 痕 | 作 | メタル |
|--------------|-----------------|-------------|-------------|-------------|------|---|-----|
| | 出土位置 | G-11-5 | 馬蹄: 鋼鉄 | 8世紀後半; 出土工具 | | | |
| 試料記号 | 化: TPR-5 | 直 径 15.0cm | 表面: 黄褐色、灰白色 | 遺存度 | 付録定期 | 分 | |
| 化: TPR-5 | 直 径 14.5cm | 厚さ 4.1cm | 端: 黒褐色・灰白色 | 破損状 | 1 | 機 | |
| 鉄製化: | 直 径 14.5cm | 直 径 6 | 前縁: | | | 機 | |
| | 直 径 14.5cm | 直 径 6 | 所用鉄道 | - | | 機 | |
| 遺物種類 (名稱) | 複数解石 (半消解石片) | 直 径 1016.0g | メタル度 L (●) | | | 機 | |
| | | | | | | 機 | |

説明所見 上面の左側部の左寄りに、半消解石や羽口の遺構がからうじて丸い大形の複形形鉄である。ほぼ完形で翼形に小さな欠けが確認される。平面形は不規則角形で大きな複円形とはなっていない。左寄りが最も厚く、右側に向かって薄くなっている。上部はほぼ平地で丁寧な木挽抜が施され、左側部には羽口の鋸部に加えて表面のガラス質漆や半消解石の瘤状にはりついている。右手寄りは一段盛んでおり木挽抜が施され、上面の右半寄りから手筋側にかけてはやや薄色となる。下部は全体が不規則な凹凸や些微な波紋に覆われている。左手寄りの把手部の底面は黒褐色の鉄生土がはりついているため黒褐色となっている。色調は表面が茶褐色で、半消解石周辺は灰色から黄褐色である。右は瘤部が黒褐色で半消解石周辺は前記と同様。

分析剖面 複数瘤部角 1/5を直線状に切削し、剖面を中心で分析に用いる。残材測定。

備考 左側から右寄りに向かって広がった複形形鉄である。上面半分に羽口の頭部や半消解石が統一、左側からの差違している片羽口による組合せである。木挽抜された大形の複形形鉄の多くは半消解石で、左右の両端部から半羽口により組合せられたものが多いため、本件はそれに似して片羽口であり、平面形も不規則である。比較的左手寄りの広い取扱いの足面近くで瓦層に残されたようにして形成されたものであろう。



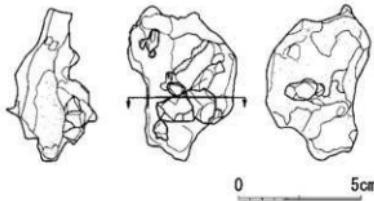
資料番号 6

| 出土地点 | 通 路 名 | 今井1選鉱 2区 | 遺 物 36 | | 78 | | 項 目 | 備 考 | メ ト ル |
|-----------------|-------------------|-----------|---------|------------|----------|-----|---------|-------|-------|
| | | | 時 期：横浜 | 8世紀後半：出土土器 | 表：黒褐色・白色 | 遺存度 | | | |
| 従 様：— | 民 族：— | G-11-7 | 法 庫：— | 表：黑色・白色 | 遺存度 | 破片 | マ ク ロ | 鏡 鏡 度 | |
| 試 作 号 化 学：TER-6 | 法 庫：— | 長 度：43cm | 生 漢 | 色：黑色、白色 | 破片数 | 分 | E P M A | X 線回折 | |
| 放 射 化：— | 法 庫：— | 高 度：5.8cm | | | | | 化 学 | ○ | |
| 試 物 种類 (名前) | 模形鉛鉱石 (平底系五付き) | 厚 度：2.0cm | 鉛 庫 度：1 | 発合度 | | | 化 火 皮 | | |
| | | 重 量：32.0g | メタル度 | な し | 鉛向標識 | — | カロリ一 | | |
| | | | | | | | 放 利 化 | | |
| | | | | | | | X 線透過程 | | |

試料所見 下面、左側下円形をした粘土質の扇形鉛鉱石である。重量で密度の高い鉛石はごくわずかである。主体は粘土質の層で、2cm以下の石英質の石粒が半溶けで残っている。二つ面は尖っており、堅膜部に小剥離が確認される。裏面は綿やかな板形でやや凹凸があり、下千手りに小さな複数の剥離が確認される。放射化も始まっている。上面左手は半透明が左右方向に向かい、幅2cmほど壁状に盛んでおり、洞口先の裏面孔の延長線を示す可能性がある。色調は表面が黒褐色から白色で、地は黒色と白色が混在する。

分析部分 延長部約1/3を直線法に切断し、半消解石として分析に用いる。残存透視。

備考者 通常の扇形鉛鉱石ではなく、粘土質で密度の低い軽量の層である。そのため前面を平面形を持たず、底面や下間に凹凸が残る。さらに本資料は右側面の深い石粒が上面を中心で残るもので、各々の石粒は半透明となっている。しっかりとした扇形鉛鉱石の中にも同じ様な半溶解の石粒を上面に残すでいるものがある。本資料では僅に扇形鉛鉱石の分化の最初段階で最初に粗い不規則が鏡面側面に投入されているということがわかる。こうした例は、大人材をもつ扇形鉛鉱石から小形のものにまで及んでいるが、小形のものの生年がより高い。さらに扇形の形状をとらないものを半溶解石として分類し慣習している。



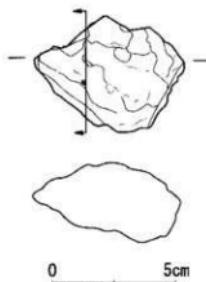
資料番号 7

| 出土状況 | 遺物名 | 24-I 漢灰 2 环 | | 直 径 | 高 度 | 96-2 | | | 項 月 時 | メモ |
|------------------------|----------|-------------|-------|-----|-------|------------|-----|----|-------|---------|
| | | テ 11 | テ 13 | | | 8世紀後半・出土土器 | | | | |
| 種類: TER-7 試料記号 化学: | 長 細: 長 細 | 長 底 | 6.1cm | 高 底 | 6.1cm | 表: 淡褐色 | 適 底 | 破片 | 分 | マ ク ロ |
| 成形化: | 直 径 | 4.5cm | - | 底 径 | - | 底: 淡茶褐色 | 底 固 | 2. | | 保 留 |
| 遺物種類 調査年 (名称) (合 稼) | 原 さ | 3.0cm | 底 厚 度 | 9 | 有 合 | | | | 析 | 反 |
| | 重 量 | 174.0g | メタル度 | 薄 | (含) | 無 | 樹脂 | ○ | | E P M A |
| | | | | | | | | | | X 線色 所 |
| | | | | | | | | | | 化 学 |
| | | | | | | | | | | 計 次 反 |
| | | | | | | | | | | ウロツ |
| | | | | | | | | | | 反 材 化 |
| | | | | | | | | | | X 線造 |

觀察所見 平面、不整円形をして純灰の青灰の鐵冶窯である。比重が高く、小さな粒状鉄を塊體の中にじみがる所に見られる。上下部は也ており左右の側面が垂直と考えられる。直径は2を数えく、全体重は並んだ積みである。上部は小さな平頂面で、左方に延びする面に鋸歯状に突出し、右側や右端が鋸歯している。通過X線像では内部に鋸歯が鋸歯している所が確認され、右側の方が密度が高そうである。色調は表面が茶褐色で、裏は暗赤褐色である。

分析部分 長軸端部1/3を直角状に切削し、マカル型を中心に分析に用いる。断面埋蔵地帯。残材添付。

備考 青灰、成形化性のような球凹形をもつ。浮遊と鉄が共存する資料である。鉄冶窯の資料と断定するだけの根拠に乏しいが、他の青灰の貯油庫や鉄冶窯系遺物の8割の高さから水倒もそれらのうちに含めている。分析結果に期待したい。



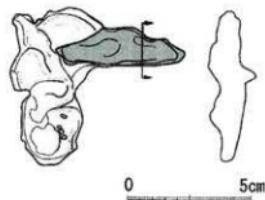
資料番号 8

| 出土状況 出土地点 | 遺物名 出土位置 | 寺町 I 芝井 2 区 G II 4 | | 遺物 No. 時間: 桜樹 | | 97 古墳後半: 土土器 | | 項目 マクロ 分類 E P M A X 線分析 化 学 容 水 度 カロリ 放 射 比 X 線造影 メタル |
|---------------------|---------------|-----------------------|------------|----------------------------|-------------|-----------------|----|-------------------------------------------------------------------------------------|
| | | 長 径 | 幅 | 表: 茶褐色 裏: 黄褐色 色: 黑褐色 | 深 度 | 幅 | 高さ | |
| 試料記号 化 学 反射光: | | 6.0cm | 6.0cm | | | | | |
| 測定結果 (各軸) | 縦 横 (鉛型取付) | 厚さ 1.5cm | 幅 1.5cm | 高さ 4.0g | メタル液 L ● | 青銅樹脂 ○ | 1 | |

観察所見 不定期な小裂の鉛治痕のなりかけで、上面には前の上方から順に鉛治が留めている。表面はやや高熱後の浮遊部が焼成してよく広がっているもので、左端部分の上面浮遊には小範囲が残されている。表面はやや高熱後の浮遊部が焼成してある。この範囲の周辺は土器質の部分で内部が発達しており、右方向に電子顕微鏡下に広がる浮遊部は残りである。下面は不規則な板状らしき凹凸があり、部分的に作が垂れ下がっている。上面に留めする鉛治は長さ5.1cmで、幅は約1.6cm程度の綿密な鉛治である。厚みは約0.6cmを有する。貴重方向に鉛治に差入しているが、これは熱による垂れかもしれない。表面表面は焼成土器に覆われ、錆びくれや熱剝離が確認される。先端は鉛部を中心とする茶褐色で、全体は茶褐色である。

分析部分 近縁部約1/4を直角状に切断し、メタル部を中心に分析に用い、鉛樹脂液滴を。焼成温度。

備考 例：複数鉛治済にはなりきれない柱状の、小さな突起に深い鉛治済の上面に鉛治が留められた貴重である。添え鉛部は完全に一体化しており、あとから付着したものではない。そのため邊の生鉛部と鉛部はは2cm弱の作員割合を示しているものと推定される。鉛治が鉛治の方法が加熱により留めしたものなのか、あるいは鉛模または鉛片の熱熟透けの事故などのかけられがされるが、透過顕微鏡では、内部の組織性が要である。

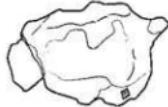
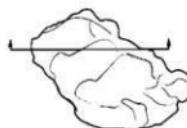


| 堆積名 出土状況 出土位置 | | 考古工事路 G-9-12 | 遺物名 時間：後期 8世紀後半：出土上器 | 101 | | 項目 分類 | 分類 項目 |
|-----------------------------------|-----------------|---------------------|--------------------------------|------------------|-----------------------------|---------------------|--------------------|
| 施設名：TBR-9 試験記号：化手：TBR-9 鉄化： | 法 | 長径 幅 厚さ 重量 | 75cm 45cm 52cm 157.0g | 色 調 形 質 | 黄褐色～黒褐色 褐色褐色～ 黑色 堅 | 遺存状 態 断面 面 | 薄片 不明 — ○ |
| 腐物種別 (名稱) | 病棟系遺物 (隕瘍系?) | 層 | 52cm | 形 質 | 堅 | 前香港 | — |
| | | メタル版 | 157.0g | 持し(合) | 新潟南(原) | 新潟南(原) | ○ |

概観所見 大部の木炭灰と焼化土砂に覆われた。上下両方に伸びる鉄機系遺物である。小さな当古に覆われており、黒褐色の表面は指紋できないが、全体觀からみて被覆を本末皆つものと推定される。見かけは伊内洋のように見えるが、各面とも切面が鋭く、底面は上位と判断される。表面に残る木炭灰は3cm大を越えるものから1cm大まで多様で、黒褐色にじみや棘がくの欠けも認められる。色調は表面の焼化土砂が新潟南で、内部部は黒褐色である。他は黒褐色から茶褐色である。

分析部分 長軸端部1/3を直角状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。切削面剖面図。焼材返却。

備考 東：内外面に木炭灰を残し表面に落部を残すが上部は焼付である。木炭灰の内で形成されたもので、薪としてはまとまって流動するまでに至っておらず、製造中の衣物木炭と直接に接して、ある程度は吸着をしている状態と考えられる。つまり、経済工場に持ち込まれた製錬系の鉄機系遺物の可燃性が高く、燃成初期から焼付段階では共通する特徴を持っている。いずれも本炭源が大きく、非常に不定型な四辺の放し形状をしている。なお、若干の落部で平成15年度に発表している考古工事路G-9-12を伴う鉄機系遺物の可能性があり、ここからかあるいは周辺の鉄機系遺物から持ち込まれた可能性の一つかう。



0 5cm



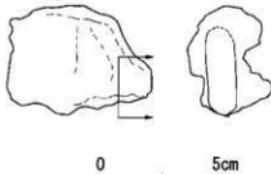
資料番号 10

| 地 上 状 況 | 地 下 位 置 | 空 洞 名 | | 重 量 | 性 質 | | 測 定 数 | 分 類 | 項 目 | 測 定 メ タ ル |
|--------------------------|------------------|-------------|-------------|--------|--------------------------|---------------|-------------|--------|--------|-----------------------|
| | | 空 洞 1 | 透 通 2 | | 重 量 | 性 質 | | | | |
| 地 下 位 置 | A-12-6 | 14kg | 根筋 | | | | | | | |
| 標 識 號 | TRR-10 | 長 36 | 5.6cm | | 茶褐色 表: 深茶褐色 底: 黑褐色 | 薄存在 度: 枝葉狀 | 3.7 | | | |
| 化 學 成 分 | — | 法 挖 36 | 4.2cm | | | | | | | |
| 遺 物 種 類 (名稱) | 根莖系 統(根茎?) | 厚 3 | 13cm | | 粗 度 | 7 | 存在度 | — | | |
| 量 | | | | 100.0g | メ タ ル 度 | 骨 (△) | 樹 脂 類 | ○ | | |

断面形状 半円。不規則な根状の鉢葉系遺物である。下面は生きており、左右の側面と手前側の側面が根筋または茎による切断部の可視性が高い。根の数は3を数える。上面には平行面で、側面は二重の裏面が生じては直線性で連続している。二重面を側面には語るがコブ状に突出し、裏面もこぶんでいる。下面の中央部に凹む部分の突出部は鉢葉状で、社土質の泥である。泥は全体に比重が高く、通過X線像ではメタル部が全体に広がっている。上面のやや外縁がわざかに藍色に染み、右斜面が一層少なくて見えるようにも見えるが、鉢葉くずや酸化土砂のための、見かけ上の形かもしれない。外縁は赤色が酸化土砂のため茶褐色で、透光部は深茶褐色である。油は濃茶褐色から墨色。

分析部分 長軸側端部 1/4 を L字状に仮断し、メタル部を中心にして分析用に用いる。切りぬき面整飾面。残存部。

備
考 根状の鉢葉系遺物である。青銅の3段が直角状に連続しており、その内の右側面と左側面は切り缺け状に斜めに小さく傾斜している。一方、上面に突出する鉢葉部の座は、かなりしつかりと固着してあり。あとから付着したものとは考えにくい。可能性としては、古い塊状の形状を示す最初工程の鉢葉鉢。または、中唐手の鉢葉(鉢頭)などが想われる。透光X線像では鉢打による鉢底や鉢頭などがはっきりせず、全体がメタルの塊がついているばかりの塊である。早く破れた「つぶした」鉢頭系の構造が復元できるか。もしもあれば、保存状態が良好で、充分分析した標準(鉢底)2点の、直前の工程に帰する手製品(鉢底)として評価されよう。



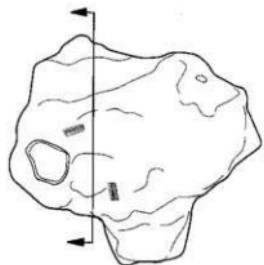
資料番号 11

| 出土記号 | 通 番 号 出土位置 | 寺田工走跡 2区 | | 遺 物 号 時期：後孫 8世紀後半：山古土器 | 114 | | 項 目 | 性 | メタル |
|---------------------------|---------------|----------|--------|------------------------------|---------|--------|---------|---|-----|
| | | G-9 | 12 | | 表： | 裏： | | | |
| 標識：TLR-11 | 長 度：5.5cm | 表：赤褐色 | 裏：深茶褐色 | 厚 度：3.0mm | 地：無色 | 破面数：3? | マ ク ロ | ○ | |
| 試料記号：T-11 | 幅 度：5.0cm | 表：赤褐色 | 裏：無色 | 重 量：100.0g | 種 類：砂岩 | 分 類：○ | 机 鏡 | ○ | |
| 試料記号：— | 厚 度：3.0mm | 表：無色 | 裏：無色 | 補 し (合)：○ | 所 有 者：○ | 分 類：○ | 鏡 面 | ○ | |
| 遺物種類：鉄製系遺物 (名前)：(鐵冶炉?) | 重 量：100.0g | メ カ ル 度： | 性 質：○ | 取 手：平 | 材 料：鐵 | 分 類：○ | 火 爐 | ○ | |
| | | | | 寸 付：手 | 形 状：丸 | 分 類：○ | カ リ ヤ ラ | ○ | |
| | | | | 付 し：手 | 形 状：丸 | 分 類：○ | 鉄 材：丸 | ○ | |
| | | | | | | | 鉄 材：丸 | ○ | |

複数見：平裏、不整な無孔をした北端約半分の長い鉄製系遺物である。上面は平坦な面で深い木板状を残す。側面は鍛造工作と推定される。表面では複数の凹部を有する。下面は全体的に深いV字形で、左半分は大型の水素瘤または工具痕である。右半分は大型の工具痕である。上面に光沢が古く削り跡から中心に低い土台が残る。下の面の一部に黒色が吹き、貧乏くの穴が鋸歯状である。縁部は表面には複数の凹部を有する。表面には複数の凹部を有する。表面には複数の凹部を有する。

分析部分：長軸端部1/3を直角状に切削し、メタル部を中心分析に用いる。剖面両断面を示す。焼材選択。

筆者等：鉄製のままが失く、上部が丁度気味で下面がやや複雑を示すことから、鉄製系の技術系遺物の可能性があるものとして扱っているが、鉄製系の技術系遺物である可能性も残されている。下面左側の僅みが木炭質か工具痕かで多少異なり異なるが、分析結果に反映している。どちらかといえば工具の可能性が高く、その意味から鉄冶炉ではないかと推定している個体である。構造No.103-Ng117はいずれも大型を残さないしほろを持つ鉄製系遺物で、鉄製系の技術系遺物の可能性が高い。



資料番号 12

| 品種名 出土地点 山土原屋 | 寺田工場北 2区 D-5 砂 | 着物 No. 硝酸：強烈 | IIIB 5世紀後半：出土土器 | 出日 アラロ ○ | 溶メタル ○ |
|---------------------|-------------------|----------------------|--------------------|------------------------------|--------------------------------------------|
| 後 著：TER-12 | 長 底 幅 細 | 丈：— cm 色：青 質：— | 通算度 破壊度 — | 分類 E.P.M.A X線回折 化 学 | 性 能 度 E.G.C カロリ 放射化 X線透視 |
| 試査記号 化学： | 法 | — cm | — | | |
| 放射化： | 法 | — cm | — | | |
| 遺物種類 (名前) | 被覆層 (4点) | 單 2 — cm | 形态 反 面 合反 — | 分析 — | 分析 — |
| | | 重量 g メタル度 | なし 鉛銅鉛 | | |

〔実施研究〕 鋼造工場の表面に設置した被覆物探取用の25cm方盤の土砂から、水洗分離により確認された被覆層である。被覆の強度により2部に分けた上で、さらに水の代用的な強度を基準としている。被覆層はD-5から2.5cm大のものを1点、E-9区から1.4cm大のものを1点抽出した。被覆層や塗の中から2.4cm大のものを1点、1.6cm大のものを1点抽出している。被覆層1点である。

分析部分 必要量を測定し、被覆層として分析に用いる。残存強度。

〔参考〕 本連絡の被覆層は被覆層のものが大多数で、表面強度探取用のメッシュは比較的広範囲にかけているが、測定された被覆層はかなり少なかった。これは被覆物探取用のメッシュを設定した時が、表面層上まで井戸が進んでしまった段階であり、測定所層が選ばれたためかもしれない。おそらく本連絡時に残されていた被覆層はさらに多かったものと想定される。次に被覆層のものが大多数であるという点については、粘土汁の多用ということが目的であるが、量の少なさとは農木では不適しており、上記の問題ともかかわり探討課題である。

資料網加 13

| | | | | | | | |
|--------------------------|-----------------------------------|-----------------------|----------------------------|--------------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 固 化 状 況 | 固 化 度 | 固 化 率 | 固 化 時 間 | 固 化 方 法 | 固 化 程 度 | 固 化 方 法 | 固 化 程 度 |
| | 固 化 度 | 固 化 率 | 固 化 時 間 | 固 化 方 法 | 固 化 程 度 | 固 化 方 法 | 固 化 程 度 |
| 試 料 記 号 | 接 続: TET-13 化 学: 放射能: | 長 短 法 豆 短 | - 日 - 日 - 日 | 表: 色 相: 色 相: 相: | - 薄 - 厚 - 厚 | 透 通 吸 透 吸 前 | 透 通 吸 透 吸 合 |
| 其 他 特 性 (名稱) | 銅 邊 鉄 片 (6点) | 重 量 | + g | メ タル 度 | なし | 無 限 期 | 一 |

観察所見 流動T_gの間に設定した地盤透水取扱いの25%方法の土砂から、水洗分析により確認された観察写真である。図中の強度により2層に分けた上で、さらに各層に別途代表的な顕微鏡写真を示している。粒径分析においては透水試験用ミックスからの出力用層が示されている。E-7とE-8から集中的にそれを抽出している。強度範囲が5mm²、0.1mm²、0.02mm²の3段階で、強度をやや弱めの3mm²、0.2mm²、0.01mm²の3段階で、混合比率がある。

分析評定「高齢者を基準」—能動性として分類に則する。胸椎歪形

考 寸法規の測定誤差は厚みが寸厚のものが主で、0.1mm以下の厚さのものは少なかった。これで構成された器具未商品や器具の構内からするとそれを考慮しておき、器具化された器具で未商品らしく其量規の量が多かった可能性を示唆している可能性がある。しかし2mm厚さといった器具のものもほとんど見られず、一般的の被験者被水準が確保されていたものと推定される。さもに平面性の低い測定誤差の半分が高いのは珍しく、岩盤といふ組合せによると測定誤差が形成される。これらも検査結果である。



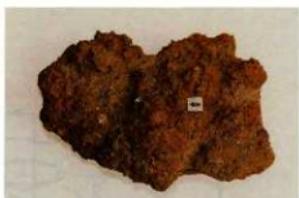
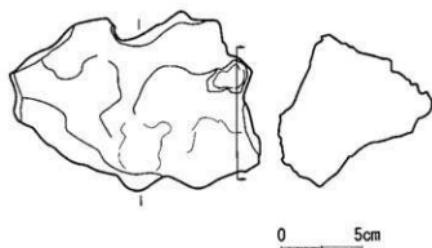
資料番号 14

| 出土状況 | 遺跡名 | 寺田工場跡 2区 | 遺物名 | 120 | 項目 | セ | メタル |
|------------|------|------------|-------------|------|-----|-------|-----|
| 井戸付置 | P-7 | 時代: 桐原 | 6世紀後半: 出土土器 | | マグロ | | |
| 種類: TBR-14 | | 長径 14.0cm | 表: 黄茶褐色 | 横角度 | 破片 | セ | |
| 試料番号 化学 | — | 色 肉 | 底: 黑褐色 | 破面数 | 5 | ビリマ | |
| 酸化度: | — | 幅 10.5cm | | | | アノマ | |
| 遺物種類 (名前) | 再結合済 | 厚さ 9.0cm | 縦 厚 度 6 | 耐含浸 | — | 化 学 | |
| | | 重量 1008.0g | メタル底 なし | 断面樹脂 | — | 耐 大 長 | |
| | | | | | | カロリー | |
| | | | | | | 酸 精 化 | |
| | | | | | | X線透視 | |

觀察所見、平面上不整な内形をした厚い底を持った再結合済の破片である。正面と下面上半側は丸めており、各位置と下図下手側が工芸品である。破面数は5を数える。正面はゴツゴツしながらも大きな形状で、一部に突出部を持っている。下面は中央部が斜面状に左下方方に突出している。周囲は底からまるく盛り上がりをしており、上手側の下面を水平にすると上面が上手側に傾斜し、逆に下面を水平とみると下手側の下面は40°近い傾斜面となっている。再結合している遺物は1枚大体の鉄鋤刃や多量の鋳造鋤刃が複数も含まれている。底部は目立たず、丁寧に接着部確認できる仕立てである。錆の多い鉄鋤刃や石英質の石粉も含まれ、底部の内側には多く下面を中心に確認される。縦断面は中央のものから薄手のものまで幅広く、薄手のものは無色のものが多い。薄手で青光を放している個体は大きさが小さいという傾向を持っている。

分析部分: 再結合部1/Sを放様状に削断し、再結合部として分析に用いる。残材追加。

備考: 零細剖面あるいは深い上坑中で再結合したためか、縦断した部分を示す再結合済である。P-7区という名前位置は水跡状の方形の跡みに接する地点で、土坑状の底みで再結合したことと上手側の底面の鉄鋤刃物等をしているものであろう。再結合済には薄手で青光る光沢をもった鋳造鋤刃が多量に確認される点は鉄鋤刃ばかりではなく、鉄製品そのものの加工もかなり行なわれていたことを示すものであろう。分析資料No13の外見となつた鉄鋤刃サンプルの中に、薄手の個体が少ないのは異常かもしれない。

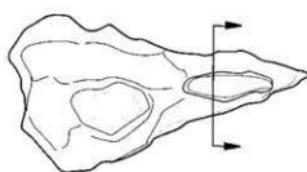


資料番号 15

細胞が見、長い三の角を有した状の老成度である。厚さでは7mm程度で平紙より下部はやや歪んでおり、成度の面を持つ。下地面には微化土砂が塊状に顯者としている。背面の方はきわめて薄い組織で、鍛打はあるものの骨の柱懸りより表面を剥離するといふもののが多くはあらう。逆に裏面は裏側を観るときの三角形の構造と左側上の舌状部や舌状化している状態である。裏面の構造はむしろ裏面が直角に舌状化している。5cm大のものが2枚で「アリ」はかなり多いものが多く、赤色は口開けである。上手側の個体の中央部は2cmほど高まっており、逆に左側の平岡形が低んでいたため、始端側の個体そのものは頭部より若干高さ化された所で並んでいたのである。左側は材料的に漁獲により逆手化をすることはやや珍しいように思えられ、この魚は裏面に切り身等とされ可食部位のあるものではない。裏面の表皮は裏側より薄く透明で、裏面は黒褐色である。

分析形態：初期複数の1/3を直線状に切断し、メタリ部分を分析に適する。断面形状改変。残存部加

考 7段などのように板状に加工された生糸または切り糸で、切削前の表面から鋸刃により三角形になる様に加工されている。そのため単純に刃形状の鉄部の形状から鋸にそのまま出来たものではなく、むしろ長い板状の棒状の材料の端部を尖らせてとぎ下したものを見ることが出来る。切り落とのかな木成品などのほか、歯車の加工が今一つはっきりしないため判断しにくい。易扱でいすることは構成が132、所133の明確な技術（技術）の特徴の1/2から1/3ほどの難しさがあるということである。



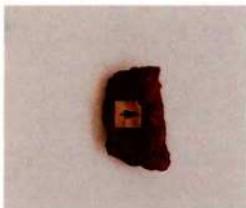
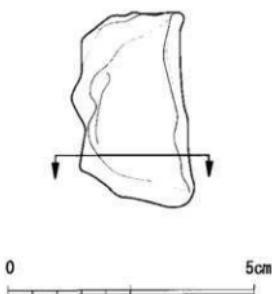
資料番号 16

| 出土状況 | 遺跡名 | 寺町I遺跡 2区 | 遺物名 | 136-2 | 項目 | 法 | メタル |
|------|---------------------|----------------------|-------------------|-------------|------------------------|---|-----|
| 出土位置 | | F-12-4 | 時期: 根拠 | 8世紀後半: 泥土土器 | マグロ | ○ | |
| 試料記号 | 後 墓: TEC 16 放射化: | 長 径 2.6cm 幅 4.0cm | 表: 深茶褐色 裏: 黒褐色 | 遺存度 完形? | 検 観 | ○ | |
| 遺物種類 | 灰 器 (板状未完成品) | 厚 底 1.4cm | 破 番 度 6 | 前含泥 - | E P M A | | |
| | | 重 量 21.0g | メタル質 L (●) | 断面黒褐色 ○ | X線回折 化 学 射 天 反 | | |
| | | | | | カロリー 放 制 化 X線透過程 | | ○ |

観察所見 平面、不整凸形をした漆抜狀の未完成品である。下下面是鋸刃型でわずかにねじれでおり、右側身と縫合部の内側面は直線状に邊切られている。ただし漆器はやんこを持ち重い成形である。それに対して右側面ははっきりと欠けたような平滑面形をしている。縫部が斜めに邊切れているように見え、要を入れてそこから折ったものかもしれない。横幅約1.3cm～1.5cm、2cmまでは不整方形板状に素加工されたものを、底に墨を入れて2つに折りとっている。本資料の厚みは約1.4cmである。色調は表面が漆茶褐色から黒褐色で、底は黒褐色である。

分析部分 漆抜端部1/4を直線的に切断し、メタル質を分析用に用いる。断面黒褐色。残存漆痕分布。残材端部。

備考 4mmほどの厚さの板状に彫刻された生材に墨を入れて糊っている未完成品である。次に特定の漆製品を作るための作業途上の未完成品であるのか、単純に残材の厚さを判断するための加工であるのか区別しがたいが、匠者の可能性が構成された類似品の多さから想定されよう。



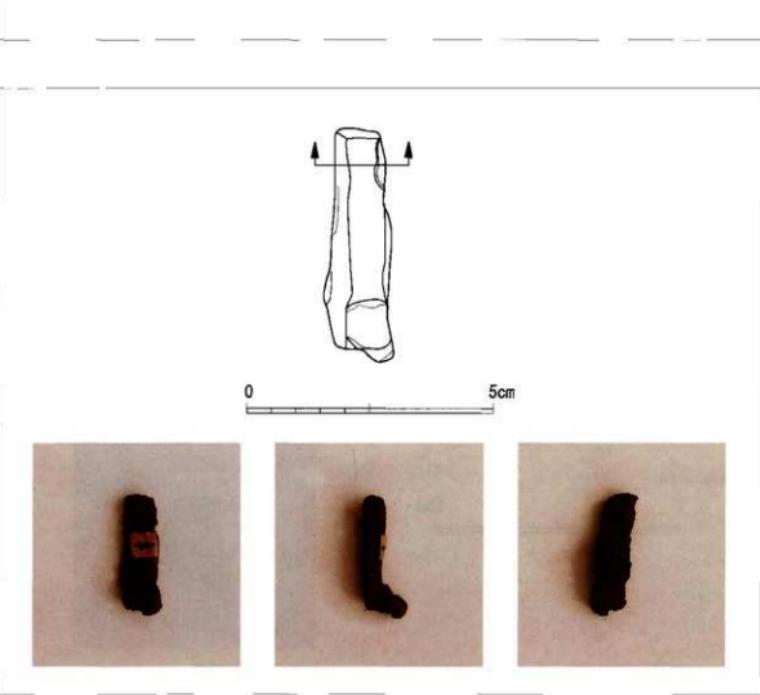
資料番号 17

| 遺跡名 | 寺町1通4-2区 | 遺物名 | 144-1 | 項目 | 測メタル |
|------|---------------------|------|------------------|----------|------|
| 出土状況 | F-12 | 時期 | 弥生後半 | | |
| 出土位置 | | 遺存度 | Ⅲ形 | | |
| 様式 | 長径 14cm 短径 4.7cm | 表面 | 赤褐色～黒褐色 地：黒褐色 | 分類 | ○ |
| 化學 | | 破壊度 | 0 | E.P.M.A. | ○ |
| 放射化 | | 崩落度 | | X線分析 | ○ |
| 遺物種類 | 鉄器 | 断面形状 | | 化學分析 | |
| (名称) | (角棒状未成品) | 厚さ | 7 | 形大きさ | |
| | | 重量 | 13.0g | 方四寸 | |
| | | メタル | M(○) | 放射化 | |
| | | 断面測定 | ○ | X線透視 | ○ |

説明所見 厚さ4mmほどの長方形の断面を有する角棒状の未成品である。割離方向にわざかに残り残っており、左右の脇部と上手側の脇部は完全な平坦面ではない。特に左手の脇部は斜めに壁に切り取った様に途切れている。下手側の上面には擦れがあり、迷路X透視では傷痕を作り出しているようにも見受けられるが、單なる擦れがくの點である。下手側も最もやかな平緩面にわずかに擦れが残っている。色調は表面が赤褐色から黒褐色で、極端黃褐色から黒褐色である。

分析部分 長軸端部1/5を直線状に削ぎし、メタルを分析に用いる。赤褐色塗装。殘材退却。

備考 考 角棒状に成形された未成品のようにも見えるが、赤褐色が鋭切りと算定される面を持ち、むしろ、分析資料144などの監査団と考え方を合わせると本質的に海板状の素材または未成品から、鋭により切り出された細長い鉛片の可能性が高そうである。事實、厚みや断面方向の次さはかなり近似している。備考144-1-3e-41-1はいずれも細長い角棒状の未成品で、かなり重複的に鋭切りされている可能性が高い。こうした特徴が物語ることは、4つの成形の厚みに引き伸ばされた鉛板状の素材から、鋭切りにより細長い棒状の抜筋を切り出している。ほぼ等一サイズの目的とする鉛製品を仕上げるための須治技術であろうと推定される。半ばに「成形の鉛製品を作る場合にはこのような加工手段を控む必要はない様に思われる。

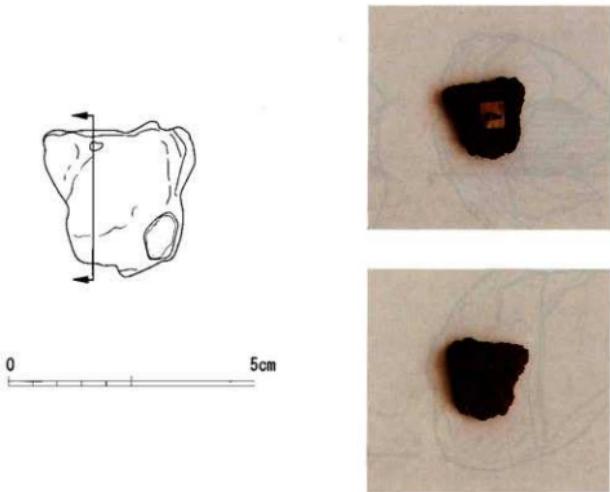


| | | | | | | | |
|-------------|------------|------------|----------|--------|---------|---|-----|
| 出土状況 | 遺跡名 | 寺庄1遺跡 2区 | 遺物名 | 146-2 | 項目 | 件 | メタル |
| 出土位置 | G-11-1 | 性別: 機械 | 表: 8世紀後半 | 出土土質: | マクロ | ○ | |
| 前 建: TER-18 | 長 度: 3.2cm | 年 齢: 2 | 裏: 漆黒褐色 | 透光度: | 微 銀 | ○ | |
| 試料記号 | 法 | 幅 度: 3.2cm | 地: 漆黒褐色 | 破面数: | 理 反 | ○ | |
| 放射化: | 延 長: | | | 27 | K P M A | | |
| | | | | | X線回折 | | |
| 遺物種類 | 量 | 厚 度: 1.0cm | 相 着 度: | 6 | 化 学 | | |
| (名称) | (種類?) | 重 量: 11.0g | メタル度: | 1. (●) | 耐 大 壓 | | |
| | | | | | カロリ一 | | |
| | | | | | 耐 硝 化 | | |
| | | | | | X線透視 | | |

概要説明: 浸漬状の漆製品の破片である。半瓦形は不整五角形で、上子側の右端部がわずかに上方に反り返っている。裏表面は、本末半圓気泡であったと考えられるが、漆ぶくれの影響のためかやや波打つような形状となっている。下面に比べて上面は「手に向かいわざかに傾斜している様にも見えるが、これが本廠の漆製品の形状を反映しているかどうかは不明である。波動的の身構え等みからみると、機械の破片かと鑑定される。上子の右端部がそり気味なのは柄物漆製品の折り返しに關わるものであろうか。はっきりしない。右側部は子有角が直線状に傾曲のように沿岸されている。色調は裏面が漆黒色から漆黒褐色で、地は漆黒褐色である。

分析結果: 長辺周縁1/3を底盤鉄に切削し、メタル部を剖面に用いる。底面肉眼透視。残存漆膜薄。

備考: 此の破片とすれば折りが約さくほの刃物のもので、後K-146-1-S-146-3迄が比較的に類似した漆器種類である。斧は別個体になるかもしれないが、漆としての凡通性はうかがえる。但しこれも破片で、本漆油工場の製品であるのか、古跡であるのかを推定していく。構成された漆製品の種類の多さや、不自然な被り山が存在する貴重が混在していることから、本資料は古跡として外殻から身込込まれた漆器片である可能性を鑑定しておきたい。構成K-13などは明らかに折り合せてある工の漆工具であり、本漆油工場が近辺の漆製品から身込込まれた漆器を漆油工場の漆油工場から漆油までの漆油加工のみではなく、それを素材としたリサイクル漆油をも扱っていた可能性が否いものと答える。



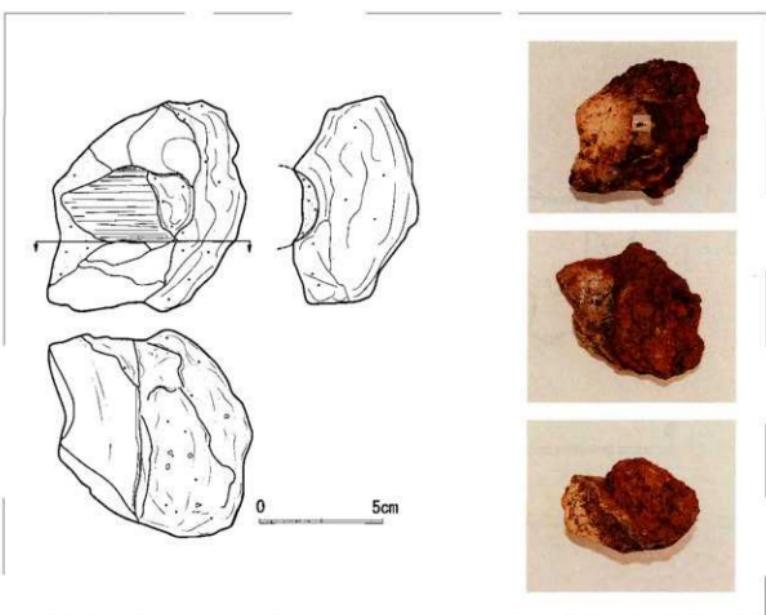
資料番号 19

| 出土地名 | 奈良「近跡」2区 | 遺物名 | 213 | 項目 | 件 | メモ |
|--------------------------------------|---------------|--------------|-------------------------|-------------------------------------|--------|----|
| 出土状況 小土丘裏 | F-II | 時 期 8世紀後半 | 性質：出土土器 | マ・タロ | | |
| 種類：TER-19 試料記号 化学：TER-19 放射化：— | 長 径 7.5cm | 色 調 淡褐色 | 表面度 表面色 淡褐色 黑色 | 板 線 度 | ○ | |
| 法 短 径 8.4cm | 高 度 4.0cm | 形 動 度 3 | 用 途 箱合便 | 送 交 日 名：M.A. | | |
| 遺物種類 (名称) 器 口 (破壊済付) | 重 量 323.0g | 材 料 メタル類 | な し | X線回析 化 学 射 穴 放 射 化 X線透視 | ○ ○ | |

観察所見 刃口先の裏部に不完全な柄部の焼落した痕跡である。刃口には新鮮の焼痕があり、先端部よりの裏面は薄く液化してしまっているため、使用時のひび割れからの焼失・汎化と考えられる。茎部側の裏面は新しい裏面で、汎化は認められない。被覆部は裏面が2面で、表層も裏面を被える。背面は外層が裏側方向に向いて剥離されたもので上半分と基底部が剥落している。通風孔部は円錐の痕跡で、先端部から約2cmほどの裏面に多く焼け抜けていている。柄上は心臓部の跡跡とスミをまばらに含むもので汎化は薄い。津裂部分は刃口の根元に沿って認めた不整焼刃形で、下部は本筋底の存在する範囲となっている。裏面は外層がやや粗く、中心部になるとつけ穴孔が少ない。下部の一端は櫛出伊の押え土の破片を裏側に埋め込んでいる。色調は裏面が灰褐色と茶褐色で、辺は淡赤褐色と黒褐色である。

分析部分 植物残部1/3を直面状に剖離し、鋸歯刃口として分析に用いた。焼材選択。

備考 ①-IIは裏面に裏側方向に向う剥離が多発するもので丁寧な作業である。ただし、ひび割れが認じたため部分的に質熱・津化してしまっている。鋸歯部は不完全な剥離のもので、さらに右方側に広がるもののがある。本遺跡では裏面に焼付件を残すものは裏側で焼成点数としては5点のみである。本資料からは選着角度が比較的弱いということを読み取れる。

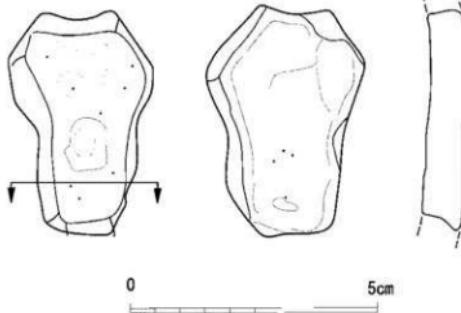


| 出土地名 出土状況 | 地名 出土位置 | 空口1-2番地 2区 G-11-10 | | 測定No. 時期: 桜井 | 223 8世紀後半: 出土土器 | | | 項目 アクリ 後輪 後輪 分 SPMA X線 化 耐火度 カリ 吸水化 X線透視 |
|--------------|-----------------------------|-----------------------|-------------------------|------------------|--------------------|--------|----------|---------------------------------------------------------------------------|
| | | 長 径 | 幅 径 | | 色 別 | 片 厚 | 破片数 | |
| 資料記号 件名: | 松: 7ER-20 松: — 敷石化: — | 法 規 量 | 4.5cm 2.0cm 0.7cm | 赤色: 暗褐色 他: 褐色 | 淡青色 他: 褐色 | 1 | 前火候 — | 析 |
| 遺物種類 (名称) | 土器粘用ルツボ | | 10.0g | タル 底 | なし | 好因縫隙 | — | |

観察記述：土器部の裏を都用した土器粘用ルツボの内部断面である。内面には黒褐色のガラス質層が薄く張り付いている。また漆のぬいところでは半光沢の青苔状の凹凸結構が確認される。上部断面としては瓦片が生きており、裏面は全面追面である。被石跡は見られない。土器としての粘土は1mm大前後の石英質の砂粒を含むもので比較的厚く作られている。外壁はテクスチャの複雑なナガにより上部に要形されている。内壁に付着する漆は最も厚いところで0.7mmほどで、底部では土器表面が発達している部分で確認される。また漆の一部が紫紅色で、漆拭痕の発色を示す。前述した青苔状の斑点もたとえ金属中の一例の合金成分の鉄晶かしない。色斑は土器側が灰色で、漆部は黒褐色である。土器側の底は火色となっている。

分析部分：粘土層部1/5を直接的に剖析し、漆剥離中心に分析に用いる。残材追加。

備考：同一個体と肯定される複数片は多く出土しているが、土器として復元出来るほどの破片数ではない。そのため、内面に剥離が薄く残る破片は剖面できるが漆等の確認されない破片は同一個体とは判断しにくい状況である。代表的な片は11枚。複数同じに見れている。内面の漆部分の色は赤褐色のものや1mm大前後の砂粒の吹いた青苔状の点在するもの。あるいは黒褐色の発達した漆面が広がるものなど多岐なものである。また土器としては外壁にカリ日本語で「さわぎ」と書かれたものや被石のためやや歪んでしまったものなども観察されている。内壁は漆剥離から全体をすべて漆面にまで漆化が及んでいると考えられ、通常の底足部のひみを用いる粘用ルツボとはかなり使用法が異なっているものと判断される。なおルツボが内張りとした粘質の漆液跡との直接的な関連の有無は判断出来ない。

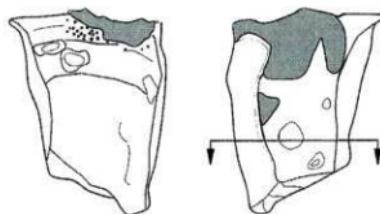


| 出土状況 測定名 測定部 | 測定名 測定部 | 寺田1遺跡-2区 | | 測定 No. 時期: 極期 測定部位: 出土工具 | 231 | | 項目 テクニコ 後退度 R.P.M.A X線回折 化学 耐火度 カロリ 放熱化 X線透過 |
|---------------------------------------|-------------------|-----------------------|-------------------------------------|--------------------------------|-------------------------------------------------------|-------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|
| | | G-13-14 | 色 長 幅 厚さ 電 重 | | 赤白色・黒色 赤: 黄褐色 白: 紫紅色 2.0cm 1.5mm 40.0g | 薄皮化 成形 前後 無 無 無 無 | |
| 試井記号 化 学 鉱物化 測定種類 (名物) | 小型ルツボ (古銅、青銅器) | 後 徳 化 度 集 | 4.0cm 3.0cm 1.5mm メタル 重 | 8後紀後半: 出土工具 | 3 3 - - - - - - | | |

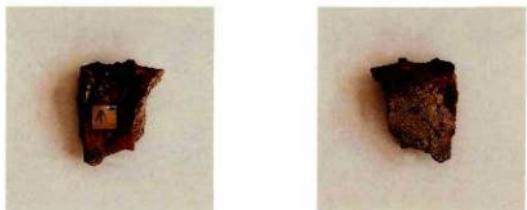
断面所見 小型ルツボの口縁部から内部にかけての断面である。内面全体と、唇部を除いて外側の上三分部が溶化している。ルツボは厚さ1.5mm程度の手捏ねのもので硬質である。外側には古いサケ革が施被するように焼されている。両側面と底部が破損となっている。破損部は3を数える。部分は1mm大程度の石英質の粒状とわずかに斜面やスカリを含むもので、部分的に剥離したりガラス化したりしている。内外壁の溶化の程度はましまで黒褐色の部分が多い。1付部は墨色ガラス質部となり、内部の一端は透明な淡緑色のガラス質となっている。内面には1mm以下の粒状の砂質のふいた青銅系の粒子が点在している。溶離の最も深い部分は、内面の右側部あたりで厚さは約1.5mmである。口付部の左側部は溶離してえぐれるように色んでいる。供試は手捏ねの表面が赤白色で、底は紫紅色であり、ガラス質部は赤色から紫紅色とチャイク状である。

分析剖面 縦横端部 /3を直角状に切断し、断面を中心にして分析に用いる。残材返却。

備考 手捏ねの丸底状の小型ルツボである。底面には丁所を取り上げているがいずれも接着せず、被削脱離や刃物も削離体であることを窺わせるものである。底部の黒褐色の深いものや墨色のものなどが確認されるが、対象合算が異なるかどうかは分析が必要である。いずれにしても青銅系の合金化時の中身であろう。なお、これに対応するように先端部外側が紫紅色になつたにも小数ながら出土している。



0 5cm

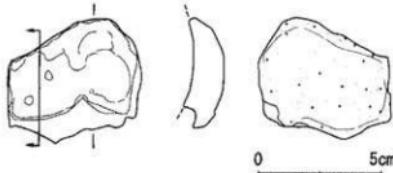


| 出土状況 出土地点 | 遺物名 G 11-3 | 遺物名 時代: 銅鏡 | 241 | | 項目 | 否 | メタル |
|----------------------------|-----------------------|----------------------------|----------------------|---|----|---|-----|
| | | | 表: 銀紅色、回褐色、重複度 鏡片 | 分 | | | |
| 試料記号 化 学: —— 放射性: —— | 法 地: 鏡 幅: 1.5cm | 色 調 地: 銀紅色 表: 銀紅色 | 重複度 鏡片数 4 | | | | |
| 遺物種類 1 (名称) 漆器 | 厚さ 1.2cm | 倍 増 度 1 | 前後度 | | | | |
| | 重 量 45.0g | メタル度 錫化△ | 鏡面用漆 ○ | | | | |

説明所見 内面が銀紅色にガラス化した場所の内側破片である。平面形は細やかな弧形で、ガラス化した内面には点々と4mm以下の鋸歯の吹いた枝が頭を出している。頭は丸い角張った不規則の參松土体で、わずかにつなぎの粘土が重じる。漆片や1.5cm大的漆面に伴う漆状薄を含んでおり、鏡面の周辺で残り上げられた内側土と考えられる。内面の銀紅色に強く、ガラス化の表も無い不規則形では1cm近い厚さを有している。色調は内面が銀紅色で、内側の土上は深褐色、底は濃紫紅色と回褐色である。

分析的分 表鏡部1/3を裏襷式に切断し、漆部を中心に分析に用いる。断面物観察用。残材起用。

備考 等 錫成No226～No228はいずれも粗い砂粒を粘土に閉じた寸前の内層破片である。全てが堅いので断面形を持つている。こうした形状は小型漆器の内壁とは一様せず、底土した漆器群の中では土器軽用漆器の内層底器付近の内層部分でないことを合意がない。但し構成No226～No228は土器軽用漆器の外壁破片のみで、砂質の内壁土の割合は全く見られない。従って構成外の土器軽用漆器の底面付近のバッフが本器は存在した可能性がありそうである。



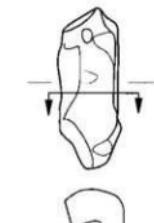
資料番号 23

| 出土地名 出土位置 | 今日1遺跡 2区 G-II 15 | 測定 No. | 249 | 項目 | 名 | メタル |
|--------------|---------------------|---------|----------------------|-----------------|---|-----|
| 株 級: T19R 23 | 高 度: 3.6cm | 地 程: 植被 | 3世紀後半: 出土を器 | マテリ | 現 | ○ |
| 試料記号 化 学: —— | 幅 種: 1.2cm | 色 調: | 青: 黑褐色、緑青色 地: 黒褐色 | 使 用 度 | ○ | |
| 数値化: —— | 厚 度: 1.0cm | 相 異 度: | 1 | E P V A | | |
| 遺物種類 (名称) | 新 作 (合 例) | 重 量: | 5.0g | X線回折 化 学 分 析 | | |
| | | メタル度: | 鈎化(△) | 耐 火 度 | | |
| | | | 断面形態 ○ | カロリー | | |
| | | | | 数 値 化 | | |
| | | | | X線透視 | | |

観察所見：外面上に錆斑の吹いた粒状の酸化物が確認できる小塊状の漆片である。上下面と右側面は生きており、左側面が分離面である。複数枚は2を挿入。逆塗方向に張り出で、下面はややぐれ気味である。直径は1cm以下の木炭粒が残り、半球状の下部は繊維な凹凸を持ち、均らかの粘土質の広葉や剥離感と並ぶ。漆質はややガラス質で、内面に1mm以上上の板を持つ水密性を残している。漆には光沢がなく、くすんだ黒褐色の底面となっている。色調は表面が深褐色と緑青色である。地は黒褐色。

分析部分：底面漆部1/2を裏剥離状に切削し、漆層を中心に分析に用いる。断面漆層塗布、残材追加。

備考：塗膜方向に張り出で、裏剥離系の剥離先で、逆塗口部を取りあくように。あるいは笠隔熱外壁に沿って剥離された漆と鑑定される。本漆片では他に小型ルツボの底面や土壠転用ルツボの一部で形成されたような裏剥離系の漆片も確認されており、いずれも構成上に反映している。



0 5cm



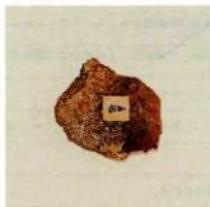
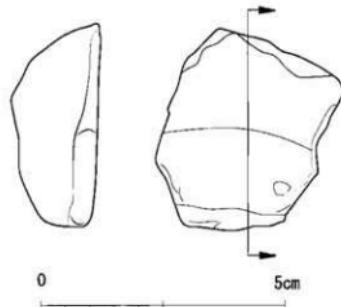
資料番号 24

| 出上状況 | 寺田1遺物 2次 G-11 | 備物 No. | 254 | 項目 | 港 | 砂土 |
|--------------|--------------------------------|-------------|-------------------------|---------------------------------------------------------|-------------|--------|
| 出上位置 | 寺高：標高 G-11 | 寺高：標高 | 古墳時代：出土土器 | アクリル 鏡 鏡 鏡 E.P.M.A 文織 磁石 化 研 分析 | ○ | |
| 出上記号 | 枝：TRR-24 化 学：TRR-21 放射化： | 長 幅 厚 | 4.0cm 3.2cm 1.5cm | 度：灰褐色・深紅色 地：灰褐色 透視度 1 | 薄 度 7 | 分 数 |
| 遺物種類 (名前) | 羽口 (青銅器) | 量 | 560g | 形 動 様 メタル度 な | 前古役 断面標記 | - |

調査研究 先端部の外周が茶褐色に変化している複身の羽口片である。表面は欠落して破れとなっている。先端部の外のみが生きており、内側には小破損が確認する。被覆性は7を数える。羽口底土は2.5cm以下の石灰質の砂を多めに含む複質のもので、わずかに翡翠の痕跡が確認される。先端部は半透光体で、外側の2cmほどが薄く透明している。外側外周は灰褐色を呈する複合気泡である。既にガラス化された部分的に埋もれたり割れが付いている。外層は黄褐色以下に翠の模様が入りにより彫刻され、丁寧なつくりといえる。化粧は表面が茶褐色と灰褐色で、辺は灰褐色である。

分析部分 透視図終1/2を直線状に切断し、側面の羽口として分析に用いる。残材返却。

傷 害 方 表面が紫紅色にガラス化した青銅器の羽口と推定される。周囲の羽口は4点を構成上に取り上げており、複身の羽口が2点で、裏古羽口に多い中間のものが2点である。被覆性が違うためか背景色の羽口は動土部分の変化が強く、崩壊による変形やひび割れからの使用時の脱落などが目立っている。セットとしては土器専用ルツボや小型ルツボに洋うものと推定される。



第11表 寺田I遺跡2区鍛冶造構主要要素一覧表

| 主要要素 | 工種 | 製錬 | | 精錬 | | 鍛錬 | | 説明 |
|------|-------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------|--------------------------|--------------------------|-------------------------|-----------------------------------------|---------------|
| | | 種別 | 成形 | TiO ₂ : ~3.1% | TiO ₂ : 3~11% | TiO ₂ : 1~0% | TiO ₂ : ~0% | |
| 性別 | 流動津 | TER-1 (5.41) | | | | | | |
| 物質 | 鉄形鍛冶滓(含鉄) | | TER-2 (3.94) | | | TER-19 (0.58) | TER-3~4 TER-5 (0.57) TER-6 (0.29) | |
| 分類 | 鍛冶滓(含鉄) | | | | | | | |
| 状態 | 粒状津 | | | | | | ○ | |
| 資材 | 鍛冶滓片 | | | | | | ○ | |
| 材料 | 鉄塊系遺物 | | | TER-9 (1.26) | | | | |
| 再結合 | 再結合津 | | | | | | | |
| 工具 | CS-L | | | | | TER-24 (0.55) | TER-19 (0.58) | TER-24 (0.55) |
| 遺物構成 | 流動津 (8,245 g) 鉄形鍛冶滓 (316,549 g) 再結合津 (38,318 g) 鉄素材・製品 (885 g) | 津口 (46,121 g) 灰鐵 (2,331 g) 鉄塊系遺物 (3,785 g) 鍛冶道具 (116,797 g) 鋼鋼筒・鐵滓 (1,080 g) | | | | | | |
| 統計 | 鉄形鍛冶滓 | 長円形状鉄形鍛冶滓 385点 (61.5%) | | | | 円形状鉄形鍛冶滓 366点 (38.5%) | | |
| 遺物 | 重量 | ~0.30g | 0.31~1.00g | 1.01~2.00g | 2.01~3.00g | 3.01g~ | 小計 | |
| 遺物 | 鍛冶滓片 | 19.07g | 31.92g | 20.37g | 15.82g | 33.47g | 120.65g | |
| 遺物 | 羽目 | 15.80% | 26.50% | 16.90% | 13.10% | 27.70% | 100% | |
| 遺物 | 通風孔直径 | ~3.1 | 3.0~2.7cm | 2.6~2cm | | 鶴円形 | 小計 | |
| 遺物 | 立場・規模 | 山間谷部内向きの斜面。平地からの比高差11m。長さ3.7m、奥行2.0mと推定される。 | | | | | | |
| 遺物 | 施設 | 斜面を平らにカットした、堅模な簡易な施設と推定される。 | | | | | | |
| 遺物 | 1号鍛冶炉 | 外法は長軸40cm、短軸35cm(推定)で構造形を呈する。長軸の両方向から津口が挿入される。羽目の設置形が推定される。 | | | | | | |
| 遺物 | 2号鍛冶炉 | 炉床410cm 短軸30cm 炉床のみ残存 | | | | | | |
| 遺物 | 形状・規模 | 縦幅77cm、横幅50~60cm、深さ7~12cmの半丸不整長方形状遺構。 | | | | | | |
| 遺物 | 特形様遺構 | 生格 | 未面堆積土に鉄滓みが多量に含まれることから粗打の鉄錬鍛冶作業場と推定される。 | | | | | |
| 遺物 | 再結合津固結部 | 規格 | 鍛冶工房の内側に東西1.85m、南北1.88mの範囲で床面に津が形成 | | | | | |
| 遺物 | 津洋場 | 考察 | 固結部の下に津がつまつた軋り込みが3ヶ所確認されることから、津面当初の鍛冶炉の可塑性が窺われる。 | | | | | |
| 遺物 | 柱穴 | 津洋場 | 鍛冶遺露の西側の斜面に、長さ8.0m、横幅5.2mの範囲で広がり、厚さ約50cmほど包含層が堆積する。 | | | | | |
| 時期 | 1号鍛冶炉 | 3穴 | | | | | | |
| 時期 | 2号鍛冶炉 | 炉内混入木炭の"C年代 交点A D660 (A D640~670・A D620~690)" | | | | | | |
| 時期 | 3号鍛冶炉 | 年末の地磁気年代 A D740±15・A D1100±20 | | | | | | |
| 遺構 | 津洋場 | 津洋場の木炭 "C年代 交点A D780 (A D680~890)" | | | | | | |
| 遺構 | ① | 本鍛冶内遺構は、精錬鍛冶を中心とした津頭も行なわれ、また1号鍛冶が有り口の後砲をもつものと考えられることから官営様式の鍛冶工房と想するが妥当か? | | | | | | |
| 遺構 | ② | 本遺構では当社七寄りの再結合津(4軒足あたりに鍛冶炉が置かれ、順次2号鍛冶炉、1号鍛冶炉で操業されたと想われる。操作者は鉄骨利出土遺物の時期に行なわれたものと推察される。) | | | | | | |
| 遺構 | ③ | 本遺構では低チタンの砂鉄を原料とした鉄素材を用いて鍛冶が行なわれていたと考えられる。 | | | | | | |
| 性格 | ④ | 本遺構では精錬鍛冶から鍛錬鍛冶までの一連の鍛冶作業に加え、例ないし銅合金の鋳造が行なわれていたと考えられる。 | | | | | | |
| 性格 | ⑤ | 本遺構では鋼ないし銅合金の鋳造作業が行なわれたと推定される。 | | | | | | |
| 性格 | ⑥ | 凸出した羽口には鍛治と鋸接の両方に使用されたとみられるものが認められる。 | | | | | | |
| 性格 | ⑦ | 本鍛冶内遺構の最終操業時期は飛鳥8世紀後半と推定される。T字では、韁頭や銅製品など調物的な製品が作られていたと想われる。 | | | | | | |

5 区

表第12 寺田1遺跡5区製鐵闕運送物銀察表

概要

| 測定点 | 道路名 | 通称名 | 二重(%) | 面積(%) | メタセコイア |
|-----|---------|------------|-------|-------|--------|
| 20 | 桂川橋西側 | 柳原(左)コナ(右) | 3800 | 1 | なし |
| 21 | 桂川橋西側 | 柳原(左)コナ(右) | 1800 | 3 | なし |
| 22 | 桂川橋東側一橋 | 柳原(右)柳原(左) | 379 | 1 | なし |
| 23 | 桂川橋東側二橋 | 柳原(左)柳原(右) | 672 | 1 | なし |
| 24 | 桂川橋東側三橋 | 柳原(左)柳原(右) | 1000 | 1 | なし |
| 25 | 桂川橋東側四橋 | 柳原(左)柳原(右) | 1600 | 1 | なし |
| 26 | 桂川橋東側五橋 | 柳原(左)柳原(右) | 1200 | 1 | なし |
| 27 | 桂川橋東側一五 | 柳原(左)柳原(右) | 1400 | 4 | なし |
| 28 | 桂川橋東側一橋 | 柳原(左)柳原(右) | 405 | 3 | なし |
| 29 | 桂川橋東側二橋 | 柳原(左)柳原(右) | 4200 | 2 | なし |
| 30 | 桂川橋東側三橋 | 柳原(左)柳原(右) | 4200 | 2 | なし |
| 31 | 桂川橋東側四橋 | 柳原(左)柳原(右) | 1200 | 3 | なし |
| 32 | 桂川橋東側五橋 | 柳原(左)柳原(右) | 2600 | 2 | なし |
| 33 | 桂川橋東側六橋 | 柳原(左)柳原(右) | 2000 | 3 | なし |
| 34 | 桂川橋東側七橋 | 柳原(左)柳原(右) | 2500 | 3 | なし |
| 35 | 桂川橋東側八橋 | 柳原(左)柳原(右) | 1600 | 5 | なし |

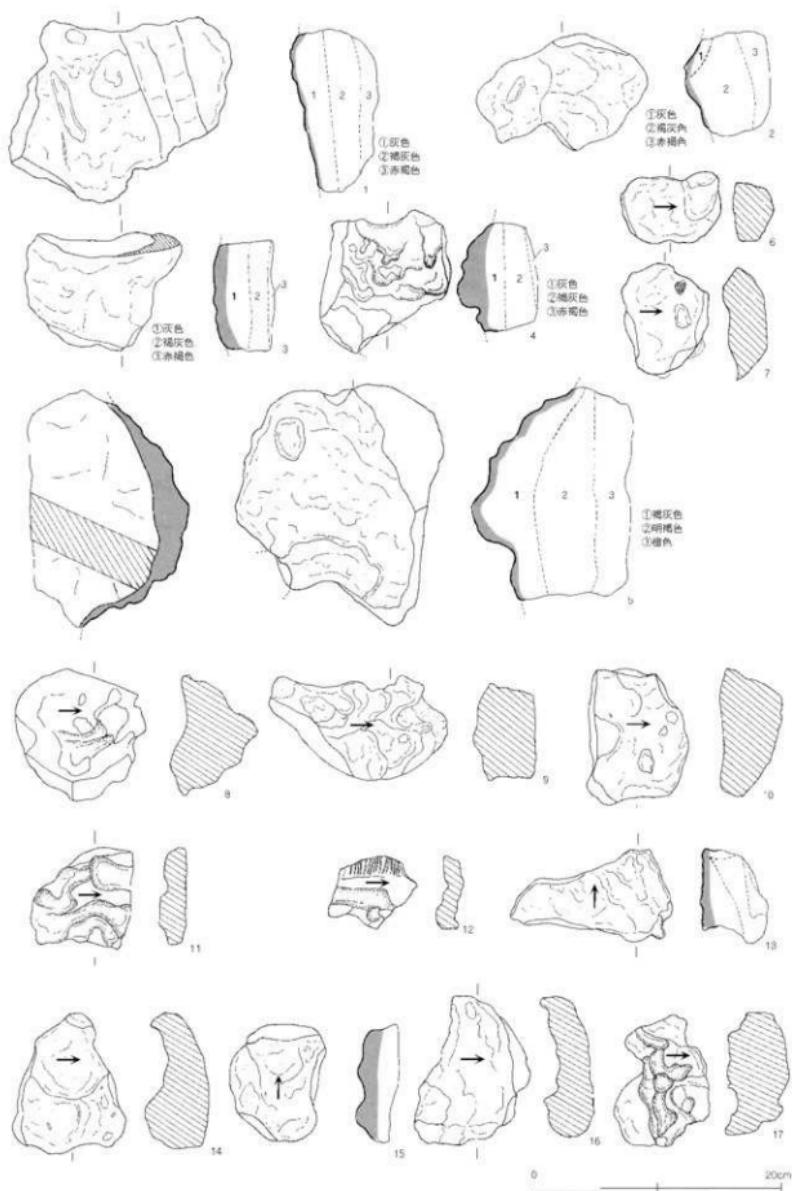
| 種類No | 種類名 | 產物名 | 品目 | 基準(%) | 経済性 | メタセコイア |
|------|---------|------------------------------|------|-----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 36 | 樹脂剥離液 油 | 樹脂(中油・重油) 溶剤油 | - | 2200 | 5 なし | 内面が表面層に溶化して、つらひの重油が溶けなくなったり水溶性で溶かす。樹脂が溶けてから見ると出没するがなく、蓋付で貯蔵する。樹脂が溶けた後は、樹脂を含む油をそのまま貯蔵する。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。 |
| 37 | 樹脂剥離液 油 | 石油(中油・半) | 1600 | 2 なし | 内面が表面層に溶化して、つらひの重油が溶けなくなったり水溶性で溶かす。樹脂が溶けてから見ると出没するがなく、蓋付で貯蔵する。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。 | |
| 38 | 樹脂剥離液 油 | 中油(中油・半) 溶剤油 | 2800 | 2 なし | 内面が表面層に溶化して、つらひの重油が溶けなくなったり水溶性で溶かす。樹脂が溶けてから見ると出没するがなく、蓋付で貯蔵する。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。 | |
| 39 | 石油剥離液 油 | 樹脂(中油・半) 溶剤油 | 6200 | 3 なし | 内面が表面層に溶化して、つらひの重油が溶けなくなったり水溶性で溶かす。樹脂が溶けてから見ると出没するがなく、蓋付で貯蔵する。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。 | |
| 40 | 樹脂剥離液 油 | 中油(中油・半) 溶剤油 溶剤油(半) | 4320 | 4 H(C) | 内面が表面層に溶化して、つらひの重油が溶けなくなったり水溶性で溶かす。樹脂が溶けてから見ると出没するがなく、蓋付で貯蔵する。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。 | |
| 41 | 樹脂剥離液 油 | 石油(中油・半) 溶剤油(半) 溶剤油(半) | 6600 | 6 なし | 内面が表面層に溶化して、つらひの重油が溶けなくなったり水溶性で溶かす。樹脂が溶けてから見ると出没するがなく、蓋付で貯蔵する。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。 | |
| 42 | 樹脂剥離液 油 | 中油(中油・半) 溶剤油(半) 溶剤油(半) | 2800 | 3 なし | 内面が表面層に溶化して、つらひの重油が溶けなくなったり水溶性で溶かす。樹脂が溶けてから見ると出没するがなく、蓋付で貯蔵する。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。 | |
| 43 | 樹脂剥離液 油 | 樹脂(中油・半) 溶剤油(半) | 2200 | 2 なし | 内面が表面層に溶化して、つらひの重油が溶けなくなったり水溶性で溶かす。樹脂が溶けてから見ると出没するがなく、蓋付で貯蔵する。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。 | |
| 44 | 樹脂剥離液 油 | 樹脂(中油・半) 溶剤油(半) | 4800 | 5 H(C) | 内面が表面層に溶化して、つらひの重油が溶けなくなったり水溶性で溶かす。樹脂が溶けてから見ると出没するがなく、蓋付で貯蔵する。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。 | |
| 45 | 樹脂剥離液 油 | 樹脂(中油・半) 溶剤油(半) | 3400 | 4 なし | 内面が表面層に溶化して、つらひの重油が溶けなくなったり水溶性で溶かす。樹脂が溶けてから見ると出没するがなく、蓋付で貯蔵する。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。 | |
| 46 | 樹脂剥離液 油 | 中油(中油・半) 溶剤油(半) | 5322 | 7 H(C) | 内面が表面層に溶化して、つらひの重油が溶けなくなったり水溶性で溶かす。樹脂が溶けてから見ると出没するがなく、蓋付で貯蔵する。内面は表面層が溶かす。内面は表面層が溶かす。 | |

| 標識名 | 遺産名 | 遺 墓 名 | 墓地名 | 総面積 | メタカラ |
|------------|---------------------------------|--------|--------|------|------|
| (7) 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) 遺陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 1600 | なし |
| (8) 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) 遺陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 489 | なし |
| (9) 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) 遺陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 1200 | なし |
| 50 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 2200 | なし |
| 51 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 1800 | なし |
| 52 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 254 | なし |
| 53 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 1600 | なし |
| 54 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 5200 | なし |
| 55 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 2800 | なし |
| 56 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 2800 | なし |
| 57 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 2200 | なし |
| 58 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 1800 | なし |
| 59 桐原御陵一塚 | 御陵(1段上) 遺陵(1段下) | 桐原御陵一塚 | 桐原御陵一塚 | 1600 | なし |

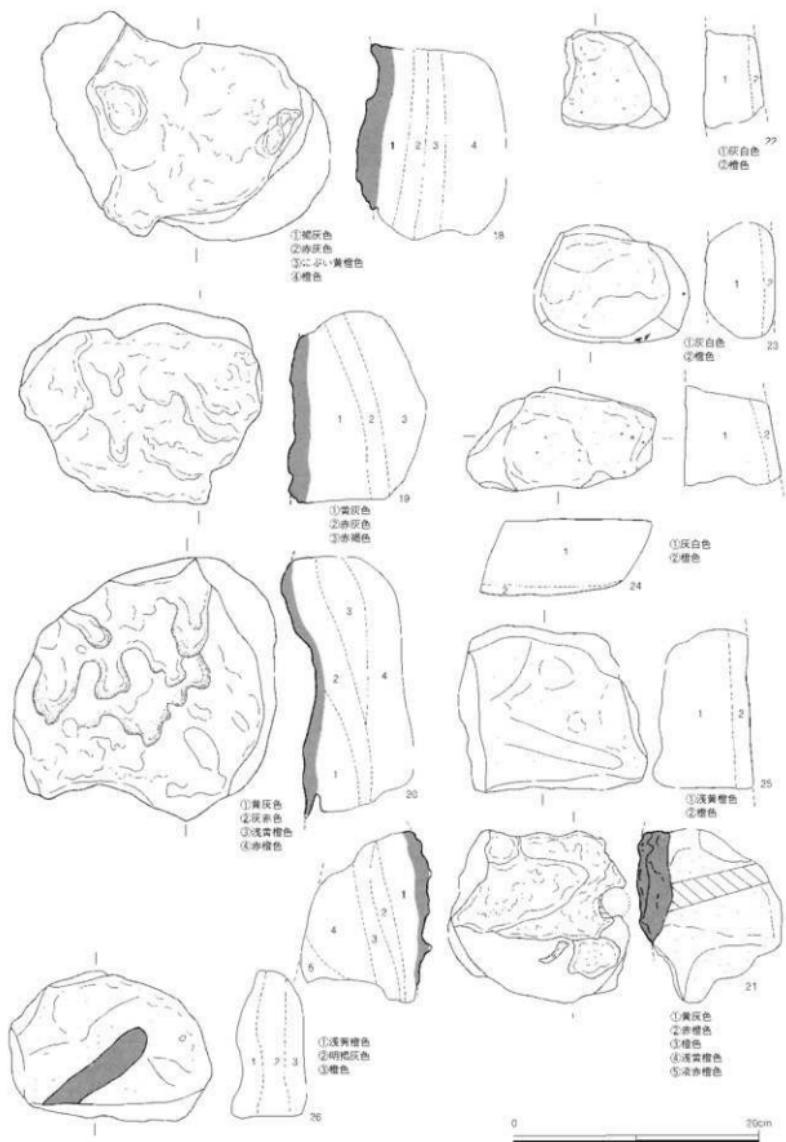
| 種別名 | 品種名 | 生 物 名 | 葉面積 | 葉面積/根 | メタカ量 |
|-----|---------|---------------|------|-------|------|
| 61 | 林地赤鶴見一品 | ササガニ (6コート一品) | 4400 | 4 | なし |
| 62 | 林地鶴見一品 | ササガニ (T.5葉付き) | 4200 | 5 | なし |
| 63 | 林地鶴見一品 | ササガニ (T.5葉付き) | 2600 | 2 | なし |
| 64 | 林地鶴見一品 | ササガニ (山鳥根付き) | 5800 | 2 | なし |
| 65 | 林地鶴見一品 | ササガニ (白色土甌) | 810 | 1 | なし |
| 66 | 林地鶴見一品 | ササガニ (白色土甌) | 1200 | 3 | なし |
| 67 | 林地鶴見一品 | ササガニ (白色土甌) | 618 | 2 | なし |
| 68 | 林地鶴見一品 | ササガニ (白色土甌) | 796 | 2 | なし |
| 69 | 林地鶴見一品 | ササガニ (4寸) | 81 | 2 | なし |
| 70 | 林地鶴見一品 | 直根丸詰 (4寸) | 36 | 1 | なし |
| 71 | 林地鶴見一品 | 直根丸詰 (6寸) | 232 | 2 | なし |
| 72 | 林地鶴見一品 | 直根丸詰 (9寸・1個) | 239 | 1 | なし |
| 73 | 林地鶴見一品 | 直根丸詰 (9寸・1個) | 127 | 2 | なし |
| 74 | 林地鶴見一品 | 直根丸詰 (9寸・1個) | 176 | 2 | なし |
| 75 | 林地鶴見一品 | 直根丸詰 (1寸・1個) | 242 | 2 | なし |
| 76 | 林地鶴見一品 | 直根丸詰 (1寸・1個) | 264 | 2 | なし |
| 77 | 林地鶴見一品 | 直根丸詰 (1寸・1個) | 602 | 5 | なし |

| 標記No | 通称名 | 種 物 名 | 系 番 (a) | 通 種 (b) | メタカラ |
|------|--------|----------------|---------|---------|------|
| 78 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (1.5t付仕上) | 536 | 2 | なし |
| 79 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (2.5t付仕上) | 1000 | 2 | なし |
| 80 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (3.5t付) | 414 | 2 | なし |
| 81 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (中) | 376 | 2 | なし |
| 82 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (中) | 439 | 3 | なし |
| 83 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (中) | 534 | 2 | なし |
| 84 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | — | — | なし |
| 85 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | 710 | 2 | なし |
| 86 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | 1000 | 2 | なし |
| 87 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | 1200 | 2 | なし |
| 88 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | 1500 | 2 | なし |
| 89 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | 1600 | 2 | なし |
| 90 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | 1800 | 2 | なし |
| 91 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | 1900 | 4 | なし |
| 92 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | 195 | 3 | なし |
| 93 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | 208 | 2 | なし |
| 94 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | 272 | 2 | なし |
| 95 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | 978 | 2 | なし |
| 96 | 排泄場過濾器 | 液化引込 (大) | 1200 | 2 | なし |

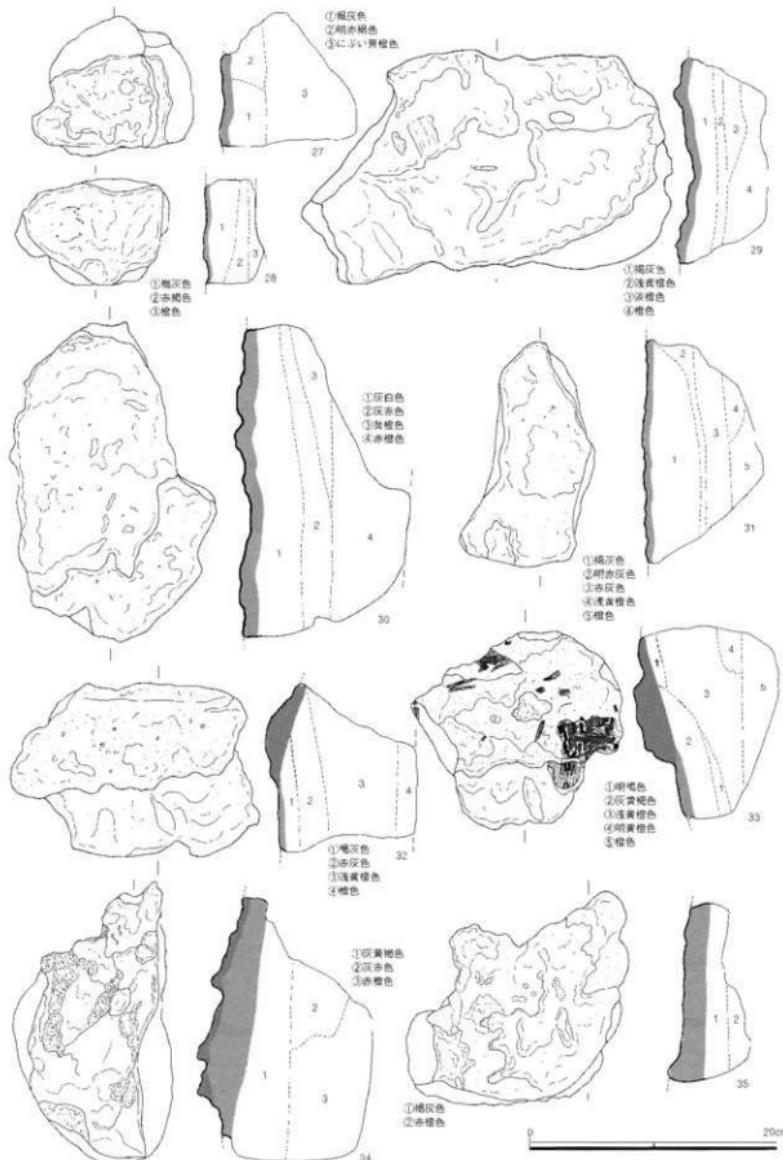
| 構成No | 通称名 | 通称名 | 重量(g) | 組成部 | メタル要 素 |
|-------|---------|-----------|-------|-----|-----------|
| — | — | — | — | — | — |
| 114 | 標準測定器 | 標準測定器 | 661 | 6 | Hf(C) |
| 115 | 標準測定器 | 標準測定器(合純) | 660 | 6 | Hf(C) |
| 116 | 標準測定器 | 標準測定器(合純) | 2000 | 4 | Hf(C) |
| 117 | 標準測定器 | 標準測定器(合純) | 860 | 5 | Mn(O) |
| 118 | 標準測定器 | 標準測定器 | 478 | 7 | Fe(I/Fe) |
| 119 | — | A/R | — | — | — |
| 120 | 標準測定器 | 標準測定器 | 497 | 6 | Fe(I/Fe) |
| 121 | 標準測定器 | 標準測定器 | 315 | 3 | なし |
| 122 | 標準測定器 | 標準測定器 | 716 | 3 | なし |
| 123 | 標準測定器 | 標準測定器 | 870 | 3 | なし |
| — | — | — | — | — | — |
| 124-1 | B区汎用測定器 | 本体(黒純) | 91 | 1 | なし |
| 124-2 | B区汎用測定器 | 本体(黒純) | 89 | 1 | なし |
| 124-3 | B区汎用測定器 | 本体(黒純) | 42 | 1 | なし |
| 124-4 | B区汎用測定器 | 本体(黒純) | 66 | 1 | なし |



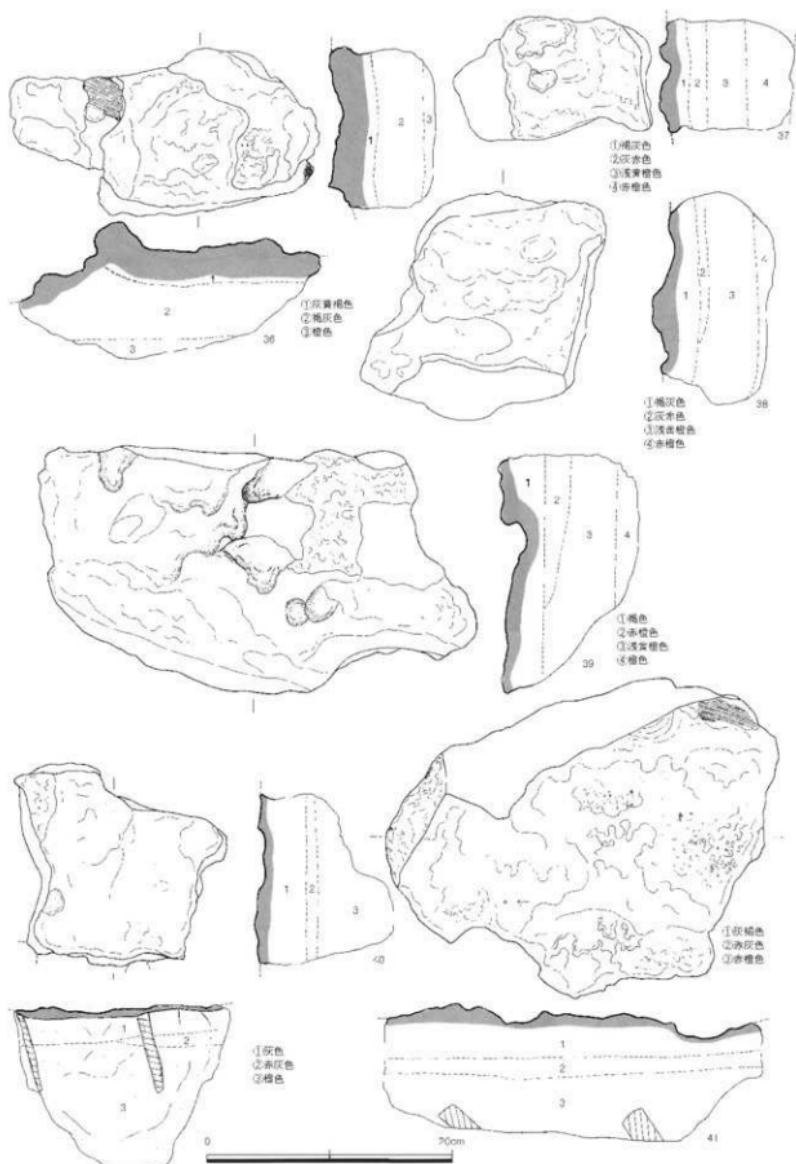
第100図 寺田I遺跡5区製鉄関連遺物実測図(1) (S=1/4)



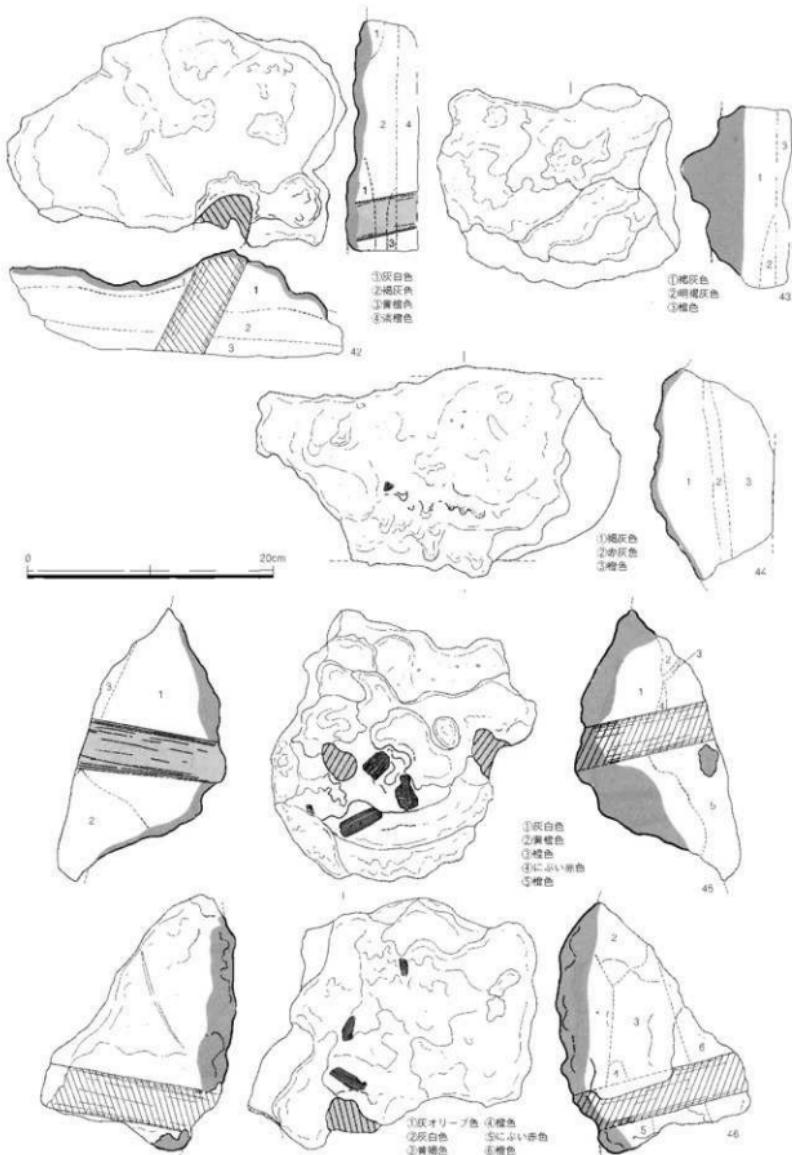
第101図 寺田I遺跡5区製鉄関連遺物実測図(2) (S=1/4)



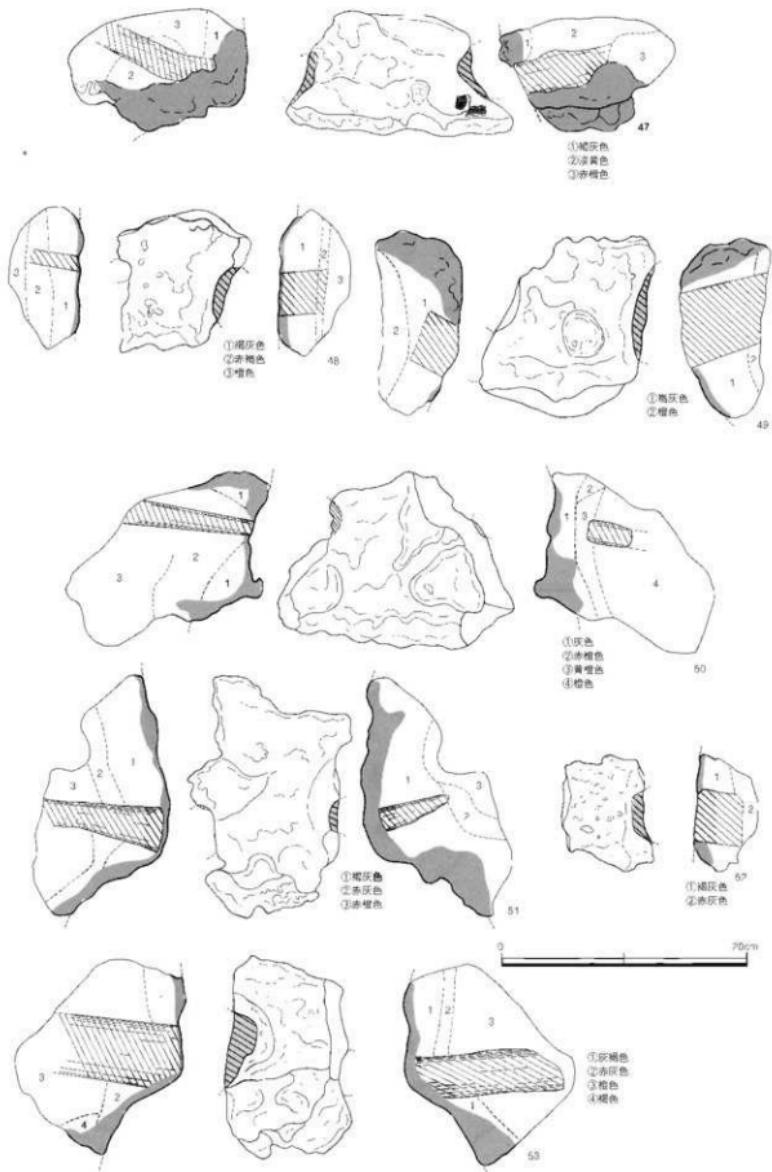
第102図 寺田1遺跡5区製鉄関連遺物実測図(3) (S=1/4)



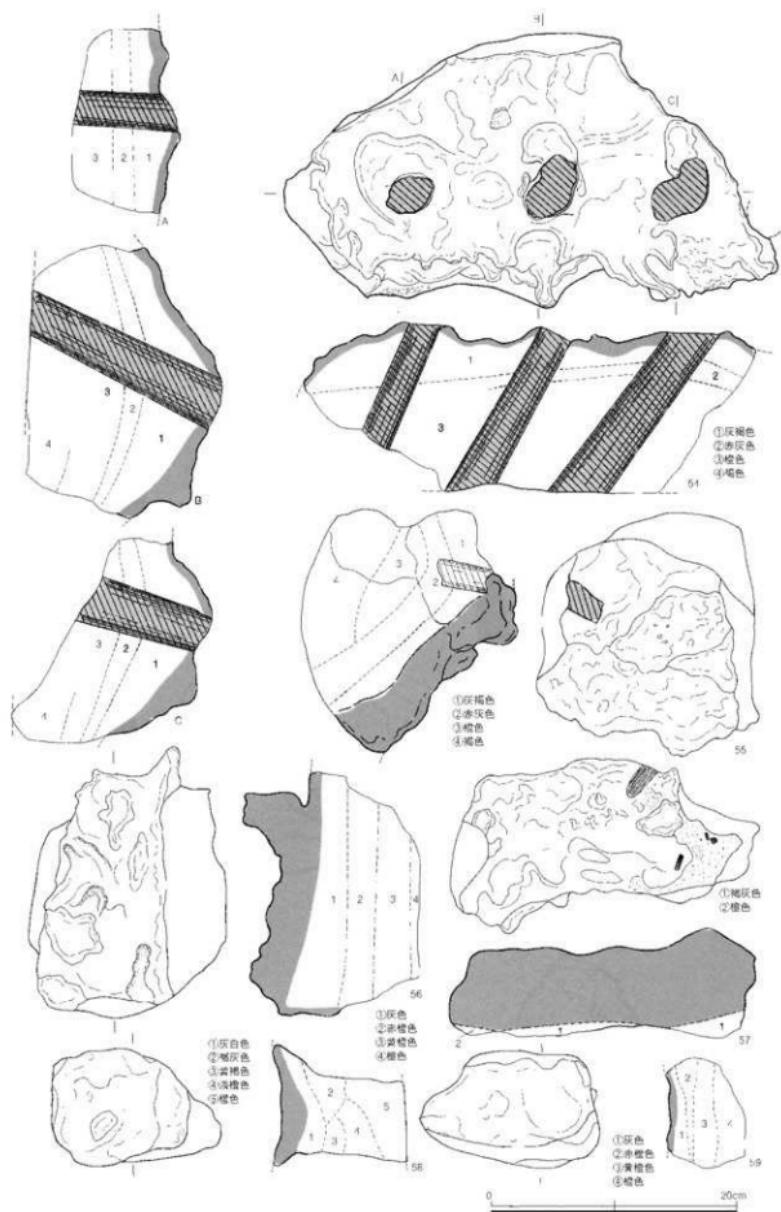
第103図 寺田I遺跡5区製鉄関連遺物実測図(4) (S=1/4)



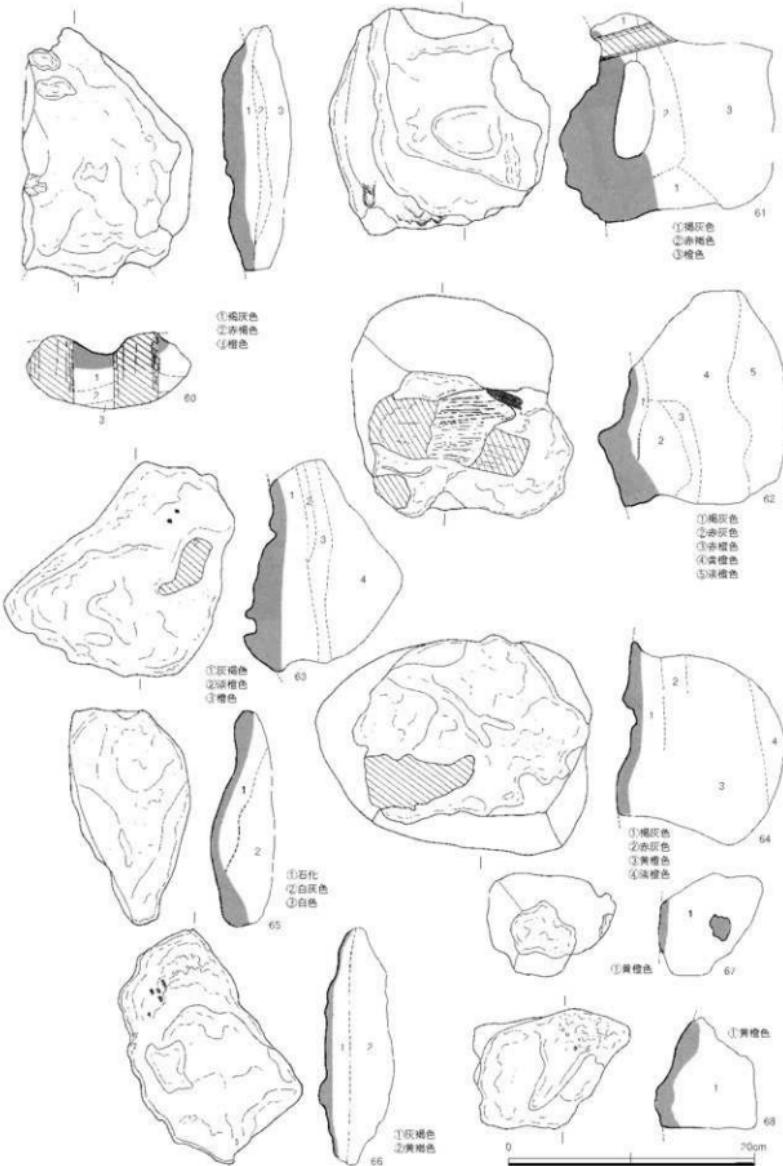
第104図 寺田I遺跡5区製鉄関連遺物実測図(5) (S=1/4)



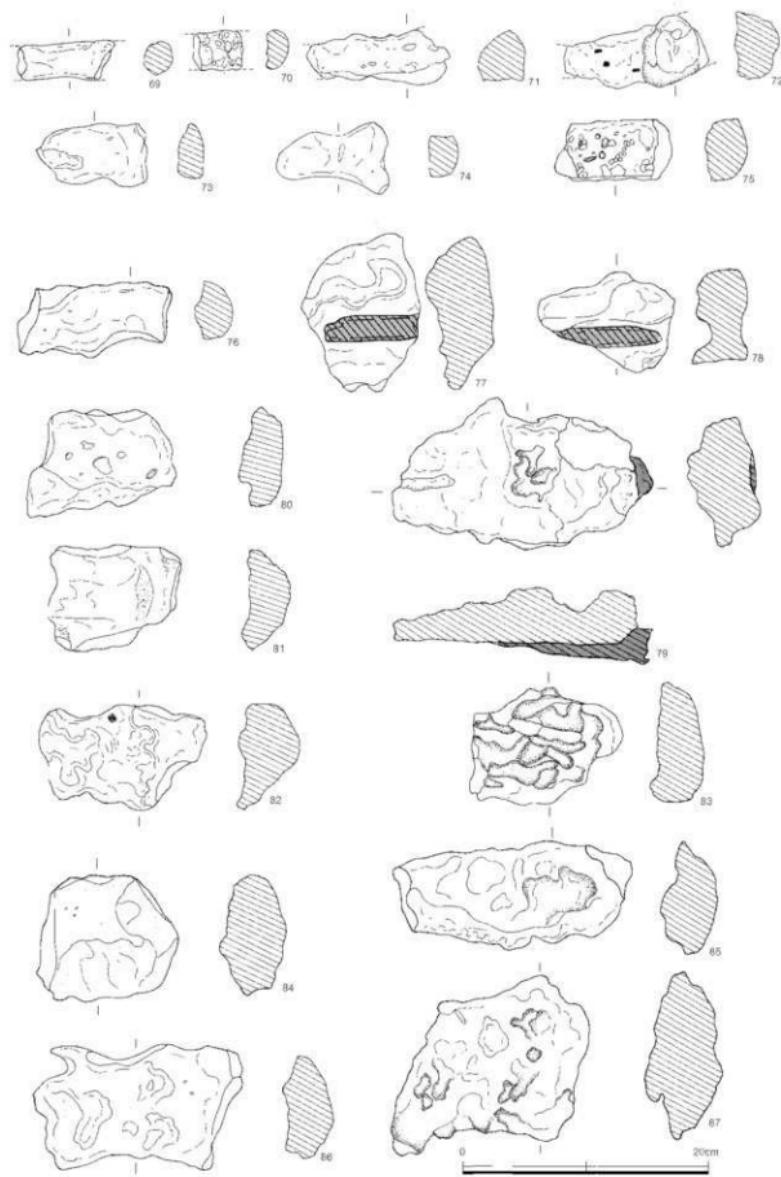
第105図 寺田I遺跡5区製鉄関連遺物実測図(6) (S=1/4)



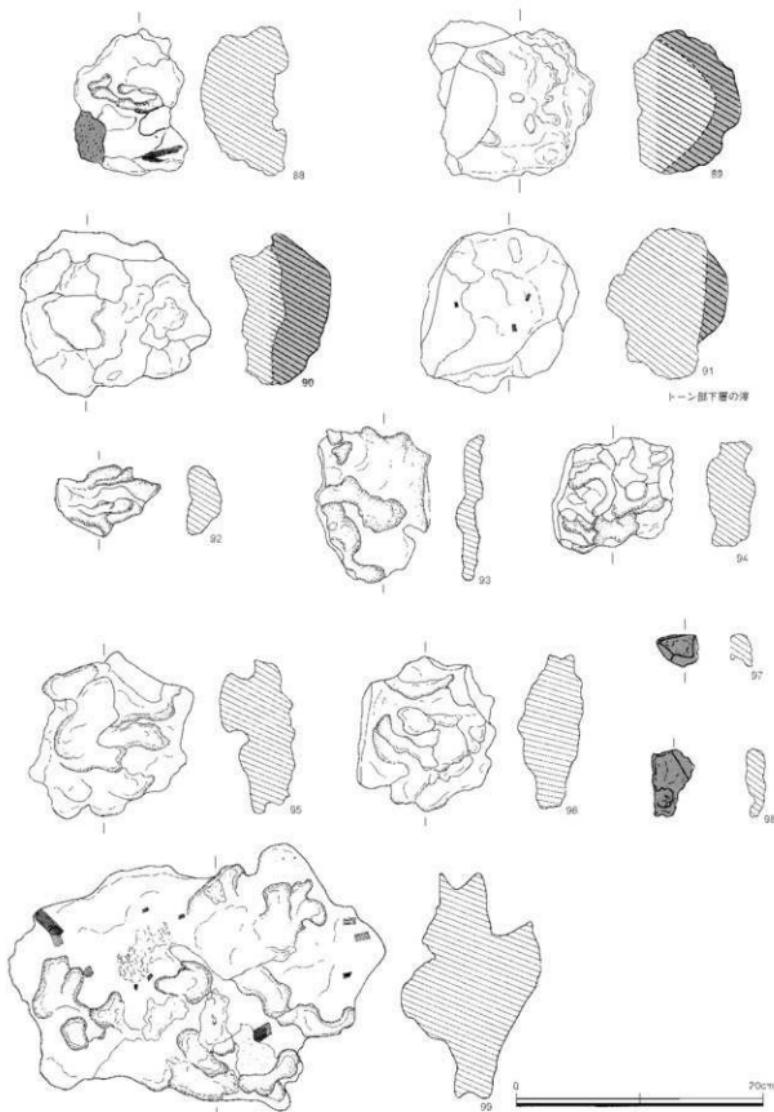
第106図 寺田I遺跡5区製鉄関連遺物実測図(7) (S=1/4)



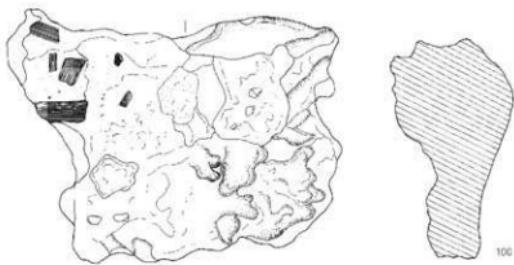
第107図 寺田I遺跡5区製鉄関連遺物実測図(8) (S=1/4)



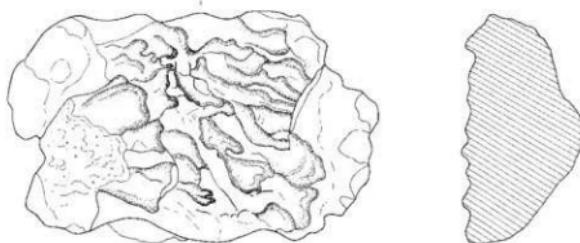
第108図 寺田I遺跡5区鍛冶・鋳銅関連遺物実測図(9) (S=1/4)



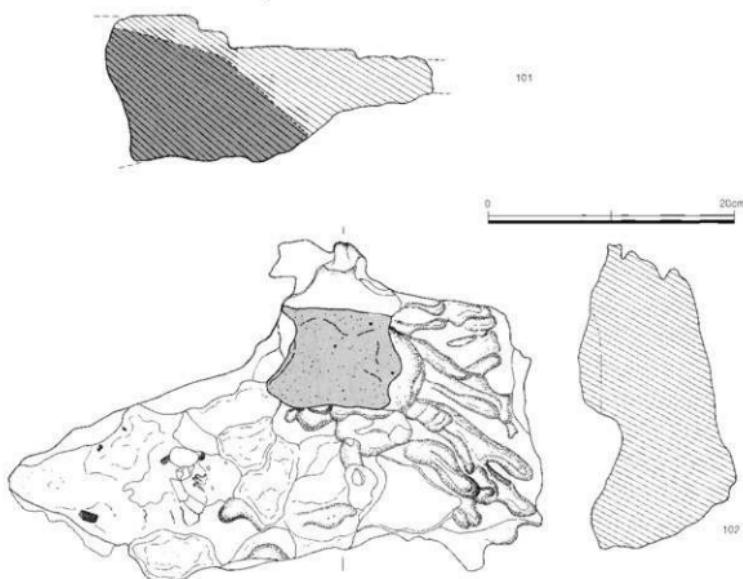
第109図 寺田I遺跡5区製鉄関連遺物実測図(10) (S=1/4)



100

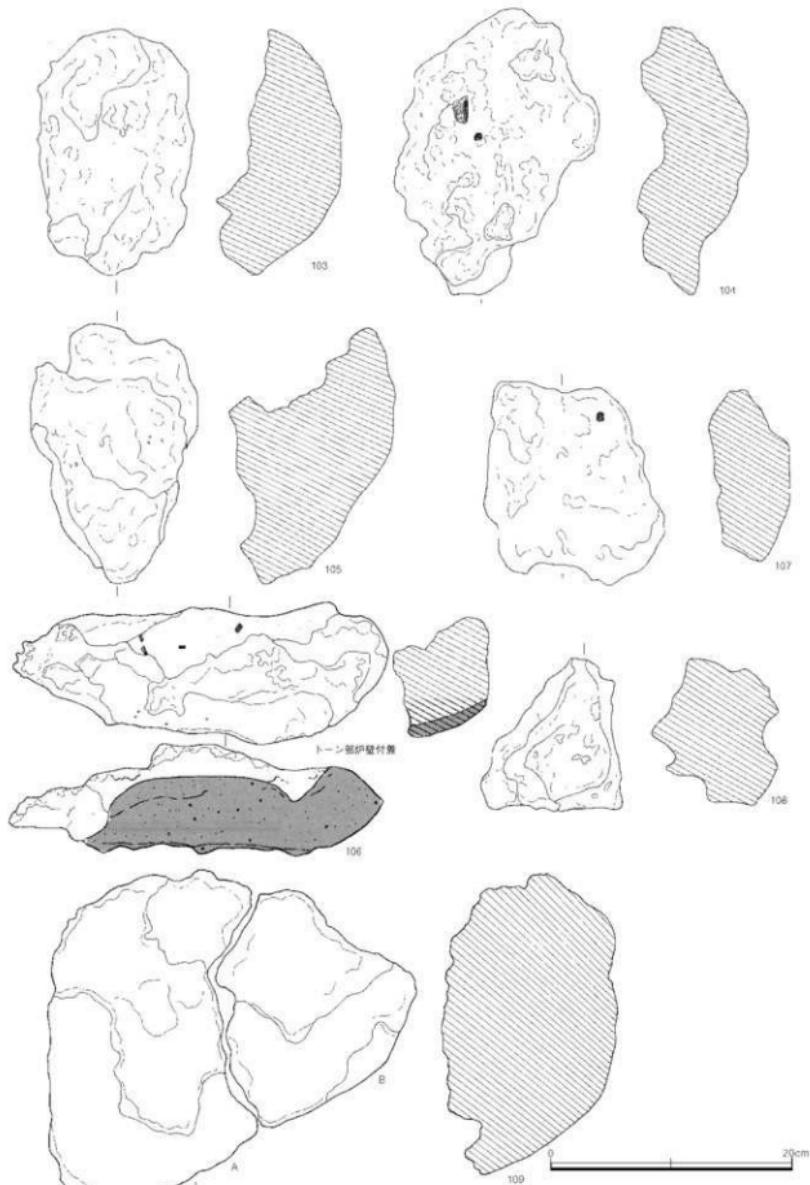


101

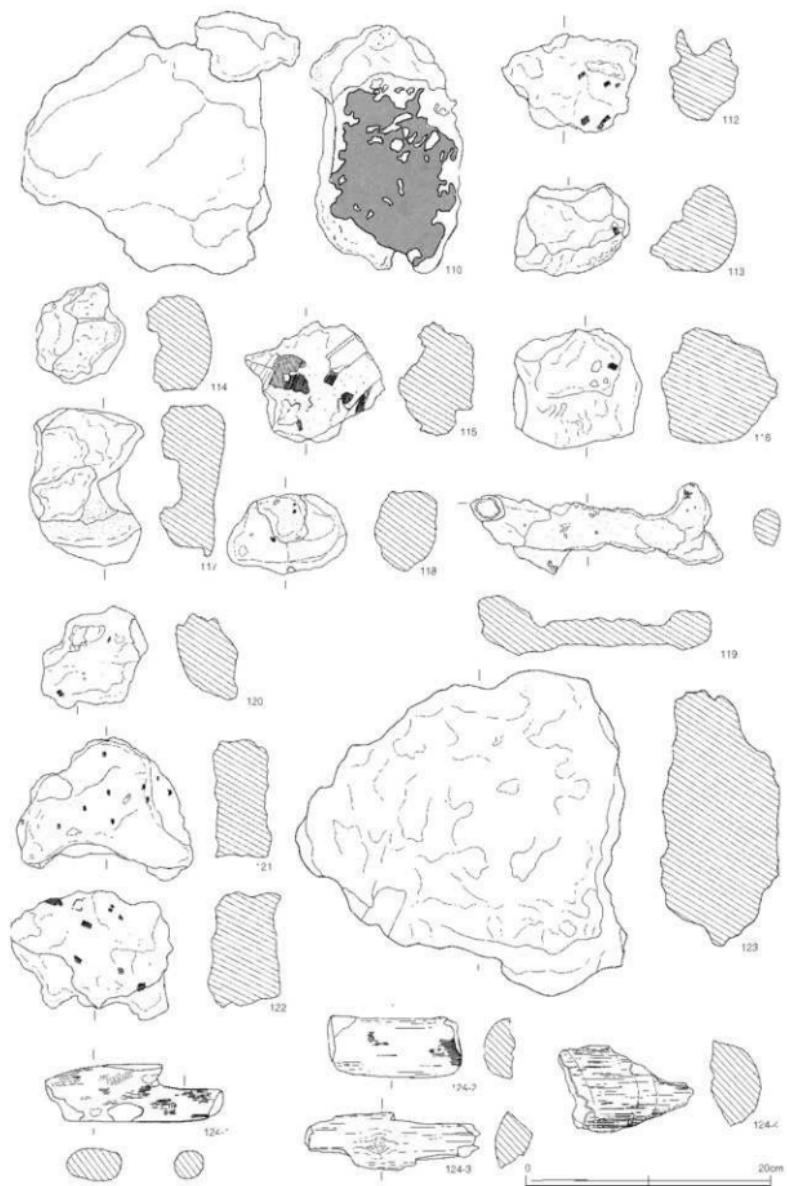


102

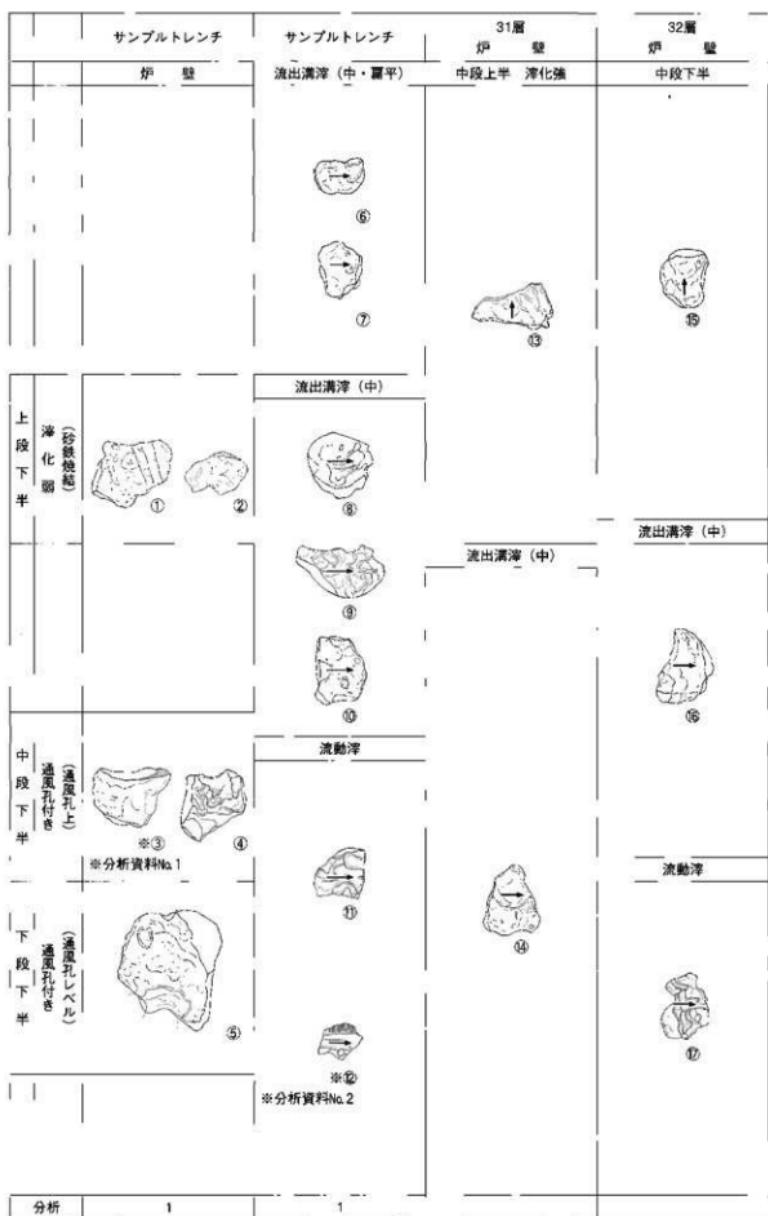
第110図 寺田 I 遺跡5区製鉄関連遺物実測図(11) (S=1/4)



第111図 寺田I遺跡5区鍛冶・鋳銅関連遺物実測図(12) (S=1/4)



第112図 寺田I遺跡5区鐵冶・銅器連遺物実測図(13) (S=1/4)



第113図 寺田I遺跡5区鉄関連遺物構成図No.1

| 排冷層一括 | | 炉盤(左コーナー部) | 炉盤(長軸側) | | | 炉盤(右コーナー部) | 炉盤(工具痕付き) | 炉盤(白色粘土質) |
|-------|-------------------|----------------------------------------------------|----------------------|----------------|----------|------------|-----------|-----------|
| 炉盤 | 頂部(被熱破壊度) | | | 22 | 23 | | | |
| 上段上半 | 被熱 | | 24 | 25 | 26 | | | |
| 上段下半 | 溶化器 (鉄器焼結) | 18 27 | 28 29 30 31 | 32 33 34 | 68 | 65 | | |
| 中段上半 | 溶化器 | 19 35 36 | 37 38 | 39 | 69 62 | 66 | *分析資料No3 | |
| 中段下半 | 通風孔(上) (通風孔付合) | 20 | 40 41 | 42 43 44 | 60 63 | 67 | | |
| 下段上半 | 通風孔(下) (通風孔付合) | 21 45 46 47 48 49 50 51 52 | 53 54 55 56 | 61 64 | 68 | | | |
| 下段下半 | 溶付き | | 57 | | | | | |
| 分析 | | | | | | | | 1 |

第114図 寺田I遺跡5区鐵関連遺物構成図No2

| 流出孔溝 (小) | 流出孔溝 (中・偏平) | 流出孔溝 (工具痕付き) | 流出溝溝 (中) | 流出溝溝 (大) | 流出溝溝 (重層) | 流動溝 | 黒色ガラス質溝 | 炉底塊 (流動浮質) | 炉底塊～流出溝溝 |
|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
|  |  |  |  |  |  |  | | | |
|  |  |  |  |  |  |  |  | | |
| | | | | | |  | | | |
| | | | | | | | |  |  |
|  |  | |  |  |  |  | | | |
| | | | | | |  | | | |
|  |  | |  |  |  |  |  | | |
| | | | | | | | | | |
| 分析 | | | | | | | | | |

第115図 寺田I遺跡5区鉄闇連遺物構成図No3

| 炉底塊 | 炉底塊(蒙付き) | 炉底塊(含鉄) 特L(☆) | 炉内滓 | 炉内滓(含鉄) H(O) | 炉内滓(含鉄) M(O) | 鉄塊系遺物 特L(☆) | 再結合滓 | 木炭(黒炭) |
|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
|  |  |  |  |  | |  |  |  |
|  | | 半分析資料No.6 | |  |  |  |  |  |
|  |  | 半分析資料No.7 | |  |  |  |  |  |
| 分析 | | 1 | 2 | 1 | | 2 | 1 | 1 |

第116図 寺田I遺跡5区鉄関連遺物構成図No.4

第13表 寺田I遺跡5区製鉄関連遺物分析資料一覧表

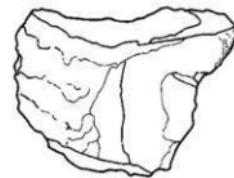
資料番号 1

| 山土状況 | 遺跡名 川上位段 | 寺田Ⅰ 連続5区 | | 遺物名 | 1 | | 項目 | 件数 |
|--------------|--------------------|--------------|-------------------------------|------------------------------------|----------------------------------|--------------------------------|--------------------------------------------------------------------|------------------|
| | | 時刻: 根鉢 | 平安・鎌倉・清治形状 | | 去: 黒色～黒色 | 構造: 鳥居型 | | |
| 試料記号 | 標識: TRAV-1 放射化: | 長径: 7cm 法 | 色: 黒 材種: 木 厚さ: 1mm 重 | 去: 棕褐色～褐色 材種: 木 厚さ: 3mm 重 | 構造: 鳥居型 材種: 木 厚さ: 1mm 重 | 件数: 6 材種: 木 厚さ: 1mm 重 | マクリ 焼成度 E.P.M.A X線回折 化水率 耐火度 カラリー 放射化 X線透光 | 1 草 ○ ○ |
| 遺物種類 (名前) | 加型 (下段上T、通風孔付) | | | | | | | |

観察所見 内面が強く汚化して茶色をもつた鉢片。上下面は粘土単位の接合面で、左右の鉢の一部と裏面が施面となっている。施面部は6ヶ所である。内面の右下側が大きく、抉れるように汚化しており、上手側の右端部には通風孔のあと部分がわずかに残されている。壁内部は青黒く汚化しており、表皮の一端は紫黒色となっている。小さな穴が下方に向かって伸びている。右下の抉れた裏面部は黑色で、表皮をもつていても。通風孔部は、平面的には右斜めの位置を向いており、窓の最大幅10cmの面には、一孔しか確認できない。上下窓の接合部から、粘土単位の高さは8.5cm程度を有する。平面的には極めてわずかな弧度で、内面の右側のみが抉れている。これは通風孔部に対応した抉れである。内面の左端部もわずかに残るが、さらに左側にも、もう一孔の通風孔があつた可能性も残されている。右上は大きく抉れている。明確なスサは確認できないが、わずかにガラスを含むしている可能性がある。色調は内面が紫黒色から黒色で、裏面は褐色から茶褐色である。底は浮遊が黒色で、伊型部分は褐色から赤褐色。

分析部分 貴格部位1/3を直線状に空切し、塑型として分量に用いる。残材遮却。

備考 烧津場側面に設けたサンプル採取を目的とした1m幅のトレッセよりの出土品である。製鐵炉があったと推定される作務中央の西側を走る、元の各部の斜面寄りにあたる位置である。構成された堅金50kgのうち、本資料に収めた粘土の鉢片が3kgを占める。分析資料No.3のような耐火性の高さうな白色の鉢土を除く伊型部は1kgと推定しない。本資料もそれに準じるので、通風孔部の重量は9-12kgで、その多くが通風孔の下脚が大きく抉れるようにならんでいたという実測値を示している。本資料もそれに準じるので、通風孔部の重量を内から見て伊型の長軸筋部、あるいは、當然から2孔口にあたる伊型片と推定される。なお、伊型の高さには、10cm以後のものと8cm以下のものの2者を見られる。



0 5cm



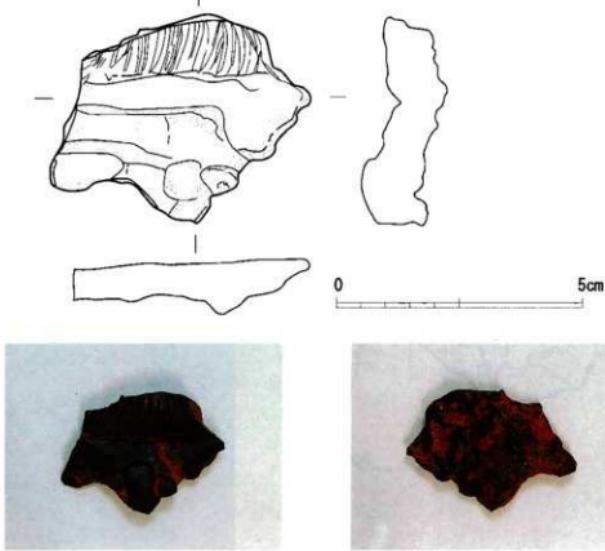
資料番号 2

| 出土地況 資料記号 着物種類 (名前) | 遺跡名 出土位置 地質 | 遺物名 | | 12 | | 項目 測定値 分類 測定 E P M A X線回折 分析部分 |
|------------------------------------|-------------------|-------------------------|----------|------------------------------------|--|--------------------------------------------------|
| | 香津浜町辺 サンブルトレンチ | 時代: 横面 法 反・往 量 | 形・色 質 | 平安～鎌倉：遺物形状 透達度 鏡片 枚数 5 | | |
| 後・後: TRAV-2 化・学: TRAV-2 放射化: | | | | | | |
| 流动洋 | | | | | | |

観察所見 手巾、不整五角形をした薄板状の流動洋の破片である。上下面が生きており、側面は右端部の一部を残して全面被覆である。鏡面数は5を数える。体はきれいな流動状で、上面と手側の裏面には済が右方向に運動したためかしわが残っている。下手側の上面には、1.5cmから1.8cm程度の縦を持つの流動溝が量産している。底面は紫黒色である。破面は微密で、表皮以下に微弱な気泡が点在している。下面は洋汁や本炭渣の丁度が主体で、やや光沢を持った平滑な面である。全体に小さな波状の変となっている。色調は表面が墨黒色から黒褐色で、底は黒褐色である。

分析部分 長辺の面(1/3)を直線状に切断し、溶として分析に用いる。成材延辺。

備考 掘削場周辺に設けられたサンブル採取用の1m幅のトレンチからの出土品である。分析資料No.1とセットになる。木造船の本構造のおり、谷筋から取り上げた遺物を全て焼きみて一括してしまったため、本体の骨密度をとらえられる遺物が少なかったために、新たにサンブル採取用のトレンチを設けたものである。これらが構成No.1～2にあたる。座標としては、一括収集から分析資料に選定された。分析資料No.1～2と似たものである。



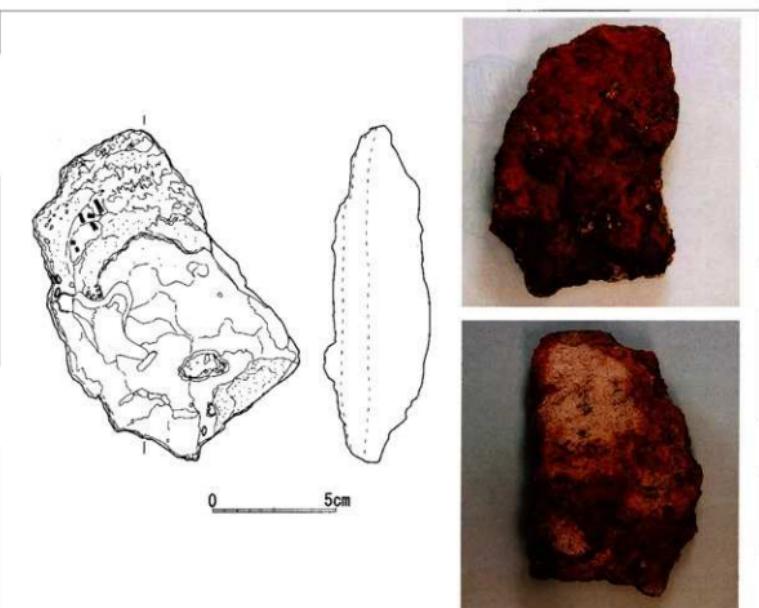
資料番号 3

| 出土状況 試料記号 | 遺跡名 出土位置 | 寺田丁第55区 海津導通付近一帯 | 遺物名 | 時代 | 66 | | 項目 | 岸 | 船 |
|------------------------------------|---------------------------|---------------------|--------------|------|-----------------------|------------|----|--------------------------------------------------------------------|------------------|
| | | | | | 表 | 裏 | | | |
| 横 梁: TRAV-3 化 学: TRAV-3 放射化: | 長 縱 横 縱 厚 縱 | 色 色 色 | 鉛 鋼 鋼 | 3 | 表面-無色～淡紅色 裏面-無色～白色 | 保存性 表面質 | 7 | 分 析 E P M A X線分析 化 学 射 火 试 カロリ... 放 射 化 X線透過程 | ○ ○ ○ ○ |
| 遺 物 類 (名前) | 伊 葵 (中段上半、浮石、 白色真珠) | 量 重 量 | cm 1,200g | メタル度 | なし | 断面状態 | - | | |

概要所見 上下方向に長い板状の厚壁片である。側面と裏面が全面酸化で、裏面数は7を数える。左付箇は単純な裏面ではなく、船底甲板の溝合部の可能性を持つている。内面は酸化して上下手の三種類の外観を見ている。上段はもとの伊賀表面の状態を反映したものと考えられ、浮石がやや多く、表面に気泡や水滴痕らしき深いほみを残している。中段部分は酸化して過酸化となり、赤れが認めできる。表面は茶紅色が強い。下端部は小さく突出した。一方、浮石や鉄成のような外観を持ち、赤れが認めない。裏面には微細な気泡が浮き、全体に軽石のような質感を有している。加湿をして背面全体に汗液が弱く、表面真っ白になっている。船底は3mm以下での石英岩の石粒を多量に含む真砂質で、つなぎとなる土が白っぽいのが特徴である。塗しの2/3程度を石灰質の白粉が占め、残りを白っぽい粘土としている。極めてわずかながらサベの状跡を確認できる。色調は裏面が茶紅色から茶紅色で、裏面は黒褐色から白色である。

分析部分 陰極発光顕微鏡1/6を複数枚に分割し、供給として分析に用いる。残存部。

備考 本型の部位としては通風孔の上部と窓辺される。内面の浮石が激しくやや軟化気味となっており、下端部は通風孔部の周辺に舟石の、小さな発生部が残されているためである。本体の通風孔部は下方向にあつたものと想定される。本資材のような異形形状で自立しないざら土を用いている鉛錆片は4点のみで、全体に占める比率は極めて低い。本調査の段階で層位的な違いが区別されているため、製鉄伊勢船足跡の層位によるものか、一般的な船底上の修理場所の変遷によるものを区別することはできないが、分析資料No.1に比べて大きめより高そうである。

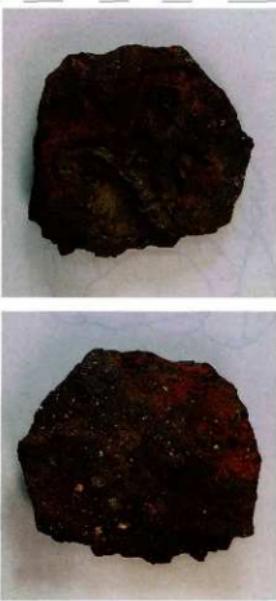
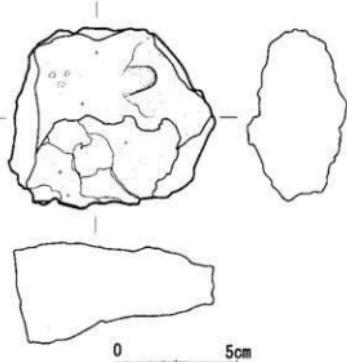


| 出土状況 | 遺物名 | 寺田1遺跡5区 | | 遺物名 | 寺期: 根據 | 64 | | 用意 | 作 | メタル |
|-------------------------------------|---------------|---------|-----|----------------------------------|--------|------|------|---------------------------------------------|---|-----|
| | | 発掘場所 | 位置 | | | 形状 | 寸法 | | | |
| 横 通: TRAV-4 試料記号: TRAV-4 放射化: | 長 細 | cm | 色 貌 | 表: 茶褐色～茶黒色 裏: 鐵系褐色 底: ～青黒色 | 薄在瓦 | 被物形状 | 被物形状 | マ ク リ | ○ | |
| | 法 透 明 | cm | | | | 被物形状 | 被物形状 | 安 廉 度 | ○ | |
| | | | | 厚 底 | 2 | 被物形状 | 被物形状 | E P M A | | |
| 遺物種類 (名前) | 流出漆器 (大、細) | 量 | 重 量 | 710g | メタル度 | なし | 被物形状 | X線回折 化 学 青火度 カラリ 放 射 化 又鉄過 渡 | ○ | |

段落所見。平裏、不整と角形をした円平な漆器底の一枚。上下面と左側面の表面が剥離しており、右の側面が大きな被面となっている。下半部の財面に右小底丸が残り、底面は多く散らばる。幅10mmの底面溝沿いで右子方向に流跡している。上方にはわざかにしづらが生じ、右上不整では削除した中を刻む流跡溝が走っている。下半部では上面にさらに伊豆漆の漆が残っているが、小さな被面に覆われてしまいがちが残されている。左右の底面から見ると、漆は下で青黒となる。下半部は萬葉な気孔が密集したガス質で、下小底は結晶の発達した表面的な漆膜とされている。萬葉な漆層の上面に真上のように伊豆漆の石英質の石粒を詰め込んでいる。下面は左子方向に向かう被面で、その表面には流出漆器の土炒の仕事が透視的に残されている。また部分的に心筋を図示している。底は左子方向が墨く、右側に向かう急速に濃くなっている。外縁は次第に黒褐色から茶黒色へ、内は茶褐色から青黒色である。

分析部分: 長輪横径1/5を真縦状に切断し、漆剤を分析に用いる。残材留持。

写真: 今や幅を行つて流出漆器の中絶裂破片である。下部の漆は緻密で、上半部の漆がガス質となっている。漆膜の裏手形状と後半部にまたがる漆である。分析資料64-5も同じ流出漆器であるが、こちらは全体にややガス質で裏堅してある。



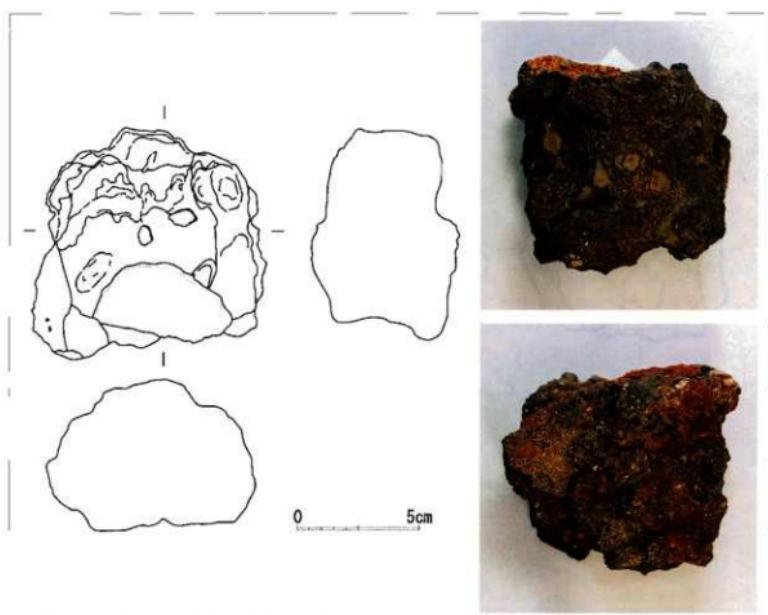
資料番号 5

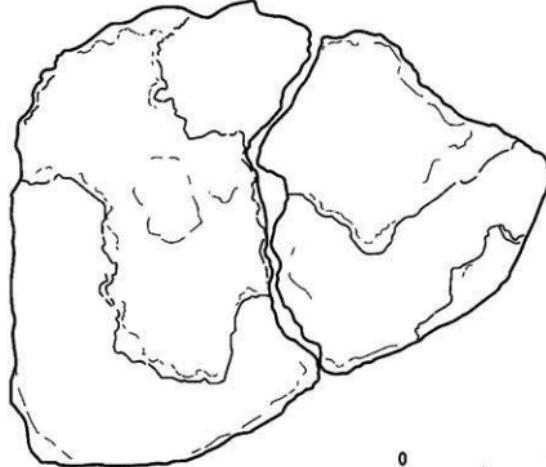
| 出土地名 出土位置 | 寺口1遺跡5区 赤堀場田原 説 | 遺物名 14号:板塊 | 59 | | | メタル |
|---------------------------|--------------------|---------------|----------------------|------------|------|------------|
| | | | 平空~縦空:遺物形状 | 分類 | メタロ | |
| 地 無: TRAV-5 | 長 細 | 色 級 | 表: 黒紫色~暗褐色 地: 青黑色 | 保存度 板の数 | 11 | マテロ |
| 試料記号 14号: TRAV-5 | 板 細 | ct | | | | 後 機 度 ○ |
| 取扱い: — | 厚 底 | cm | | | | E.P.V.A |
| 遺物種類 流出漂浮 (名称) (ガス質、塊) | 重 量 | cm | 底 細 底 | 2 | 保存度 | X被覆状 |
| | 重 量 | 1,400 g | メタル度 | なし | 表面解説 | 化 学 ○ |
| | | | | | | 耐 水 度 |
| | | | | | | カロリー |
| | | | | | | 波 費 化 |
| | | | | | | X被覆過 |

觀察所見。塊みを持ったガス質の流出漂浮の複数。上下面と冠輪周辺の堅度は基本的に共通であり、黄褐色の堅度には小窓面が存在する。堅度は11を数える。表面が黒褐色で、右側面から見えると4単位から6単位に分けることができる。それぞれの表面の底面には褐色の鉄酸粉が斑的に張り付いている。下平面の表面から見るときには下で大きく分かれている。基底部の深さは左側面に大きく抉れたような自然の窓みを持ち、右側は右方向に向かって斜面に高くなっている。その上面自体には1cm程度の小窓位の鉄酸粉が散在している。上面部の深さは窓みに分かれており、底面に固定する堅度との移動の多さにより、堅度測定が不規則であることを示している。上面部の深さは一概に小窓位を有せんのである。ガス質の密度が強い。窓みは右方向に段々と多くなっている。上面表面にはガスの抜けと津の移動により不規則なしづらぎが生じている。全体の色調は表面が黒褐色から墨褐色で、裏面は茶色、底面は青黒色である。

分析部分 基盤深21/3を真直状に削除し、表面を分離して用いる。残材返却。

備考 ト半径の深さが一貫測定された後には、上面に次々とガス質の流れ跡が生じたものである。鉄酸粉の計測が深い構造の深である。また、下平面の溝の底面には溝の直角な邊切れがあり、底面孔隙の可塑性もやや認められている。推測原因としては底面のもので、比較的堅度の高いよりの深であろう。こうしたガス質の性が、調子よく生成されているおりには、内部の鉄酸粉の炭素量はやや高めになっている場合が多い。分析資料No.8や9などの鉄酸粉の生成状況などに近い深であろう。





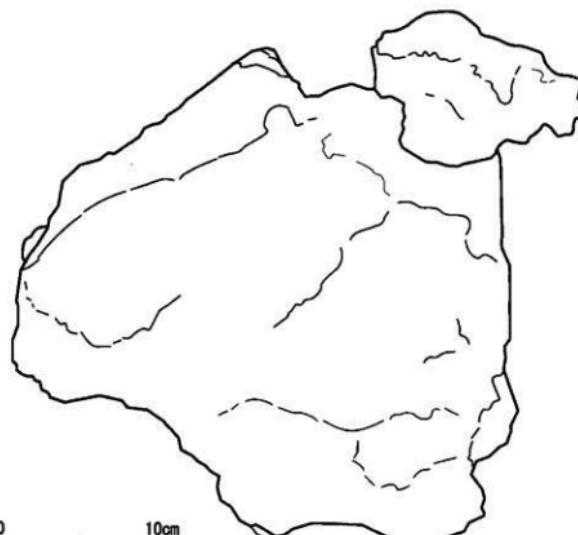
資料番号 7

| 地質名 出土位置 | 今井1選鉱5区 | | 地物名 種類: 植物 地質: 混凝岩 | 110 | | 項目 マクロ 分級 E.P.M.A X-線回折 化率 着火度 カロリー ¹ 燃焼上昇 X線透光 | メカル ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ |
|--------------|-------------|----|--------------------------|-----------------------|-----------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------|
| | 排水場周辺 | 泥炭 | | 厚さ: 10cm | 色調: 茶褐色~黒褐色 斑: 黑褐色 | 含有度: 10% | |
| 地質名 出土位置 | 排水場周辺 | 泥炭 | 厚さ: 10cm | 色調: 茶褐色~黒褐色 斑: 黑褐色 | 含有度: 10% | 化率 着火度 カロリー ¹ 燃焼上昇 X線透光 | ○ |
| 試料記号 化学生 | TRAV-7 | 泥炭 | 厚さ: 10cm | 茶褐色~黒褐色 斑: 黑褐色 | 含有度: 10% | ○ | ○ |
| 放射性 | — | 泥炭 | 厚さ: 10cm | 茶褐色~黒褐色 | 含有度: 10% | ○ | ○ |
| 地物種類 (名前) | 炉灰灰 (含鉄) | 量 | 厚さ: 10cm | 色調: 茶褐色~黒褐色 斑: 黑褐色 | 含有度: 10% | 化率 着火度 カロリー ¹ 燃焼上昇 X線透光 | ○ |
| | | | 重量: 1,000g | メタル度 着火度: ○ | 含有度: 10% | | ○ |

概要所見 平面、不整台形をした分離い鉄部主体の箱型炉の少底模様である。上方がきれいに立てており、下面は大形の礫石に囲まれている。礫石数は10を数える。表面には礫石が厚く重っており、右上手側の前部や右側の下手側下部には洗浄層含む酸化土砂が底状に張り付いている。上面は左右方向に長い浅い谷状で、底面は舟底状である。平均的厚さは10mm強を測る。全体に底面が強く、左上手側の側面や下手側の側面には縦目が刻まれて多い。下面は部分的に礫石に張りがあり、一定の範囲で浮遊が広がっている可能性が高い。右片側の出張傾向は上手側が強く、下手側は浮遊や酸化土砂の影響によるためか、ややばらつきを持つ。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、内部は墨褐色。裏の含鉄部は墨褐色から黒褐色である。

分析部分 長範囲部1/3を直線状に切取し、さらに交叉方向で対角に切り出し、メタル部を中心に分析に用いる。又、残材断面を鏡面仕上げ後、表面を布。残材道具。

備考 鉄部主体のか底模の下鉄部破片と判定される。磁石が極めて強く、メタル度も有し(食)であり、此點も食したことから振動の成長が推定できる。ただし、複数の底面が比較的シャープな底模形状の鉄部主体は観察できないことから、底面模様には何れかの底面から良否等クラスのものであろうか。分析資料のNo.6の会社の地質図「A面+B面」とA面的にはほぼ近似するが、会社の方は下面走行の浮遊や底面の底面の深さがより少ない可能性がある。そうである。こうした鉄部主体の地質構造が複数、各層の深さに給入込んでいるのは何らかのエラー、または鉄部の深さが意図したものではなかったのかどちらかではないかと考えられる。いずれにしても、箱型炉の少底模の含鉄部の発達の在り方を示す統計的資料であり、如意算の発現の確立を良くしているものである。



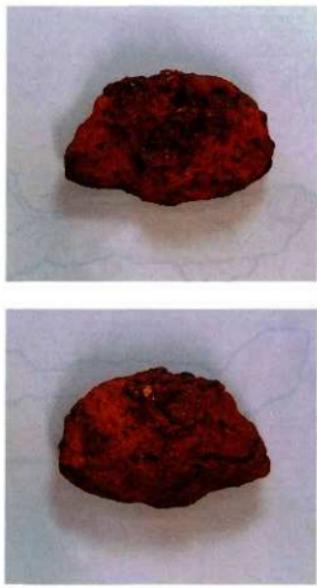
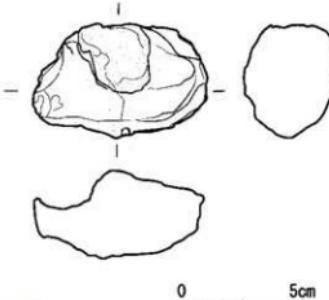
資料番号 8

| 出土状況 目(位置) | 遺跡名 発見場所名 | 遺物 No. | | 118 | | 項目 | 測定 メタル |
|---------------|-------------------------------------|--------|------------|-----------|---------|---------------|-----------|
| | | 時間: 横掘 | 下部～健倉：遺物形状 | 直：黒褐色～黒褐色 | 直：直立 | | |
| 試料記号 | 種: TRAV-8 化 学: THAV-8 放射性: -- | 長 度 cm | 色 級 | 直：黒褐色 | 直：直立 | 分 | ○ |
| | | 幅 cm | | 直：黒褐色 | 直：直立 | | ○ |
| 遺物種類 (名前) | 鉄鉢形遺物 | 厚さ cm | 盛着度 | 7 | 前後連 | - | ○ |
| | | 重 量 g | 475g | メタル質 | 直 L (古) | 鉄面裏側 | ○ |
| | | | | | | 右斜六反 | ○ |
| | | | | | | カロリ一 焼面直上付 | ○ |
| | | | | | | X線透視 | ○ |

断面所見 平面、不整椎円形をした鉄鉢形遺物である。上面と正面側の側面の一部に酸化土跡が張り付く以外は、極端な流状のしっかりした形態を持っている。左側の側面のみが表面と鑑定され、被覆数は2としておく。全体に左側が頗るなり左側にややせり上がる形で、左側は側面に基みを残し、大きくなっている。背面から下面は深い直角状である。表面は酸化土跡の合間に薄く浮き表皮が確認できる。底面は左側寄りを除いて左側で強く、そのほとんどがメタル質と鑑定される。左側は表面の酸化土跡が貴重である。底面部分は黒褐色となっている。底は黒褐色。

分析部分 長範囲部1/2を直角状に切削し、さらに直交方向で切片を切り出し。メタル質を中心に分析に用いる。又、残材前面を鏡面仕上げ後、出撃痕分布。残材底部。

備 考 右方向に向い、わずかに流跡状の外観を呈している。左側のみが明確な直角で、沈出孔中に流れ込んだ鉄鉢主体の縁であろうか。横断面からは、幅5.7cmほどの沈出孔の大きさをうかがわせる。ただし、其のものの流动性は高くはない。



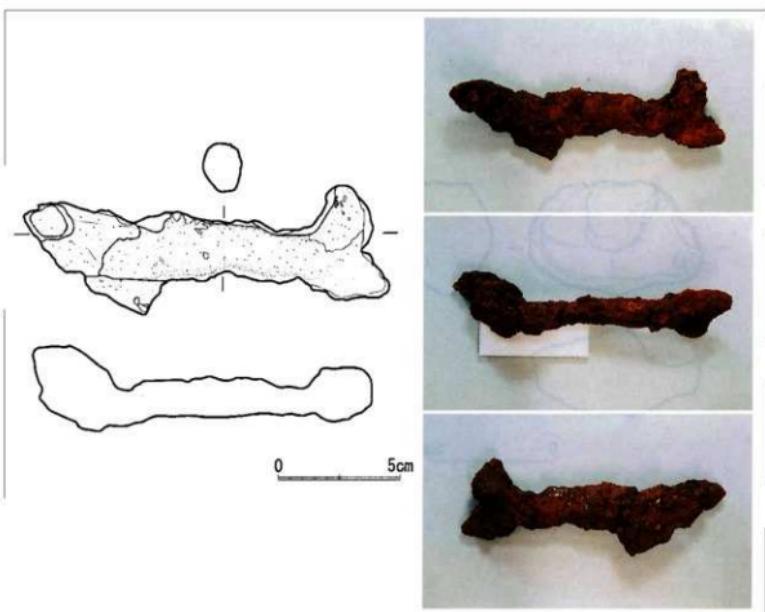
資料番号 9

| 出土状況 試料記号 | 遺跡名 出土位置 | 寺田工演算5区 A区 | 遺物名 科種: 鉄器 | 1.9 平安・鎌倉・遺物形状 | 項目 | 否 | メカル |
|--------------|---------------------------------------|---------------------|----------------|--------------------------------|-------------------|----------|-----|
| | 後 漢: TRAV-9 化 学: TRAV-9 鉄鋤刃: —— | 長 横 色 調 法 短 横 | cm cm cm | 表: 茶褐色～黒褐色 裏: 黒褐色 地: 黒褐色 | 厚 度 鉛 値 重 量 | 破面数 8 | 枝 |
| 遺物種類 (名称) | 鉄鋤系遺物 (流動鉄) | 直 | 厚さ cm | 鉛 値 K | 鉛 値 K | 断面形 K | 枝 |
| | | | 重 量 497g | メタル度 特L(△) | 断面形 ○ | | |

觀察所見 在手から右手に向い流れ出した流動鉄の鉄鋤系遺物である。扁平な棒状で左の裏面に1ヶ所ずつの範囲を持ち、破面数は2を数える。在手の3.5cmほどは斜め上から右下に向い角度で流れ落ちる形貌を持ち、それから右側にかけては直やかな傾斜となる。右端部よりの5cmほどは「V」の字状に二叉に分かれている。横断面形は左寄りが馬蹄形で、右寄りに向うにつれて扁平となり、豊形ないしは絶形となっている。中間部分の上面はやや盛り上がりしている。一部に流れじわ状の凸凹を持つが鉄化土砂のため小明瞭である。下部は左側の3cmほどが底面化または底面底底を示す形となっている。全体に酸化土砂が堅く、表面状態が分かりにくい条件である。左端部には黒鐵がにじみ、下手側の裏面には鉄粉剥離が生じている。色調は裏面の底面土砂が茶褐色で、在手部は黒褐色。邊は濃茶褐色から黒褐色である。

分析部分 長軸方向1/7を直線状に切削し、メタル度を中心に入射用いる。残材断面形を証する。残材遇み。

備考 著 滴出孔あるいは滴出孔から流出液にかけて流れた鉄部主体の流動鉄の鉄鋤系遺物と断定される。左端の斜め上に立ち上がっている部分が、鉄鋤から流れ落ちた形狀をとどめているものか、あるいは流出口の出口付近で形成されたものかは、はっきり區別することは出来ない。可塑性としては後者の方がより強いかもしない。分析部分は流動した先端部である。

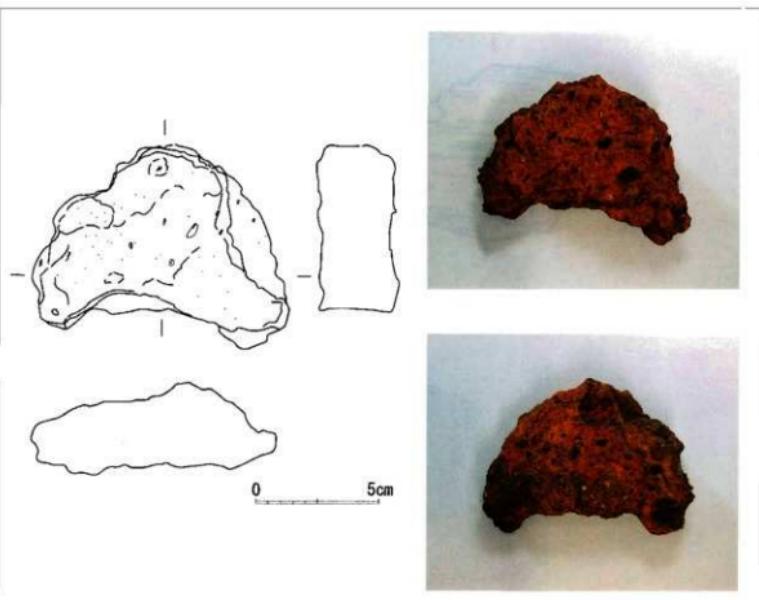


| 遺跡名 | | 寺王1遺跡5区 | | 遺物No. | | 121 | |
|---------------|------|----------|------|--------|------------|------------|------|
| 出土状況 (生)遺跡 | | 埠岸港周辺 一括 | | 時期: 水期 | | 平安・鎌倉・過街形狀 | |
| 標識: TRAV-10 | | 長 度 | 28 | 色 畜 | 赤: 黄褐色～黒褐色 | 厚 度 | 破片 分 |
| 試料記号 化学: | — | 法 | cm | 類 | 過渡色～黒褐色 | 層存度 | — |
| 取扱い: | — | 法 | cm | 類 | 破面数 | 106 | |
| 遺物種別 (名稱) | 再結合部 | 厚 度 | cm | 層存度 | 3 | 重合度 | — |
| | | 重 量 | 746g | メタル度 | なし | 表面傷害 | — |

鉱原所見 平面、不規則円形をした再結合部の鉱石である。斜面と下の大きさは楕円で、底面は少くとも10mmを越える。手前側の側面は大きな楕円で、上端面は厚さ0.5~1.0mmの薄片状の二次的酸化物により覆われていることが分かる。資料の下端面が平滑化しているのはこの二次的酸化物とそれ以外の再結合部分との差となっていて。上端は半ば気泡で、1cm前後の小塊状の浮遊や微細な粉状が点々と積もっている。下面は酸化物の剥離面で、石英質の石板をはじえた1層がこびりついている。再結合の大きさは薄手と殆どで密度は高い。底面には底面の深さが内溝的な舟型の溝が存在しており、一部に鐵鉱化物が認められる。色調は表面の酸化土が黄褐色で、薄皮以下の酸化物は黄褐色、底は鐵系鉄鉱から黒褐色である。

分析器分 鉛鉱鉱1/5を薄紙状に切削し、再結合部として分析に用いる。残材放棄。

説 明 考 再結合部として構成された遺物は1点である。最も大型で大きい資料は標識No.123で、12cm強の込みを持つ。但し、構成元素全体から言えば再結合部の比率はごく低い。分析資料No.123の頂部には再結合部が盛り付けており、それらの鉄酸化物をも再結合していた可能性が高い。埠岸港周辺として見られた出土地のため、再結合部の剥離された位置の性質をさらにに取り込むことはできないが、剥離部から鉄鉱を含むといった性質がある程度集中して多くの岩盤の割れ目に残されていた可能性が高い。埠岸港を変更した状況は分析資料No.6、7、8などによって証明される。



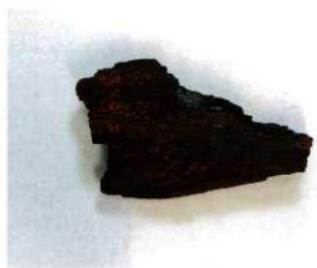
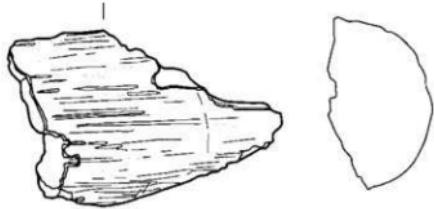
資料番号 11

| 出土地名 | 寺田下遺跡 | 遺物番号 | 124-4 | 項目 | 木炭 |
|--------------------------|-------------|----------|------------|------------|-----|
| 出土位置 | 羽伏戸塚墓 底層 | 類別：骨頭 | 小沢・若尾：遺体形態 | マテリ | ... |
| 種類：TRAV-II 化學：TRAV-II | 良徳 | 色：黒・色 | 遺存度 | 種類 | ○ |
| 放射化： | 或 近縁 | 調 | 残存度 | 分級度 | — |
| 測定部分 | 量 | 地：黒・色 | 種類数 | E P M A | — |
| 測定部位 (名) | 木炭 (木炭) | 地層度 | 1 | X線回折 化學 | ○ |
| | 重量 | 66g メタル度 | 結合度 | 熱火度 | — |
| | 重量 | なし | 粒度解剖 | カロリー | ○ |
| | | | — | 炭素化 度 | — |
| | | | | X線透視 | — |

観察所見 底層の木炭材、27年。木炭率は概1/3ないしは半割り。炭化はほぼ良好。腐葉れ度い。外皮なし。黒炭。外葉や腐葉の表面に薄く土砂が残る。

分析部分 良徳層部1/2を直線状に切断し、木炭として分析に用いる。残材選択。

備考 無煙れが強く、状態にこる「ねらし」が切かれている黒炭である。岩灰から検出された長いイチジク柄の炭化植物で形成されたものと考えられる。炭化の時期を示す資料は全く出ししていないが、岩部に検出された数枚伊の掛漆塗より後者することが、岩部に設けられたガブレンチで堆積しているつまり、漆器の上に固着があり、その上に日向瓦からの木炭や灰が乗っているという形になる。さらにその後、木炭充填と埋め込みが造られた時代に至っている。



第14表 寺田I遺跡5区製鉄関連遺物等主要要素一覧

| 遺物名 | | 製錬 | | |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------|------------------|--------------------------------|
| 分析 資 料 | TiO ₂ | 3.1% | TiO ₂ | 3~1.1% |
| | TiO ₂ | 1~0% | TiO ₂ | 1~0% |
| 沈動津 | TERV-2 (2.06) | | | |
| 流出津 | TERV-4 (3.47) | | TERV-5 (2.59) | |
| 炉底塊(含鉄) | | | | TERV-6 (0.52) |
| 炉壁 | | | | TERV-3 (0.18) TERV-1 (0.33) |
| 再結合津 | TERV-10 (1.20) | | | |
| 統計資料 (遺物構成比) | 種別 | 重量(kg)(%) | 種別 | 重量(kg)(%) |
| | 炉壁 | 775.0 (30.8) | 流出津 | 58.4 (2.3) |
| 流动津 | 938.6 (37.1) | 流出津 | 12.0 (0.5) | |
| 炉内津 | 520.2 (20.6) | 炉底塊(鉄塊系遺物を含む) | 18.4 (0.7) | |
| 炉底津 | 169.6 (6.7) | 再結合塊 | 34.8 (1.4) | |
| 合計 | 2,527kg | | | |
| 製鐵炉 | 後世の水田造成により消滅したと考えられる。遺構は確認できなかったが炉底塊(資料番号6)の大きさから箱型炉の炉底の内深は35cm程度と推定される。 | | | |
| 排水場 | 炉底塊、炉壁等の残物が遺存するのみで排水場の明確な位置、規模は不明。 | | | |
| 年代 | 年代測定を行っておらず根拠に乏しいが、出土した炉底の胎土や炉底塊の法量から平安~鎌倉時代と推定。 | | | |
| 分析のまとめ | ①分析調査を実施した鉄津3点(TERV-2,4,5)は、いずれも花崗岩起源の低チタン砂鉄を原料とする製錬津である。炉底津(含鉄)(TERV-6)や、鉄塊系遺物(TERV-8)も、低チタン酸性砂鉄が原材料であった可能性が高い。 ②炉底塊(鉄塊)(TERV-7)は、火山岩起源の高チタン砂鉄が製錬原料の製錬生成鉄の可能性が高い。 | | | |
| | ③本遺跡では、目的とする生成鉄の性状によって、チタン含有率の異なる砂鉄を使い分けている可能性を考えられ、様々な炭素含有量の鉄塊ができていたものと推定される。 | | | |
| | ④本遺跡の製鐵燃料・還元剤には、広葉樹材の墨炭が用いられたと考えられる。 | | | |

第4節 まとめ

本遺跡の発掘調査により、主な遺構では古代の鍛冶炉跡や中世の炭焼き遺構、遺物では古代、中世の製鉄や鍛冶、鋳削関連の遺物のほか、縄文時代前期の土器など多様な遺構、遺物が確認された。中でも2区から検出された奈良時代後半とみられる鍛冶遺構は遺存状態が良好でこれに伴う遺物とともに斐伊川中、上流域における古代の製鉄あるいは鍛冶の様相を知る上で貴重な資料となった。本節ではこの鍛冶遺構及び関連の遺物について考察することとし、まずは今一度当地域の立地と遺跡の分布について述べておきたい。

下布施地域の特性について

『出雲国風土記』仁多郡条によると布勢郷の由来について「大神命の宿り坐しし處なり。故、布世と云う。」と伝えている⁽⁸⁾。この布勢（布施）郷は古代の行政区に照らすと、斐伊川が大きく蛇行しながら北西から南西に流れを変える木次町北原本郷辺りを境として斐伊川の右岸一帯を指し、左岸は三澤郷にあたっている。現在は布施地域の内、北原本郷から東側を前布施、上布施と呼び、西側を下布施と呼んでいる。これらの地域はほぼ全域が山間の谷の多い地形で、山の谷間や少し開けた平地に集落が営まれている。また、古代には上記のほか佐白、八代も布勢郷に含まれていたと考えられている。

さて、第4図古墳時代の遺跡分布図で見るとおり、北原本郷や尾白を境として古墳時代の遺跡、特に古墳や横穴墓の分布数に大きな差がみられ、東側が西の下布施に対して圧倒的に多く分布する。これはこの地域が比較的平地が多く大きな集落が形成されやすい地形状況と関連があるかもしれない。

一方、下布施地域では斐伊川右岸の前布施や上布施ほどの平地はみられず、ところどころにわずかな谷が開ける程度である。しかしこの地域は大原郡木次郷に近く、谷筋には下布施川が二筋になって斐伊川に注いでおり、水利には良好な地である。この川の合流地点には6世紀後半から7世紀初頭の遺物や加工段などが検出された垣ノ内遺跡が所在する⁽⁹⁾。また、本次町東日登の南端を水源とする下布施川沿いには古墳時代終末の須恵器が出土した茶屋の廻遺跡⁽¹⁰⁾や本遺跡などが所在するが、付近の谷奥には下布施横穴墓群や北原I遺跡も所在する⁽¹¹⁾⁻⁽¹³⁾。いずれにしても下布施川に沿った谷間では縄文時代から生活のあとが窺え、垣ノ内遺跡のように縄文時代中期から消長を繰り返しながら営まれてきた集落もある。

垣ノ内遺跡は、下布施地域内で唯一の集落遺跡で寺田I遺跡からわずか700m北西に位置している。古墳から奈良時代の遺物に関して言えば6世紀後半から7世紀初頭と8世紀中葉以降の土器が多く出土している。出土した8世紀代の壺には丹塗り土器が多く、本遺跡と土器の種類において類似性が見られる。この時期の明確な遺構は確認されていないが、瓶や土製支脚など煮焚き具も出土しており、本遺跡で鍛冶が行われていた時期、垣ノ内遺跡には集落が存在していたことも十分考えられよう。そうとすれば増田浩太氏も指摘するように丹塗り上器がどのように使われていたのか、遺跡の性格を知るうえで重要になると思われる。

遡って、古墳時代終末に営まれた下布施横穴墓群は恵まれた土地があるとは言いがたい谷奥に所在している。にもかかわらず聖主墓には装飾大刀が副葬されていてこの地域の特異性を窺わせてい

る。

鍛冶関連遺構について

寺田Ⅰ遺跡から検出した遺構は古くは箱式石棺から近代の炭窯まで様々であり、本遺跡からは時代を超えて人々の暮らしや生業のあとが見える。しかしここで各々の遺構を関連付けて論することはできないので特に注目される鍛冶関連遺構について調査から得られた所見と若干の考察を述べる。

年代観

遺構上面から出土した須恵器坏と排溝場山土の須恵器とは編年から見て同一時期と見られ、8世紀中葉と考えられる。これは排溝場山土の楕円形鍛冶溝に埋め込んだ木炭の14C年代と大きく矛盾しない。

楕円形鍛冶溝

本遺跡では、鍛冶原料の不純物除去の精錬鍛冶Ⅰ程から、鉄製品を製作する鍛錬鍛冶までの一連のⅠ程が行われていたことが判明した。鍛錬Ⅰ程で排出された鍛冶滓は大小合わせて951点を確認し、重量は300~400kgと推計された。この楕円形鍛冶溝を形状から円形状楕円形鍛冶溝と長円形状楕円形鍛冶溝に分けた場合、円形状楕円形鍛冶溝の5%、長円形状楕円形鍛冶溝の7.8%がメタル度を持ちとLが占めていた。製鉄遺跡における鍛冶滓のメタル度に関する資料が乏しく比較検討はできないが本遺跡では精錬にあたって丹念に除滓を繰り返したとは考えられず、意図は不明であるが鍛冶原料が濁沢に使われていたことが推察される。

なお、排溝場から出土した溝の中には花崗岩の礫が半溶解状に固着したものが認められた。これは炉底に溜まつた溝を早く冷却して取出すための工夫ではないかと推測されており、鍛冶創業の一端が窺われる資料となつた⁽¹⁰⁾。

鍛冶・鍛錬工具

本鍛冶関連遺構からは鍛冶・鍛錬に伴う一連の鍛冶工具が出土した。鉄素材の鍛打に用いられる鉄床と槌は全てが石製であり、細かい鍛打・成形作業に適した金槌は確認されなかった。しかし、本遺跡では成形された割鉄や鎌の一部などが出土しており、工具では鑿も出土していることから石槌は大鍛冶に用いられ、小鍛冶にはやはり金槌が用いられていたと推察される。

鍛錬に関しては、羽口や坩堝、鉄鋸が出土しているがいずれも少数であり、長期間にわたって鍛錬が行われていたという印象を受けない。鍛錬鍛冶を主目的として副次的に鍛錬が行われていたのであろうか。これまでに鍛錬が確認された遺跡は出雲国刀跡⁽¹¹⁾と寺院関連施設が窺われる堤平遺跡⁽¹²⁾（松江市宍道町）のみであるが両者はいずれも公的な施設であり、本遺跡とは趣が大きく異なる。一方、この三遺跡のうち精錬鍛冶と鍛錬の両方が行われた遺跡は本遺跡のみである。工房の所在地が山間の谷あいとはいえ、本鍛冶工房は官営的な性格を多分に持っていると言えよう。

羽口の形態

形状から指摘しうる点については第2節で述べたとおりであるが、古代の羽口については古墳時代を中心に形態の変遷が次のように示されている⁽¹³⁾。

I式羽口 外径・孔径ともに円筒形に近く、基部の外形が著しく広がらないもので、外形の断面形が正円に近いもの（a類）と蒲鉾型、楕円形に近いもの（b類）に分かれる。本遺跡出土の羽口では1点がb類に該当すると思われる。

II式羽口 外径・孔径ともに円筒形に近いが、基部で外径・孔径ともにラッパ状に広がるもので第

43図2のほかに5点が含まれる。また、同図1のように断面形が橢円形を示すものもあるので本書では前者をa類、後者をb類と細分しておきたい。

Ⅲ式羽口 外径・孔径とともに先端部から基部に向けて「ハ」の字状に広がるもの。本遺構では2点を確認した。

このほか、古墳時代終末、官営工房的性格を持った遺跡から出土するといわれるスマキ痕のある羽口などバラエティに富んだ羽口が出上している。なお、本鍛冶遺構では遺存の良好な1号鍛冶炉が検出された。炉の形状から官営の鍛冶工房に設けられたとされている両羽口の鍛冶炉であった可能性も推察されている。このように本鍛冶遺構から出土した羽口の形態の多さは特筆されるといつてよい。前述したように官営的な鍛冶工房との関連も含めて今後の調査を待ちたい。

終わりに

本鍛冶遺構から出土した遺物で特に注目されるのは切鉄であろう。古墳時代に生産された鉄素材は薄板状のものが通有である。今回出土した切鉄は切り餅形に成形されたもので奈良時代の切鉄として形状が判明したは例は極めて少ない。前述した「出雲国風土記」仁多郡条の記述「以上の諸の郷より出す所の鐵、堅くして、尤も雜具を造るに堪ふ」からは製作された鉄製品そのものが堅くて優れているというより、「諸の郷より出す所の鐵」素材、つまり切鉄自体の特長を言い表しているといえよう。

今回確認された鍛冶工房は、鋳銅も併せて行われていたことから見て、郡家あるいは郷家など公的機関によって管理されていた可能性が窺われる。出土した切鉄はこのような公的機関の求めに応じて作られ、納められていた可能性も否定できない。

なお、排漆場から出土した遺物の中に鋤先を小型化したようなV字状の鉄器がある。これとよく似た鉄器が広島県福山市、矢立遺跡でも報告されている。矢立遺跡では、官営鍛冶工房とみられる鍛冶遺構に伴って出土していることから、この遺物はこのような鍛冶工房の性格と関連があるのかかもしれない³⁷⁾。

斐伊川中流域における古代の鍛冶遺構は、芝原遺跡と原田遺跡で確認され、操業時期はいずれも8世紀後半と考えられている³⁸⁾⁻³⁹⁾。最近では斐伊川の支流・飯石川上流域の鉄穴内遺跡からも発見された⁴⁰⁾。本遺跡と立地が非常によく似ており、いずれも郡家所在地からはかけ離れた谷間の斜面に所在している。

ところで砂鉄を用いた中国山地の製鉄は古墳時代後期には始まっていたとされている。奥出雲地方の古墳時代の製鉄遺跡では、今のところ羽森第3遺跡が知られるのみであるが、この遺跡も本遺跡と立地的にはほとんど変わらない山丘の斜面に位置している⁴¹⁾。こうしたことから、本遺跡の鍛冶工房は、製鉄炉からそう遠くない場所に設けられたかのような印象が持たれる。今後、関連遺跡の調査によってさらに詳細な検討がなされることを期待したい。

第15表 寺田I遺跡2区楕円形鍛冶滓集計表(円形・長円形)

円形状楕円形鍛冶滓(法量別個数)

| 法量 径(cm) | 個数 | 比率(%) | 平均重量(g) | 推計重量(g) |
|-------------|-----|-------|---------|---------|
| 13.1~16.1 | 19 | 5.2 | 600 | 11,400 |
| 10.1~13.1 | 91 | 24.9 | 400 | 36,400 |
| 8.1~10.1 | 90 | 24.6 | 190 | 17,100 |
| 6.1~8.0 | 124 | 33.8 | 140 | 17,360 |
| 6.1以下 | 42 | 11.5 | 120 | 5,040 |
| 合計 | 366 | 100 | | 87,300 |

※平均重量は同じ法量内の鍛冶滓を数点計測し、その平均概数値を示す。

長円形状楕円形鍛冶滓(法量別個数)

| 法量 長軸の長さ(cm) | 個数 | 比率(%) | 平均重量(g) | 推計重量(g) |
|-----------------|-----|-------|---------|---------|
| 13以上 | 2 | 0.3 | 900 | 1,800 |
| 11.6~13 | 9 | 1.5 | 700 | 6,300 |
| 10.1~11.5 | 27 | 4.6 | 600 | 16,200 |
| 8.6~10 | 67 | 11.5 | 480 | 32,160 |
| 7.1~8.5 | 134 | 22.9 | 390 | 52,260 |
| 5.6~7 | 184 | 31.5 | 300 | 55,200 |
| 4.1~5.5 | 94 | 16.1 | 100 | 9,400 |
| 4以下 | 68 | 11.6 | 70 | 4,760 |
| 合計 | 585 | 100 | | 178,080 |

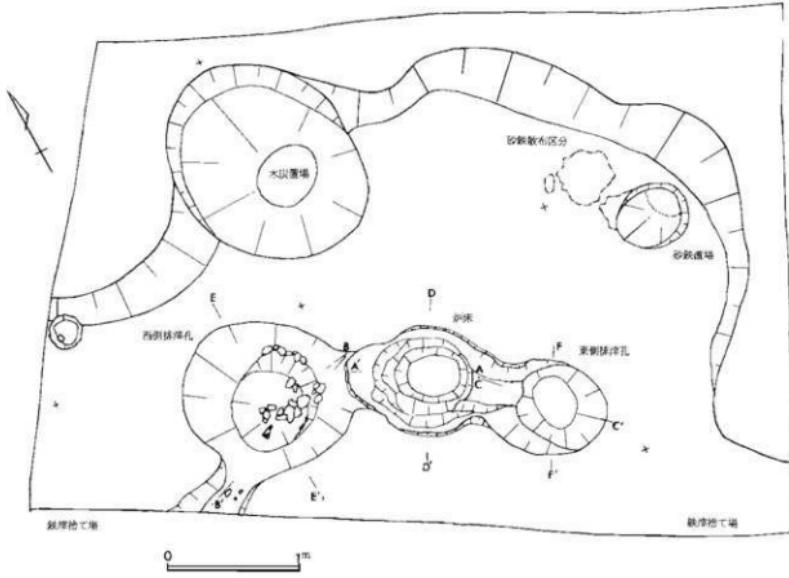
※平均重量は同じ法量内の鍛冶滓を数点計測し、その平均概数値を示す。

円形状楕円形鍛冶滓(メタル度別個数)

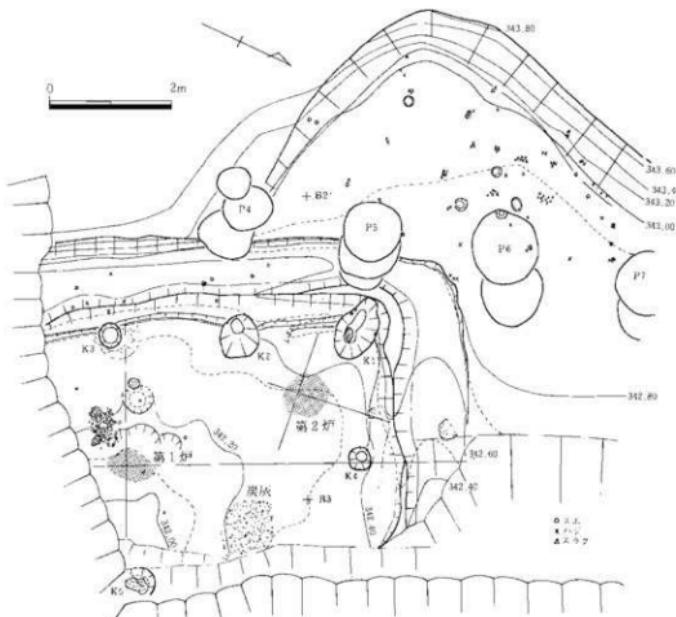
| メタル度 | 個数 | 比率(%) |
|-------|-----|-------|
| 特L(☆) | 3 | 0.8 |
| L(●) | 15 | 4.1 |
| M(◎) | 11 | 3 |
| H(○) | 109 | 29.8 |
| なし | 228 | 62.3 |
| 合計 | 366 | 100 |

長円形状楕円形鍛冶滓(メタル度別個数)

| メタル度 | 個数 | 比率(%) |
|-------|-----|-------|
| 特L(☆) | 10 | 1.7 |
| L(●) | 36 | 6.2 |
| M(◎) | 50 | 8.5 |
| H(○) | 185 | 31.6 |
| なし | 301 | 52 |
| 合計 | 585 | 100 |



第117図 羽森第3遺跡遺構配置図（掛合町教育委員会 1998年より転載）



第118図 芝原遺跡鍛冶遺構平面図（仁多町教育委員会1994より転載）

第16表 寺田I遺跡出土試料の放射性炭素年代測定結果

1. 試料と方法

| 試料 | 採取地点 | 種類 | 前処理・調整 | 測定法 |
|-------|--------------------------------------|-----|------------|---------------------|
| No 1 | 寺田 I 遺跡 1 区 トレンチ | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | β 線法 (標準) |
| No 2 | 寺田 I 遺跡 2 区 G 11-3 (廻溝場) | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | AMS 法 (加速器質量分析法) |
| No 3 | 寺田 I 遺跡 2 区 1 号炉 | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | AMS 法 (加速器質量分析法) |
| No 4 | 寺田 I 遺跡 2 区 C - 5 (炭焼き跡) | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | β 線法 (標準) |
| No 5 | 寺田 I 遺跡 2 区 D - 2 (炭溜まり - 1) | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | β 線法 (標準) |
| No 6 | 寺田 I 遺跡 2 区 D - 7 (炭焼き跡 A) | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | β 線法 (標準) |
| No 7 | 寺田 I 遺跡 2 区 F - 9 (炭溜まり PNO. 233) | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | β 線法 (標準) |
| No 8 | 寺田 I 遺跡 2 区 F - 9 (炭溜まり) | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | β 線法 (標準) |
| No 9 | 寺田 I 遺跡 2 区 H - 9 (鋳冶構造周辺 PNO. 4) | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | β 線法 (標準) |
| No 10 | 寺田 I 遺跡 2 区 1 号古墓埋土 | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | β 線法 (標準) |
| No 11 | 寺田 I 遺跡 3 区 トレンチ | 炭化物 | 酸-アルカリ-酸洗浄 | β 線法 (標準) |

2. 測定結果

| 試料 | ^{14}C 年代 (年 BP) | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) | 補正 ^{14}C 年代 (年 BP) | 暦年代 (西暦) | 測定 No. (Beta-) |
|-------|------------------------------|------------------------------|---------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------|
| No 1 | 750 ± 60 | -26.7 | 720 ± 60 | 交点: AD1280 1 σ : AD1260 ~ 1300 | 185113 |
| No 2 | 1230 ± 40 | -24.5 | 1240 ± 40 | 交点: AD 780 1 σ : AD 710 ~ 810 AD 840 ~ 860 2 σ : AD 680 ~ 890 | 175423 |
| No 3 | 1380 ± 40 | -24.9 | 1380 ± 40 | 交点: AD 660 1 σ : AD 640 ~ 670 2 σ : AD 620 ~ 690 | 175424 |
| No 4 | 920 ± 60 | -25.4 | 910 ± 60 | 交点: AD1160 1 σ : AD1030 ~ 1200 | 185114 |
| No 5 | 1170 ± 60 | -26.5 | 1150 ± 60 | 交点: AD890 1 σ : AD790 ~ 980 | 185115 |
| No 6 | 920 ± 60 | -26.5 | 900 ± 60 | 交点: AD1160 1 σ : AD1030 ~ 1210 | 185116 |
| No 7 | 810 ± 60 | -27.7 | 760 ± 60 | 交点: AD1270 1 σ : AD1230 ~ 1290 | 185117 |
| No 8 | 840 ± 60 | -26.3 | 820 ± 60 | 交点: AD1230 1 σ : AD1180 ~ 1270 | 185118 |
| No 9 | 1270 ± 60 | -27.1 | 1240 ± 60 | 交点: AD780 1 σ : AD690 ~ 880 | 185119 |
| No 10 | 390 ± 50 | -24.5 | 400 ± 50 | 交点: AD1460 1 σ : AD1440 ~ 1510 AD1600 ~ 1620 | 185120 |
| No 11 | 910 ± 60 | -25.9 | 890 ± 60 | 交点: AD1170 1 σ : AD1040 ~ 1220 | 185121 |

※No 1 ~ No 4 ~ 11 (環境考古研究所) / No 2 ~ No 3 (株式会社 古耶境研究所)

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際慣例に従って5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（%）で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 厳年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-T h年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

曆年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と曆年代校正曲線との交点の曆年代値を意味する。 1σ (68%確率)・ 2σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

註

(1)穴澤義功氏のご教示による。

(2)類似の錫先形の鉄器は、広島県福山市矢立遺跡の銀治遺構（奈良～平安時代）からも出土している。（鳥取県教育文化財団 坂本嘉和氏のご教示による）

(3)野島 水『弥生・古墳時代の鉄生産の一様相』『たたら研究』第38号 1997

真鍋成史『鍛冶関連遺物』『考古資料大観』7 弥生・古墳時代 鉄・金属製品 2003 小学館

(4)同様の炭焼き遺構は、島根県教育委員会が尾原ダムの建設に伴って調査した雲南市木次町北原の宮ノ脇遺跡においても検出されている。宮ノ脇遺跡では、この遺構に残っていた炭化材の樹種がノミグリミやコナラ節の広葉樹であることを確認し、この遺構と近世以降の炭窯とでは平面形や形態が大きく異なるとしながらも、ナラなどの雜木がたたら用の大炭に最適であること、鉄滓や炉壁が出土していることなどから、近接して存在すると推定された鉋跡に伴うものであろうとしている（島根県教育委員会・国土交通省中国地方整備局「宮ノ脇遺跡・家の後II遺跡1」尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6 2005）。

(5)島根県教育委員会・国土交通省浜田工事事務所『忠良遺跡・壹々炭窯跡・上条遺跡・水戸（三戸）神社跡（上条古墳）・立女遺跡』・一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV 2001

(6)鈴元証『現代語訳 鉄山必用記事』2001 丸善株式会社

(7)本遺構については、形状や植道部の存在から炭窯跡としているが、側壁や天井が消滅していることから、杉原治一氏より麻蒸し場との指摘もいただいている。

(8)加藤義成校注『出雲國風上記』改版13刷 1998 松江今井書店

(9)島根県教育委員会『家の後I遺跡 埼ノ内遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 2003

(10)木次町教育委員会『上豆内たたら跡・北原I遺跡・茶屋の廻遺跡』尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2 1999

(11)木次町教育委員会『下布施横穴墓群・案久寺遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 2002

(12)前掲証 (10)

(13)穴澤義功氏のご教示による。

(14)島根県教育委員会『遺跡出雲国府跡』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書17 2006

- 62及び66号溝から楕形鍛治溝や掛場等が出土、焼土面も2か所検出されており、奈良から平安時代の遺構と考えられる。
- (15)島根県教育委員会『堤平遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 8
(16) (3) 同じ。
(17) (2) 同じ。
- (18)仁多町教育委員会『日ヤケたたら跡・芝原遺跡』高田小学校建設予定地内発掘調査報告書 1994
- (19)島根県教育委員会・国土交通省中国地方整備局『家ノ脇II遺跡・原田遺跡1区・前田遺跡4区』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4 2004
- (20)鉄穴内遺跡・草々ノ内II遺跡現地説明会(平成18年9月16日)及び椿兵治氏(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター)のご教示による。
- (21)掛合町教育委員会『坂石地区農道離着陸場整備事業に伴う羽森第2・羽森第3遺跡発掘調査報告書』
1998

【参考文献】

- 柳浦俊一「山陰地方における縄文時代前期土器の地域編年」『島根考古学会誌』第18集 2001
- 柳浦俊一「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『島根考古学会誌』第17集 2000
- 松本岩雄「出雲・隱岐地域」「弥生七器の様式と編年」山陰・山陰編 1992 木耳社
- 鹿島町教育委員会『南誘武草田遺跡』講武地区泉宮圓場整備発掘調査報告書 5 1992
- 松本岩雄・柳浦俊一「山陰」「古墳時代の研究」6 土師器と須恵器 1991 雄山閣出版
- 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
- 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第3号 1980
- 島根県教育委員会『前田遺跡(2)・下布施氏館跡・原田遺跡I区(分析編)』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5 2005

図 版



ゴマボリ遺跡
調査前状況



ゴマボリ遺跡
継断土層状況

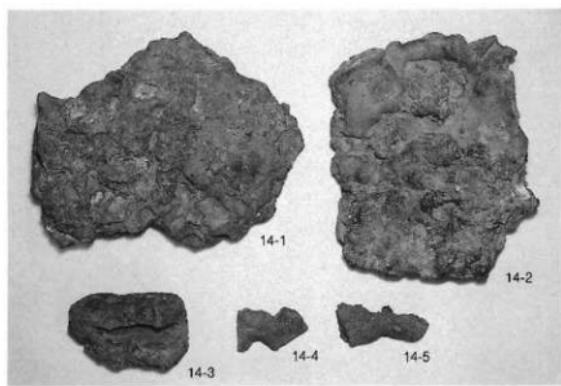


ゴマボリ遺跡
完掘状況

ゴマボリ遺跡
出土土器



ゴマボリ遺跡
製鉄関連遺物



寺田 I 遺跡
1・2・4区 調査前状況

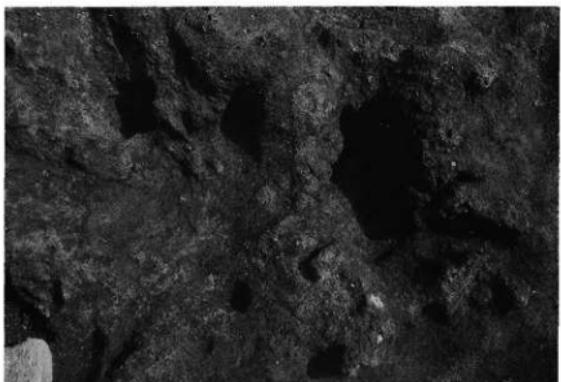




寺田 I 遺跡
1区 粘土張り面検出状況



寺田 I 遺跡
2区 鋳冶遺構検出状況



寺田 I 遺跡
1号(右)・2号(左) 鋳冶
炉検出状況